

一般国道17号  
浦佐バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

町上遺跡

2013

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道17号

浦佐バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

まち がみ  
町 上 遺 跡

2013

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

一般国道 17 号は、東京から本州を横断して新潟市に至る主要な幹線道路です。そしてこの地域の産業や経済の振興に大きな役割を果たしています。

この国道 17 号浦佐バイパスは、南魚沼市野江甲から魚沼市虫野間の延長 6.6km のバイパス事業です。市街地の交通混雑や冬期の除雪障害を無くすために浦佐バイパスが計画されました。

本書は、浦佐バイパスの建設に先立ち、2011（平成 22）年に発掘調査した魚沼市町上遺跡の発掘調査報告書です。遺跡は、魚野川支流の水無川によって造られた扇状地にあります。調査により縄文時代の集落跡であることが分かり、多量の土器と石器のほか、焼けたサケの歯・骨が多く出土しました。秋に遡上するサケを待ち構えていた当時の人々の生活が蘇ります。

遺跡周辺は、魚沼コシヒカリを育む美田が広がり、特産の八色スイカの産地でもあります。農耕に適さないとされていた石の多い土地が、現在の姿に生まれ変わったのは 40 年代から始まった国営開拓事業によります。工事に伴う削平や地形の改変もありましたが、その過程で本遺跡が発見されました。

この調査報告書が、魚沼市域の歴史を明らかにする為の一助になると共に、これを契機に埋蔵文化財に対する理解が一層広まれば幸いです。

最後に、この調査に対して多大な御協力と御理解をいただいた、魚沼市教育委員会並びに大浦・大浦新田をはじめとした、地元住民の方々に、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 高井 盛雄

## 例　　言

- 1 本報告書は、新潟県魚沼市大字大浦字八色原に所在する町上遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道17号浦佐バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は、県教委が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社古田組に委託して発掘調査を2011（平成23）年度に実施した。
- 5 出土遺物及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「11マチガ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 6 調査成果の一部は現地説明会資料、埋文にいがた78号、平成23年度新潟県埋蔵文化財調査事業団年報等に記載しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 7 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致する。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第VI章は章末に示した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 本書で示す方位は、すべて真北である。
- 11 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、有限会社天田安平商店に委託し、完成データ（P D F）を印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真は、デジタル一眼レフカメラで撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集を行った。
- 12 本書の執筆は、田海義正（新潟県埋蔵文化財調査事業団　課長代理）・三ツ井朋子（同　保存処理担当班長）、相羽重徳・藤田　登（株式会社古田組　遺跡調査研究室主任調査員）・建部真也（同　調査員）、山崎　健（奈良文化財研究所　研究員）があたり、編集は相羽が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
第II章、第V章、第VI章1・2：相羽　　第I章、第III章、第V章2、第VI章3・4：田海  
第IV章：相羽・建部　　第V章3：藤田　　第VI章1：三ツ井　　第VI章2：山崎
- 13 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。  
(敬称略、五十音順)  
安立　聰、阿部泰之、石坂圭介、石井　寛、伊藤啓雄、桑原　健、佐藤雅一、鈴木俊成、高木公輔、高橋　保、高橋保雄、寺崎裕治、宮尾　亨、魚沼漁業共同組合、魚沼市教育委員会、大和郷土地改良区

## 目 次

<b>第Ⅰ章 序 説</b>	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業の経過	1
A 試掘確認調査	1
B 本発掘調査	2
1) 調査の体制	2
2) 調査の経過	3
C 整理作業	4
<b>第Ⅱ章 遺跡の位置と環境</b>	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
A 八色原周辺の縄文遺跡	6
B 弥生時代以降の周辺遺跡	10
1) 弥生時代	10
2) 古墳時代	10
3) 古代	11
4) 中世	11
C 魚野川水系の水産資源	11
<b>第Ⅲ章 遺跡の調査</b>	13
1 グリッドの設定	13
2 層序	13
<b>第Ⅳ章 遺構</b>	15
1 概要	15
2 記載の方法	16
3 各説	16
A 堆穴建物	16
B 掘立柱建物・柱穴列	18
C 土坑	20
1) 袋状土坑	20
2) 埋設土器土坑	21
3) その他	22
D ピット	24
1) 柱穴	24
2) その他	25
E 沢	26
<b>第Ⅴ章 遺物</b>	27
1 縄文土器・土製品	27
A 概要	27
B 分類	27

C 各 説 .....	30
1) 遺構内出土 .....	30
2) 埋没沢上層出土 .....	38
3) 遺構外出土 .....	38
2 骨 角 器 .....	43
3 石器・石製品 .....	43
A はじめに .....	43
B 器種分類 .....	43
C 各 説 .....	48
1) 概要 .....	48
2) 石器 .....	48
3) 石製品 .....	51
4) 小結 .....	51
第VI章 自然科学分析 .....	53
1 赤色塗彩土器の赤色顔料 .....	53
A 試料と分析の目的 .....	53
B 観察及び分析の方法 .....	53
C 結果と考察 .....	53
2 動物遺存体 .....	56
A はじめに .....	56
B 分析資料 .....	56
C 同定・記載の方法 .....	56
D 分類群の記載 .....	57
1) 貝類 .....	57
2) 魚類 .....	57
3) 両生類 .....	57
4) 鳥類 .....	57
5) 哺乳類 .....	57
6) 骨角器 .....	58
E 遺構ごとの検討 .....	59
1) SK 97 .....	59
2) P 108 .....	59
3) SK 20 .....	60
第VII章 まとめ .....	61
1 遺構の変遷 .....	61
2 繩文土器 .....	62
3 石器 .....	63
4 総括 .....	63
《要約》 .....	65
《引用・参考文献》 .....	66
《観察表》 .....	69

## 挿図目次

第1図 試掘トレーンの位置	2	第15図 試料No.18二次電子線像(上)と X線チャート(下)	55
第2図 トレーン設定図と調査範囲	4	第16図 試料No.19二次電子線像(上)と X線チャート(下)	55
第3図 周辺の遺跡分布図	8	第17図 試料No.20二次電子線像(上)と X線チャート(下)	55
第4図 鮎類漁獲量(海面・内水面合算)	12	第18図 試料No.21二次電子線像(上)と X線チャート(下)	55
第5図 基本層序写真	13	第19図 試料No.22二次電子線像(左)と X線チャート(右)	55
第6図 グリッド設定図	14	第20図 新潟県域におけるイノシシの出土遺跡 (縄文時代中期～後期)	58
第7図 土層堆積状況写真	15	第21図 穴孔された骨角器	58
第8図 土坑・ピット法量分布図	16	第22図 動物遺存体	60
第9図 出土土器類(客土)の重量分布	27	第23図 集落の変遷	61
第10図 土器円盤の法量分布	29		
第11図 石器器種分類表(1)	46		
第12図 石器器種分類表(2)	47		
第13図 試料No.1二次電子線像(上)と X線チャート(下)	54		
第14図 試料No.3二次電子線像(上)と X線チャート(下)	54		

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	9	第6表 町上遺跡出土赤色塗彩土器の 赤色顔料分析結果	54
第2表 河川別サケ類採捕数(2010年)	12	第7表 動物遺存体の同定結果	59
第3表 土器分類の時期対応表	27	第8表 主要遺構出土土器の系統別一覧	62
第4表 石器類の器種別数量	44		
第5表 不定形石器分類表	47		

## 図版目次

### [図面図版]

- 図版1 調査区と周辺の地形  
図版2 遺構全体図  
図版3 遺構分割図(1)  
図版4 遺構別図(1)  
図版5 遺構分割図(2)  
図版6 遺構別図(2)  
図版7 遺構別図(3)  
図版8 遺構分割図(3)  
図版9 遺構別図(4)  
図版10 遺構別図(5)  
図版11 遺構別図(6)  
図版12 遺構別図(7)  
図版13 遺構別図(8)  
図版14 遺構別図(9)  
図版15 遺構分割図(4)  
図版16 遺構別図(10)  
図版17 遺構別図(11)

- 図版18 遺構個別図(12)  
図版19 遺構個別図(13)  
図版20 遺構個別図(14)  
図版21 遺構出土の縄文土器(1)  
図版22 遺構出土の縄文土器(2)  
図版23 遺構出土の縄文土器(3)  
図版24 遺構出土の縄文土器(4)  
図版25 遺構出土の縄文土器(5)  
図版26 遺構出土の縄文土器(6)  
図版27 遺構出土の縄文土器(7)  
図版28 遺構出土の縄文土器(8)  
図版29 遺構出土の縄文土器(9)  
図版30 遺構出土の縄文土器(10)  
図版31 遺構出土の縄文土器(11)  
図版32 沢上層・遺構外出土の縄文土器(1)  
図版33 遺構外出土の縄文土器(2)  
図版34 遺構外出土の縄文土器(3)  
図版35 遺構外出土の縄文土器(4)

- 図版36 遺構外出土の縄文土器(5)  
図版37 遺構外出土の縄文土器(6)  
図版38 遺構外出土の縄文土器(7)  
図版39 遺構外出土の縄文土器(8)  
図版40 遺構外出土の縄文土器(9)  
図版41 遺構外出土の縄文土器(10)  
図版42 遺構外出土の縄文土器(11)・土製品・骨角器  
図版43 石器(1)  
図版44 石器(2)  
図版45 石器(3)  
図版46 石器(4)  
図版47 石器(5)  
図版48 石器(6)  
図版49 石器(7)  
図版50 石器(8)  
図版51 石器(9)  
図版52 石器(10)
- [写真図版]  
図版53 空撮・遺跡遠景  
図版54 遺跡遠景・調査区全景  
図版55 遺跡遠景・着手前・堆積状況・遺構検出状況・完掘  
図版56 遺物出土状況・遺構検出状況・出土遺物  
図版57 壊穴建物(1)  
図版58 壊穴建物(2)  
図版59 壊穴建物(3)  
図版60 壊穴建物(4)  
図版61 壊穴建物(5)・掘立柱建物(1)  
図版62 掘立柱建物(2)  
図版63 掘立柱建物(3)  
図版64 掘立柱建物(4)・土坑(1)・ピット(1)
- 図版65 土坑(2)・ピット(2)  
図版66 土坑(3)  
図版67 土坑(4)  
図版68 土坑(5)・ピット(3)  
図版69 土坑(6)  
図版70 土坑(7)・ピット(4)  
図版71 ピット(5)  
図版72 ピット(6)  
図版73 遺構内出土縄文土器(1)  
図版74 遺構内出土縄文土器(2)  
図版75 遺構内出土縄文土器(3)  
図版76 遺構内出土縄文土器(4)  
図版77 遺構内出土縄文土器(5)  
図版78 遺構内出土縄文土器(6)  
図版79 遺構内出土縄文土器(7)・沢上層出土縄文土器  
図版80 遺構外出土縄文土器(1)  
図版81 遺構外出土縄文土器(2)  
図版82 遺構外出土縄文土器(3)  
図版83 遺構外出土縄文土器(4)  
図版84 遺構外出土縄文土器(5)  
図版85 遺構外出土縄文土器(6)  
図版86 遺構外出土縄文土器(7)・土製品・骨角器  
図版87 石器(1)  
図版88 石器(2)  
図版89 石器(3)  
図版90 石器(4)  
図版91 石器(5)  
図版92 石器(6)  
図版93 石器(7)  
図版94 石器(8)  
図版95 石器(9)

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

一般国道7号は、東京都中央区と新潟県新潟市を結ぶ本州を横断する主要幹線道路である。南魚沼市(旧大和町)や魚沼市(旧小出町)の周辺では、上越新幹線や関越自動車道の利用が伸びるにつれ、国道を利用する車も増加している。魚沼地域は日本でも有数の豪雪地帯であるが、JR浦佐駅から北の旧小出町側はJR上越線と魚野川に挟まれる形で国道が通るため、冬期の降雪を外側に飛ばすことができず、ダンプトラック等に積み込んで搬出している。浦佐バイパスはこのような冬期の除雪障害と交通混雑を無くするために計画された。国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所(以下、国交省)の計画によると浦佐バイパスは、起点の南魚沼市野江甲から魚沼市虫野に至る延長6.6kmの道路である。バイパスはJR浦佐駅近くから魚野川を東の右岸に渡る。水無川扇状地の八色原を横切り大浦新田を通過し三用川を渡り、終点の魚沼市虫野で国道17号に合流する。

この浦佐バイパスの埋蔵文化財調査は、魚野川を臨む右岸の河岸段丘で1999(平成11)年古墳時代後期の古墳群大久保遺跡の発掘調査から始まった。その後も県教委は法線内の試掘調査を断続的に実施したが、扇状地形で堆積物が厚い事や水場の少なさからか、遺跡はほとんど確認できなかった。その中でも町上遺跡から南に約600mの地点で確認した八色原遺跡は、地表下約1.4mで検出した黒色土中から縄文時代中期から後期の土器が出土した。本発掘調査には至らなかったが、新規登録したこの遺跡は、水無川扇状地における希少例であった。

水無川扇状地一帯は、現在は美しい水田であるが、それは1965(昭和40)年から始まった国営魚野川東部開拓建設事業に負うところが大きい。その事業は旧小出町・大和町・六日町の2,799haが対象となつた。その内訳は未墾地729ha、畑467ha、水田1,544ha、道路敷59haである。その国営開拓事業の圃場整備工事の過程で、町上遺跡周辺で地元の住民により縄文土器などが発見採集され、地元では遺跡の存在が明らかになったが、周知化されずに終わった。町上遺跡が県教委の埋蔵文化財包蔵地として登録されたのは1978年になる。その後、2004年の試掘確認調査を経て、工事にかかる本発掘調査必要範囲を確定した。

町上遺跡の本発掘調査は、国交省から2011年3月に県教委に埋蔵文化財発掘調査の依頼があり、県教委の依頼(平成23年3月22日付け 教文第1488号の2)を受けた埋文事業団が、2011年5月9日から11月2日までの予定で発掘調査に入った。

## 2 調査と整理作業の経過

### A 試掘確認調査

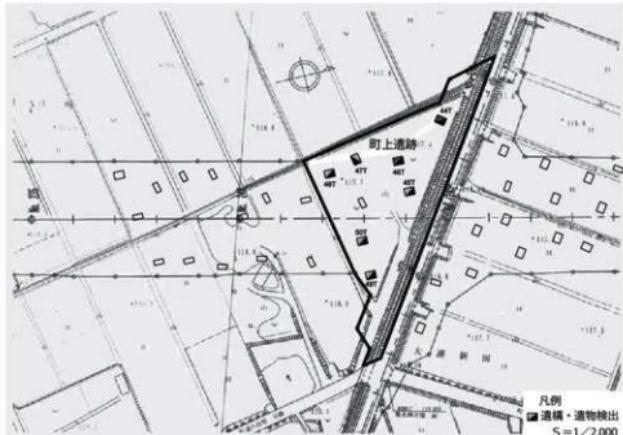
町上遺跡を含む浦佐バイパスの試掘確認調査は、県教委を調査主体に埋文事業団が2004(平成16)年6月28日から8月4日に実施した。その対象地は水無川右岸の法線距離にして約530mと未買収地を挟んで、周知の遺跡である町上遺跡周辺の延長約300mを合わせた67,230m<sup>2</sup>である。調査は任意の地

点に 112か所の試掘坑を設定し、重機で掘削したのち、土層断面と遺構の有無を精査した。その結果、町上遺跡付近の 2か所の試掘坑から川原石で囲った配石遺構や溝状遺構を検出した。5か所の試掘坑からは縄文時代中期と後期の遺物が出土した。遺物包含層は 2層あり、上層は粘性の弱い黒褐色土、下層は粘性の強い黒褐色であるとした。この確認調査で遺跡範囲が不明瞭だった当遺跡は、浦佐バイパスの法線内については、南北方向の限界が確認できた。

バイパス工事にかかる本発掘調査が必要な面積は、上層が 5,760m<sup>2</sup>（後に範囲を見直し上層 4,300m<sup>2</sup>に修正）、下層が 3,000m<sup>2</sup>と報告した。

#### 試掘確認調査の体制

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越 謙一）	
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	
総括	黒井 幸一	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	長谷川二三夫	（〃 総務課長）
庶務	高野 正司	（〃 班長）
調査総括	藤巻 正信	（〃 調査課長）
調査担当	山本 増	（〃 試掘調査担当課長代理）
調査職員	田中一穂	（〃嘱託員）



第1図 試掘トレンチの位置

## B 本発掘調査

### 1) 調査の体制

調査期間 2011（平成23）年5月11日～8月5日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 木村正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）

管 理 今井 亘（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 総務課長）  
 所 務 伊藤 忍（ “ 班長）  
 調査総括 北村 亮（ “ 調査課長）  
 調査担当 田海義正（ “ 本発掘調査担当課長代理）  
 調査職員 相羽重徳（株式会社古田組遺跡調査研究室 主任調査員）  
             藤田 登（ “ 主任調査員）  
             建部真也（ “ 調査員）  
 支 援 株式会社古田組 現場代理人 陶山詔行

## 2) 調査の経過

町上遺跡の発掘調査は、2004（平成16）年度の確認調査の結果を踏まえ、上下層合わせて7,300m<sup>2</sup>（上層4,300m<sup>2</sup>、下層3,000m<sup>2</sup>）を対象とし、現地調査を5月10日から11月2日までの期間で調査計画を立てた。

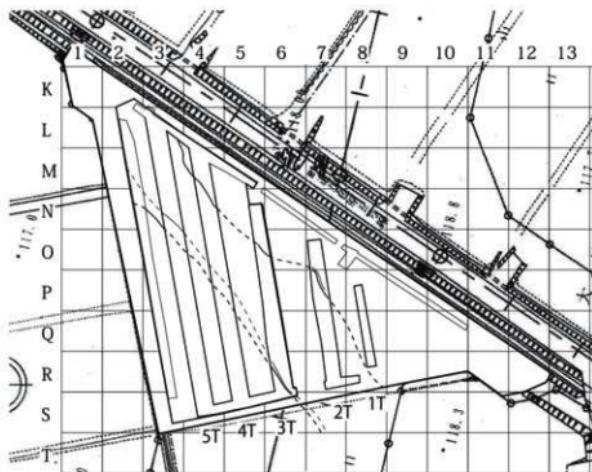
雪が消えた連休明けの5月11日から発掘調査を開始した。最初に概ね三角形の調査区の壁際に、土層観察と排水を兼ねたトレーナーを掘削して、土層堆積と遺物出土状況を確認した。この作業により国営開拓事業によって、広範囲が搅乱（涙溝）されていることを確認した（第5図）。特に扇状地形の扇尖部に近い側、つまり標高の高い方の調査区の東（8-10列）と南側（Q-S列）は、地山面まで掘削が及んでいることが分かった（図版3-5）。予想以上に工事の影響があることが分かり、削平範囲のより詳細な把握が必要になった。調査区をほぼ南北方向に重機で5本のトレーナーを入れ、遺跡の残り具合を確認する作業を開始した（第2図）。この遺存状況確認のトレーナー掘削作業は5月末までかかった。その結果、次の4点が明らかになった。  
 ① 東側から順に5本のトレーナーを設定し、順に番号を付け掘削した。3トレーナーまではほとんど遺構や遺物を検出できなかった。  
 ② 1トレーナーから4トレーナーにかけて、縄文時代に埋没が完了した沢を検出した。  
 ③ 沢の上部に縄文土器を包含する未摺乱層を確認した。  
 ④ 調査区の北西及び西側には多量の遺物が含まれていたが、工事による客土からの出土が多い事が分かった。そのような中でも部分的（30・3P区）には遺物包含層が残っていた。  
 ⑤ 確認調査で2層と捉えた遺物包含層は、工事の客土を誤認していた可能性が高いと判断した。

その結果を基に6月1日に文化行政課と現地で打合せを行った。その中で、当初予定の上層4,300m<sup>2</sup>については、国営開拓事業で削平が進み、3トレーナーから東側は、動かされた土に含まれる遺物はごく少數であることに加え、地山面でも遺構の検出がないことから、発掘対象から除外することが決まった。

6月以降は発掘調査対象地を3Tから西側とした。新たな調査方針は国営開拓事業により搅乱された土は、重機によって除去し、遺物をグリッド単位で取り上げつつ、遺構確認面の黄褐色シルト・砂層の上面まで検出する。未削除の遺構を中心に精査することとした。これによって当初、上層4,300m<sup>2</sup>、下層3,000m<sup>2</sup>とした発掘調査対象地は、遺物包含層は単層で2,578m<sup>2</sup>に縮小した。

6月下旬から本格的に遺構を掘り始めた。壊されている部分はあったが、竪穴住居や柱穴、竪溝や縄文土器の大破片が入ったフラスコ状土坑など充実した遺構が検出された。地元魚沼市教育委員会にも依頼して、発掘調査に慣れた地元の方を紹介してもらい、作業員を増員して、発掘調査を続け、7月末には終了の目途が立った。発掘調査の結果は、南東から北西方向に沢があり、その右岸には縄文時代後期の掘立柱建物が集中する。左岸には竪穴住居やフラスコ状土坑などが分布し、中期末から後期初頭の遺構が分布した。8月4日に完掘後の空中写真を撮影し、補足の測量などをを行い8月6日に現地作業を終了した。

これに先立つ7月30日（土）に現地説明会を計画したが、新潟・福島豪雨により道路が寸断され、当日々調査員が現地に入れず、やむなく中止とした。発掘調査終了後の8月28日に大浦新田地区の八海神社祭礼に合わせ、大浦新田集落開発センターにおいて、「町上遺跡発掘調査説明会」を開催し、60余名の参加を得た。



第2図 トレンチ設定図と調査範囲

### C 整理作業

整理作業は、上越市柿崎区に所在する株式会社古田組遺跡調査研究室で行った。

調査期間 2012（平成24）年4月1日～2013年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 高井 盛雄）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）

管理 熊倉宏二（ “ 総務課長）

庶務 伊藤 忍（ “ 班長）

調査総括 北村 亮（ “ 調査課長）

指導 田海義正（ “ 本発掘調査担当課長代理）

整理組織 株式会社 古田組

整理担当 相羽重徳（株式会社古田組遺跡調査研究室 主任調査員）

藤田 登（ “ 主任調査員・2012年3月まで）

建部真也（ “ 調査員・ “ ）

作業員 安達鉄雄・風間 梢・小池美奈子・藤田明美・丸山道子

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

以下は、主に〔戸田ほか 1989、渡辺 1986、細矢 1994〕を参考とした。

八色原の地勢 町上遺跡は長野県・群馬県・福島県と接する新潟県南部の魚沼地域のほぼ中央に位置し、越後三山と呼ばれる駒ヶ岳（標高 2,002.7m）・中ノ岳（2,085.2m）・八海山（1,778m）から発する急峻な水無川下流域に形成された扇状地（通称「八色原」）に立地する。八色原は、魚沼地域を北流し、長岡市川口地区で信濃川に合流する一般河川魚野川の右岸とその支流である水無川の下流域一帯を指す。八色原の標高は約 110-180m で、総面積は 3.716ha である。八色原の東部は越後三山から延びる尾根に囲まれ、奥には越後三山只見国定公園が広がる。八色原の西限には魚野川が北流し、両岸には河岸段丘が発達している。魚野川の左岸には魚沼丘陵が拡がり山麓に形成された複合扇状地が展開する。北限の丘陵根には三川川が流れる。

八色原は地質的には本来洪積層であるが、水無川の度重なる氾濫により運ばれた砂礫層が厚く堆積している。そのため、水無川の上流域では水量豊富であるが、下流域の砂礫地帯に入ると漏減し、平時では乏水地となる。

八色原の開発 八色原の中心部は砂礫地帯のため開発は遅い。近世には東部丘陵根部を中心に耕地拡張と新村の形成が行われた。しかしながら、享和 3（1803）年～文化 6（1809）年にかけて編纂された『新編会津風土記』には「魚沼川（魚野川）の東にあり、東西一里南北二里、瘠薄の地にて沙石多く、田圃を開墾し難く曠平の芝原なり、二十余区の村落に分ち属す、水無川原中を西に流る」〔（ ）内筆者註〕とあり、急速に開発が行われた様子は見られない。明治には桑畑や畑がわずかに開かれたのみであったという。八色原が現在のような農地へと転換したのは、第二次世界大戦以後で、昭和 20（1945）年には戦後の食料増産のため 1,170ha の山林・原野・荒蕪地の開拓が計画された。その後、扇状地内で小規模な開田が散発的に行われたものの系統的な開発ではなかったため、耕地が分散する結果となり、用水路・農道・農地の整備が遅れた。そこで、それらの問題を解決すべく、1965（昭和 40）年に国営魚野川東部開拓建設事業が開始された。用水を魚野川からポンプ揚水により貯め、用排水を広域に整備（704ha）することで、扇状地内の農地造成（開田・開畑 462ha）を可能とした。また、区画整理（298ha）も実施され、大圃場となることで大型農業機械の導入が可能となるなど労力の集約化が行われた。国営事業は 1977 年 10 月に完工した。現在は、魚沼米を中心とする稲作と大崎芋・八色スイカなどの畑作が盛んで、ワインの原料となるブドウも栽培されている。近年では、工業団地や高等学校・大学校が進出し、農業以外の開発も行われている。

## 2 歴史的環境

### A 八色原周辺の縄文遺跡

魚野川下流域を含む魚沼地域では河岸段丘が発達しており、中位段丘に多くの遺跡が立地している。時代ごとでは、旧石器～縄文時代早期の遺跡は丘陵や高位段丘上に立地し、縄文時代前期以降になると中位段丘上に立地する傾向が強くなる。特に、遺跡数が最も増加する縄文時代中期・後期にはその傾向が強まるが、縄文時代晚期～弥生時代になると低位段丘へと進出する傾向がやや強くなる〔桜井 1996〕。こうした動向の中で、扇状地内に立地する町上遺跡は特異な例である。

**旧石器～草創期** 魚沼地域は旧石器の遺跡が多いことで知られ、上ノ原B遺跡（19）・瓜ヶ沢遺跡（8）・いのくぼ遺跡（123）でナイフ形石器、月岡遺跡（52）で細石刃、権現平遺跡（6）で大形尖頭器、布場平D遺跡（46）で削器・搔器が出土・採取されている〔八木・佐藤 1988、梅川・高木 2006〕。

旧石器終末期から縄文草創期にかけては、清水上遺跡（1）〔鈴木ほか 1996〕、上ノ原A遺跡（16）・田川稲荷平遺跡（21）付近〔佐藤ほか 1995〕・長者林遺跡（29）〔中村 1978〕で丸（Pj）彫形局部磨製石斧、権現平遺跡（6）で尖頭器などの石器群〔佐藤 1985〕、古長沢遺跡（53）で有舌尖頭器〔佐藤ほか 1995〕が出土・採集されている。

**早 期** 清水上遺跡（1）からは押型文・内外面条痕文・沈線文土器が少量出土し、埋没谷からは後半の土器がまとまって出土した〔鈴木ほか 1996〕。古長沢遺跡（53）からは後半の格条体条痕文土器が出土している〔田海ほか 1990b〕。上ノ原A遺跡（16）では条痕文・沈線文土器が出土している〔佐藤ほか 1995〕。七日市遺跡（97）でも土器が採集されている〔桜井 1996〕。

**前 期** 上ノ原遺跡（15-19）からは初頭から後半（花積下層～諸磯c式）の土器が出土している〔池田 1979〕。清水上遺跡（1）では、中葉（圓山II式～有尾式）の集落を検出した。集落は、竪穴建物1軒と方形柱列（掘立柱建物）3棟からなる。また、後葉（諸磯b式）の遺物も少量出土している〔鈴木ほか 1996〕。大久保遺跡（179）からは末期（諸磯b式）の遺物が少量出土した〔尾崎・坂上 2001〕。また、小出地区の月岡遺跡（52）〔桜井 1996〕、大和地区的上八色（172、前期～中期）〔穴沢編 1977〕で土器・石器が採集されている。堀之内地区的庄司平遺跡（56）からは块状耳飾りや小型磨製石斧などが採取され、古長沢遺跡では前半から後半の土器が出土した〔佐藤ほか 1995〕。

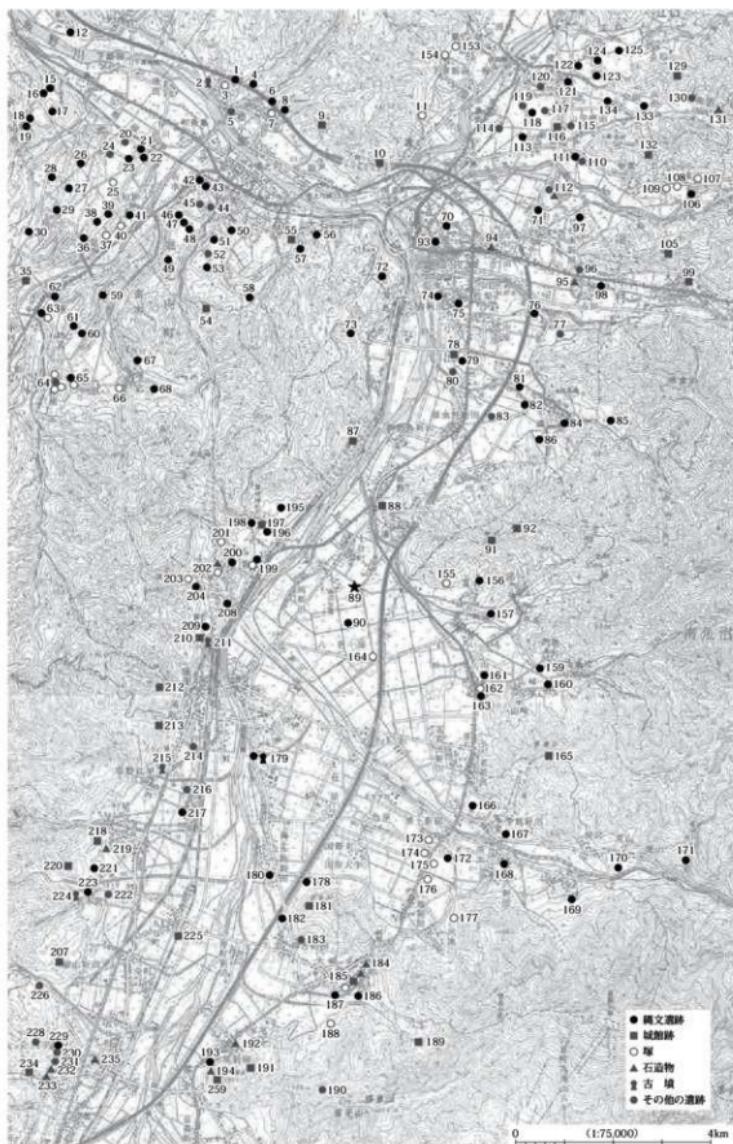
**中 期** 最も遺跡数が増加する時期である。また、魚沼地域の中期の遺跡は、「後期前葉にかけて継続する場合が一般的」との見解〔桜井 1996〕がある。清水上遺跡（1）では初頭（劍野E式平行）～中葉（大木8a式に平行）に狭い範囲で地点を変えながら營まれた集落が検出された。なかでも前葉から中葉の集落は、円形または楕円形の竪穴建物と、長方形の大型竪穴建物、貯蔵穴からなる環状ないしは馬蹄形を呈する〔田海ほか 1990a、鈴木ほか 1996〕。その他、後葉（大木9式・沖ノ原式）の土器も少量出土している〔鈴木ほか 1996〕。月岡遺跡（52）では前葉の石圓炉を伴う竪穴住居が検出されている〔中村 1968〕。瓜ヶ沢遺跡（8）では土坑に伴い、前葉（劍野E式平行）の土器が出土している〔藤巻ほか 1985〕。江口上原遺跡（124）では前葉（阿玉台式平行）の遺物が出土した〔高木 2010〕。布場平D遺跡（46）では前葉の竪穴建物2軒と方形柱穴列1棟のほか、狩獵用闇穴と考えられるV字形溝状土坑が検出されている〔佐藤ほか 1985〕。古長沢遺跡（53）では中葉（大木8a-b式期）を中心に中期前葉から後期中葉までの土器が出土し、石組み炉や地床炉を持つ竪穴建物7軒などが検出されている〔田海ほか 1990b〕。原・居平遺跡（62）では中

葉 - 後葉（大木 8b-9 式に平行）を中心とする環状集落を検出した。竪穴住居 36 軒を検出し、かの形態は石圓か複式かがあり、かの中心軸は概ね広場の中心を向いている。そのほか、中葉（大木 8a 式平行）と後期初頭（三十稻場式平行）の遺物が少量出土している。原居平遺跡が立地する河岸段丘上には 300m 離れて倉下遺跡が存在するが、後期前半（堀之内式平行）を中心とすることから、原居平遺跡の集落が移行した可能性が指摘されている〔梅川 1998、池田ほか 1981〕。布場上ノ原遺跡（125）からは中葉 - 後葉を中心とし、後期初頭（三十稻場式平行）までの遺物が出土している〔高木 2007〕。正安寺遺跡（42）からは中葉（大木 8b 式平行） - 後葉（大木 9 式平行）を中心とする集落を検出した。検出した建物は石圓か複式かを有する竪穴建物 31 軒で、プラスコ状土坑 16 基が建物の周りに配置されることから環状集落になると考えられている。建物内からは火焰型土器が 1 個体潰れた状態で検出した例や、焼失した建物の壁際から石棒が検出した例があるなど良好な遺存状況である〔梅川 1996・1997〕。長者林遺跡（79）では火焰型土器を含む大木 8b-9 式期の土器が昭和 30 年代の耕地整理の際に出土している〔桜井 1996〕。水上遺跡（223）では、末葉（大木 10 式平行） - 後期初頭（三十稻場式平行）を中心とする集落を検出した。集落は、竪穴建物 12 軒、土坑 49 基、屋外埋甕 3 基などからなる。繩文土器は、中期末葉と後期初頭の他、前期末葉（諸磯 b 式）・中期前葉（新崎式）が少量あり、中期中葉末 - 後葉（大木 8b-9 式平行）と後期前葉（称名寺・堀之内式）が定量あり、中期中葉の大部分が欠落する。石器組成では、打製石斧・石錐が出土せず、磨製石斧が微量で、凹・磨石が多いという特徴があり、清水上遺跡と類似する。堆積土から三十稻場式段階において洪水により集落を廃棄したものと考えられている〔池田・荒木 1988、池田・細矢 1990〕。

そのほか、小出地区の立ノ内遺跡（70）・向山遺跡（72）・浦ノ山遺跡（73）・上原遺跡（76）・十楽遺跡（85）・桜田遺跡（84）・水頭遺跡（86）・荒屋敷遺跡（82）〔桜井 1996〕、広神地区のいのくぼ遺跡（123）・上原遺跡（76）〔関 1980〕、堀之内地区的七久保遺跡（182）・柳平（22、加曾利 E2 平行）〔池田 1979〕・上ノ原 A 遺跡（16、剣野 E1 式）〔佐藤ほか 1995〕、大和地区的船ヶ沢長者屋敷遺跡（168）、〔細矢 1994〕、出水田（209、中 - 後期）・宮田（196、中 - 後期）・鳥居木（200、中 - 晩期）・所平（204、中 - 後期）・まぎのこう（208、中 - 後期）・堀場（157、中 - 後期）・京平（156、中 - 後期）・館ノ腰（187、中 - 晩期、中世館）〔穴沢編 1977〕からも土器・石器が出土・採取されている。八色原に位置する堂島長者屋敷遺跡（167、中期 - 晩期）、上八色遺跡（172）、平間（195、中 - 後期）、八色原遺跡（90、中 - 後期）でも戦後の開拓・耕地整理などの際に中期の土器・石器が出土・採取されている。そのうち、まぎのこう・鍛冶屋原・鳥居木・八色遺跡からは硬玉大珠が出土している〔穴沢編 1977〕。

**後期** 上ノ原遺跡（15-19）からは前葉（南三十稻場式）の土器が少量出土している〔池田 1979〕。正安寺遺跡（42）からは前葉（三十稻場式平行） - 中葉（加曾利 B 式平行）を中心とする遺物が出土し、堀之内 I 式期の竪穴建物を 1 軒検出した。〔梅川 1996・1997〕。柳古新田遺跡（180）では前葉 - 中葉（称名寺式・堀之内式併用）を主体とする環状集落を検出した。集落は竪穴建物 25 軒、長方形柱穴列 4 棟、配石土坑 27 基、配石遺構 20 ヶ所、土坑 39 基、埋甕 4 基からなり、集落中央と周縁に墓群が伴う。粘板岩製線刻岩板が出土しており〔池田・荒木 1987〕、注目される。布場平 D 遺跡（46）の土坑からは土器とともに炭化した栗が多量に出土している〔佐藤ほか 1985a〕。瓜ヶ沢遺跡（8）からは後期 - 晩期にかけての亀甲状 6 本柱穴列を持つ建物跡が 4 軒、土坑、V 字状溝状遺構（竪穴）が検出されている〔佐藤ほか 1985b〕。

そのほか、小出地区的古新田遺跡（74）・荒屋敷遺跡（82）で土器が採集されている〔桜井 1996〕。大



第3図 周辺の遺跡分布図

(国土地理院発行 平成6年「小千谷」「八海山」平成9年「須原」平成10年「十日町」1:50,000原図)

No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代
1	清水上	縄	58	前平	調	114	寛平	古代	186	十二原	縄
2	吉林 1～6 号墳	古墳	59	前原祭祀場	調	115	板倉敷	中世	187	郡ノ屋	縄
3	行人塚	不明	60	谷野田	調	116	宮の内跡	室・安	188	百人塚 1～4 号墳	南
4	水井	縄	61	大平	縄	117	庄代	平	189	御城跡	南
5	設倉社古墳出土地	家	62	原・植子	縄、埴(不明)	118	石妻根	盛・平	190	足原	中世
6	稚原平	縄	63	曾下	縄、埴(不明)	119	馬ケリ	平	191	越後山城跡	室・帷
7	浅沢の塚	不明	64	植葉	不規、埴(不明)	120	佐佐田	平	192	道光寺石碑	中世
8	三ノ穴	縄	65	古鹿	縄、埴(不明)	121	日吉原	縄	193	若宮	縄
9	鏡ノ瀬城跡	室	66	鹿の川塚	不規	122	南北城	縄	194	足尾摩室山	不明
10	下舟山城跡	室	67	ソーワ穴手	縄	123	久くぼ	縄	195	平野	縄
11	下の御塚	不明	68	鹿の川中平	縄	124	三日月原	縄	196	雪田	縄
12	平	縄	69	立川	縄	125	布施ノノ原	縄	197	須川城跡	中世
13	上ノ原 E	縄	70	立川	縄	126	草木山城跡	第 1 古?	198	木戸井	縄
14	上ノ原 A	旧・縄	71	如意里	縄	127	千葉	不明	199	カヤツ原	縄、等(?)
15	上ノ原 D	縄	72	山田	縄	128	米沢古船場	第 1 古?	200	高麗屋	縄
16	上ノ原 B	縄	73	減少ノ山	縄	129	中城跡	室・安	201	武下下原	江
17	上ノ原 C	縄	74	古田田	縄	130	子の神	縄	202	武下生國四塚・緑塚	中世
18	上ノ原 E	縄	75	新平	縄	131	大原	縄	203	舟手原	江
19	上ノ原 F	縄	76	上原	縄	132	車中陣跡群	不明	204	舟手原	縄
20	むしな平	不明	77	宮原	小朝	133	車中陣跡群	不明	205	鶴山城跡	室
21	田ノ船開聞	縄	78	宮原	小朝	134	筑前	不明	206	まのこのう	縄
22	相平	縄	79	佐野者原跡群	戰一	135	筑前	不明	207	鶴山城跡	室
23	船橋山 A	縄	80	佐林	縄	136	筑前	不明	208	まのこのう	縄
24	船橋山 B	中世	80	佐佐	平	137	造堤	縄	209	赤糸田	縄
25	稚羽原	不明	81	糸山	縄	138	石門	縄	210	山城跡	中世
26	下船大平	縄	82	長森敷	縄	139	石門田	縄	211	山ノ原 1～3 号墳	古墳
27	下鳥	縄	83	三木木	墳・室	140	布瀬	縄	212	湯瀬城跡	室
28	牛ヶ苔	縄	84	稻田	縄	141	坊塚	縄	213	上山城跡	室
29	番ヶ平	縄	85	十束	縄	142	大原	縄	214	水口	允
30	沢田	縄	86	水原	縄	143	内山	縄	215	上山古墳	古墳
31	原城跡	範	87	新原城跡	室	144	淨原	江	216	組島	平
32	下林	縄	88	桑原城跡	室	145	淨原河跡	室	217	川尻	縄
33	乳屋原平洋原	不明	89	町上	縄	146	田舎	縄	218	一村尾跡	中世
34	金原	縄	90	八角原	縄	147	望岳山古墳	縄	219	唐の板壁	中世
35	和田段	縄	91	船之城跡(雲土城跡)	室～範	148	望岳山古墳	縄	220	ゴツヅクの割跡	中世
36	和田原の塚	不明	92	溝ノ谷城跡	室～範	149	安の寺跡	室	221	ゾウカビワ	縄
37	和田	縄	93	原	縄	150	朝日城跡下	縄	222	朝原	古代
38	正安寺	縄	94	井出新田の五輪塚	江	151	柿子	縄	223	木上	縄
39	春日平	縄	95	吉原の五輪塚	江	152	上色原	縄	224	名次古場	古場
40	瑞雲寺	中世	96	吉田日	不明	153	神ノ木 1・2 号行塚	曲	225	御前	古～室
41	赤堀山 D	縄	97	七条市	縄	154	三塚(穴地 1～3 号塚)	曲	226	西寺寺跡	南
42	赤堀山 B	縄	98	西条 A	縄	155	上色原	曲	228	天元	平
43	赤堀山 C	縄	99	大原城跡	不規	156	宮ノ瀬 1・2 号塚	曲	229	幡山	縄
44	圓治原	縄	100	跡ノ山城跡	室	157	向ノ上 1～2 号塚	中世	230	六舟寺北隣	平
45	船之大糸城の塚	不明	101	牛糸原	縄	158	幡山山城跡(佐称)	縄	231	林原	平
46	日向の塚	縄	102	大糸原	墳・室	159	大保	縄・古場	232	阿多御堂跡	室
47	月明	旧・縄	103	研究 1・2 号(西側・東側)	不明、室	160	研究新田	縄	233	角野御堂跡	南
48	吉長沢	縄	104	三ノ塚	室	161	大原城跡	縄	234	美ノ台古墳群	南
49	船之大糸城跡	室	105	市川原	平	162	七子原	縄・平	235	宝令寺古墳群	南、不明
50	大石跡地	中世	106	市川学校	縄	163	寺原	室	239	八幡御跡	南
51	注羽河	縄	107	市川	縄	164	大原城跡	縄	① 宮石番	築・文	
52	月明	旧・縄	108	市川 1 号(西側・東側)	不明、室	165	横山城跡、蓬寺古墳群・大崎跡	曲	② 宮石町	築・文	
53	吉長沢	縄	109	三ノ塚	室			③ 宮石町	築・文		
54	船之大糸城跡	室	110	市川原	平			④ 宮石町	築・文		
55	大石跡地	中世	111	東市学校	縄			⑤ 宮石町	築・文		
56	注羽河	縄	112	白石一・市吉古跡	平・中世			⑥ 宮石町	築・文		
57	対野立	縄	113	新家家の道	縄・古代			⑦ 宮石町	築・文		

第 1 表 周辺の遺跡一覧表

和地区ではまぎのこう遺跡(208)で三十稲場式土器が、鳥居木遺跡(200)で三仏生式土器が出土している〔穴沢編 1977〕。広神地区からは清水上屋敷遺跡で前葉(三十稲場式平行)の土器と石器が採集されている。広神地区でも後期の遺跡のほとんどは「中期と複合」し、後葉の土器は「ほとんどみられない」という〔闇 1980〕。

**晩 期** 大久保遺跡(179)・清水上遺跡(1)・荒屋敷遺跡(82)からは中葉の絡条体網目撚糸文土器・入組文土器(大洞 BC 式)・赤彩壺(大洞 C 式)が少量出土した〔尾崎・坂上 2001、鈴木ほか 1996、高木 2007〕。居平遺跡(75)からは中葉・末葉の墓坑が検出され、大量の土器と共に接着剤(アスファルト)の付着した石器やヒスイ製垂玉が出土している〔池田ほか 2002、池田 2002〕。堂島長者屋敷遺跡(107)からは後期末葉・晚期末葉までの土器が出土した〔池田 1992b〕。古長沢遺跡(53)からは後葉の赤彩された沈線網状文土器が出土している〔佐藤ほか 1995〕。

また、小出地区の古新田遺跡(74)〔桜井 1996〕と、広神地区的南谷地遺跡(122)からは土器・石器が採取されている。特に、南谷地遺跡からは柄頭に工字文が彫刻されている石劍が、昭和 30 年代の耕地

整理の際に発見されている〔関 1980〕。

## B 弥生時代以降の周辺遺跡

### 1) 弥生時代

遺跡数は少ない。春日平遺跡（43）からは遺構が検出されていないものの、正位の状態で出土した後期の完形壺が出土しており、再葬墓の可能性が指摘されている〔梅川 1996〕。布場平D遺跡（46）からは中期（宇津ノ台Ⅱ式群）の土器が出土し、南東北からの影響が指摘されている〔佐藤ほか 1985a〕。一水口遺跡（214）は、昭和 27 年に東京大学により発掘調査され、古墳時代前期にかけての遺物が多く出土し、イネ・ウリ・ヒヨウタン・クルミなどと共に出土した弥生土器は櫛式の流れを組む櫛描文を有する〔桜井 1996〕。古林古墳群（2）周辺からは末葉の土器が出土している。

### 2) 古墳時代

魚沼地域には中期末～後期の群集墳が展開する。この時期に大和朝廷の支配が及び、該地が大和朝廷の越後進出の足掛かりとなっていたと考えられている〔桜井 1996〕。

町上遺跡の立地する魚野川右岸では、大久保古墳群（179）と古林古墳群（2）の 2 例のみが知られる。大久保遺跡では墳丘が 19 基確認されていたが、浦佐バイパス法線内の後期円墳群（5 基）を発掘調査し、供獻土器と管玉などが出土した〔尾崎・坂上 2001〕。後期前半の古林古墳群では墳丘が 6 基確認されているが内 2 基は既に湮滅している。横穴式石室を作うものも含む。明治 14 年の開墾の際に直刀・鉄鎌・馬具・小型仿製鏡・刀装具・人骨が出土した〔梅川 1992〕。

対岸の魚野川左岸には、下山古墳群（211）・名木沢古墳群（224）・蠍子山古墳群・飯綱山古墳群（南魚沼市）が展開する。明治年間に発掘された下山古墳群は水無川が魚野川に合流する地点の標高 200m の尾根上に 6 基が直列に並んで築かれ、直刀・勾玉・內行花文微製鏡・管玉などが出土した〔細矢 1994〕。名木沢古墳群は明治 9～14 年の開墾で鏡・勾玉・石鎌・須恵器などが出土した。上山古墳群では方墳が 7 基確認され、人骨・土師器・須恵器が出土した。段野古墳は「旦那塚」と呼ばれており、昭和 27 年に土中から須恵器が発見されている〔穴沢編 1977〕。

集落遺跡はあまり知られていない。清水上遺跡（1）からは竪穴住居 1 軒、溝 1 条が検出されている〔鈴木ほか 1996〕。

### 3) 古代

清水上遺跡（1）〔鈴木ほか 1996〕・上ノ原 A 遺跡（16）〔池田 1979〕・和伍遺跡（80）〔高木 2010〕・馬作り遺跡（119）〔高木ほか 2012〕・春日平遺跡（43）〔梅川 1996〕・瑠璃光寺遺跡（44）〔佐藤ほか 1995〕・七久保遺跡（182）〔佐藤 1985b〕・覚屋遺跡（114）〔池田・高木 2001〕などで平安期の集落乃至は遺物が検出・出土しているものの、遺跡分布は散漫である。その内、馬作り遺跡では 9 世紀中葉～10 世紀前葉の集落を確認し、竪穴建物 1 軒・掘立柱建物 3 棟を検出した。須恵器は佐渡小泊産が大半を占め、東頸城丘陵産・淡海川流域産が少量ある。土師器表には北陸型・北信型・武藏型がある。また、覚屋遺跡では 8 世紀末～9 世紀中葉の集落を確認し、掘立柱建物 3 棟・竪穴建物 2 軒を検出した。小泊・在地産須恵器と土師器無台碗（底部糸切り）、武藏型土師器表などが出土し、底部に「北」と書かれた墨書き土器も見られる。

#### 4) 中世

集落遺跡はあまり知られていないが、魚野川沿いの低地段丘及び扇状地を見下ろす高台には城館が数多く築かれる。また、板碑などの石像物や塚、寺院などの信仰遺跡が堀之内地区、広神地区、浦佐地区、五日町地区、八色原南東部に集中する。

下倉山城（10）は県指定史跡である。捨曲輪の一部を発掘調査した他、中世後期～近世の土坑墓と、中世後期～近世初頭の塚及び土壙状遺構を検出した〔藤巻ほか1985a〕。苗場山城（191）でも発掘調査が行われ、空塗が検出されている〔佐藤ほか1985b〕。御館遺跡（225）は、水路や掘立柱建物群、井戸などからなる中世居館である。青磁・青花のほか14世紀代の珠洲焼や漆器が出土した〔池田1992a〕。

一日市遺跡（112）〔高木2009〕・水上遺跡（223）〔池田・細矢1990〕は中近世の墓地である。水上遺跡では、掘立柱建物と火葬土坑を検出した。それらの遺構の一部は近世まで下る可能性を含むものの、14世紀代の珠洲焼や北宋錢が出土していることから大部分は中世の所産と考えられる。八色原扇頂部の穴地付近には、かつて伊板寺（いはんじ）もしくは阿南寺があったとの伝承があり、集落内から板碑6基が出土した。そのうち1基は「貞和六（1350）年」銘、ほか1基は「応安二（1369）年」銘をもつ。該地は南北朝時代の古戦場の一部と伝えられ、塚が多く分布し、塚上に「永和元（1375）年」銘板碑をもつ塚もある。〔細矢1994〕。

清水上遺跡（1）〔鈴木ほか1996〕・居平1号塚（62）〔池田ほか1981〕・七ツ塚〔佐藤ほか1995〕・滝沢の塚（7）〔佐藤ほか1985b〕・京平塚（155）〔細矢ほか1985〕などの塚では発掘調査されているが、遺物が出土せず内部施設を持たないことから、詳細は不明であり、該地に分布する塚の中には近世以降に下るものも多く含む可能性がある。

### C 魚野川水系の水産資源

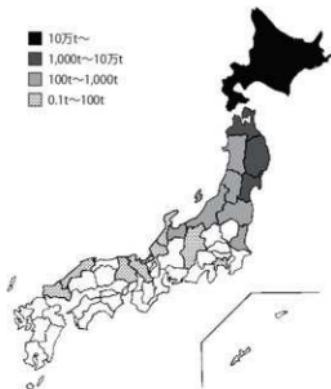
魚野川は、群馬県との境である谷川連峰西面を水源帯とし、本流68km余の一級河川である。水源の山岳地帯を一気に下り、魚沼南部の肥沃な盆地を潤しながら北流し、右岸側に展開する越後三山から集めた水無川や佐梨川などの大小河川や守門岳を源流とする破間川などを併せながら魚沼北部を貫流し、長岡市川口地区で信濃川に入る。信濃川は長野県を源流（千曲川）とし、新潟県に入ると十日町盆地から越後平野を流れ、日本海へと達する一級河川である。延長は367kmと国内最長で、流域面積は11,900km<sup>2</sup>と国内第3位である。

魚野川では、その名通り多くの川魚が棲む。信濃川と魚野川との合流地点は日本海から約80km離れているが、秋には現在でも鮭が遡上する（第4図・第2表）。また、夏には鮎釣りが盛んである。そのほか、鱒・鯉・鮒・八ツ目鰐・ウゲイ・カジカ・スナホリ（カワギス）・ヤマメ・イワナ・ハヤ・ドジョウなど多種に亘る（魚沼漁業協同組合のご教示による）。

特に鮭は古来より主要な魚として多くの漁法・方言・食習・民俗が発達した。

天保8-12（1837-41）年に刊行された魚沼地域の生活を紹介した書籍『北越雪譜』には、信濃・魚野川を遡上する鮭の様子やその生態・食し方・商團・漁法について細部にわたり記載されており〔岡田校訂1978〕、近世においても該地に鮭文化が根付いていたことを物語る。

また、初鮭は縁起物として貴ばれ、近世では主に長岡藩主へ毎年献上され、その多くは将軍家へ送られ



第4図 鮭類漁獲量（海面・内水面合算）  
〔2010年度統計〕

水系	捕獲場	捕獲数
山北大川	山北大川	11,201
勝木川	勝木	1,768
三瀬川	三瀬	44,616
荒川	荒川	11,312
船内川	船内	850
加治川	加治	4,317
阿賀野川	阿賀野	17,764
阿賀野川	小町賀野	1,893
信濃川	信濃	3,388
信濃川	能代	7,667
信濃川	加茂	6,962
信濃川	五十嵐	5,937
信濃川	大河津分水	574
信濃川	魚野	4,285
信濃川	善津	6
谷根川	谷根	3,180
桑取川	桑取	6,372
名立川	名立	14,448
能生川	能生	12,773
木浦川	木浦	139
草川	草川	974
海川	海川	1,002
能川	能川	1,604
田海川	青海川	729
合計		163,781

第2表 河川別サケ類採捕数（2010年）

〔独立行政法人水産総合研究センター「平成22年度  
河川別の採捕件数と放流数」より作成〕

た。魚野川沿いの村では「鮭役」を納入することで漁場を確保している。

水無川と魚野川の合流地点である岡部田では、合流部付近約200mの内を「お種川」と称し、親鮭は捕つても良いが、産卵した卵の捕獲は禁止する取り決めがあった。

考古学的には、縄文時代以降特に東日本や日本海に注ぐ水系地域での食料分野におけるサケ・マス類の重要性が指摘されている〔山内 1964・1969、網野 1985〕。新潟県でも近年、阿賀町小瀬ヶ沢洞窟遺跡（縄文早・前期）、魚沼市黒姫洞窟遺跡（縄文早期前葉）、新潟市豊原遺跡（縄文前期後半～中期初頭）、胎内市江添遺跡（縄文後期）、村上市元屋敷遺跡（縄文後・晚期）、村上市道端遺跡（縄文後・晚期）、新発田市青田遺跡（縄文晚期）、新潟市西郷遺跡（弥生時代前～後期）、新潟市御井戸遺跡（古墳前期）、胎内市反貫目遺跡（古墳時代）、胎内市西川内南遺跡（古墳～古代）、新潟市の場遺跡（8世紀前半、「鮭」字木簡）、新潟市牛道遺跡（平安時代）などでサケ・マス類の骨を土壤中から検出している〔植月 2006・2009、納屋内・松井 2009〕ものの、県内遺跡全体数から見れば未だ検出事例は少なく、食料全体におけるサケ・マス類の利用頻度を論じるまでは至っていない。町上遺跡の所在する信濃川水系上流部（魚沼地域）では、破間川の支流による川食洞窟である黒姫洞窟（前述）での出土例があるほか、河口から約180km離れた長野県千曲市屋代遺跡の縄文中期後葉の層（遺構復土）からサケ・マス類の椎骨・歯が大量に出土〔松井ほか 2011〕している。

なお、魚野川では採卵のため遡上する鮭類を現在でも採捕している。2010年度の採捕数は4,285尾（第2表）で、2011年度は4,382尾、2009年度は3,337尾、2008年度は3,733尾であった（魚沼漁業協同組合のご教示による）。

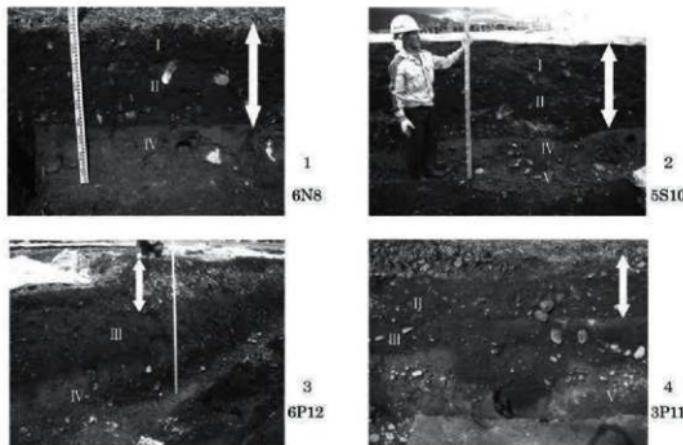
## 第III章 遺跡の調査

### 1 グリッドの設定

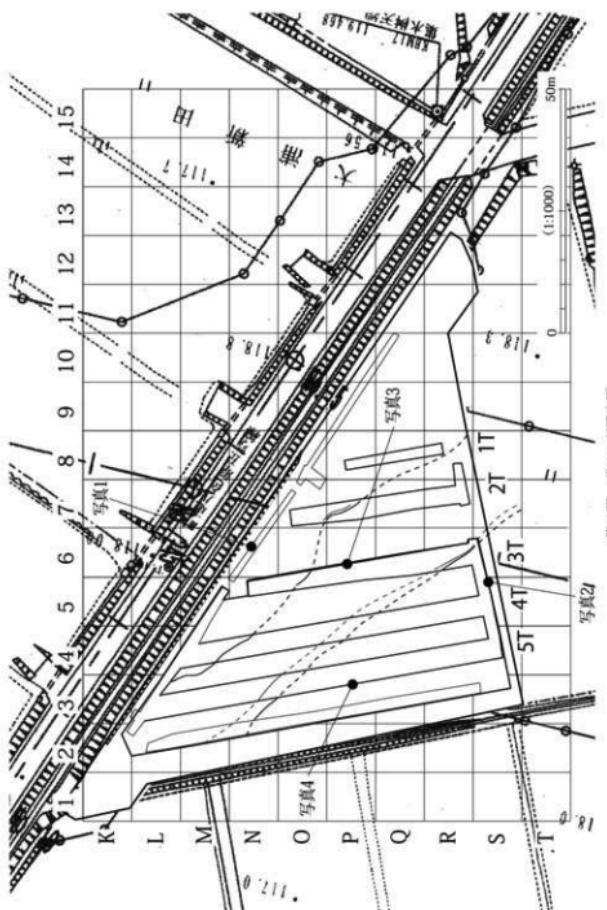
町上遺跡のグリッドは、遺跡範囲の下り側（西側）の北西端を始点として、10m単位の大グリッドを設定した。大グリッドは南北にアルファベットを用い、北から南へ順に付した。南北軸は真北に一致する。調査区はKから始まり、L、M…Sまでの9字を使用した。東西区分は算用数字で西端の1から東へ順に数字を付し、12までが調査区を覆う。大グリッド名の基点は北西隅として、1K等と称した。大グリッド内を2m単位の小グリッドで分割し、北西隅を1として東へ順に送り北東隅を5、南西隅を20、南東隅を25とした。大グリッドと小グリッドの組み合わせで、1K13等と呼んだ。大グリッド2点の座標は1K (X=131,300, Y=400,000)、10K (X=131,300, Y=400,090) である。

### 2 層序

土層は5層に分層した。開拓事業により上位の2層は搅乱・移動している。I層は水田耕作土で褐色土。II層は暗褐から黒褐色クロボク土で0.2mから1.2mの厚さがある。礫・砂・縄文土器が多く含む部分もある。遺物取り上げ時は、客土と注記した。III層は砂を多く含む黒色土（クロボク）で遺物包含層である。本層は調査区を南東から北西方向に斜めに流れる沢地と北西側中央部分（30・3P区）に残り、他の大部分は開拓時の圃場整備工事で削られていた。IV層は遺構検出面で黄褐色シルトや粘質土である。V層は扇状地の疊層で黄褐色シルトが充填する。（下写真4点の水田面標高117.7m 矢印は客土・擾乱層）



第5図 基本層序写真



第6図 グリッド設定期図

## 第IV章 遺構

### 1 概要

時期判定 町上遺跡は、主に縄文時代中期中葉～後期前葉までの遺物が出土する。しかしながら、遺跡の大半は過去の国営圃場整備により地山面に到達するまで破壊されており（図版2、第III章参照）、遺構・包含層の層位的な前後関係は把握できなかった。そのため、遺構の検出はやむなく地山面で一元的に行つたが、切り合い関係にあり確実に時期が異なると考えられる遺構同士の覆土であっても色調・特徴が近似しており、検出時における時期別のグルーピングはできなかった。したがって、各遺構の帰属年代は出土遺物に頼るほしからなかった。ただし出土遺物は、別時期の遺構同士の切り合いによる後世の混入や、遺構が既に検出面上あるいは遺構上部まで破壊されている状況を勘案すると多少の混入は想定せざるを得ず、時期決定にあたっては主体となる出土遺物の年代観を当てている。

立地と遺構の分布 町上遺跡は八色原扇状地の北部に位置し、扇端からやや内側に入った地点に立地する。八色原は圃場整備事業により旧地形が大幅に変更され、現在は美田が広範囲に展開する。現況では遺跡は、扇央方向に位置する南東が高く、扇先方向の北西・西に向かって緩やかに傾斜している。調査範囲の東側（グリッド7列以東）や南側、市道を挟んだ北側のバイパス法線上は、本調査に先行して実施した試掘調査の結果、遺物散布が散漫で遺構が検出されなかったことから、遺跡が延伸しないか、すでに破壊されているものと考えられる（第2図）。また、遺構の分布が調査区西側に集中していること（図版2）から遺跡は主に西側に延伸するものと考えられる。

検出遺構 調査区の中央やや北寄りには、幅15～20m、深さ約1.5mの沢が埋没している。トレーンチ調査したところ、沢内からは中層を中心として少量であるが主に縄文時代中期の遺物が出土し、検出面付近（上層）では縄文時代後期前葉を下限とする遺物が定量出土している。このことから、この沢は縄文時代中期の段階で半埋没状態にあり、後期前葉の段階でほぼ完全に埋没したと考えられる。

沢の西側からは縄文時代中期後葉～後期前葉の竪穴建物4軒、土坑29基、ピット71基を検出した。グリッドO・P列では遺構の切り合いが著しい。また、沢左岸に当たるO・N列では縄文時代中期～後期初頭の完形に近い深鉢が逆位で埋設されているなど墓域としての土地利用の在り方も想定できる。

沢の東側からは縄文時代後期初頭～前葉の掘立柱建物5棟、柱穴列1列、ピット19基を検出した。沢の西側に縄文時代中期後半の遺構が定量見られるのに対し、沢の東側からは明瞭な中期の遺構は検出されていないことから、該地の開発は縄文時代後期に入つてからの可能性が高い。



第7図 土層堆積状況写真

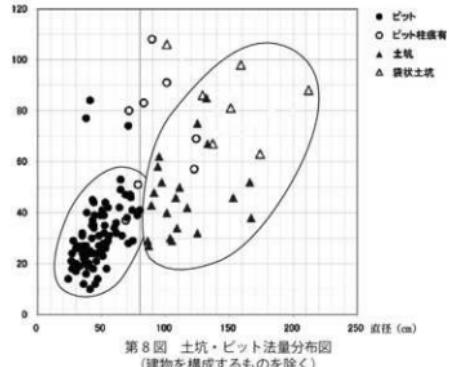
## 2 記載の方法

遺構の種別は略号を用い、堅穴建物:SI、掘立柱建物:SB、柱穴列:SA、土坑:SK、ピット:Pとした。土坑とピットの区別は、法量分布（第8図）から平均直径80cm以上を土坑とした。ただし、建物柱穴と考えられる遺構や断面観察の結果、柱痕の認められる遺構については大きさに係わらずピットとした。

遺構番号は、遺構の種類に関係なく深さ(cm)

通し番号を付し、遺構番号を頭に付けた。ただし、複数遺構の集合体である堅穴建物・掘立柱建物・柱穴列の番号についてはその限りではない。また、調査及び整理の過程で欠番とした遺構番号もある。

個々の説明は本文（各説）、遺構観察表、図面・写真図版を用いる。ただし、本文、図版は特徴的な遺構のみ選別して掲載した。遺構観察表には掘り込みを有するすべての遺構を掲載した。



第8図 土坑・ピット法量分布図

（建物を構成するものを除く）

## 3 各 説

### A 堅 穴 建 物

堅穴建物は沢の西側で4棟検出した。SI91とSI92は調査区西端で検出したが、大部分が調査区外へ延伸し、切り合ひ関係も著しいことから全容を把握しがたい。SI27とSI46は上部を破壊されているため堅穴状掘り込みの有無若しくは範囲が明瞭でない。

SI27（図版15・17・18・55・57） グリッド4R・Qに位置する。堅穴の掘り込み及び床面、炉跡は検出できなかったが、柱穴がほぼ等間隔に円形状に巡ることから堅穴建物と認定した。柱穴はP47・48・19・18・17・16・15・14・13・12・11・6・35の13基で、P47とP35間の北西部については擾乱が著しく本来的に存在しないのか破壊されたのかは不明である。13基の柱穴の底面標高は116.5-116.9mとややばらつくが、南東部が深い傾向がある。柱穴の平面規模は、擾乱の著しいP47・48・35・6を除くと平均径40-65cm程度と小型であるが、まとまりがある。柱穴の平面形はいずれも円形からやや楕円形を呈し、楕円の長軸は柱穴列の円弧に即する傾向がある。柱穴で囲まれた円形プランは直径6.5-7.0mを測り、床面積は35.8m<sup>2</sup>程度と推定される。円形プラン内からは、5基のピットと3基の土坑を検出した。これらは、いずれも堅穴建物との切り合ひがないため新旧及び同時性は確認できないが、プラン内に存在していることから建物が存在していた時期に同時に機能していた可能性を考慮し、本項で報告する。P9とP21は柱穴と考えられるP11とP19を結ぶ直線上に位置する。P11・9・21・19を結ぶ軸はSI27の平面プランをおおむね二分することからP9とP21は上屋を支える支柱穴である可能性がある。P9とP21は底面標高が116.7m・116.6m、平面直径が平均48cm・45cmを測り、近似し

ている。平面プラン中央付近には断面袋状を呈する土坑SK20が配される。SK20は上面で直径約1.3m、下面で1.6mを測り、下底面はやや湾曲する。覆土はレンズ状堆積で、床面から30cm程高い最下層（4層）の上面付近で縄文時代後期初頭の土器底部（図版21・73-11）が出土した。この土坑の覆土を水洗・分析した結果、サケ科を含む43点の焼骨が含まれていた（第VI章参照）。SK3とSK4はどちらも平面形が橢円でほぼ同じ軸方向を指す。また、長軸及び短軸の規模・底面標高も近似するなど共通性が高く、用途面での関連性も高いものと考えられる。出土遺物は少ないが、柱穴などから縄文時代中期中葉の大木8b式土器や後期前葉（初頭含む）の浅鉢が出土している。SK20からは後期初頭頃の蓋や中期末葉～後期初頭の大木10式深鉢、後期初頭頃の深鉢底部などが出土している。このことから、SK20が本建物に伴うると中期末葉～後期初頭に帰属すると考えられ、伴わない場合は中期後半に遡る可能性があろう。

SI46（図版15・19・55-58） グリッド3R・Q、4R・Qに位置する。規則的に配された柱穴群、南側の壁及び周溝、中央やや西寄りに石組炉を検出したことから竪穴建物と認定した。竪穴の掘り込み範囲及び床面は検出できなかった。柱穴は北側に西からほぼ等間隔にP31・30・29と並び、やや離れてP5が配される。南側にはそれらに対してそれぞれP70・60・61・7が配され、この位置関係はSK5とSK7の中間に石組炉（SK67）を結んだ軸線とほぼ線対称となる。P31以西の柱穴については不明瞭である。8基の柱穴の底面標高は南側の4基が116.0-116.3mとやや深いに対し、北側の4基は116.2-116.4mと浅くなる傾向がある。柱穴の平面形は隅丸方形基調の楕円形を呈するものが多く、楕円の長軸は隣接する柱穴同士を結んだ線上に即する傾向がある。柱穴の規模は長軸が84-108cm、短軸が70-100cmとやや大型で、まとまりがある。南側柱穴列の40-50cm南には柱穴列に沿って竪穴の壁面（最大深さ15cm）を検出し、壁面際には幅16cm、深さ16cm程の周溝が巡る。周溝の底面からは10-30cm程の間隔で深さ10cm程の小ピットを複数検出した。建物の東側と北半は上部の擾乱が著しく、周溝の延長を検出することはできなかった。仮に本建物の柱穴と認定した8基の柱穴の外側を柱穴列と平行に周溝が巡るとすると、本建物の平面形は長軸約9.0m、短軸約8.5mの長楕円（小判型）を呈することとなり、周溝に囲まれた床面積は53.0m<sup>2</sup>程と推定される。建物プランの中央やや西よりには石組炉（SK67）を持つ。炉体部は中央がやや括れた「だるま形」の平面プランを呈し、長軸約1.9m、短軸約1.2m、深さ約0.4mを測り、壁面全体に石組がなされていた可能性が高いが、検出された石組みは南西部の一部分のみである。覆土中からは石組の構成石と考えられる礫が多数混入していることから、大部分は廃絶時若しくは後世に破壊されたものと考えられる。炉の東側からは中期後半の大木9a式浅鉢（19）がほぼ完形で出土した。石組炉（SK67）は西側の一部を土坑SK68に切られており、その部分の石組みは壊されている。建物プラン内及び周辺からは15基のピットを検出した。そのうち、P112は本遺構の周溝を切っており、本遺構より新しい。また、P112の南には埋設土器が1基検出されている。埋設土器（図版22・73-19）は深鉢を正位に据えたものと考えられるが底部付近のみの出土で、遺存部も劣化が著しいため、復元率は低い。本遺構の年代は、覆土及び石組炉内などの出土品から沖ノ原式期・大木9a式期を中心とする中期後葉と考えられる。このことは、本遺構を切って構築されるP112から後出の加曾利E IV式土器が出土していることと整合している。

SI91（図版8・14・60） 調査区西隅のグリッド3Oに位置する。半弧状の周溝を検出したことから竪穴建物と認定した。本建物の大部分は西側へと延伸するものと考えられる。周溝は幅25cm程で、深さは10cm程を測り、弧の直径は約5.6mを測る。周溝に接して小規模なピットを複数検出した。周溝から内側へは4-6mの幅で平坦面が設けられており、中央部は20cm程深く掘り込まれている。このことから本遺構は、ベッド状遺構を伴う竪穴建物である可能性が高い。調査区西側の断面からは明瞭な貼床若しくは硬

化面は確認できなかった。建物の検出箇所周辺は遺構の重複が著しく、本建物に伴う柱穴の特定は困難である。柱痕を持つP213及び土坑SK106(中期末~後期初頭)・216(後期初頭)は本遺構を切っており新しい。また、土坑SK233は本遺構に切られており、SK233はP235を切っている。P235はP234に切られるが、P234は本建物を切っていないことから、SK233・P235・P234は本遺構より古い。SI91-P1は本遺構と同時若しくは新しい時期の遺構で、規模から建物の主柱穴となる可能性がある。本建物の中央やや南よりのベッド状遺構に接するSI91-P1の検出面上位からは焼土が検出されている。焼土はP1より新しいことから、本建物のがではないと考えられる。本建物の時期は、覆土中及びプラン内のピットなどからは、朽倉式期の遺物が定量出土していることから、中期中葉に帰属する可能性が高い。埋土中やSI91-P3からは後期前葉の沈線文系土器が少量出土している。P3と本建物との切り合い関係については不明であるが、土坑SK106やSK216のように後期の遺構と考えられる。また、本建物中に含まれる後期の遺物(図版23・74-57など)については、本遺構を切って構築されている遺構の分布や圃場整備による遺構上部の攪乱などを勘案すると、SI91の構築以後に混入ないしは攪乱された可能性が高い。

**SI92(図版8・14・61)** 調査区西隅のグリッド3Pに位置する。弧状の竖穴壁面を検出したことから竖穴建物と認定した。竖穴の検出範囲は建物東側の極一部のみの検出にとどまり、最大直径約4.2m、深さ約30cmを測る。調査区西側の断面からは、壁に沿って周溝の可能性がある幅20cm程の層位の乱れを検出したが、平面プラン上で確認は出来なかった。また、掘方直上の3層は貼床と考えられるものの、本層の平面堆積範囲は特定出来なかった。なお、硬化面についても断面及び平面で確認出来ない。壁の周辺からは小規模なピットが、やや内側には土坑SK145・146が検出されている。ただし、周辺の遺構は重複が著しく、本建物に伴うものは判然としない。そのうち、SK116(後期)は本建物を切っており新しい。SK145は貼床と考えられる3層を切っている可能性があり、本建物と同時期の可能性がある。SK145は土層堆積状況から柱穴である可能性がある。本建物は出土遺物から中期後半頃と考えられる。

## B 掘立柱建物・柱穴列

掘立柱建物は、沢の東側で5棟を検出した。棟持柱を持つ構造(SB1・3・4)と、棟持柱を持たない若しくは不明瞭な構造(SB2・5)がある。いずれも後期前葉に属すると考えられる。また、掘立柱建物群に近接して柵の可能性がある柱穴列を1例(SA1)検出した。

**SB1(図版3・4・61・62)** グリッド2L・3Lに位置する。主屋は桁行1間(2.6m)、梁間2間(4.7m)を測り、床面積は約12.2m<sup>2</sup>である。建物の南側には中心軸上に主柱穴より小型の棟持柱を支えると考えられる柱穴(P212)が1基検出されている。この柱穴と対になると思定される北側の柱穴位置は、調査区北壁より外に当たるために有無を確認することができなかった。6基からなる主柱穴は平面形が円形からやや梢円形を呈し、規模は直径70-110cm、底面標高115.1-115.4mであるのに対し、棟持柱の柱穴と想定されるP212は直径52cmと小さく、掘り込みも底面標高115.5mとやや浅い。主柱穴のP197とP187の断面からは直径30cm前後の柱を用いていることが観察できる。本遺構は、出土遺物から縄文時代後期前葉(三十編場式段階)と考えられる。

**SB2(図版3・4・55・61・62)** グリッド3M・4Mに位置する。主屋は歪な平面プランであるものの桁行1間(3.0-3.5m)、梁間3間(2.5-3.0m)を測り、床面積は約9.1m<sup>2</sup>である。主柱穴は8基からなるが、梁間方向の柱穴間は近接している。主屋から南にはP183が位置し、本建物の棟持柱を支える柱穴になる可能性もあるため、対となる北側に同様な柱穴が存在していないか慎重に検出に努めたが、発見に至ら

なかつたことから、本報告では可能性の提示に留めておく。主柱穴はいずれも平面円形からやや楕円形を呈し、規模は南側のP184・231が平均直径43cm、61cmとやや小さいものの、他の6基の平均直径は73-87cmとおむね揃う。また底面標高は、8基ともに115.8-116.0mであり共通性が高い。棟持柱柱穴の可能性があるP183は平均直径74cmで、主柱穴の北側6基と近い数値を示し、底面標高も115.7mとやや深いものの近似値を示す。

SB3（図版5・6・61-63） グリッド4Nに位置する。主屋は桁行1間（2.7m）、梁間2間（5.2m）を測り、床面積は約14.0m<sup>2</sup>である。建物の中心軸上の南北には、棟持柱を支えると考えられる小型の柱穴（P162・229）を2基検出し、同軸上にはP148とP230が存在する。6基からなる主柱穴は平面形が円形を呈し、規模は直径90-120cm、底面標高115.3-115.7mを測る。一方、棟持柱の柱穴と考えられるP162とP229は直径78cm、62cmと小さいものの、底面標高は115.5m、115.8mと近似値を示す。また、P162とP229の中間に位置し、主柱穴を構成するP181とP164を結ぶラインとの交点に位置するP148も直径73cm、底面標高115.5mと近似値を示すことから、P148は建物の南北に位置するP162とP229と一緒に機能していた可能性が高い。一方、P230は西側に抜き取り痕の可能性のある浅い掘り込みに切られる様子が見られるものの、柱穴本体は直径38cm程度で底面標高116.3mと小型で浅いことから、P162-P148-P229と同一の機能を有していたとは考えがたい。しかしながら、同一軸上で、かつ主柱穴P180・P163との中间地点に位置していることから、梁材などの上層構造を支える細柱といった機能を有していた可能性は否定できない。主柱にはP163・164・180・181の断面から、直径30-40cmの柱が用いていたことが分かる。棟持柱も、P162の断面から同様に直径30-40cm程度の柱を用い、P230の断面から推測されるように部分的に直径15cm程度の細柱を補助材に用いていた可能性がある。出土遺物から後期前葉（南三十稲場式・堀之内式期）と考えられる。このことは、建物西側の主柱穴であるP181とP182の断面から縄文時代中期の堆積である沢中層と後期初頭～前葉の堆積である沢上層を切って構築されていることと齟齬はない。

SB4（図版5・7・61・63） グリッド5Nに位置する。主屋は歪な平面プランであるものの桁行1間（1.9-2.3m）、梁間3間（4.8m）を測り、床面積は約10.1m<sup>2</sup>である。建物の中心軸上の南北には、棟持柱を支えると考えられる柱穴（P172・193）を2基検出した。8基からなる主柱穴はいずれも平面形が円形からやや楕円形を呈するが、すべてに小型で不整形な浅い掘り込みが付随する。この浅い掘り込みは、断面観察から主柱穴を側面から斜めに掘り込んでいる様子が見て取れることから、主柱の抜き取り痕の可能性が高い。抜き取り痕の付随する方向は一定しておらず、抜き取りに際しての規則性は見られない。主柱穴の底面標高は116.2-116.5mと浅いため、上部の多くの圓場整備時に破壊された可能性が高い。残存している主柱穴の規模は直径40-50cmと他の掘立柱建物と比して極めて小型である。しかしながら、P173やP191の断面からは直径15cm程度の柱痕が観察できることから、本遺構で用いられた柱は細く、必然的に小型の掘り込みで事足りたものと考えられる。なお、棟持柱の柱穴と考えられるP172とP193では、規模が直径38cm・54cm、底面標高116.2m・116.5mと主柱穴と同規模である。本遺構の年代は、少量はあるものの出土遺物から判断して後期前葉（三十稲場式段階）と考えられる。

SB5（図版4・5・61・64） グリッド5O・Nに位置する。主屋は桁行1間（2.3m）、梁間1間（2.3m）を測り、床面積は約5.3m<sup>2</sup>である。主屋がSB1-4と同様に北西-南東軸に延伸する可能性を考慮し、東側主柱穴列のP194とP204から等間隔の位置にトレンチを設定し、柱穴の有無を検討したが、発見には至っていない。また、同様に東西方向に延伸する可能性を考慮し、P238とP204の延長上にトレンチを設定

したが柱穴は検出できなかった。西側への延伸については沢中に設けたトレーナーにより検証不可能であるが、埋没沢の中央部に向かうことからその可能性は低いと考えられる。棟持柱の柱穴についても、周辺で慎重に検出に努めたが、発見には至らなかった。したがって、本遺構は主柱穴4本からなる1間×1間の構造物である可能性が極めて高い。4基からなる主柱穴は平面形が円形から梢円形を呈し、規模が平均直径60-105cmと一定しない。東側列のP194とP204では平均直径72cm・62cmと小型であり、底面標高はいずれも115.8mである。対して西側列のP237とP238は平均直径79cm・103cmとやや大きく、底面標高は115.6mとやや高い傾向にある。このことは、東側列が沢岸の比較的安定した地盤に築かれているのに対し、西側列が沢中のやや不安定な地盤に位置していることと関係している可能性がある。柱の大きさについては、P194及びP204の断面から、主柱に直径20-25cmの柱を用いていたことが観察できる。なお、東側列のP194とP204の中間に底面標高116.2mと浅い掘り込みを持つP224が位置している。P224と本遺構との関係性については不明であるが、補助柱などの柱穴である可能性も否定できない。本遺構は、出土遺物から後期前葉（南三十種場式・堀之内式期）と考えられる。このことは、同じく建物の一部が沢中に位置するSB3の年代観と一致する。

SA1（図版3・5・61） グリッド4M・Nに位置する。P156・159・166・167・208の5基からなる柱穴列である。5基の底面標高は、116.1-116.2m程度とまとまり、北側が深くなる。柱穴間はP166-167間が1.84mと狭いものの、他は2.7-3.5mと比較的均等に直線的に配されている。対となる柱穴列が付近に存在しないことから、柵の可能性を含む柱穴列として報告する。いずれの柱穴からも遺物が出土しなかつたが、沢の右岸に位置することから他の掘立柱建物群と同様に後期前葉に位置付けられる可能性が高い。

## C 土 坑

上面形が平均直径80cmより大きい掘り込みを有する遺構を土坑とした。土坑には①袋状土坑、②埋設土器土坑、③その他があり、本調査区からは①を7基、②を1基、③を25基検出した。検出した土坑は沢の西側にのみ展開する。

### 1) 袋 状 土 坑

断面が袋状ないしはフラスコ状を呈する土坑を一括した。SK20・SK43・SK44・SK45・SK78・SK97・SK106が該当する。いずれも直径1m、深さ60cmを超える大型の土坑である。そのうち、SK20は3Aで説明したので、割愛する。

SK43（図版15・16・69） グリッド3R15・20、4R11・16に位置する。上面形はやや梢円を呈し、長軸182cm、短軸162cmを測る。底面最大径は176cm、深さは63cmを測る。覆土は下位に崩落土を含む層がブロック状に堆積し、上位には黒褐色土-灰黃褐色土を中心とする層が比較的水平に近い状態で堆積する。底面は礫層に達し、比較的平坦であるが、中央に一段下がった窪みを持つ。東側で隣接するSK44に切られている。細片であるが出土遺物から中期中葉の大木8b式から柵倉式期に位置付けられる。

SK44（図版15・16・69） グリッド4R11・12・16・17に位置する。上面形はほぼ円形を呈し、長軸224cm、短軸200cmを測る。底面最大径は224cm、深さは88cmを測る。覆土は最下層（9層）にロームブロックを含む層が約10cmの厚さで堆積し、中-上位はロームブロックを少量-多量に含む層がブロック状に堆積し、人為的に埋め戻しているものと考えられる。最下面には拳大-人頭大程度の礫が散在する。底面は

礫層に達し、比較的平坦であるが、中央に一段下がった窪みを持つ。西側で隣接するSK43を切っている。出土遺物から中期中葉の大木8b式頃頃に位置付けられる。

SK45（図版15・17・56・70） グリッド3R24・25、3S4・5に位置する。上面形は梢円形を呈し、長軸148cm、短軸126cmを測る。底面最大径は168cm、深さは67cmを測る。底面中央には長軸60cm、短軸50cm、深さ8cm程の窪みを持つ。最下層はロームブロックを多量に含み、ほぼ水平に堆積する。中・上位は直径5cm～人頭大程の礫を多量に含み、やや遺存率の高い土器を包含している。本土坑の南西隅底面からは、縄文時代中期後葉の大木9式期の深鉢や、沖ノ原式期～後期初頭に位置づけられる加飾隆唇を伴う深鉢が出土し、中期後葉に位置付けられる。

SK78（図版8・11・67） グリッド3P15・20に位置する。上面形は梢円形を呈し、長軸172cm、短軸146cmを測る。底面最大径は160cm、深さは98cmを測る。覆土は基本的に3層で、レンズ状の堆積を呈し、東寄りに円窪がやや多く入り込む。西側で隣接するP58を切り、北側で隣接するSK139に切られる。出土遺物から後期初頭頃に位置付けられる。なお、P58は中期末～後期初頭、SK139は後期前葉と考えられ、齟齬はない。

SK97（図版8・11・56・66） グリッド3P8に位置する。上面形は梢円を呈し、長軸112cm、短軸90cmを測る。底面最大径は124cm、深さは106cmを測る。覆土は10層に分層したが、断面観察の結果、1～5層は後世に掘り込まれたビット（柱穴）であることを確認した。本土坑本来の堆積は6～10層であり、ほぼ水平に堆積している。8層以下は焼土を大量に含む層で、土壤中に含まれる微細骨片を分析した結果、1万2千点を超えるサケの骨を含む、合計11万点余の焼骨片が含まれていることを確認した（第VI章参照）。土坑の壁面など周間に焼固した痕跡が認められないことから、これらの焼骨片はその場で焼かれたのではなく、本土坑に投棄された焼土中に含まれていたものと考えられる。また、本土坑覆土中～下位には人頭大の礫を投棄した痕跡も確認出来た。本土坑を切るビット（柱穴）は断面観察から直径33cm程の柱が据えられていたものと考えられ、直径20cm程の礫で根固めを行っている。本土坑からは大木8b新段階、大木9式、沖ノ原式、及び沈線文系土器が出土した。出土土器における時期別のまとまりから、袋状土坑が中期中葉末～後期初頭頃、ビット（柱穴）は後期前葉である可能性が高い。その他の遺構との切り合いは、本土坑がP144・143を切っている。P143は後期初頭と考えられ、齟齬はない。

SK106（図版8・9・66） グリッド3N21、3O1に位置する。上面形は梢円方形を呈し、長軸162cm、短軸140cmを測る。底面最大径は166cm、深さは81cmを測る。覆土は5層がほぼ水平に堆積するが、中位には直径5cm程の礫を多量に含む層がある。本土坑はSI91と一部プランが重複しており、SI91を切つて構築されている。本土坑からは、中期後葉の沖ノ原式・加曾利E IV式・加飾隆唇文土器、及び後期初頭の称名寺式が出土したことから、中期末～後期初頭に位置付けられる。なお、本土坑に切られるSI91は中期中葉と考えられ、齟齬はない。

## 2) 埋設土器土坑

沢の左岸であるグリッド3Oで、土坑に深鉢を逆位に据えたSK95が検出されている。検出された明瞭な埋設土器土坑はSK95の1基のみであるが、周辺では客土中から比較的復元率の高い深鉢が複数出土しており、埋設土器土坑群が展開していた可能性がある。また、SI46に近接して深鉢底部が小規模土坑内に正位で据えられた状態で出土している（図版20・60）。

SK95（図版8・9・56・77） グリッド3O2・3に位置する。客土掘削中に逆位の状態で深鉢が出土し

たことで本遺構を認識した。しかし、周辺の擾乱が著しいことから、遺構の掘り込みは検出できなかった。その為、深鉢を残したまま周辺を掘り下げていき、深鉢の埋設状況などを記録した後、深鉢を取り除き、地山面で遺構プランの検出手を行った。検出手出來た遺構の平面形は梢円で、長軸 122cm、短軸 85cm、深さ 30cm を測る。埋設土器は中期末～後期初頭の大木 10 式若しくは称名寺式の最古段階に位置づけられる深鉢（図版 28・77-218）で、底部は欠損している。土器の内部からは拳大程の自然礫が数点出土したのみである。

### 3) そ の 他

SK1（図版 8・11・67） グリッド 4P17 に位置する。南半分は現代の削平を受けている。深さは 29cm を測る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

SK10（図版 15・17・69） グリッド 4R12・13・17・18 に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸 234cm、短軸 100cm、深さ 38cm を測る。中央部は描鉢状に緩やかに凹み、中心付近の床が赤く焼固している。凹みの南西隅からは立石が出土した。また、本遺構の北側では配石を、南西隅では小ピット状の凹みを検出した。断面形は浅い台形状を呈する。覆土はブロック状に堆積し、地山ローム粒など混入物が著しい。規模から土坑に分類したが、堅穴建物の炉の下底部である可能性も考えられる。出土遺物は少ないものの、大木 8b 式が出土していることから中期中葉に位置付けられる。

SK34（図版 15・16・68） グリッド 3Q3 に位置する。平面形は梢円で、深さ 27cm を測る。P33 に切られる。本土坑は出土遺物から中期後葉に位置付けられる。P33 は後期前葉と考えられ、齋齋はない。

SK49（図版 15） グリッド 3R14・19 に位置する。遺構の大部分が開闢により調査不可能となり、全容を把握しがたい。遺存部で長軸 114cm、深さ 18cm を測る。覆土は単層で、断面がやや袋状を呈する。出土遺物から中期後葉に位置付けられる。

SK73（図版 8・10・65） グリッド 3P18・22・23 に位置する。平面形は梢円で、長軸 172cm、短軸 134cm、深さ 46cm を測る。覆土は 4 層からなり、ほぼ水平に堆積する。下位では小礫や微細な炭化粒を多く含む。P72・141 に切られる。出土遺物から中期中葉に位置付けられる。なお、P72 は後期前葉と考えられ、齋齋はない。

SK79（図版 8・11・68） グリッド 4P13・18 に位置する。平面形は円形で、長軸 114cm、短軸 108cm、深さ 50cm を測る。覆土は 6 層からなり、ブロック状に堆積する。底面中央付近に人頭大の円礫が投棄され、覆土全体に直径 5-6cm 程の礫やロームブロックなどの混入が著しい。遺構底面は礫層まで達している。本土坑からは繩文土器が出土したものの、時期を特定出来なかった。

SK80（図版 8・11・68） グリッド 4P14 に位置する。平面形は円形で、長軸 108cm、短軸 108cm、深さ 46cm を測る。覆土は 3 層からなり、レンズ状に堆積する。覆土中には人頭大の円礫が投棄され、SK79 の堆積状況に近似する。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。本土坑の西側には同規模で類似した堆積状況を示す 2 つの土坑（SK79・SK1）がほぼ等間隔に位置している。柱痕が認められないため建物とは認定しなかったものの、これら 3 つの土坑が一連の機能を分担していた可能性はある。

SK94（図版 8・9・66） グリッド 3N21・22 に位置する。平面形は円形で、長軸 172cm、短軸 160cm、深さ 52cm を測る。覆土は 4 層からなり南西から北東にかけて投げ込まれたような傾斜した堆積を示す。北側を SK147 に切られる。出土遺物から中期末～後期初頭に位置付けられる。

SK98（図版 8・10・65） グリッド 3P7・8 に位置する。平面形は梢円形で、長軸 112cm、短軸 90cm、

深さ 40cm を測る。土坑に分類したが、ピット（柱穴）である可能性もある。その場合、1 層が柱痕、礫を多く含む 2・3 層が柱の根固めに相当する。P99・190 を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

SK104（図版 8・9・66） グリッド 308 に位置する。平面形は楕円で、深さ 52cm を測る。覆土は 3 層からなるが、1 層が 2・3 層を大きく抉り込むように堆積していることから、1 層と 2・3 層は時期差がある可能性がある。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

SK116（図版 8・9・14・61） グリッド 3P1・2 に位置する。平面形は楕円で、長軸 154cm、短軸 110cm、深さ 85cm を測る。覆土中～下位の北側には礫を多く含む層がブロック状に堆積していることから、本遺構は根固め石を伴う柱穴の可能性もある。SI92・SK146・P199・P215 を切っている。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。なお、SI92 と SK146 は中期後葉と考えられ、齶齧はない。

SK139（図版 8・11・67） グリッド 3P20 に位置する。平面形は楕円を呈すると考えられ、深さは 43 cm を測る。覆土中には直径 5-10cm 程の川原石を多く含み、上位では微細な炭化物も多く含む。SK78 を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

SK140（図版 8・10・64） グリッド 3P3・4 に位置する。SK114・115・142 に切られ、平面形は不明である。覆土は 2 層からなり、直径 10cm 程の礫を多く含む。出土遺物から中期後葉～後期初頭に位置付けられる。

SK142（図版 8・10・65） グリッド 3P3・4 に位置する。平面形は長楕円で、長軸 136cm、短軸 80cm、深さ 62cm を測る。覆土は 5 層からなり、上位では直径 10cm 程の礫と、微細な炭化物を多く含む。SK140 を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。なお、SK140 は中期後葉～後期初頭と考えられ、齶齧はない。

SK146（図版 8・9・61） グリッド 3O21・22、3P1・2 に位置する。平面形は円形又は楕円で、深さ 34cm を測る。覆土は 3 層からなるが、いずれも直径 10-30cm の礫を含み、特に下位に多い。SI91 との切り合い関係は不明瞭であるが、P199 を切り、SK116 に切られる。出土遺物から中期後葉に位置付けられる。なお、SK116 は後期前葉と考えられ、齶齧はない。

SK147（図版 8・9） グリッド 3N16・17・21 に位置する。平面形は楕円で、深さ 48cm を測る。覆土は、小礫と炭化物を多量に含む。南側で SK94 を切る。遺物は出土しなかった。

SK190（図版 8・10・65） グリッド 3P3・7・8 に位置する。P99・189・SK98 に切られているため、全容は不明である。深さは 29cm を測る。覆土は 3 層からなり、ブロック状に堆積する。遺物は出土しなかった。

SK216（図版 8・14・60） グリッド 3O6 に位置する。西側は開渠によって切られており、全容は不明であるが、調査区西壁の断面に現れなかったため、開渠中に収まるものと考えられる。長軸 144cm、短軸 106cm、深さ 32cm を測る。覆土は 3 層からなり、上位では微細な炭化物や焼土粒を多く含む。SK233 と SI91 を切っている。出土遺物から後期初頭に位置付けられる。なお、SI91 は中期中葉の竪穴建物であるが、本土坑中からも大木 8b 式が出土しており、本土坑が SI91 を切って構築していることを示唆している。

SK217（図版 15・16・68） グリッド 3Q13 に位置する。平面形は円形で、長軸 138cm、短軸 128cm、深さ 67cm を測る。覆土は 5 層からなり、中～下位はほぼ水平に堆積するが、上位はブロック状に堆積する。P71 に切られる。遺物は出土しなかった。

SK219（図版 8・9・66） グリッド 3O20、4O16 に位置する。平面形は楕円で、長軸 136cm、短軸 114cm、

深さ 75cm を測る。覆土は 3 層からなるが、中～下位に直径 5cm 程の礫を多量に含む。出土遺物から中期後葉～後期初頭に位置付けられる。

SK233 (図版 8・14・61) グリッド 301・6 に位置する。西側開渠に切られ、全容は不明である。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、長軸 186cm、短軸 140cm、深さ 64cm を測る。P235 を切り、P228、SK216、SI91 に切られる。遺物は出土しなかった。

## D ピット

平面形の平均直径 80cm 以下の掘り込みを有する遺構をピットとした。ただし、80cm 以上であっても断面観察の結果、柱痕が認められる遺構については本類に分類した。ピットには①柱穴と②その他があり、①は断面観察で柱痕が認められるピットである。②は柱痕が認められないか、不明瞭なピットである。ただし、②であっても「柱穴」として機能を否定するものではない。

### 1) 柱 穴

P33 (図版 15・16・70) グリッド 3Q2・3・7・8 に位置する。平面形は梢円で、長軸 108cm、短軸 84cm、深さ 69cm を測る。断面観察から、柱の直径は 32cm 程と考えられる。根固め石は 3・4 層を中心に小礫を用いている。SK34 と P39 を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。なお、SK34・P39 は中期後葉と考えられ、齋館はない。

P38 (図版 15・17) グリッド 3S15 に位置する。平面形は円形で、長軸 48cm、短軸 40cm、深さ 44cm を測る。断面観察から、柱の直径は 18cm 程と考えられ、根固め石は用いられていない。遺物は出土しなかった。

P39 (図版 15・16・68) グリッド 3Q3・8 に位置する。平面形は円形で、長軸 74cm、短軸 72cm、深さ 46cm を測る。断面観察から、柱の直径は 18cm 程と考えられ、根固め石には拳大程の礫を用いている。SK33 に切られる。出土遺物から中期後葉に位置付けられる。なお、SK33 は後期前葉と考えられ、齋館はない。

P54 (図版 8・13・72) グリッド 4P13 に位置する。平面形は円形で、長軸 28cm、短軸 25cm、深さ 21cm を測る。断面観察から、柱の直径は 15cm 程と考えられ、根固め石は用いられていない。出土遺物から中期後葉～後期初頭に位置付けられる。

P56 (図版 8・13) グリッド 4P14 に位置する。平面形は梢円で、長軸 48cm、短軸 34cm、深さ 25cm を測る。断面観察から、柱の直径は 14cm 程と考えられ、根固め石は用いられていない。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

P57 (図版 8・13) グリッド 3P14 に位置する。平面形は円形で、長軸 46cm、短軸 42cm、深さ 34cm を測る。断面観察から、柱の直径は 14cm 程と考えられ、根固め石には小礫を用いている。出土遺物から中期中葉に位置付けられる。

P72 (図版 8・10) グリッド 3P17・18 に位置し、西側の一部は開渠により調査できなかった。残存部から推測して平面形は梢円で、長軸 79cm、短軸 70cm、深さ 47cm を測る。断面観察から、柱の直径は 20cm 程と考えられる。裏込め土の状態は良く観察されるものの、根固め石は用いられていない。SK73 を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

P74 (図版 8・13) グリッド 3P18 に位置する。平面形は梢円で、長軸 48cm、短軸 40cm、深さ 24cm

を測る。断面観察から、柱の直径は14cm程と考えられ、根固め石には直径3~5cm程の小礫を用いている。遺物は出土しなかった。

P75（図版8・13・72） グリッド3P19・24に位置する。平面形は円形で、長軸74cm、短軸68cm、深さ74cmを測る。断面観察から、柱の直径は20cm程と考えられる。根固め石には小礫を用い、下位に多く、中～上位は少ない。本遺構からは縄文土器が出土したが、詳細な時期は特定出来なかった。

P83（図版8・13・70） グリッド3P12に位置する。西側は開渠により調査できなかったが、遺存部は長軸82cm、短軸56cm、深さ51cmを測る。断面観察から、柱の直径は22cm程と考えられ、根固めに円礫を用いている。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

P89（図版8・12・71） グリッド3P2・3に位置する。平面形は円形で、長軸94cm、短軸85cm、深さ108cmを測る。断面観察から、柱の直径は20cm程と考えられる。根固め石には主に拳大程の川原石を用いている。P90を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。なお、P90が中期中葉～後葉と考えられ、齟齬はない。

P93（図版8・13） グリッド3P19に位置する。平面形は梢円で、長軸58cm、短軸48cm、深さ44cmを測る。断面観察から、柱の直径は14cm程と考えられ、根固め石には小礫を用いている。出土遺物から中期後葉～後期初頭に位置付けられる。

P109（図版8・13） グリッド3O18に位置する。平面形は梢円で、長軸68cm、短軸55cm、深さ36cmを測る。断面観察から、柱の直径は18cm程と考えられる。裏込め土の状態は良く観察されるものの、根固め石は用いられていない。本遺構からは縄文土器が出土したもの、詳細な時期は特定出来なかった。

P114（図版8・10・64） グリッド3P3・8に位置する。平面形は梢円形で、長軸88cm、短軸78cm、深さ83cmを測る。断面観察から、柱の直径は24cm程と考えられ、根固め石には直径10cm程の川原石を用いている。SK140・P189を切る。出土遺物から後期前葉に位置付けられる。なお、SK140は中期後葉～後期初頭、P189は中期後葉と考えられ、齟齬はない。

P115（図版8・10・65） グリッド3O23・24、3P3・4に位置する。平面形は梢円形で、長軸127cm、短軸118cm、深さ57cmを測る。断面観察から、柱の直径は24cm程と考えられ、根固め石には直径10~15cm程の川原石を用いている。出土遺物から中期後葉～後期初頭に位置付けられる。同時期のSK140を切って構築している。

P117（図版8・12・72） グリッド3O22に位置する。平面形は円形で、長軸42cm、短軸40cm、深さ84cmを測る。断面観察から、柱の直径は18cm程と考えられ、根固め石を用いている。本遺構からは縄文土器が出土したもの、詳細な時期は特定出来なかった。

P122（図版8・11） グリッド3O13に位置する。平面形は円形で、長軸47cm、短軸42cm、深さ39cmを測る。断面観察から、柱の直径は18cm程と考えられる。裏込め土の状態は良く観察されるものの、根固め石は用いられていない。遺物は出土しなかった。

P143（図版8・12・71） グリッド3P8・12・13に位置する。平面形は梢円形で、長軸106cm、短軸96cm、深さ91cmを測る。断面観察から、柱の直径は50cm程と考えられる。6・7層は根固めと考えられ、根固め石には直径10cm程の礫を用いている。P144に切られる。出土遺物から後期初頭に位置付けられる。

P213（図版8・9・72） グリッド3O1に位置する。平面形は梢円で、長軸76cm、短軸67cm、深さ80cmを測る。断面観察から、柱の直径は18cm程と考えられる。裏込め土の状態は良く観察されるものの、根固め石は用いられていない。本遺構の中位には崩落土が著しく観察され、隣接するSK106との境が明

瞭ではない。また、下位の5・6層は柱痕より下位に水平に堆積していることから、SI91の覆土及び周溝内覆土の可能性もある。本遺構からは遺物は出土しなかった。

## 2) そ の 他

柱痕が認められない、又は明瞭でないピットを81基検出した。①に分類した柱痕のあるピットと比較すると不整形で、平面形・深さともに小規模になる傾向が強い。また、出土遺物は少ないか、出土しないことが多く、詳細な所属時期を決めがたい。ピットの分布は他の遺構の分布と共にし、時期も中期中葉～後期前葉に取まる。時期毎の量比は、中期中葉<中期後葉～後期初頭<後期前葉であり、各時期の遺構数の変動と対応している。なお、沢の東側で建物が築かれるのは後期前葉になってからであるが、ピットも確実に中期に遡るもののは確認していない。

P108はグリッド3Pに位置する中期中葉～後葉のピット（図版8・12・71）であるが、覆土土壤中からイノシシの焼骨が2個体出土した（第VI章参照）。P108は、サケを含む11万点余の焼骨が出土した袋状土坑SK97（中期中葉末～後期初頭）と隣接している。

## E 沢

調査区中央やや北寄りから、埋没した沢を検出した（第2・5図、図版2）。本発掘調査及びトレンチ調査により、本沢は幅15～20m、深さ約1.5mを測り、グリッド7S・8Rから2M・3L（南東・北東）に流走していることを確認した。本沢の堆積は底面まで断ち切った5本のトレンチ（1T-5T：第2図）により、大きく3層に分層出来た。下層は褐色土で礫を多量に含み、遺物をほとんど含まない。中層は暗オリーブ褐色土で礫の混入は少なく、遺物をわずかに含む。上層は黒褐色土（クロボク）で、礫をやや含む。上面を中心に遺物を多量に含む。中層上面は竪穴建物・掘立柱建物・土坑などの検出面より低い。また、下・中層には少量ではあるものの、縄文時代中期の遺物を含むことから、該期には半埋没状態であったと考えられる。上層からは、後期前葉（南三十稲場式段階）を下限とする遺物が多量に出土している。このことから、右岸に掘立柱建物が築かれる後期前葉にはほぼ完全に埋没していたと考えられる。しかしながら、沢の上面には岸端のSB3・5を除き、遺構が検出できることから、地盤の悪い埋没沢上の開発は進まなかったものと考えられる。なお、トレンチ調査の結果、中・下層からの出土量が極めて少なく、小片であることから沢内の全面発掘はしなかった。

# 第V章 遺物

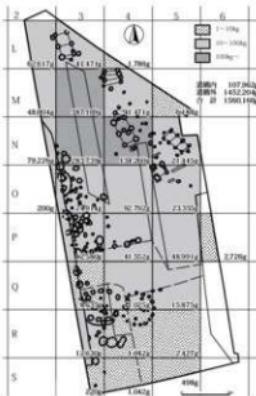
## 1 繩文土器・土製品

### A 概要

本遺跡では、包含層を極めて部分的にしか検出しておらず、遺構も上部は破壊されているものが多い。遺物の出土がなく遺構を検出していない地点についても、破壊が及んでいたため、本来的に集落外であったかどうかは不明である。客土中の土器類の重量分布（第9図）は標高の高い南部及び東部が少なく、低位の北西部に集中し、地盤の悪い沢中の3M・3N・4Nにとりわけ多い。このことは、水田を造成する際、高位の包含層を低位に運び入れた結果と考えられる。総量は約1.5tにおよぶが、遺構内出土が約108kgに対し、客土中出土が約1,452kgと圧倒的であり、破壊の大きさが分かる。客土中に含まれる土器類は、遺構内出土の土器類と年代観や様相に大幅な差異が認められないことから、客土は本来的に本遺跡の「包含層」乃至は「遺構覆土」であった可能性が極めて高い。したがって、本報告は原位置を保っている遺構内の土器類を最優先に報告することとし、客土中の土器類については時代性及び地域性を示す特徴的なものの抽出して補完的に報告するに留める。土器・土製品は浅箱（54cm×34cm×10cm）で280箱出土し、石器は59箱である。

### B 分類

繩文土器と土製品があり、繩文土器の出自については大きく、A類：関東系、B類：東北系、C類：越後在地系、D類：その他及び不明がある。それらの中には一部、信州からの影響も考慮せねばならないものも含む。以上の4大類を、さらに文様構成や器形、技法の特徴から26群に細分した（第3表）。以下の分類及び記述（各説含む）は主に【小林編2008】を参考にした。



第9図 出土土器類（客土）の重量分布

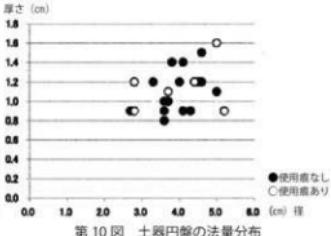
時期区分	A類 (関東系)	B類 (東北系)	C類 (越後在地系)	D類 (その他・不明)
中期	1群・2群			
	10群a	5群・6群	3群・4群	18群
	10群a・b・c 22群b	7群・8群 9群・22群a	11群 12群	19群 20群 21群
後期(初頃)	(10群cの一部) 15群	14群 22群c・d	(11群・12群) 13群	23群 16群
		17群		
後期 中期				

(註) 横列は並行関係を意味しない。

第3表 土器分類の時期対応表

- 1群 勝坂式系統乃至は北陸系新崎式、上山田・天神山式系統 竹管などのヘラ状工具で連續押し引きすることで、曲線文あるいは渦巻き文を有するもの。断面蘆鉢形の半隆起線内に施するもの(297)と器面に直接施すもの(60)がある。
- 2群 阿玉台式系統 口縁部直下に押し引き三角文を有するもの。雲母の混入が顕著である。
- 3群 火炎土器系統 いわゆる火炎型・王冠型土器及びその系譜上にあるもの。
- 4群 いわゆる柄倉式系統 柄倉遺跡第七類土器〔寺村1961〕である。基本的に、胴部に縱位半隆線若しくは沈線を施す。縱位線は器面全体に施される場合と、縱位線間を綾杉文などで充填する場合がある。沈線内には刺突が伴う場合もある。双頭渦巻文を特徴とする。口縁部は無文帯になる場合が多い。本報告では、細片が多いため、近似した文様構成を持つ信州系唐草文土器や郷土式土器との区別はしていない。
- 5群 大木式系統 (8a式段階) 太い沈線及び頂部の細い半隆線やソーメン状浮文により蕨手状の渦巻文や平行線、方形区画文を重層的に描く。
- 6群 大木式系統 (8b式段階) 沈線及び隆線による小型の渦巻文あるいは密に巻く渦巻文を特徴とする。沈線は幅狭で深く鋭い傾向が強く、隆線は断面蘆鉢状もしくは台形が多い。口縁には透かしを施した大型突起を持つものがある。渦巻文は劍先若しくは方形角などの形状を呈した棘状の分岐を経ながら連結される。本群では基本的に隆線を磨かない。ただし、最新段階では後出の7群古段階と近似した手法を用いているものもあり、区別が困難なものも存在する。また本群の新段階乃至は直後に4群が派生するが、本群にも地紋を短沈線で斜行若しくは綾杉状で充填するもの(越後在地化した「綾杉文系土器」[高橋2012])などがあり、4群との区別に課題を残す。
- 7群 大木式系統 (9式段階) 古段階(9a式併行)と新段階(9b式併行)に細分した。古段階では先行する6群と比較して、渦巻文が大型化し、沈線が浅く幅広になる傾向がある。口縁部波状突起の頂部に渦巻文を有するものが特徴的に見られる。隆線及び沈線内を含む隆線周辺を磨く例が多い。新段階では二列文様帶構成が顕著となる。11群との区別が困難なものがある。
- 8群 大木式系統 (10式段階) 加曾利E式・称名寺式最古段階との相互の影響が著しい。
- 9群 大木式系統のうち深鉢を除く器種 銛付き浅鉢、両耳付壺形土器、壺形土器、有孔銛付土器、器台、器種不明などが確認できる。
- 10群 加曾利E式系統
- a、連弧文土器の系譜をひくもの 沈線による連續弧線文を描くもので、加曾利E式及び曾利式土器の影響下で成立したと考えられていることから本群に含める。E II式後半からE III式前半頃に盛行する。
  - b、E III式段階 口縁部文様帶と胴部の縱位沈線及び磨り消し帯を特徴とする。
  - c、E IV式段階以降 口縁部文様帶が衰退する。磨り消し・充填埴文・空白部のナデ及びミガキが主体となる。古段階では胴部上・下半に二列の文様帶を構成するものが多く、新段階では細い沈線文により鋸歯状文や入組弧線文を描くものが多い。最新段階(いわゆる「E V」「統E IV」式)以後では称名寺式との関係が濃厚となり、判別しがたいものもあり、一部は後期に入ると考えられる。
- 11群 沖ノ原式系統 文様構成の差異により細分が可能である。大木9式~10式段階に平行し、本群の最新段階では一部後期に入る。

- 12群 加飾隆帯をもつ土器 口縁部下位に加飾隆帯をもち、上位に無文帯を設ける一群。城ノ腰類型（式）を中心とする。地文には縄文・撚糸文・条痕文がある。
- 13群 三十稻場式系統 基本的に広範囲な刺突による施文のあるもので、蓋も含む。
- 深鉢
  - 蓋 1、地文に刺突 2、列点文もしくは隆帯に刺突
- 14群 綱取式系統 口縁部に、円形窓文を沈線でつなぐ「C」字状の貼付文が付属する。
- 15群 称名寺式系統
- 16群 沈線文を主体とする土器群 後期の堀之内式・気屋式・「信州系」[品田 2001]・南三十稻場式を含む。
- 溝巻文を基調とする
  - 三角文を基調とする
  - 口縁部
- 17群 大洞式系統 晩期中葉のC2式が1点（518）のみ出土した。
- 18群 口縁無文の土器 口縁部にミガキもしくはナデにより無文帯を作出するもの。
- 区画線を持たない
  - 区画線を持つ
    - 横位押圧縄文
    - 太沈線 幅5mm以上の横位沈線で区画する。
    - 細沈線 幅2mm程度の横位沈線で区画する。
  - 有段 口縁部外面を肥厚させることで、無文帯を作出する。
  - 微隆帯
- 19群 条痕・条線文土器 a、沈線による区画 b、区画線なし
- 20群 撥糸文土器 a、沈線による区画 b、隆帯による区画 c、区画線なし
- 21群 縄文または無文の土器及び施文の一部を有する土器 他群の一部である可能性を含む
- 縄文のみまたは無文
  - 横位列点文
  - 縱位又は斜位沈線文
  - 横位沈線文
- 22群 浅鉢
- 大木式系統
  - 加曾利E式系統 口縁部が肥厚し、上面が平坦になる特徴的な器形を呈する。内外面に黒色付着物と赤色顔料（ベンガラ）が付着するものが多い。
  - 称名寺式系統
  - 堀之内式系統
  - その他
- 23群 蓋 系統不明の蓋を一括した。
- 無文
  - 条線 三十稻場式から南三十稻場式にかけて存在する。
  - その他
- 24群 注口土器 系統不明の注口付き土器を一括した。
- 25群 土製品
- 土器円盤 土器片の周縁を打ち欠き、円盤状に二次加工したもの。直径3~5cm、厚さ0.8~1.5cm程のものが多い（第10図）。素材の多くは深鉢胴部片で、底部片が少量ある。多くは縄文のみが施され



第10図 土器円盤の法量分布

たもので、わずかに大木 8b 式から称名寺式最古段階頃までの文様が認められる。多くは明瞭な使用痕を持たないが、268 のみ周縁と裏面が著しく摩耗している。

- b、耳飾り 滑車型が 1 点出土した。
- c、土 棒 石棒を模したもの。
- d、土 皿 石皿を模したもの。
- e、粘土塊 中空のものが 1 点出土した。

26群 不 明

### C 各 説

#### 1) 遺構内出土 (図版 21-31・73 ~ 79-1-339)

1~11 は SI27 からの出土である。そのうち、8~11 は竪穴建物とプランが重複する SK20 からの出土である。1 は 21 群 d である。繩文地文を幅広の沈線により、ナデ消す。2 は 21 群 c である。沈線間の半隆線に刺突が伴う可能性がある。3 は 16 群 c である。波状口縁頂部直下に円孔が穿たれ、横位に沈線が 1 条巡る。4 は 21 群 a である。5 は 6 群である。平行短沈線が認められることから、綾杉文系土器の可能性があり、新段階に位置付けられる。6 は 16 群である。7 は 21 群 c で、底部片である。底部際まで縱位平行沈線が施されていることから、10 群 b か。8 は 11 群である。加飾隆帯により口縁部無文帯を、沈線で胸部器面を区画する。隆・沈線には突瘤文が伴う。9 は 23 群 a である。中央に摘みが付く。10 は 8 群である。幅 1cm 程の太い沈線により横位方向に長いモチーフの文様を描き、繩文を充填する。11 は 21 群 a である。底面はナデ調整される。SI27 の遺物は年代的まとまりをやや欠く。SK20 が本建物に伴うると中期末葉 - 後期初頭に帰属するものと考えられる。

12~56 は SI46 からの出土である。12~15 は床直上、16・17 は周溝中からの出土である。12 は 11 群である。横位沈線に突瘤文が伴う。13 は 18 群 b2 に分類したが、他群の可能性もある。14 と 15 は 21 群 c である。15 の沈線は幅 7mm と太いことから、7 群か。16 は 3 群の突起部である。17 は 10 群 a である。幅 3mm 程の沈線により、渦巻文及び連弧文を施す。胸部中央には円形刺突が伴う 2 条の横位沈線が施される。口縁上部の渦巻文は低い隆帯を貼付している。18 は プラン外に近接した埋設土器で、21 群 a である。19 はほぼ完形で、22 群 a である。主文様は隆帯による連続小渦巻文で、ところどころで剣先状の棘状文が分岐する。隆帯に沿って幅広の沈線が巡り、それらにより区画された中を繩文で充填する。隆帯は丁寧に磨かれ、上面が比較的平坦であることから、大木 9a 式段階に位置付けられる。20 は 7 群古段階である。21 は 19 群 b である。22 は 6 群である。断面台形の横位平行半隆線が施される。23 は 11 群で堂平類型に似る。波状口縁で、加飾隆帯が巡る。隆帯より上位には短沈線を充填し、下位は繩文である。24 は 11 群と考えられる。25 は 18 群 c で、26 は 5 群である。27 は 21 群 c である。断面蒲鉾状の縱位半隆線であることから 6 群か。28 は 7 群古段階である。29 は 26 群である。10 群 a に文様構成が似る。30 は 11 群で、つづじ原類型である。欠損しているものの、突瘤文と考えられる痕跡が弧状を描く隆帯に付加される。31 は 7 群古段階である。隆帯による渦巻文と幅広の沈線に区画された充填繩文が認められる。32 は 21 群 c で、底部片である。7 に似ることから、10 群 b か。33 は 11 群である。34 は 2 群である。横位刺突列の下位は条痕文である。35 は 11 群である。加飾隆帯により口縁部無文帯を区画し、下位に横位沈線文を巡らせる。36 は 11 群である。37 は 21 群 c である。6 群若しくは 10 群 b であろうか。38 は 4 群であろうか。磨り消し帯を伴う縦位沈線が引かれ、沈線内には刺突列が施される。39 は 18 群 c

である。40は7群新段階である。41は7群古段階である。42は25群aである。先端の丸い工具による沈線が3条認められることから、6群若しくは11群を素材にしているものと考えられる。43は21群cである。44は11群で、つつじ原類型と考えられる。横に長い「U」字状沈線及び縦位沈線が描かれる。沈線には突瘤文が伴う。45は4群である。46は10群bである。縦位磨り消しを施す。47は11群である。48は16群cの口縁部突起である。遺存部は扁平な弧状を呈し、中央に円孔が開く。外面は突起の形状に沿って、弧状の沈線が3条巡る。口縁部直下には横位沈線が1条巡り、やや湾曲する沈線が垂下する。49は6群である。50は21群cである。沈線間は無文である。51は21群cに分類したが、4群の可能性もある。52は18群aである。53は10群である。幅5mm程の工具により、縦方向に磨り消し、無文帯を作出する。ただし、磨り消しは粗雑で、無文帯の器面は工具の単位痕跡が明瞭で、凹凸が残る。10群bと考えられるが、10群cまで下る可能性もある。54は6群である。55は10群cである。玉抱文と考えられる。56は18群aである。口縁部を欠損するが、口縁部下端と考えられる屈曲部を横ナデし、無文帯を作出していることから本類に分類した。SI46は、48のように後期の所産の可能性がある遺物を少量含むものの、概ね沖ノ原式・大木9a式・加曾利EⅢ式前後の土器が多いことから、中期後葉に帰属すると考えられる。なお、SI46を切るP112からは加曾利EⅣ式段階以降の土器が出土しており、齋藤はない。

57-71はSI91からの出土である。72-74は本建物のプラン内に位置するものの、切り合ひ関係にあると考えられるSI91-P3からの出土である。57は16群cである。口縁帶に円形窓文を連続して施し、下端は押し引き文が巡る。胴部はやや斜行の縦位平行沈線が引かれる。外面のミガキは丁寧である。58と59は4群である。58は口縁部に横位沈線が2条巡り、そのうち1条には沈線内に刺突列が施される。胴部は縦位沈線が連続する。59の縦位沈線内には刺突列を有する。60は1群である。1条の隆帶と3条の爪形連続押し引き文が平行しながら一連の曲線を描く。押し引き文は器面に直接施文している。61は6群である。断面蒲鉾状の縦位半隆線により区画され、短沈線で充填する。本群の新段階に位置付けられる。62は11群で、万條寺林類型である。沈線により施文される。63は4群である。本群の特徴である縦位隆・沈線を伴わないものの、多くの属性が共通することから、本群に含めた。短く外反する口縁部は無文で、屈曲部に4条の沈線が巡る。胴部には隆起した双頭渦巻文を隆線で連結する。主文様は下位に移るにつれて隆線が徐々に高さを減じていき、胴部下半では沈線へと変化していくとともに、横位沈線へと連結し、底部付近では、ついに沈線すらも無くなりナデ調整のみとなる。沈・隆線間は短沈線により綾杉状若しくは斜行に充填される。圓化しなかったが、同一個体の可能性がある破片の存在から、双頭渦巻文同士の中間に上位へと垂直に尖る劍先状モチーフの隆・沈線が施される可能性がある。64は22群eである。沈線が横位に数条施される。外面の磨きは雑である。65は4群である。66は6群に分類した。地文には撫糸文を採用し、縦位沈線を描く。沈線間には規則的な凹みが認められる。それらが、意図的な刺突であれば、4群に分類すべきであるが、地文の残留とも判断でき、ひとまず本群に分類しておく。いずれにしても本群新段階に位置付けられる。67は25群aである。68は26群である。器種不明で、把手が付く。69は6群である。断面が三角形から台形を呈する隆線2条で構成される大型渦巻文を描く。地文には撫糸文を採用する。施文技法や文様構成が7群に類似していることから新段階に位置付けられよう。70は6群、71は18群a、72は16群aである。73は16群bである。頸部に平行沈線、胴部に斜行沈線を施し、刺突列を伴う。74は16群である。沈線文の多くが平行に引かれ、細分は出来ない。SI91は後期の57、中期末葉-後期初頭の62などを含むものの、多くは斉倉式・大木8b式新段階にま

とまることから、中期中葉に帰属すると考えられる。SI91-P3は後期前葉の沈線文系土器期にまとまりがあり、SI91と新旧関係にある。

75-84はSI92からの出土である。75は21群aである。76は2群である。口縁部外面には幅1.2cm程の肥厚帯を持ち、内面は斜位に面取りする。口縁上端面は平坦に面取りされ、先端の尖る工具で沈線状に押し引きされる。口縁帶の直下には先端の尖らない工具による横位の押し引き、三角文の下位二辺は細い工具による押し引き若しくは貝殻復縁による施文がなされる。雲母の混入が顕著である。77は21群cである。6群か。78は18群a、79は21群a、80は20群である。81は10群である。隆帯及び幅広の磨り消し無文部が継位方向に施される。EⅢ段階(b)からEⅣ段階(c)に位置付けられる。82は20群、83は21群cである。84は10群cである。幅3mm程の沈線により磨り消し帯を区画する。SI92からは時期を限定できる良好な資料に乏しいが、明瞭な後期の土器を含まず、後期の遺構であるSK116に切られる事から中期後葉頃に帰属するものと考えておきたい。

85はSB2からの出土で13群aであることから、SB2は後期前葉に帰属すると考えられる。

86と87はSB4からの出土である。86は15群である。「」字状と考えられる沈線区画と押し引き文が認められる。87は16群である。管状工具による刺突列を作らう横位沈線文と、やや湾曲する斜行沈線文を施す。このことからSB4は後期前葉に帰属する。

88-93はSB5からの出土である。88は16群bである。頭部に幅6mm程の太い沈線を施し、以下を縄文で埋め、沈線及び磨り消しにより三角基調の文様を描く。89は16群である。「ハ」字状の細い沈線文が認められる。90は16群cである。口縁内面には弧状沈線が平行して施され、外面には横位沈線が1条と押し引き文列が1条巡る。内外面のミガキは丁寧である。91は13群aである。2条の沈線で挟まれた刺突列が認められる。92は16群cである。口縁帶に管状工具による円形窓文を2箇配し、左右両方向に断面「U」字状の太沈線が1条引かれる。93は21群aで、底部片である。底面は平行細沈線が施される。SB5は後期後葉に帰属するが、88などのように堀之内Ⅱ式段階と考えられる土器を含むことから、SB2・4より後出する。

94-115はSB1からの出土である。94は18群aである。95は8群である。小さい方形区画を沈線で描き、内側を縄文で充填する。加曾利EⅣ式の対向文の影響と見られる。96は深鉢の波状口縁部である。「S」字状の隆帯を貼り付けていることから、13群aである。97は11群である。沈線中に刺突を伴う。98は13群と考えられる。眼鏡状の隆帯に刺突が施される。99は13群aの口縁部である。隆帯上及び沈線で区画された方形区画内を管状工具による円形刺突文で充填する。100は13群b1である。101は11群である。隆帯により、円形窓文及び縦横区画を作出する。102は25群aである。103は16群aの口縁部片である。遺存部左端に弧を描く沈線が施されていることから本群に分類した。地文には縄文が施されている。104は16群cである。波状口縁の頂部直下の玉抱文から横位に沈線が1条引かれる。胴部には継位方向の沈線が数条認められる。105は16群aに分類したが、沈線文が入り組んでおり、15群に該当する可能性もある。106は16群cである。断面が「U」字状を呈する幅1cm程の太い沈線により施文され、遺存部中央には突起の可能性のある瘤状隆起が認められる。107は13群aである。108は12群である。口縁上面は内傾し、端部からやや下がった場所で口縁に平行して剥落した痕跡が認められる事から、269と同様に蓋受け状の鷄が巡るものと考えられる。109は18群cである。110は23群cである。中央に橋状把手が付き、地文に円形窓文と撲糸文が施される。111は12群である。加飾隆帯には縄文が施される。112は16群bである。鋸歯状に三角文が施される。113は11群である。沈線内に刻

目を施し、突瘤文を貼付する。114と115は13群aである。SB1は後期前葉に帰属する。112の存在から壠之内Ⅱ式期まで下る可能性があるものの、13群が多くを占めることから三十稻場式段階に位置付けられよう。

116-137はSB3からの出土である。116は16群cである。薄手で、無文である。117は16群bである。118は19群である。櫛歯状工具で条痕文を施す。119は13群aである。突起の欠損部から把手あるいは貼付文が付属するものと考えられる。突起の下部には円形窓文が施されている。胴部には刺突と沈線、縄文が認められる。120は9群で、器種不明である。分岐する隆帯を貼付し文様を施すとともに、区画された内部に縄文を充填する。内外面は丁寧に磨かれ黒色を呈しており、スヌが付着する。121は16群a、122は12群である。123は16群bである。細い沈線により三角文を重層的に描き、細密縄文及び磨り消しを施す。壠之内Ⅱ式土器である。124は12群である。隆帯の右端が盛り上がっていることから瘤状突起が付加される可能性がある。突起から下位にはやや湾曲した沈線が施されている。11群の可能性もある。125は13群aで、126は16群bである。127は10群cである。細い沈線により区画された磨り消し縄文が施され、口縁部には沈線が1条巡る。新段階に位置付けられ、後期に入る可能性がある。128は20群、129は15群、130は18群aである。131は26群である。縦位に沈線で描く波状文は、後期前半に多用される。132は11群である。波状の加飾隆帯が貼付され、口縁部無文帯を区画する。下位は沈線文と縄文である。13群若しくは16群に分類すべきかもしれない。133は16群aである。南三十稻場式土器である。134は13群aである。135は16群bである。沈線により小三角文を連続して施す。胎土中には砂粒が多く混入する。気屋式に類似する。136は16群bである。横位沈線より下位に平行斜沈線文を施す。137は13群aである。SB3からは後期前葉の三十稻場式土器を含むものの、壠之内Ⅱ式・南三十稻場式土器も定量出土していることから、SB1・2・4に後出し、SB5と同時期と判断される。

138と139はSK1からの出土である。138は13群b1である。139は21群aで、簡易なナデ調整のみの無文の土器である。このことからSK1は後期前葉に位置付けられる。

140はSK10からの出土で、6群である。出土量が少なく遺構の年代は判然としないが、中期中葉に位置付けておきたい。

141-145はSK34からの出土である。141は21群cで、11群の一部か。142は26群である。幅3-4mm程の沈線で渦巻文を施す。大木系土器か加曾利E式系土器であろう。143は9群であろうか。内外を丁寧に磨き、湾曲する微隆帯で文様を描く。144は21群cである。極めて浅い沈線文で無文帯と充填縄文帯を区画する。145は21群aで、底部片である。遺構の年代は判然としないが、中期後葉であろうか。

146-149はSK43からの出土である。146は6群に分類した。地文には撫糸文を採用し、縦位半隆線を描く。本群の新段階に位置付けられ、4群に分類すべきかもしれない。147と148は4群である。149は6群である。横位隆・沈線から縦位隆・沈線が垂下する。本遺構は柄倉式期にまとまりがあり、中期中葉に位置づけられる。

150-153はSK44からの出土である。150と151は18群aである。152は6群である。断面台形の隆帯及び幅3mm程の沈線により、渦巻文と分岐する平行隆線を描く。153は4群である。本遺構は中期中葉の大木8b式から柄倉式期に位置付けておきたい。

154-164はSK45からの出土である。154と155は11群である。156は26群である。薄手で、幅5mm程の沈線と刺突により施文される。沈線は刺突穴から2条垂下し、その両側を弧状に区画していることから、7群や11群との共通性が高い。157は7群古段階である。158は6群古段階である。波状口縁

の頂部と直下の外面に、幅広の沈線と隆帯により渦巻文が施される。渦巻文の両脇は2列の押し引き文が施される。11群の可能性もある。159は7群古段階と考えられるが、11群の可能性もある。160は7群古段階である。161は7群古段階である。162は7群古段階である。把手付き波状口縁部で、円孔が穿たれている。163は6群の口縁部突起である。2箇の円孔が穿たれる。下位には横位隆帯に沿って刺突列が施される。164は12群である。地文の縄文は斜方向で一定せず、渦巻状に施文される傾向にある。また、指ナデによる縱位方向の器面調整がなされており、特に胴部下半に顕著である。SK45は、加飾隆帯を作り164が新しい傾向にあるものの、概ね大木9a式・沖ノ原式にまとまりがあり、中期後葉に位置付けられる。

165はSK49からの出土で、7群新段階の底部付近の破片である。幅広の沈線に区画された充填縄文帯が認められる。縱位方向の長梢円形モチーフの一部と考えられ、10群cの可能性も残る。いずれにも中期後葉に位置づけられる。

166~192はSK78からの出土である。166は20群aである。波状口縁となり、口縁無文帯と内面を丁寧に磨く。波状突起の内面には指頭形の窪みとそれに沿った隆帯が貼付される。167はC類（越後在地系）で、浅鉢若しくは深鉢の捻転する口縁把手である。後期初頭に位置付けられる。168は20群aである。169は12群である。加飾隆帯の上位には沈線が平行して引かれる。また、下位には1条の垂下沈線が認められる。170は18群b2である。薄手の土器で、渦巻文の可能性が高い沈線文が胴部上半に施される。171は12群である。波状口縁に沿って加飾隆帯が巡る。加飾隆帯の上位には隆帯上面と同様の手法による刺突文が巡り、波状頂部の直下には刺突を作り環状貼付文が配される。172は12群である。加飾隆帯の刻目は先端の細いヘラ状工具を使用している。加飾隆帯の下位には円形窓文が施される。内面及び無文帯の磨きが丁寧である。173は18群b2である。沈線は幅1cm程と広い。174は20群bである。口縁部形状は10群c以降の系譜を引き、後期初頭頃の所産であろうか。175は12群である。隆帯には指頭圧痕で加飾される。263と同様、加飾隆帯の分岐傾向や地文などの共通性から、後期初頭～前葉に位置づけられる。176と177は同一個体と考えられる小型深鉢で18群b3である。口縁端部は平坦で、やや内傾する。沈線以下は無節斜縄文で埋め、加えて縦位に同原体の側面圧痕によるループ文を施す。底面は幅広のヘラ状工具でナデ調整する。178は21群aである。179は7群古段階である。ミガキを作り3条の横位平行隆・沈線の下位に「S」字を描く隆帯を貼付する。180は11群である。沈線中に突瘤文を作り。181は18群dである。微隆帯の周辺及び内面を丁寧に磨き、外面下位に鴻曲する沈線が描かれる。182は21群aで、底部片である。底面はナデ調整の後、ヘラ状工具による平行沈線が施される。183は10群cである。沈線による鋸歯状文が認められる。地文には無節縄文が採用されている。184は7群古段階である。185は22群eの胴部片である。沈線が横位に施される。内外面は丁寧に磨かれている。186は11群で、つつじ原類型であろう。沈線中に突瘤文を作り。187は11群である。沈線内に刻目を作り、平行沈線文が施される。188は19群である。縦位に突瘤列を貼付する。189は22群bである。190は21群aで、底部片である。底部は丸底で、凹凸が著しい。内面には厚く炭化物が付着している。191は20群である。胴部片のため細分できない。192は21群aである。胴部は粗い無節縄文を地文とし、底部付近及び底面は縦位方向のナデで器面調整する。SK78は概ね後期的様相を示す。しかしながら、刺突を作り典型的な三十編場式土器（13群）を含まないことから後期初頭に位置づけられよう。

193~195はSK80からの出土である。193は21群cである。194は19群である。胴部片のため細分できない。195は16群bである。口縁部には列点文を作り横位平行沈線、胴部には重層三角文を施す。

本遺構はまとまりを欠くが、195 の存在から後期前葉に位置付けておく。

196-199 は SK94 からの出土である。196 は 20 群 c で、波状口縁となる。197 は 12 群である。波状口縁部で、隆帯も口縁形態に合わせ波状となる。地文には撫糸文を採用している。198 は 11 群で、つつじ原類型と考えられる。横に長い「U」字状隆線及び沈線、やや大型の突瘤文で施文する。199 は 25 群 a である。素材には底部を使用している。このことから、本遺構は中期末葉 - 後期初頭に位置付けられる。

200-217 は SK97 からの出土である。200-204 は 18 群 a である。ただし、203 の口縁部無文帯は幅 1cm 程度であり、下端も明瞭でないことから、意図的ではない可能性があり、本類に含まれない可能性もある。205 は 11 群である。突瘤文を伴う隆帯を貼付し、刺突による加飾を行う。206 は 18 群 a、207 は 19 群 b、208 と 209 は 18 群 b3 である。210 は 11 群で、万條寺林類型である。沈線中に突瘤文を伴う。211 は、低く幅広い隆帯と片側に沿う幅 6mm 程の浅い沈線の存在から 7 群に分類した。隆帯の裾部の一部には地文の回転瘤文が連続して施されている。また、横位隆線からは沈線が 1 条垂直に上昇し、地文と無文部を区画している。212 は 26 群である。橋状把手の一部であろうか。梢円状沈線に沿う隆帯部に瘤文が施され、梢円頂部付近は扁平瘤状に隆起する。中期末葉 - 後期前半の所産と考えられる。213 と 214 は 16 群 a である。215 は 6 群で、綾杉文系土器である。縱位区画線は 2 条の沈線である。216 は 4 群に分類したが、6 群綾杉文系土器の可能性もある。217 は 6 群である。本遺構は断面図から時期の異なる 2 つの遺構で構成されていることが判明している。出土遺物もまとまりを欠き、本遺構が攪乱されていることを示すものであろう。出土土器は大きく、中期中葉末 - 後期初頭（大木 8b 式新段階・9 式、沖ノ原式期）と後期前葉後半（沈線文系土器期）に分かれ、後期前葉前半の三十稻場式を欠く。この二時期がそれぞれ遺構の新旧に対応する可能性があろう。

218 は SK95（土器埋設土坑）からの出土で、逆位で埋設されていた。8 群である。上位には、幅 2-3mm 程の細い沈線により「J」字状の文様を描き、内側の瘤文を磨り消している。器形や文様帯が上位に集中していることなどから本類に分類したが、モチーフは加曾利 E 式最新段階あるいは称名寺式最古段階との影響が濃厚であり、中期最末期 - 後期最初頭に位置付けられる。

219-221 は SK98 からの出土である。219 は 16 群である。横位沈線とやや済曲する斜行沈線文を施す。220 は 16 群 b である。横位沈線文 1 条と斜行短・長沈線の組み合わせで施文する。221 は 16 群 a である。このことから本遺構は、後期前葉に位置付けられる。

222-227 は SK104 からの出土である。222 は 18 群 b3 である。内湾する薄手の器形で、外面をナデ調整する。223 は 12 群である。内面及び無文帯の磨きが丁寧である。224 は 12 群である。加飾隆帯は下位に弧を描き、収束する。225 は 13 群 a である。波状の加飾隆帯で口縁部無文帯と刺突地文部を区画する。226 は 23 群 a である。中央に摘みが付く。227 は 23 群 b である。縁辺部をナデにより面取りする。胎土中に土器片を多量に含む。このことから本遺構は、後期前葉の三十稻場式期に帰属すると考えられるが、227 の存在から沈線文系土器期に下る可能性も残る。

228-240 は SK106 からの出土である。228 は 6 群である。やや幅広の沈線と断面台形の隆線により連結渦巻文を描く。隆線はミガキを施すことから、新段階に位置付けられる。11 群の可能性もある。229 は 12 群である。加飾隆帯は下位に弧を描き収束する。胎土に長石を大量に含み、地文原体が 237 と近似していることから同一個体の可能性がある。230 は 12 群である。加飾隆帯は下位に弧を描き、収束する。233 と地文原体及び胎土が近似しており、同一個体の可能性がある。231 は 11 群で、万條寺林類型である。幅広の沈線文中には刺突を伴うものがある。232 は 20 群 c である。区画線は引かれないが、

口縁部付近は無文帯を設けている。234は12群である。235は11群で、万條寺林類型である。横位隆・沈線により施文され、隆帶には刺突が伴う。236は15群である。加飾隆帶が巡る。238は6群である。小渦巻文同土を隆沈線で連結させ、短沈線で区画内を充填する。新段階に位置付けられる。95（8群）のような対向文と見ることもできようか。239と240は10群cである。239は沈線による鋸歯状文が施される。本遺構からは沖ノ原式・加曾利E IV式・加飾隆帶文土器（城ノ腰類型）が共伴していることから、中期末葉～後期初頭に位置付けられる。

241と242はSK116からの出土である。241は16群である。242は26群で器種不明である。外反する器形で、外面の縱位方向に刺突の伴う隆帶が貼付される。内外面は丁寧に磨かれる。このことから本遺構は、後期に位置付けられる。

243-247はSK139からの出土である。243は22群cである。244は10群cの口縁部把手である。外面は中央が凹むように湾曲し、縄文が施される。245は13群aである。246は22群cで、注口付き浅鉢口縁部である。247は18群dである。このことから本遺構は、後期前葉に位置付けられる。

248-250はSK140からの出土である。248は21群cである。沈線間は丁寧に磨かれている。249は21群aである。250は12群である。加飾隆帶の上下には沈線が平行して引かれる。遺構の年代は判然としないが、中期後葉～後期初頭頃と考えられる。

251-254はSK142からの出土である。251は11群である。加飾隆帶の下位に平行沈線を施す。252は16群cである。口縁部に沈線による渦巻文と短弧状文、楕円状あるいは横位平行沈線文が施される。253と254は13群b1である。253は刺突のほかに円形窓文が施される。このことから本遺構は、後期前葉に位置付けられる。

255-269はSK216からの出土である。255は22群eである。口縁部に捻転する突起が相対して2個付く。胸部から口縁部への屈曲部には扁平な突起を作う隆帶が巡り、口縁突起付近で「U」字状に下位へ分岐する。外面を磨くが、丁寧とはいえない。C類（越後在地系）に属し、典型的な三十稻場式（13群）成立直前の後期初頭に位置付けられる。256は22群eである。口縁部は端部を外側へ引き出し、上面を平坦に作出する。胸部から口縁部への屈曲部に255に類似する突起付き隆帶を巡らせる。外面は丁寧に磨かれ、内面口縁部付近ではススが著しく付着する。255との類似性から後期初頭に位置付けられる。257は18群cである。258は11群で、道尻手類型に似る。259は12群である。地文は撫糸文を採用している。260は5群の口縁突起部と考えられる。261は6群である。断面蒲鉾状の横位平行半隆線が施される。262と263は12群である。263の加飾隆帶には直径2.5mm程の管状工具による刺突により、円文が連続して施される。加飾隆帶は一部で上部に分岐することから、綱取式の影響が垣間見られる。地文は条痕が採用されている。後期初頭～前葉に位置付けられる。264は11群と考えられる。横位平行沈線から縦位沈線を垂下し、方形区画を作出する。7群の可能性もある。265は12群である。加飾隆帶に瘤状突起が付加される。266は6群で、縫杉文系土器である。小型継ぎ手渦巻文を作う3条の縦位隆帶で区画する。338と接合する。267は5群とした。ただし、沈線は細く、半隆線は断面蒲鉾状を呈していることから6群まで下る可能性を含む。268は25群aである。裏面（土器の内面）が平滑となり、周縁は平坦面が出来る程擦痕が明瞭である。器面には細い沈線で区画し、区画を磨く施文方法が218と共通することから、称名寺式最古段階の土器を素材にしたものと考えられる。269は12群である。加飾隆帶には直径5mm程の管状工具による刺突により、中央が隆起する円文が連続して施される。口縁部内面には蓋受けと見られる嘴状の鈎が巡る。地文は胸部上半と下半で異なり、上半が無節斜縄文、下半が条痕文

である。後期初頭～前葉に位置付けられる。本遺構からは中期中葉～後葉の土器を含むものの、典型的な三十種場式（13群）成立直前段階である後期初頭の頃にまとまりがある。本遺構は中期中葉の柄倉式期の堅穴建物SI91を切って構築していることから、中期の遺物は混入である可能性が高く、本遺構の年代は後期初頭に位置付けるのが妥当であろう。

270-280はSK219からの出土である。270は10群cである。271は18群b2である。外反する口縁部で、口縁端部は小玉縁状を呈する。272は12群である。地文には無節斜縄文を採用している。273は18群b3である。緩やかに内湾する口縁部である。274は18群aで、275は20群aである。276は10群b新段階もしくは7群古段階である。蕨手状沈線が認められる。277は11群である。沈線中に突瘤文を伴う。278は11群である。やや湾曲した縱位沈線中に突瘤文を貼付する。279は21群cで、底部片である。7に似ることから、10群bか。280は21群aで、底部片である。外面及び底面はナデ調整される。内面に厚くススが付着する。本遺構はまとまりをやや欠くことから、中期後葉～後期初頭頃に位置付けておく。

281-339は直径80cmを超える大型の柱穴を含むピットからの出土である。281は16群cである。口縁帶中央に幅広の横位沈線を施す。282は11群で、万條寺林類型である。沈線内に刺突を伴う。283は4群である。284は13群aである。浅い刺突を伴う「S」字状貼付文を施す。285は4群であろうか。断面蒲鉾状の隆線に刺突を施し、短沈線で空白部を充填する。286と287は3群の口縁突起の一一部と考えられる。288は19群である。289は10群cである。細い弧状沈線により区画しているものと考えられるが、磨り消し部と縄文帶の差が明瞭に認識できない。290は21群cに分類したが、16群の可能性もある。291は5群である。剥離が著しいものの、ソーメン状浮文が認められる。292は11群と考えられる。横位平行沈線から縱位沈線を重下する。7群の可能性もある。293は11群である。加飾隆帯により口縁無文帶を区画し、下位に横位沈線文を巡らせる。294は10群cである。縱位沈線及び幅広の磨り消し無文部が確認できる。295は25群aである。周縁の擦痕が明瞭である。296は11群である。沈線中に突瘤文を伴う。297は1群である。3条の半降起線が平行しながら曲線を描き、中央の1条に細かな爪形押し引き文が施される。また、それらの上位には1cmほどの空白域を持つが、境となる両側面の沈線には刻目が施される。298と299は6群で、298の横位隆・沈線からは縱位隆・沈線が重下する。300は「S」字状の隆帶を貼り付けているものと考えられ、13群aであろう。301は6群である。隆帶は断面台形でミガキを伴い、沈線は断面が丸みを帯び、幅広になりつつあることから、新段階に位置付けられる。302は11群である。沈線内に刺突を伴う。303は10群cである。沈線間を磨り消し、無文帶を作出しており、縱に長楕円形モチーフ描いているものと考えられる。304は16群であるが、細分は出来なかった。沈線が斜方向に平行して引かれ、沈線間の一部に細密縄文が施される。空白部はナデ調整される。305は6群である。306は6群である。3条1対の断面台形の高い隆帶により小渦巻文及び縱位線文を描く。307は26群で、器種不明である。刺突を伴う弧状の隆帶が貼付され、弧の内側に沈線が3条沿う。後期前葉であろうか。308と309は7群古段階、310は19群、311は16群aである。312は16群bである。斜状平行沈線と短沈線により施す。313は9群で、壺形土器の底部である。「U」字状あるいは楕円を呈する隆帶文で器面を飾り、外表面を丁寧に磨くとともに、ベンガラを塗布している。大木10式段階に位置付けられる。314は21群aである。315は11群である。沈線間に突瘤文が貼付される。316は26群で深鉢と考えられる。幅3-4mm程の沈線が細長い楕円状に深く彫り込まれる。11群であろうか。317は16群aである。318は21群aである。僅かに6mm程度の口縁部無文帶を

有する。319は21群a、320は7群古段階、321は13群a、322は21群c、323は7群古段階である。324は18群b2である。内外面の磨きは丁寧である。325は11群である。326は4群に分類したが、6群綾杉文系土器の可能性もある。327は11群である。隆帯上に刺突と突瘤を交互に施す。13群の可能性もある。328は16群aに分類したが、沈線文が入り組んでおり、15群に該当する可能性がある。329は16群cである。口縁部の中央を幅広の横位沈線より凹ませ、下端に加飾隆帯状の刻目を施す。330は21群dである。波状口縁部で、内側が肥厚する。遺存部最下端に横位基調の沈線が認められる。後期の所産か。331は16群cである。口縁部に円形窓文と弧状沈線を施す。332は16群cである。肥厚する口縁部を有し、円形窓文と横位沈線が施される。窓文からは管状工具による3列の押し引き文が垂下する。333は21群aである。口縁端は揃んで先細りに作り出している。334は7群古段階である。335は25群aである。周縁の突出している箇所が部分的に擦られている。幅広の浅い沈線が認められることから大木9式土器を素材にしたものであろうか。336は12群である。ただし、加飾隆帯は横「J」字状に収束することから、一線を画す。地文に回転繩文を施すことから本類に分類したが、三十稻場式古段階に類例が見られ、13群に含めることも可能である。337は、断面台形を呈する隆帯に沿って幅6mm程の浅い沈線状のナデが認められることから、7群に分類した。338と339は6群で、綾杉文系土器である。338は206と接合し、339の器面は小型渦巻文を伴う縦位隆帯で区画される。

ピット出土の土器は、中期後葉と後期前葉の土器が混在する場合が多く、良好な一括資料は僅少である。この傾向は、中期の集落の上から後期のピットを掘り込む本遺跡の集落構造に由来すると考えられ、沢の西側（グリッド3N-P）で特に顕著である。一方、中期の開発がほとんど見られない東側に位置するP178ではほぼ後期前葉の土器でまとまる。

## 2) 埋没沢上層出土（図版32・79-340-350）

調査区の南東から北西にかけて検出した埋没沢では、下・中層から極めてわずかながら中期の土器が出土した。のことから本沢は、中期には半埋没状態であったと考えられる。340-350は上層の上面付近から出土した土器である。340は6群で、綾杉文系土器である。トンボ眼鏡状突起と劍先付渦巻文を施し、地文を短沈線で埋める。341は10群bで、磨り消しは粗雑である。342は22群bである。343と344は15群で、344は幅5mm程の沈線で「J」字状に区画された内部を細密繩文で埋める。345は16群cである。文様構成は480に似るが、胴部は重層三角文である。346は16群a、347は21群a、348は16群cである。350は11群である。小型の深鉢形土器で、口縁部内側に蓋受けと考えられる鈎が巡る。口縁部は丁寧な磨きにより無文帶を作出し、隆帯で区画する。隆帯からは縦位突瘤列と縦位波状隆帯が垂下し、地文には横「ハ」字状短沈線を施す。口縁部には把手の基部の可能性がある欠損部が認められる。底面はナデ調整する。本群新段階に位置付けられ、後期に入るものと考えられる。349は26群で、波状口縁部である。頂部には環状沈線文が配され、直下に橋状把手が付く。把手両側には沈線文が施され、波状口縁の縁には刺突を伴う隆帯が巡る。のことから本沢は、後期前葉の段階でほぼ完全に埋没したものと考えられる。

## 3) 遺構外出土（図版32・80-86・42-351-536）

351は26群で、口縁部装飾の一部である。施文方法などは、十日町市笠山遺跡出土の獣面把手付土器[石原1998]に類似する。中期中葉頃の所産であろう。352-357は3群である。352と353は鋸歯状突起

部周辺部、354と355はトンボ眼鏡状突起、356と357は冠状突起である。

358-361は5群である。362-375は6群である。362-365は同一個体の可能性が高い。3条1対の断面鉢鉢状の隆起及びそれらに沿う沈線により連結する渦巻文を描く。本群中段階に位置付けられる。366は口縁部上面に隆帶による小渦巻文が施される。外面は無文である。368は7群の波状口縁部と類似するものの、装飾は細かく、丁寧である。隆線にも磨きが見られつつあることから、本群新段階に位置付けておくが、7群古段階まで下る可能性を含む。369は綾杉文系土器である。口縁はやや外に開くものの、直線的に立ち上がる。口縁上面には3条の隆沈線が巡る。胴部上位の横位展開する剣先渦巻文に沿って、刺突列が伴う。370は3条1対の縱位隆沈線により区画し、地文に綾杉状短沈線を施す。本群新段階に位置付けられる。371は深鉢の波状口縁部で、幅広の隆帶による大型渦巻文を施す。渦巻文の上面は平坦で、短沈線が充填される。また、渦巻文に沿って刺突が施される。地文は撫糸文を採用している。これらの施工手法の共通点から、本群新段階に位置付けられる綾杉文系土器に分類しておく。4群及び類似信州系土器との比較検討が課題である。372と373は綾杉文系土器である。372の隆線は細く磨かれ、断面は台形である。剣先付渦巻文を施し、地文を短沈線で埋める。373の胴部の文様構成は369に似る。374の隆線は断面方形で高く、沈線は深い。地文を短沈線で埋める。本群新段階に位置付けられる。375は口縁部文様帯部である。口縁部上部には幅5mm程の横位沈線が2条巡る。中位には隆帶による渦巻文を配し、両脇には沈線で囲まれた梢円状区画が施される。梢円状区画内は縱位短沈線で充填される。本群新段階に位置付けられ、4群に平行すると考えられる。

376と377は4群である。376の口縁部は「く」字状に屈曲する。口縁部の上半は無文、下半は隆帶による小渦巻文を配し、地文に沈線で区画した長方形区画内を縱位短沈線で埋める。渦巻文からは垂直に幅1cmほどの隆帶が貼付され、隆帶の中央には管状工具で連続的に刺突する。また、隆帶の両脇には上方が弧を描いて逆「U」字状に連続する刺突列が施される。胴部の地文は短沈線による綾杉文が施される。377の上面形は梢円を呈する。口縁部には、渦巻文が連結する隆帶により無文帯を区画する。その隆帶の下位には刺突を伴う隆帶が1条沿う。胴部にも、隆帶及び刺突を伴う隆帶により、大小の連結渦巻文を施し、地文を短沈線で充填する。

378-381は7群である。378は古段階、379-381は新段階に位置付けられる。379の上位には380と類似した手法の主文様を施す。胴部の最大径付近で波状沈線により区画線を設け、それより下位には繩文のみとなる。文様帯が上位に集中する傾向から、380より後出とみられ、8群古段階にまで下る可能性がある。380は幅5mm程の沈線により縱位対向梢円文及び垂下梢円文を描き、沈線で区画された内部には繩文を充填する。381の胴部上位には「コ」字状文が向きをランダムに変えながら配置され、胴部中央から下位には「U」字状文が連続して巡る。主文様は、幅6mm程の沈線により区画され、内部に繩文を充填する。

382-392は9群である。382は赤色両耳付壺形土器である。隆帶で縦横に器面を覆い、下位では大型の渦巻文を作出する。内外面を丁寧に磨き、外面はベンガラを塗布している。耳は口縁部や下位と胴部下半の二箇所に合い向かいて設置されている。大木10式古段階に位置付けられる。383は跨付き浅鉢である。跨の上面には幅広の沈線による渦巻文が、胴部には曲線状の幅広沈線と充填繩文が施される。大木9式段階頃であろう。384は有孔跨付土器の口縁部である。把手の基部に縱位及び横位に十字状に穿孔される。内外面を丁寧に磨くとともに、ベンガラを塗布している。385は器種不明である。隆帶による横位の「U」字状若しくは梢円文を施す。内外面を丁寧に磨くとともにベンガラを塗布する。386は有孔跨

付土器である。器面には湾曲した「U」字状沈線と、戸手状の沈線の一部が認められる。内面は剥離が著しいものの、内外面を磨くとともに、ベンガラを塗布している。387は有孔跨付土器である。386と同様の湾曲した「U」字状沈線が認められる。388-390は器種不明である。388は高い隆帯を貼付し文様を施す。内外面にはスヌの付着が著しい。389は隆帯により文様を施す。内外面を丁寧に磨くとともに内外面にベンガラを塗布する。390は隆帯による渦巻文を施す。器面は丁寧に磨かれ、外面にベンガラが塗布されている。スヌの付着が著しい。391と392は器台の可能性がある。391の図の上面は平坦で、下面と392の上面には端面及び部分的な欠損部が認められることから、透かしが施されているものと考えられる。外面には沈線により方形区画文を描く。391と392は同一個体の可能性がある。器台であれば、図の天地が逆となろう。十日町市幅上遺跡で類品が出土している〔菅沼・宮内2007〕。

393-403は10群bである。393は口縁部文様帶である。394は波状口縁部で、磨り消しによりやや縱長の大型渦巻文を施す。395は地文に縄文を施したのち、幅5mm程の浅い縱位沈線を巡らす。底部境2cm程はナデ調整され、無文となる。396と397は内渦ある口縁部で、幅1cm程の太い沈線で渦巻文を描く。同一個体の可能性がある。398の区画線には隆帯を作う。400は口縁部文様帶部で、7群古段階の可能性もある。隆帯及び幅広沈線による渦巻文が施される。401と402の口縁部上半は無文帯である。隆帯により文様を区画する。403は口縁部文様帶部と考えられることから、本類に分類したが、隆帯を作う文様が均整を崩しつつあることから、10群cまで下る可能性を含む。

404-412は10群cである。404は隆帯を作う入組弧線文を描く。沈線幅は3-5mm程度と広い。406と407は区画線に隆帯を作う。同一個体の可能性がある。408は幅広の縦位無文帯を有する。409は玉抱文を描き、頂部に突起が付属する。本群最新段階に位置付けられる。410は細い沈線により、入組弧線文を描く。本群最新段階に位置付けられる。411は鋸歯状文と考えられる文様を細沈線で描くことから本群に分類した。しかしながら、加飾隆帯の上下に沈線及び充填縄文が及ぶため、他に分類すべきか迷う。本群最新段階であろうか。412は加飾隆帯で口縁部無文帯を区画する。加飾隆帯中には円形窓文若しくは戸手状の窓文が施され、隆帯が垂下する。隆帯沿いには幅広の磨り消し帯が付帯し、内側に縄文が充填される。本群の中でも新しい様相が見られ、後期の所産と考えられる。

413-416は22群bである。417-437は11群である。417はつづじ原類型である。加飾隆帯により口縁部無文帯を作出し、突瘤文を作う沈線が垂下する。418は大小の渦巻文と隆・沈線、刺突で口縁部に施文する。419は万條寺林類型である。420の横位沈線には突瘤文が伴う。421と422は万條寺林類型である。421は加飾隆帯を作り、沈線中に刺突が確認できる。423は突瘤文を伴う沈線により器面を区画する。426はつづじ原類型である。加飾隆帯及び上方に沿う沈線で口縁部無文帯を区画し、胴部には隆・沈線により施文される。427は道戻手類型に似る。428は刺突を作う加飾隆帯及び上方に沿う刺突列により、口縁部無文帯を区画する。隆帯からは沈線が2条垂下する。429は沈線内に刻目を伴う、平行沈線文が施される。431は指頭による円形の凹みと沈線による半梢円形の区画を持ち、区画内は短沈線を充填する。図の縦横は誤りの可能性もある。432は隆・沈線による半梢円形区画内に縱長の刺突文で充填する。433の沈線中には突瘤文を伴う。434の加飾隆帯の刺突は、左から右に向かい管状工具で連続的に施している。隆帯の上下には浅い幅広の沈線が平行して引かれ、地文には細密縄文が採用されている。つづじ原類型の最新段階に位置付けられ、後期に入るものと考えられる。435は堂平類型である。波状口縁に沿った加飾隆帯により口縁部無文帯を区画する。436は加飾隆帯で口縁部無文帯を区画する。波状口縁で、直下には橋状把手が付く。把手には小渦巻文が配され、胴部には沈線文で囲まれた方形区画

に縄文を充填する。本群の最新段階に位置付けられ、後期に入るものと考えられる。437は反里口類型である。短沈線で横「ハ」字状文を施す。本群最新段階である。

438-447は12群である。438の地文には撫糸文が施されている。442は加飾隆帯と同様の刻目を付した環状浮文を貼付する。443の加飾隆帯の上位には極めて浅い沈線状の凹みが1条平行して巡る。444の隆帯は波状を呈し、細くて高い。上端に浅い刻目を連続的に施す。口縁部上端は幅1cm程の平坦面が作出され、縄文が施される。445の加飾隆帯は下方への弧状取束部が対称し、連続しない。446の隆帯は波状を呈し、上端に縄文を加飾する。加飾隆帯上の所々で扁平な瘤が貼付される。447の加飾隆帯は波形を呈すると考えられる。加飾隆帯上の刺突と同様の刺突が、口縁部にも巡る。地文は条痕文である。

449-466は13群である。448-457は深鉢で13群aである。456は管状工具により途切れなく列状に押し引き若しくは刺突を行うことにより、爪形状の文様を施す。外面には把手が付き、内面口縁部直下には蓋受けと考えられる隆帯が2条巡り、隆帯間は同様の文様を施している。457は環状浮文と沈線文が施され、地文を管状工具で鈍角に刺突する。458-465は蓋で13群bである。そのうち、458-461の施文方法はb1である。459の内面にはかえし状の突帯が巡る。460は刺突、沈線の他に「U」字状の貼付文が施される。462-465の施文方法はb2である。463の上面縁は折り返され、肥厚する。肥厚部には刺突が伴い、境には幅広の沈線が巡る。464の中央には摘みと沈線文を施し、周縁には隆帯が貼付され細長い刺突が施される。465の中央には摘みを有し、周縁には刺突を伴う網目状の隆帯が貼り巡らざれる。

466-468は23群aである。466は本群に分類したが、10群bの波状口縁部の可能性もある。468の中央には橋状把手が付くものと考えられる。469-472は15群である。469の沈線は幅2mm程と狭い。471と472は沈線間に幅広の隆帯を貼付する。473は14群である。本群を特徴付ける貼付文のほかは丁寧に磨かれている。474-476は26群で、管状工具により円文列を施す一群である。円文列は三十稈場式に類例があるが、本類には縄文地文がある。474の円文列の下位には沈線が沿い、胴部には沈線で区画されたと考えられる無文帯及び縄文地文が確認できる。476は円文列の下位に沈線が沿う。沈線以下は縄文地文である。

477-483は16群である。477は16群aで、文様構成は斜方向に展開する。3条の沈線により、不整形の渦巻文を連結する。南三十稈場式土器である。478-482は16群cである。478の口縁部には突起を有する。口縁突起には多重沈線が施されて、内面には環状浮文の貼付及び円孔が穿たれている。突起の基部には円形窓文が配され、幅3mm程の沈線が横に伸びる。内側に屈曲する口縁部には縄文が施されるが、胴部は磨かれ、無文である。479の波状口縁頂部からは沈線が垂下し、口縁帶は横に長い楕円形区画文を配し、区画内を刺突文で埋める。胴部は、刺突文列を伴って平行する斜沈線及び曲線沈線が施される。480の口縁帶には円形窓文及び同心円状重弧文・横位沈線を施し、下端に押し引き文列が巡る。胴部には台形に近い方形区画文を幅3-4mm程の沈線により施文する。481の波状口縁頂部直下には弧状文と円形窓文を施す。482は外反する薄手の口縁部で、小突起が付属する。小突起の内外面には円形窓文が配され、外面上には更に弧状沈線と両脇に円形窓文が施される。内外面のミガキは丁寧である。483は16群bである。堀之内II式に文様構成が類似する。

484はB類の注口土器であろうか。胴部には中央に突起の付く環状浮文を沈線でつなぐ施文がなされる。外面上のミガキは丁寧であるが、内面は差程ではない。十腰内式に類似し、後期前葉に位置付けられる。

485-488は22群である。485は22群aである。波状口縁を呈する。口縁部は外に鈎が付き、折り返

して作出了した平坦面には楕円状の簡素な沈線文が施される。平坦面の内端は「T」字状に上下へ突出する。内外面は丁寧に磨かれている。大木9から10式段階若しくは後期初頭頃に位置付けられようか。486は22群dである。薄手で、波状口縁の内側に上面が平坦な隆帯により渦巻文を貼付する。487と488は22群eで、同一個体の可能性がある。注口付き浅鉢か。波状口縁で、口縁部には刺突列を伴う2条の沈線が口縁形状に沿って施され、胴部には多条沈線が施される。欠損しているものの、把手が付く可能性が高い。後期前半に位置付けられる。

489はA類の注口土器であろうか。器壁は極めて薄い。内外面を丁寧に磨き、口縁部直下から薄い楕状把手が付く。把手の外面には渦巻沈線文が配され、側面には「C」字状沈線で円形窓文を繋ぐモチーフが施されている。把手両側の胴部には沈線を伴う刺突列が、下位には渦巻沈線文が施される。堀之内式に類似し、後期前葉に位置付けられる。

490と491は24群である。490は幅3mm程の沈線に囲まれた範囲に縄文を充填する。491と同様に注口の下面にススが付着している。7・8群ないしは10群c段階であろうか。491の遺存部は無文で、注口の下面にススが付着している。492は26群である。把手付き注口土器であろうか。凹凸のある粗い器面を丁寧に磨く。後期の所産か。

493-495は20群である。493は胴部片のため細分できない。器面には幅4mm程の沈線により区画された無文帶で主文様が描かれることから、大木9-10式段階に位置付けられる。494は口縁帯を肥厚させ段を作出することで、地文部を区画する。波状口縁で、中央に三角形の凹みを有し、刺突列が巡る。495は口縁部に1単位の突起が付き、外面中央には先端から下位に三日月形の沈線が施される。

496-504は19群である。そのうち、496-499は沈線を伴う19群aで、500-504は伴わない19群bである。497の沈線は幅広い。499の区画沈線は幅1.5-2.0mm程で明瞭ではなく、沈線より上位にも条痕が飛び出していることから、19群bに分類することも可能である。条痕は斜方向に施される。503は著しく内湾する口縁部である。天地逆で蓋の可能性もある。504は19群bである。櫛歯状工具で渦巻文や方形区画文を描く。本群の地文に条痕を施す一群とは一線を画すことから、他群に分類することも可能である。11群の範疇に類品が見られる。

505-509+511-512は18群である。505は18群cである。波状口縁部に直径18mmの円孔が穿たれる。506と507は18群b1である。やや肥厚する口縁帯の直下に横位押圧縄文が施される。506には2条、507には3条が巡る。508は18群cに分類したが、肥厚する口縁帯より下位2cm程も無文帶となるため、分類が適切か否かについては検討の余地がある。波状口縁を呈し、口縁帯の中央に円形窓文を施す。窓文の両脇も三角形の凹みを作出する。509は18群cである。511と512は18群aである。

510は21群bである。頭部を2列の横位列点文で区画する。513は21群aである。514は26群である。波状口縁で、管状工具による円形刺突を伴う加飾隆帯で口縁無文帯を区画する。欠損しているものの、遺存部のほぼ中央付近から加飾隆帯の頂部に掛けて把手が貼付されていた可能性が高い。胴部には幅2mm程の沈線による不整形の楕円形が配され、内部に加飾隆帯と同様の施文方法による刺突文が充填される場合もある。地文には円形刺突と無節縄文が施される。後期の所産と考えられる。515は26群である。深鉢の波状口縁部である。細い管状工具による刺突が施された加飾隆帯が口縁形状に沿って貼付され、口縁部無文帯を区画する。遺存している加飾隆帯の最上面は面取りされていることから、波状にならず、「ハ」字状を呈する可能性がある。加飾隆帯の下位には同様の刺突を持つ5条の半隆線が平行し、遺存部中央には橋状把手が付く。把手の上面にも半隆線が施され、把手の下位には同様の刺突を持つ突瘤文が付加さ

れる。地文は無節縦文である。円形刺突を多用する土器には北陸系串田新II式が知られ、影響関係を考慮する必要があるかもしれない。516は21群aである。517は26群で、器種不明である。口縁上面は中央がやや凹むものの、平坦面を作り出しており、内外に斜状に突出する。遺存部の下位には刺離の痕跡が認められ、口縁部突起に向かい橋状把手などが付加されていた可能性がある。その推測が正解を得ているのであれば、後期の所産であろう。518は17群である。薄手で、外面には雲形文を有する。沈線内は縦文を充填するが、それ以外の内外面は丁寧に磨かれ、ベンガラが部分的に遺存している。

519-536は25群である。519は25群dである。上面は縁が高くなり、中央が凹む。側面はほぼ直立し、下面是中央に向かい下がる。520は25群cである。下部を欠損する。遺存部の最大径は23mmで、先端に向かい徐々に細くなる。先端は丸めている。521は25群bである。いわゆる滑車型の土製耳飾りである。522は25群eである。中空で、外面に指頭圧痕が無数に認められる。作為的な造形とは考えられない。523-536は25群aである。523・524・526・533の平面形は梢円形に近い。523の周縁は突出している箇所が部分的に擦られている。527は裏面（土器の内面）がやや平滑であり、周縁は擦痕が明瞭である。土器の粘土紐接合部を使用しており、外面はやや屈曲する。531は裏面（土器の内面）がやや平滑であるものの、周縁には擦痕は認められない。剣先状あるいは棘状文の一端とみられる沈線が認められることから大木8b式を素材にしているものと考えられる。532は断面錐鉢状の縦位半隆起線が認められることから、素材には大木8b式土器の脛部を用いているものと考えられる。536は底部を使用している。

## 2 骨 角 器

537（図版42・86-537）はSK20出土で、大きさは高さ11.8mm、幅9.4mm、厚さ2.5mmを測る。頭部にある孔径は2.4mmで片側から穿孔し、反対側からも孔の縁を削り整っている。頭部周辺は半円形に端部を整えているが、左右と下部を欠いている。下部は股状になると思われ、股部には調整の削り痕が見られる。動物骨を使用しているが、どのような製品であるか不詳である。加熱で白色化している。

## 3 石 器・石 製 品

### A は じ め に

本遺跡で出土した石器・石製品は、1,742点である。そのうち遺構内出土は161点にすぎず大半は客土（一部包含層土有り）によるものである。時期的には、縄文時代中期から後期の所産と考えられるが、多くを占めるのは中期中葉から後期前葉までと考えられる。遺構の検出状況から、調査区の南東から北西に延びる埋没河川を挟み西側に堅穴建物群・袋状土坑群、東側に掘立建物群の居住空間が見られるが、調査区内の包含層残存率が低いことから顕著な廃棄空間が認識できないため、ある程度の偏りを推察するに留める。遺物の数が多かった3M・N区は埋没河川の覆土上層位であり、廃棄時の投げ込みが考えられる。

### B 器 種 分 類（第4表、第11・12図）

石器および石製品の内訳は、石錐・石錐・石匙・不定形石器・板状石器・打製石斧・磨製石斧・両極石器・石錐・磨石類・砥石・石皿・石核・礫類・礫剥片・薄片類・石製品である。（第4表）各器種の分類方法は、

五丁歩遺跡〔高橋 1992〕に準じ、細分については、清水上遺跡Ⅱ〔鈴木 1996〕に準拠した。石器・石製品は 121 点を抽出し掲載した。

**石 鐵** 無茎のものと有茎のものに大別し、基部の形状が明瞭な凹状（抉り）を有すもの、基部の凹状が浅く不明瞭なもの、基部に三角形状の突部を有すもの、基部が棒状のものに細分した。尖頭部の形状については、幅広のものや細身のものも含まれるが、不明瞭な部分も存在するので細分していない。

**A 類** いわゆる無茎のものである。

A1 類 基部の凹状が明瞭なもの。(538・539・541-545)

A2 類 基部の凹状が不明瞭なもの。(540・546-549)

**B 類** いわゆる有茎のものである。

B1 類 基部に三角形状の突部を有すもの。(550)

B2 類 基部が棒状のもの。(551)

**板状石器** 4-6cm 大の扁平盤や板状の礫剥片を素材とし、ほぼ全周する急角度剥離の片面加工を基本とした二次加工を施すものである。平面形は円形や楕円形が多く、断面形は台形状を呈する。また片面（裏面）には摩耗あるいは線条痕がある。平面形状で A-C まで 3 分類した。

A 類 平面形が三角形で側縁に抉りのあるもの。(575・576)

B 類 平面形が円形及び楕円形で周縁に剥離調整を施すもの。(577・579・581-585)

C 類 平面形が不整形で周縁の剥離調整がとぎれるものの。(578・580・586)

**不定形石器** 二次加工や使用痕のある石器で、主に刃部形状の違いにより細分した。分類は、清水上遺跡〔高橋ほか 1990〕、五丁歩遺跡〔高橋 1992〕の「不定形石器分類案」に従った。この中で、器種認定可能としたものは、不定形石器から分離した。

**A 類** スクレイパー 刃部に急角度の連続剥離が施されるものである。二次加工は片面を基本とするが、一部に両面加工も含まれる。細分は二次加工の大きさ、加工部位により 3 分類した。

1 類：中型の急角度連続剥離が施されるもので、二次加工は側縁ないし底縁である。

(556・557・560・572: 五丁歩遺跡表 28 の A 類に相当する。)

2 類：小型の急角度連続剥離が施されるもので、二次加工は側縁ないし底縁である。

(567: 五丁歩遺跡表 28 の B 類に相当する。)

3 類：素材の端部に小型の急角度連続剥離が施されるもの。

(571: 五丁歩遺跡表 28 の I 類に相当する。)

**B 類** 鋸歯縁石器 刃部に鋸歯状の剥離が施されるもの。

(561・564・569・570・574: 五丁歩遺跡表 28 の C1・C2 類に相当する。)

**C 類** 挿入石器 刃部が挿入状（ノッチ）のもの。

(565: 五丁歩遺跡表 28 の E1・E2 類に相当する。)

器種名	石 燕	石 錐	石 匙	不 定 形 石 器	板 状 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	石 錘	磨 石 類	両 極 石 器	石 核	礫 類	礫 剥 片	剥 片 類	石 製 品	合 計	
出土数 (点)	18	1	2	30	26	104	20	13	51	9	65	19	156	1030	187	20	1751
百分率 (%)	1	0.1	0.1	1.7	1.5	6	1.1	0.7	2.9	0.5	3.7	1.1	8.9	58.8	10.7	1.2	100

第 4 表 石器類の器種別数量

D類 微細剥離痕のある剥片 無加工ないし二次加工が極めて少ない刃部に使用痕（主に微細剥離痕）が見られるもの。

(558・559・562・563・566・568・573: 五丁歩遺跡表 28 の J1・J2 類に相当する。)

打製石斧 素材には剥片と扁平礫があり、剥片素材には薄手と厚手のものを大別した。さらに平面形状から撥形・短冊形に分類した。

A類 薄手の剥片素材で平面形が撥形のもの。

1類 兩側縁がやや抉れる。(587・599・600)

2類 兩側縁に明瞭な抉りを有するもの。(601-605)

B類 薄手と厚手の剥片素材で平面形が短冊形のもの。

1類 薄手剥片で両側縁がやや抉れる。(598)

2類 薄手剥片で両側縁が直線状かやや膨らむもの。(588・592・594)

3類 厚手剥片で両側縁が直線状かやや膨らむもの。(589・596・597)

C類 扁平礫を素材とし平面形が短冊形のもの。(590・591・593・595)

扁平礫の周縁部を荒剝離で成形したものの。

磨製石斧 いわゆる定角式磨製石斧として識別したもので、形の大きさにより基端から刃部までの長さで 3つに分類した。

A類 大型で長さが 11cm 以上のもの。(611・612)

B類 中型で長さが 4cm 以上、11cm 未満のもの。(607-610)

C類 小型で長さが 4cm 未満、幅が 2cm 未満のもの。(606)

磨石類 主に扁平礫や棒状の礫を素材とし、磨痕・凹痕・敲打痕が一つの礫に複数残るものである。以下にそれぞれの痕跡の組み合わせで分類した。

A類 磨痕と凹痕が残るもの。(627・631)

B類 凹痕だけが残るもの。(624・626・629)

C類 凹痕と敲打痕が残るもの。(623・625・628)

D類 敲打痕だけが残るもの。(630)

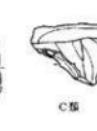
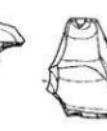
石核 石核には小型素材のものと大型素材のものを大別し、更に調整段階（荒削り及び打面調整）のものと剥片剥離作業段階のものを分類した。

A類 小型素材の母岩で調整段階のもの。(651)

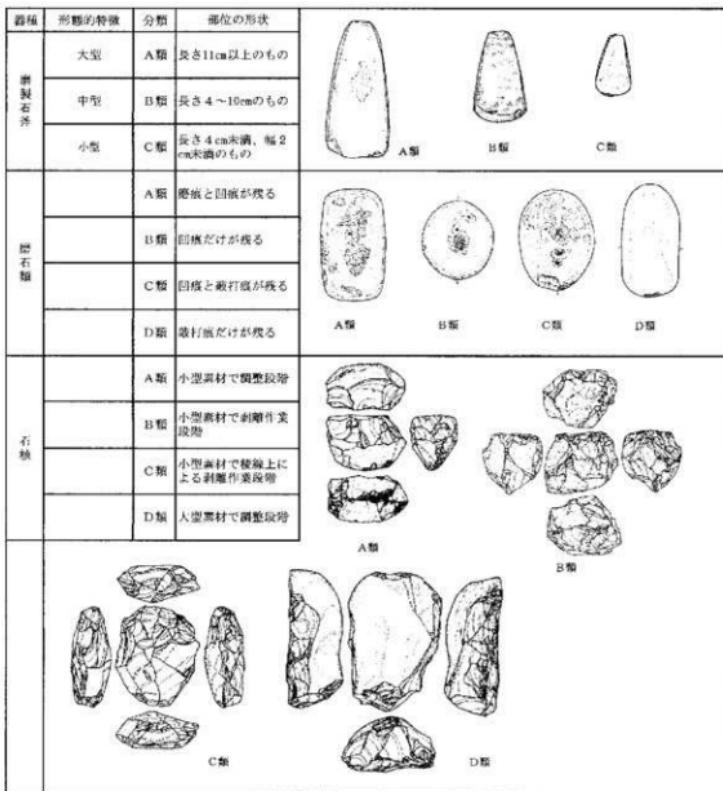
B類 小型素材の母岩で剥離作業段階のもの。(653)

C類 小型素材の母岩で稜線上からの剥離作業段階のもの。(650・652・654・655)

D類 大型素材の母岩で調整段階のもの。(656-658)

器種	形態的特徴	分類	断面の形状	
石 器	A類 凹状無基盤	1類 2類	基部の抉りが明瞭 基部の抉りが不明显	 A 1類  A 2類
	B類 凸状有基盤	1類 2類	基部が二角形状の中基 基部が尖頭状の中基	 B 1類  B 2類
板 状石 器	平面形が二角形	A類	側縁に抉りが入る	 A類
	平面形が円形 か楕円形	B類	剥離調整が周縁に入る	 B類
	平面形が不整形	C類	周縁の剥離調整がとぎれる	 C類
未 定 形 石 器	A類 スクレイパー 急角度の片削り形	1類 2類 3類	側縁に中型の連続剥離 側縁に小型の連続剥離 端部に小型の連続剥離	 A 1類  A 2類  A 3類
	鉗壓破石器	B類	刃部に鉗壓破壊を施すもの	 B類
	挿入石器	C類	刃部が挿入状(ノック)のもの	 C類
	微細剥離及び 痕のある剥片	D類	加工剥片に使用痕(微細剥離)がある	 D類
打 製 石 器	A類 平形 薄手の剥片素材	1類 2類	両側縫がやや抉れる 両側縫に明瞭な抉り	 A 1類  A 2類
	B類 矩形 薄手・厚手の剥 片素材	1類 2類 3類	薄手で両側縫がやや抉れる 薄手で両側縫が直線かやや曲らむ 厚手で両側縫が直線かやや曲らむ	 B 1類  B 2類  B 3類  C類

第 11 図 石器器種分類表 (1)



第12図 石器器種分類表(2)

分類	刃部形状	刃部タイプ	薙材	二次加工部位	再分類	五丁歩道筋の分類
A類	中型急角度連續剥離	直彎状	縱長削片	片側縫・両側縫	A 1類	A類
	小型急角度連續剥離	外彎状	縱長削片	片側縫・両側縫	A 2類	B類
	小型急角度連續剥離	直彎状	縱長削片	端部(先端)	A 3類	I類
B類	縦衝撃石器	外彎状	縱長・横長削片	片側縫・逆縫		C類
C類	挿入石器	内湾上	縱長・横長削片	片側縫・両側縫		E類
D類	横衝撃・枕形被わる薄片	縦長	横長削片	側縫と端部		J類

第15表 不定形石器分類表

## C 各 説

## 1) 概 要

今回抽出した掲載石器・石製品の内訳は、石鏃 14 点・石錐 1 点・石匙 3 点・板状石器 12 点・打製石斧 19 点・磨製石斧 7 点・石錘 10 点・磨石類 9 点・両極石器 6 点・不定形石器 19 点・砥石 4 点・石皿 3 点・石核 9 点・石棒 5 点である。石器の大半は客土中（一部含層）の出土だが、土坑やピットの覆土中に少數ではあるが剥片石器・礫石器が出土している。遺構内出土の掲載遺物は、12 点である。

当該期（縄文時代中期中葉 - 後期前葉）の石器組成の特徴は、打製石斧がやや多いこととその素材となる厚手の礫剥片が多くみられる。また、厚手の礫剥片を作り出す大型の石核も認められることから、打製石斧を大量生産していたことが想定される。所謂、用途別分類〔鈴木 1991〕の中の採取・加工具に含まれる打製石斧は、山間部および丘陵部を中心に分布する傾向を示しており〔鈴木 1996〕、清水上遺跡・清水上遺跡 II [高橋ほか 1990・鈴木 1996]、五丁歩遺跡 [高橋 1992]、笹山遺跡 [阿部ほか 1998] などは大量に出土する代表的な遺跡である。

## 2) 石 器

## 石 鏃 (図版 43・87-538-551)

538-540 は無茎の A1・2 類で遺構内から出土している (538・SK97, 539・SK123, 540・SK4)。形態については、城之腰遺跡 [國島ほか 1991] と対比した。538・539・541-545 は A1 類である。このタイプは、基部にやや深い抉り込みが認められる凹基無茎鏃で、城之腰遺跡 [國島前編] の石鏃 C I b・C II b 類に相当する。540・546-549 は A2 類である。540・546-548 は、城之腰遺跡 [國島前編] の石鏃 A I a, 549 は同 A I b に相当するもので、後期初頭から前葉にかけて量産される平基無茎式である。543 は基部の抉り込み部に僅かながらタールの付着が認められる。550・551 は数少ない B 類の有茎鏃である。538 の石材は、透明感のある黒曜石で、他の搬入石材と比べても剥片の出土が極少であることから製品として搬入した可能性も想定される。

## 石 锥 (図版 43・87-552)

石錐は 1 点のみで、P110 から出土している。厚みのある剥片素材で、つまみ部と錐部の境が不明瞭な棒状を呈している。二次加工は錐部の両側縁とつまみ部の片側縁に施され、特に錐部の加工は入念で、断面は菱形を呈している。

## 石 匙 (図版 43・87-553-555)

石匙は縦長剥片を素材としており、553 は基部の抉りが明瞭に認められるもので、刃部の二次加工調整は、片側縁には正面に、一方の側縁には裏面に施されている。554・555 は基部の抉りが不明瞭で、側縁部の調整痕は粗い二次加工が認められる程度である。

## 不定形石器 (図版 43・44・87・88-556-574)

不定形石器は 19 点を抽出した。ここに含まれるのは、「スクレイパー」・「二次加工のある剥片」・「使用痕や微細剥離が認められる剥片」である。遺構覆土中から出土したものは、557 (SK104)・561 (P33)・

564 (SI91-P8) の3点である。分類別にみると556・557・560は、A I類（五丁歩遺跡A類相当）である。558・559・562・563・565・567・568は、A II類（五丁歩遺跡B類相当）である。571は、A III類（五丁歩遺跡I類相当）である。561・564・569・570・572・574は、B類（五丁歩遺跡C1・C2類相当）で鋸歯縁状の刃部を形成する石器である。565は、C類（五丁歩遺跡E1・E2類相当）の抉入石器である。573は、D類（五丁歩遺跡J1・J2類相当）で微細剥離痕のある剝片である。

不定形石器を総体的にみると特徴的な点は、鋸歯縁状の刃部を有するものとその素材となる大型剝片が多量に出土した事があげられる。これは、時期的な特徴と近隣から石材を容易に保持できたという地域的な特徴を加味していると考えられる。

#### 板状石器（図版45・89-575-586）

板状石器は、平面形態により3つに大別した。分類別にみると、A類2点（575・576）・B類7点（577・579・581-585）・C類3点（578・580・586）である。遺構覆土中からは577の1点である。小型の扁平礫を素材としたものは10点（575・577・578・580-586）、剝片を素材としたものは2点（576・579）である。長径を幅とした場合、幅5-7cmのものが主体的である。厚さは素材に開わりなく10-16mmに大部分が収まる。使用痕が認められたのは10点（575-577-583-585-586）、認められないものは2点（576・584）である。使用痕は裏面に顕著に見られ、摩耗痕あるいは線条痕が認められる。また、側縁部にも摩耗痕が認められるのは7点（577・578・580・582-585）である。

#### 打製石斧（図版45-47・89-91-587-605）

打製石斧は、剝片素材のA・B類と扁平礫素材のC類に大別し、それぞれを形態的特徴で細分した。剝片素材のA類（擦形）は8点（587・599・600・601-605）、B類（短圓形）は7点（588・589・592・594・596-598）、扁平礫素材のC類（短圓形）は4点（590・591・593・595）である。刃部に見られる顕著な使用痕は、摩滅痕およびつぶれ状況が素材別、形態別に開わらず大半のもの（587-591・593-595・598・599・601-605）に認められる。特に、C類の両側縁にみられるものは、成形時の敲打調整が入念になされており、刃部の使用面は敲石の使用痕に酷似し平坦になっている。

#### 磨製石斧（図版47・91-606-612）

磨製石斧は器面全体に念入りな研磨が施され、刃部が形成されるものを抽出した。形の大きさにより3つに分類した。大形のA類は2点だが、612は特に大型のもので、ほぼ全面に研磨を施すが、部分的に敲打調整が認められる。刃部には打撃による潰れや剥離痕が認められる。また、横断面がやや丸みを帯びるが、両側縁が平坦な定角式磨製石斧であり、縄文時代中期中葉以降のものに酷似する。中形のB類は4点で、608-610は均一に肉厚だが、607は幅と厚さが小型のC類（606）に酷似する。609は入念な研磨成形を施しているが、端部・側面・刃部に打撃による成形痕が残る。小型のC類1点とB類の609は形態的特徴が類似する事から、使用目的が同じ製品と考えられる。つまり、櫛（ノミ）の様な機能が想定される。

刃部に使用痕が認められるものは、A類の612、B類の608・610である。いずれも顕著な摩滅痕が認められる。

## 石 錘 (国版 47・48・91・92-613-622)

石錘は完形品 10 点を抽出し掲載した。素材は、比較的大きさにまとまりのある扁平礫 (4.5-7cm 大) で、長径の軸に沿って両端に打撃剥離を行い明瞭な抉り (糸掛け部) を作出すものである (613-622)。620 は、剥離によって抉りを作出した後に一面に刻線を施している。

## 磨石類 (国版 48・49・92・93-623-631)

磨石類は、自然の円礫等を用いたものが多いため形態分類は行わず、痕跡の組み合わせで 4 つに分類した。今回抽出した磨石類は、凹痕・敲打痕・磨痕の使用痕跡が認められた。

A 類の 627 は、肉厚の扁平礫を素材としているが、正面・裏面・両側面・両端面に平坦な磨痕が認められ長方形を呈している。631 は、断面が三角形 (三角柱状) を呈した自然礫を素材としたもので、その稜に使用面を持つもので、平坦な磨痕が認められる。岩原 1 遺跡 [北村ほか 1990] では「特殊磨石」としたもので、縄文時代早期後葉の条痕文系土器期に属するものである。つまり本類も該期に属するものであろう。B 類の 624・626・629 は、扁平礫を素材としたもので、いずれも正・裏面の中央部に複数の凹痕が認められる。C 類の 623・625 は扁平礫、628 は棒状の礫を素材としたものである。また、628 は両端に敲打痕と剥離が認められる。D 類の 630 は、磨石類には数少ない石材で、頁岩の扁平礫の一端に摩滅痕が認められる。

## 砥 石 (国版 49・93-632-635)

砥石は、平坦な砥面を持つ比較的大型の破片資料である。632 は SK146 から出土した。632-634 は扁平あるいは板状の形状の薄型砥石で、砥面の浅い凹痕は幅広で、正面・裏面に認められる。635 は、砥面が 4 面に認められ断面が四角形を呈している。特に 634・635 は、部分的に浅い溝状の砥面が数条認められるが、このような使用痕跡から見て、石斧等の研磨が想定される。

## 石 盆 (国版 49・93-636-638)

石盆は、側縁あるいは周縁を縁取り加工したものの破片資料である。636 は、裏面に脚と思われる丸い突起が 2 か所認められ、後期の所産と考えられる。使用面の形状は、636 はやや緩くくぼむもので、637・638 はほぼ平坦である。

## 両極石器 (国版 49・50・93・94-639-644)

両極石器は、小剥片・礫剥片・扁平礫を素材とし、2 個 1 対の両極剥離痕を持つものである。639-641 はいわゆるビエス・エスキューに含まれるものである。642-644 は礫剥片・扁平礫の両端に剥離痕が認められるものである。644 は、3 個の剥離痕が認められる。これらは両端に剥離痕を持つ石錘に類似する部分があるが、両者の違いは両極の剥離調整の形状にみられると、考えられる。つまり石錘は、意図的な抉り (V 字状ないし U 字状) を両端に認められるが本類については、それとは異にした成形過程が想定される。

### 石核（図版 51・52・95-650-658）

石核は、小型石核 6 点と大型石核 3 点である。小型石核の 650・652・654・655 は、剥離作業段階の残核と考えられるもので、扁平な形状を呈している。655 は、稜線上の交互剥離と考えられる。651・653 は再調整段階の打面調整が残るものと考えられ、打面と思われる平坦面は未調整段階である。これらの石核は、石錐・石錐・スクレイバー類の素材となりえた剥片を剥離するものと推測される。大型石核の 656-658 は、礫皮を大まかに剥離し、平坦面を打面調整したもの（657）と、稜線上で交互剥離作業が行われたもの（656・658）と考えられる。

### 3) 石製品

#### 石棒（図版 50・94-645-649）

石棒は、棒状に仕上げられたものでいずれも一端あるいは両端が欠損している。645-647 は大型石棒で断面が円形のものである。最終成形は丁寧な研磨が施されているが、部分的に敲打による成形痕を残している。648 は中型の石棒で一端が欠損している。ほぼ中央部位の断面は円形だが先端部位は扁平の形状を呈している。全体的に敲打成形で仕上げている。649 は小型の石棒で片端部に小規模な剥離が認められるが、ほぼ完形品である。全体的に粗い研磨仕上げを施しているが、敲打痕を多く残している。

### 4) 小結

本調査で出土した石器及び石製品は、過去の水田造成により、主体部の包含層が消滅した実情をふまえると、当該期の本来の包含層乃至遺構内覆土の一部は客土中で攪拌されていたことが想定される。しかし、客土直下で検出された、縄文時代中期後半～後期前半の堅穴建物・掘立柱建物・袋状土坑等の出土遺物との対比の中では、各遺構の時代幅に含まれる所産と考えられる。ただ、本遺跡の石器群は、客土とともに流動的な動きがあるという制約があり、組成の様相・特徴を的確に捉えられるものではない。したがって今回は本石器群を総体的見知から断片的にまとめてみたい。石器組成は、出土点数が多い主要な石器を順に並べると、打製石斧 104 点、石皿・砥石類 65 点、磨石類 51 点である。つまり、打製石斧・磨石類・石皿・砥石類が石器組成の主体を占めている。次いで不定形石器 30 点、板状石器 26 点、磨製石斧 20 点、石錐 18 点、石錐 13 点となる。特定の石器では、石匙・石錐の数は極端に少ない。また、各石器の形状組成から見られる特徴は、石錐は後期前葉に相当するものがまとまっており、打製石斧は中期前葉から中葉の量産時期に含まれるものや後期前葉～後葉のものが主体をなしている。なお、石皿・砥石類の破片が多量に出土しているが、1 個体を意図的に破碎したと思われる接合資料は認められなかった。

先に、清水上遺跡 II [鈴木 1996] で縄文時代中期の石器組成分析が行われ、3 類型の組成と 4 ブロックの地域圈が見出されている。後に、『新潟県の考古学』の論稿で「早期から晩期の石器組成」[鈴木 1999] が報告され、中期以前・以後の石器組成の変遷が見出されて来た。そこで、本遺跡の石器組成を前述の組成類型や地域性分類基準に準じて見てみる。遺跡の立地から見ると本遺跡は魚野川と破間川の合流点寄りの上流にある。地域圈から見ると、ブロック 3 の中央部山間地域および丘陵部である。前記の流域からさらに信濃川流域にいたる中央部山間地域でも、多少時期差（中期～後期）がある遺跡も含めると、打製石斧を量産した地点が多い。魚野川流域の状況で見る主な遺跡は、本遺跡を含め、清水上遺跡 [高橋ほか 1990]・五丁歩遺跡 [高橋 1992]・清水上遺跡 II [鈴木 1996]・城之腰遺跡 [田中 1991] 等がある。

清水上遺跡・五丁歩遺跡は中期前半期、本遺跡・城之腰遺跡は中期後半期～後期の時期幅に含まれ、前者の組成類型は「採取・加工具（打製・磨製石斧、板状石器など）> 調理具（磨石類、石皿など）> 狩獵・漁獵具（石鏃、石錐など）型」をとり、後者は、「調理具 > 採取・加工具 > 狩獵・漁獵具型をとる」とある〔鈴木 1999〕。このことから、本遺跡の打製石斧の出土量から中期前葉～中葉の時期幅が想定され、石鏃の形状組成から後期前葉の時期幅に含まれると考えられる。また、打製石斧の A 類（撥形）に見られる諸特徴に類似した資料が、最近の論稿の中で紹介されている。吉川耕太郎氏が東北地方北部（青森県・秋田県・岩手県）を中心とした打製石斧について、「有肩打製石器」と呼称したもの〔吉川 2012〕である。形態的特徴は「基部と肩部が明瞭に区別される平面形を持つ」とし、素材は「大型分厚な分割剝片もしくは石核素材のもの、板状剝片素材のもの、扁平長狭もしくは棒状のもの」に細分されている。これらの時期幅は、前期後半から中期にかけて出現し始め晩期に盛行するとある。

また、用途についても「晩期における焼畑農耕を背景とした“手持ちの軽作業具（除草具）」を示唆している。この特定的な打製石斧の製作技術面や用途についての類似点が、今後の比較検討の中で一致する面が明確になると、中部圏から東北地方への物流と生業文化の移入がより鮮明に見出されることになる。

# 第VI章 自然科学分析

## 1 赤色塗彩土器の赤色顔料

### A 試料と分析の目的

日本列島で使用されていた旧石器時代から古墳時代までの赤色顔料は、現在大きく分けて2種類あることが自然科学分析によって確認されている。一つは硫化水銀（HgS）を主成分とする「水銀朱」、もう一つは酸化第二鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）を主成分とするベンガラである。本報告では、町上遺跡から出土した赤色塗彩土器12点の内面・外面に付着した赤色顔料計23点を分析対象試料とし（第6表）、赤色顔料の種類とその原料を把握することを目的として分析を行った。

### B 観察及び分析の方法

試料の観察・分析にあたっては、東北芸術工科大学文化財保存修復センターの分析走査型電子顕微鏡を借用させていただき、米村祥央氏からご指導いただいた。

試料の採取・調整 赤色塗彩土器の内外面から、メスを用いて赤色顔料を削り取り、実体顕微鏡下で混入した土砂を取り除いた。これをスライドグラスに貼付したカーボンテープに乗せ観察・分析試料とした。

走査型電子顕微鏡による試料の粒子の観察 試料の粒子の形状を観察し、赤色顔料の種類とその原料を把握するため、走査型電子顕微鏡（SEM）による二次電子像の観察を行った。観察には、日本電子株式会社製分析走査型電子顕微鏡 JSM-6390LA を加速電圧 15kV の条件下で使用し、1,000 倍で観察した。

エネルギー分散型 X 線分析装置による存在元素の確認 試料が「水銀朱」か「ベンガラ」かを判別する指標となる、水銀（Hg）と鉄（Fe）の存在を確認するため、前述の SEM にエネルギー分散型 X 線分析装置を連動させ、加速電圧 15kV の条件下で存在元素の確認を行った。

### C 結果と考察

対象試料 23 点の SEM による粒子の観察と X 線分析の結果を、第6表と第13~19図にまとめた。

今回分析した赤色顔料 23 点は、全て酸化鉄系赤色顔料のベンガラであった。また町上遺跡出土のベンガラは、粒子の形状と検出元素から、パイプ状粒子を含むベンガラと、パイプ状粒子を含まないベンガラの2種類に分類でき、試料 20 を除いて全て前者であることが確認された。

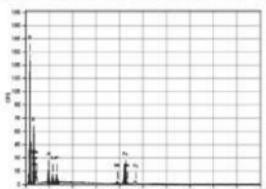
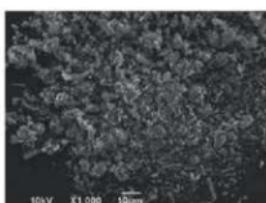
試料 1-19・21-23 のベンガラは、直径約 1.5 μm、長さ約 -25 μm のパイプ状粒子が塊、あるいは分散した状態で存在し、検出元素に Fe・Al・Si・P などが認められる（第13-16・18・19図、第6表）。一般に「パイプ状ベンガラ」と呼ばれ、ベンガラの中でも鉄分の含有率が高く、質が良いと考えられている。パイプ状粒子は、鉄細菌が水中に溶存している鉄分を体内に蓄積して生成する生体鉱物の一種である[岡田 1997]。鉄細菌は、崖端の湧水部や地下水・伏流水中に棲息し、赤褐色の細胞状に浮遊したり、沈殿物を生じていることがある。縄文人は、これらを集めて乾燥・加熱・粉碎し、赤色顔料に利用していたものと推測される。

一方、試料 20 のベンガラは、パイプ状粒子を含まず、表面に凹凸のあるブロック状を呈しており、検出元素に Fe, Al, Si が認められる（第 17 図、第 6 表）。現時点では、原料の特定は難しい。

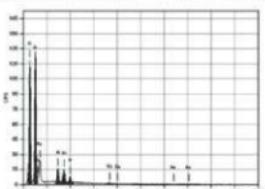
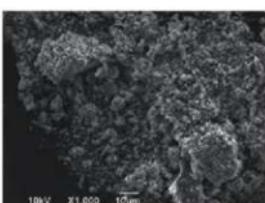
今回分析対象とした試料は、縄文時代中期後葉～最終末、および晩期中葉に所属するが（第 6 表）、赤色顔料の種類・粒子の形状・検出元素に明確な時期差は認められなかった。

試料 No.	報告 No.	外層 内面	土器 分類	所属時期	出土位置			精度・分析		
					遺 墓	グリッド	層 位	SEMの結果		分析結果
								粒子の形態	検出元素	
1	311	外層	9群	中期最終末	SK105			パイプ状	Al, Fe, P, Si, Mn	ベンガラ（パイプ）
2	313	内面	9群	中期最終末	SK105			パイプ状	Fe, Al, Si, P, Ca	ベンガラ（パイプ）
3	382	外層	9群	中期最終末	2M・3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
4	382	内面	9群	中期最終末	2M・3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
5	387	外層	9群	中期最終末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
6	387	内面	9群	中期最終末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
7	386	外層	9群	中期最終末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
8	386	内面	9群	中期最終末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
9	384	外層	9群	中期最終末	40	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
10	384	内面	9群	中期最終末	40	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
11	414	外層	22群 b	中期後葉～末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
12	414	内面	22群 b	中期後葉～末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
13	389	外層	9群	中期最終末	40	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
14	389	内面	9群	中期最終末	40	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
15	390	外層	9群	中期最終末	50	客土		パイプ状	Fe, Si, Al, P	ベンガラ（パイプ）
16	385	外層	9群	中期最終末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, P, Si	ベンガラ（パイプ）
17	385	内面	9群	中期最終末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
18	342	外層	22群 b	中期後葉～末	2M	泥上層		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
19	342	内面	22群 b	中期後葉～末	2M	泥上層		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
20	413	外層	22群 b	中期後葉～末	3M	客土		ブロック状	Fe, Al, Si	ベンガラ（ブロック状）
21	413	内面	22群 b	中期後葉～末	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
22	518	外層	17群	晚期中葉	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）
23	518	内面	17群	晚期中葉	3M	客土		パイプ状	Fe, Al, Si, P	ベンガラ（パイプ）

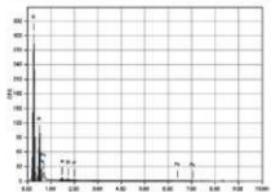
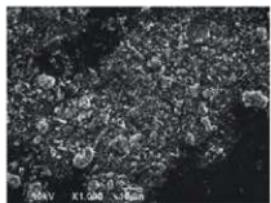
第 6 表 町上遺跡出土赤色塗彩土器の赤色顔料分析結果



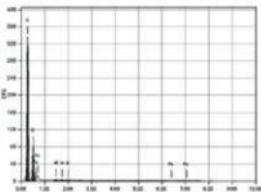
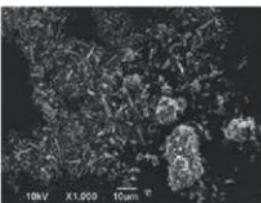
第 13 図 試料 No.1 二次電子線像（上）と X 線チャート（下）



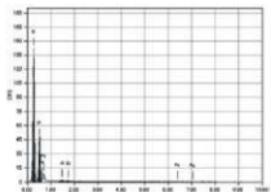
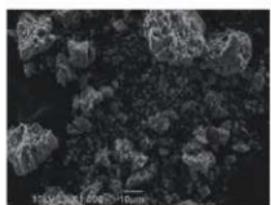
第 14 図 試料 No.3 二次電子線像（上）と X 線チャート（下）



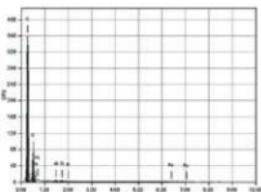
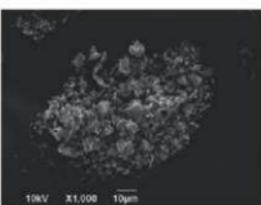
第15図 試料No.18 二次電子線像（上）と  
X線チャート（下）



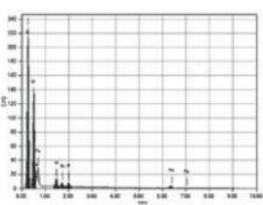
第16図 試料No.19 二次電子線像(上)と  
X線チャート(下)



第17図 試料No.20 二次電子線像（上）と  
X線チャート（下）



第18図 試料No.21 二次電子線像(上)とX線チャート(下)



第19図 試料No.22 二次電子線像（左）とX線チャート（右）

## 2 動物遺存体

国立文化財機構 奈良文化財研究所 山崎 健

### A はじめに

町上遺跡では、縄文時代中期末～後期前葉の土坑やピットから焼骨片が多量に出土した。町上遺跡から出土した動物遺存体は、火を受けたために残りやすくなったものと考えられ、貝塚の分布密度が低く出土事例の少ない日本海側における生業活動を検討する上で貴重な資料といえる。本稿では、これらの動物遺存体の分析結果を報告し、町上遺跡における動物資源利用を検討する。

### B 分析資料

発掘調査の段階で、遺構埋土に白色の微細な骨片が含まれていることを確認した。これらの骨片類を回収するため、発掘調査時に現地で遺構ごとに土壤を探取し、整理事務所に持ち帰り 1mm 目までのフライによる水洗選別作業を実施した。

分析資料は微細な骨片であったため、同定に有効な部位を残した資料だけでなく、1mm 以上の資料をすべて分析対象とした。その結果、合計 113,594 点 (544.84g) の動物遺存体を抽出した。出土した動物遺存体は、熱を受けた骨に認められる亀裂や収縮が認められ、白色や黒色に変色していた。種や部位が特定された資料 (12,219 点 84.91g) について、骨の色調をみると、破片数算定・質量算定とともに 99.9% が白色を呈していた。骨の外表面だけでなく、破断面や内表面 (骨頭腔側) も同様に変色していることから、割れる前に火を受けただけではなく、割れた後にも火を受けたと考えられる。

骨が焼けた場合には、貝塚・洞穴・岩陰遺跡・低湿地遺跡という特殊な堆積環境だけでなくとも、動物遺存体が残ることがある。骨は、主に無機物であるリン酸カルシウムと有機物であるタンパク質から構成されており、焼けるとタンパク質は燃焼され、無機質であるリン酸カルシウムのみが残存する。また、灰とともに焼骨が埋没した場合には、酸性土壤が中和されて、骨の残存しやすい堆積環境に変化した可能性が考えられる。

焼骨は 3 つの遺構埋土から検出された。SK97 が 113,428 点 (515.15g) と最も多く、P108 から 123 点 (27.83g)、SK20 から 43 点 (0.27g) が出土した。これらの遺構では焼上面や灰層が検出されていないため、出土した動物遺存体はこの場で火を受けた訳ではなく、焼骨が土坑やピットに投棄されたものと考えられる。

### C 同定・記載の方法

同定は現生骨格標本との比較によりおこない、比較標本には奈良文化財研究所環境考古学研究室が所蔵する標本 (NAC 標本群) を用いた。同定や計数は肉眼および実体顕微鏡下でおこなった。同定をおこなった資料は番号を登録し、同定破片数と質量を記録した。出土した動物遺存体は焼けて細かな破片となっており、最小個体数で評価することができないため、破片数とともに質量で算定した。質量は電子天秤を用いて、小数点第 2 位まで計測したものである。

## D 分類群の記載

貝類、魚類、両生類、鳥類、哺乳類を同定した。ほとんどの資料が細片であるため、種同定は全体的に困難で同定可能な資料はわずかであった。

### 1) 貝類

貝類の可能性がある資料（「貝類？」と記載）が、SK97 から 1 点 (0.03g) 出土した。

### 2) 魚類

出土した魚類は 76,702 点 (162.00g) で、このうち骨格部位が特定された資料は 12,353 点 (42.38g) であった。同定した分類群はサケ科のみであった。

#### サケ科 *Salmonidae* sp.

椎骨片 11,659 点 (38.35g)、歯 470 点 (3.12g)、頸骨 2 点 (0.17g) の計 12,131 点 (41.64g) が出土した。計測可能な椎骨はほとんど出土していないが、小型～大型の椎骨片が含まれている。現在の新潟県では、サケの他に、河川の上流～中流に生息するイワナ（アメマス）、中流に生息するヤマメ（サクラマス）といったサケ科魚類が分布する〔本間<sup>1983</sup>〕。他の魚種と比較してサケ科が卓越して出土していることから、資源量・漁獲量の多いサケが主体であると推測される。サケは、産卵のために毎年決まった時期に河川を群れで遡上するため、時間的にも空間的にも獲得が予測可能な資源といえる。

町上遺跡は、信濃川の支流である魚野川右岸に位置する。現在の新潟県内をみると、三面川のような中規模の川は、河口から 1～2km ほど上流の場所からサケの産卵場となっているのに対し、下流の発達した信濃川では、河口から 100km 以上も上流の魚野川が主な産卵場となっている〔本間<sup>前掲</sup>〕。したがって、町上遺跡周辺においてもサケの産卵場が存在し、短期間のうちに集中的な漁撈活動がおこなわれたものと考えられる。

### 3) 両生類

#### カエル目 *Aura* spp.

SK97 から計 2 点 (0.01g) が出土し、脛骨や四肢骨片を同定した。

### 4) 鳥類

SK97 から種不明の脛足根骨や可能性のある資料（「鳥類？」と記載）が計 6 点 (0.27g) 出土した。

### 5) 哺乳類

出土した哺乳類は 6,486 点 (309.02g) で、このうち骨格部位が特定された資料は 65 点 (45.51g) であった。同定された分類群はイノシシとイヌであった。

#### イノシシ *Sus scrofa*

中手骨あるいは中足骨 4 点 (2.35g)、手根骨 3 点 (2.49g)、腰椎 2 点 (6.33g)、踵骨 2 点 (5.17g)、中手骨 1 点 (0.55g)、足根骨 1 点 (0.77g)、基節骨 1 点 (0.03g)、中節骨 1 点 (0.22g)、末節骨 1 点 (0.18g)、の計 16 点 (18.09g) が出土した。



現在、新潟県にはイノシシが分布していない〔阿部等 2008〕。イノシシは雪に弱く、積雪深30cm以上あると分布が制限されると言われている〔朝日 1975、常田・丸山 1980〕。とくに、町上遺跡の所在する魚沼市は「豪雪地帯」に指定され、植物珪酸体分析によって約1万年前以降は現在の積雪分布と近い状況であったと考えられている〔杉山・早田 1997〕。すなわち、町上遺跡周辺は、縄文時代中期～後期においても多量の積雪があったと推測される。したがって、遺跡周辺では獲得できない「非現地性資源」であった可能性を検討する必要がある。

第20図は、新潟県域における縄文時代中期～後期のイノシシが出土した遺跡である。積雪量が相対的に少ない海岸部や平野部だけでなく、山間部の遺跡からもイノシシが出土することが確認できる。これから、山間部から出土したイノシシすべてが、積雪量の少ない地域から持ち込まれた「非現地性資源」と解釈するよりは、積雪量の多い地域にもイノシシが生息することがあったと解釈するほうが妥当であろう。

#### イヌ *Canis familiaris*

SK97から、脛骨の近位端1点(0.73g)と遠位端1点(1.72g)の計2点(2.45g)が出土した。

#### 6) 骨 角 器

SK97から、穿孔された骨角器の破片が1点(0.24g)出土した。穿孔は片面からなされている(第21図)。また、骨角器の可能性がある資料がSK20から1点(0.16g)、SK95から2点(0.12g)の計3点(0.28g)出土した。緻密骨のみで、棒状を呈している。



第21図 穿孔された骨角器

## E 遺構ごとの検討

### 1) SK97

SK97からは、合計 113,428 点 (515.15g) と非常に多くの焼骨片が出土した。歸屬時期は、縄文時代後期前葉（南三十櫛場式期）を下限とする。貝類、魚類、両生類、鳥類、哺乳類が確認され、とくに魚類が卓越していた。SK97の埋土には燒土粒や炭化物が含まれているが、燒土や灰層が堆積した状況ではないため、土坑内で火を焚いたではなく、焼骨が土坑やピットに投棄されたものと考えられる。

筆者は、新潟県村上市の長割遺跡（後期前葉）において、炉跡、袋状土坑、ピット（柱穴）、遺物包含層から出土した焼骨を比較して、焼骨の生成要因を検討したことがある〔山崎・納屋内 2011〕。その結果、炉跡や袋状土坑では魚類が多く、遺物包含層では哺乳類が多く、ピット（柱穴）は中間的な様相を示していた。炉跡は、調理などを目的として一定の場所で繰り返して火を焚いた跡である。そのため、炉跡から検出された焼骨は、調理中の混入や食料残滓の焼却処理によるものと考えられる。そして、その炉跡資料と同じ傾向を示すことから、袋状土坑から検出された焼骨は、土坑の廃絶にして炉内の焼土や灰を投棄したものと推測された。

SK97も魚類が卓越していたため、炉内の焼土や灰が投棄されたことが示唆される。とくにサケ科魚類が集中して出土していることから、季節的な廃棄単位を反映している可能性が高い。

### 2) P108

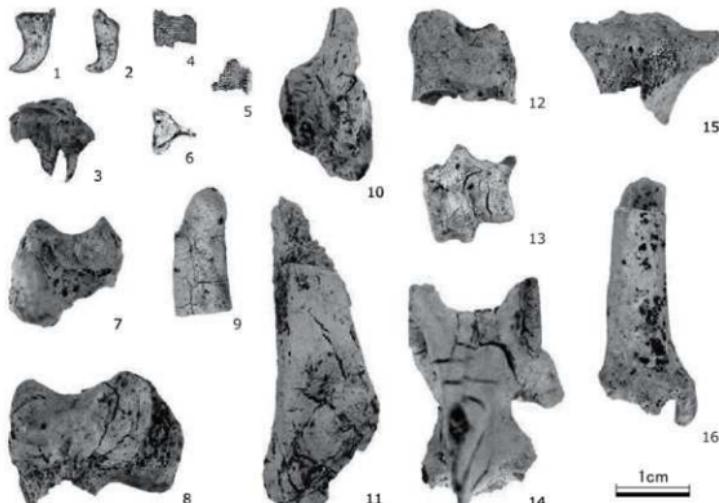
P108からは、合計 123 点 (27.83g) の焼骨片が出土した。歸属時期は、縄文時代中期中葉～後葉（大木 9-10 式期）である。哺乳類以外の骨片は認められず、種が特定された資料はイノシシの腰椎破片 2 点であった。種が特定できない資料でも、大型哺乳類の腰椎椎体や棘突起、椎体板の破片が出土しており、同じイノシシ腰椎であった可能性が高い。以上の点から、P108には、焼けたイノシシの腰椎 2 個が投棄されたものと考えられる。

遺構	種名	部位・結合状態		左右	破片数	質量 (g)
		椎体	椎弓			
P108	イノシシ	腰椎 椎体+椎弓裂隙部		左	1	4.92
		腰椎 乳頭部断続部		左	1	1.41
SK20	哺乳類不明 (大型)	腰椎 椎体		左	2	12.91
		椎体 椎弓板		左	2	0.57
SK20	サケ科	腰椎		左	1	1.41
		腰椎		左	2	0.01 未満
SK97	哺乳類不明	不明【骨肉腫】		左	1	0.16
	鳥類?			左	1	0.03
サケ科	頭骨			左	2	0.01
	肉			左	479	3.12
	骨			左	1165	38.35
魚類不明	頭骨 椎体			右	1	0.12
	尾端			右	4	0.01
魚類不明	頭骨			右	5	0.02
	尾端			右	1	0.01 未満
カエル科	頭骨			右	2	0.01
	四肢骨			右	1	0.01
鳥類不明	前足椎骨 連合端 (融合)			左	1	0.01 未満
	鳥類?			左	5	0.27
イヌ	前足 沖合端 (融合)			左	1	0.73
	前足 連合端 (融合)			左	1	1.72
サル科	頭骨			右	3	2.49
	手骨 近位端 (融合)			右	1	0.05
イノシシ	頭骨 鹿突起			左	2	0.17
	足骨			左	3	0.77
サル科	中手骨 中足骨 連合端 (未融合骨端部)			右	4	2.35
	基節骨 近位端 (未融合骨端部)			右	1	0.03
サル科	中節骨 (融合)			右	1	0.22
	末端骨 (融合)			右	1	0.18
サル科	大顎骨 近位端 (未融合)			左	1	0.76
	基節骨 中手骨 連合端 (融合)			左	2	0.99
哺乳類不明 (大型)	当骨 近位端 (未融合骨端部)			左	3	1.29
	当骨 近位端 (未融合骨端部)			左	1	0.25
哺乳類不明 (中型)	頭骨			左	1	0.47
	上顎骨 近位端 (未融合骨端部)			左	1	0.68
哺乳類不明 (中型)	中手骨 中足骨 連合端 (融合)			左	2	0.06
	當骨 近位端 (融合)			左	1	0.01 未満
哺乳類不明 (中・小型)	腰椎			左	11	1.69
	肋骨			左	6	0.70
哺乳類不明 (中・小型)	頭骨 (融合)			左	1	0.99
	腰椎			左	2	0.26
哺乳類不明	腰椎 椎体板			左	8	1.11
	肋骨			左	1	0.01
不規	【仰孔のある骨端部】			左	1	0.24
	不明【骨肉腫】			左	2	0.12
	骨肉腫			左	1	0.01

第7表 動物遺存体の同定結果

## 3) SK20

SK20 からは合計 43 点 (0.27g) の焼骨片が出土し、サケ科の椎骨片と哺乳類の骨片が確認された。帰属時期は、縄文時代中期末～後期初頭である。



1-5: サケ科(1: 頭, 2: 齒, 3: 腹骨, 4: 椎骨, 5: 椎骨), 6: カエル科(脛骨), 7-14: イノシシ(7: 手根骨, 8: 手根骨, 9: 中手骨 近位端, 10: 跖骨, 11: 跖骨, 12: 足根骨, 13: 中足骨 遠位端, 14: 腰椎), 15・16: イヌ(15: 腹骨 近位端, 16: 腹骨 遠位端)

第22図 動物遺存体

## 引用・参考文献（第VI章）

- 朝日 稔 1975 「イノシシおよびシカの捕獲と植生区分」『生物科学』27-3 日本生物科学者協会編 岩波書店  
 阿部 永光 2008 『日本の哺乳類（改訂第2版）』東海大学出版会  
 岡田文男 1997 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表会』日本文化財科学会  
 杉山真二・早田 勉 1997 「植物珪酸体分析による古環境推定—ササ類の植生変遷と積雪量の変動—」『日本第四紀学会講演要旨集』27 日本第四紀学会  
 常田邦彦・丸山直樹 1980 「イノシシの地理的分布とその要因」『第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（哺乳類）全国版（その2）』環境省  
 本間義治監修 1983 『新潟県陸水動物図鑑』新潟日報事業社編 新潟日報事業社  
 山崎 健・納屋内高史 2011 「焼獣骨と焼人骨」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第224集 長割遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 第VII章 まとめ

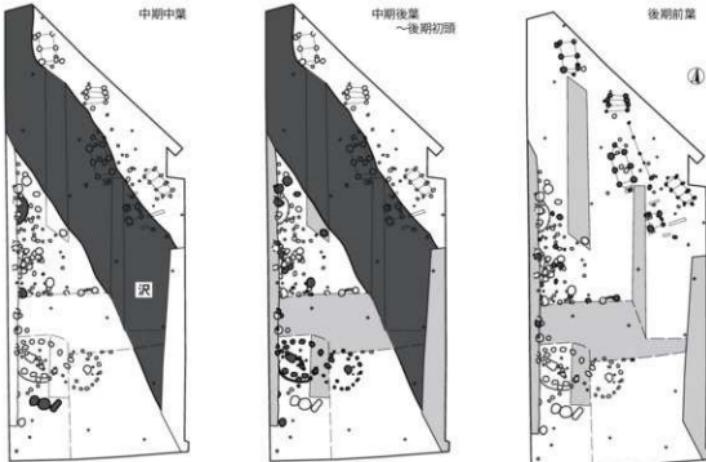
### 1 遺構の変遷

主に出土遺物から推定した各遺構の年代を基に遺構配置の変遷を見ていく（第23図）。

画期は①中期中葉、②中期後葉～後期初頭、③後期前葉とする。各期に対応する土器型式や類型などは第V章の第3表に示した。なお、出土土器の時期が特定できない、若しくは出土土器がない遺構については考察から除外した。

①縄文時代中期中葉 沢は半埋没状態で、遺構群が沢の左岸に展開する。竪穴建物SI91はベッド状遺構が付帯する構造である可能性が高い。ピットや土坑が散見され、概して遺構密度は低いものの、グリッド3・4Rでは袋状土坑(SK43・44)や建物の炉の可能性がある長方形を呈する土坑(SK10)が集中して検出された。出土した土器は大木8a式・8b式段階に時期のものが多い。集落の中心は調査区の西側に在るものと考えられる。

②縄文時代中期後葉～後期初頭 沢は浅くなりつつあるものの、①期に引き続き半埋没状態である。遺構群は①期と同様、沢の左岸に展開する。遺構密度は①期よりも高い。竪穴建物は3軒検出され、SI46では石組炉を作り、竪穴建物の周辺では袋状土坑を含む大型の土坑やピットが展開する。ピットの中には直径が80cmを超える大型で柱痕や根固め石が確認出来るものもあり、付近に未認定の建物が存在する可能性もある。また、グリッド30では深鉢が逆位に据えられて出土した遺構(SK95)が検出されていることから、付近に墓域が展開していた可能性も指摘できる。



第23図 集落の変遷

③繩文時代後期前葉 沢はほぼ完全に埋没している。該期に至り、沢の右岸地区の開発が始まる。沢の右岸では掘立柱建物群が展開する。沢の中心に近いSB3・5は南三十稻場式期の建物であり、沢の中心から遠く、地盤の安定している場所に立地するSB1・2・4は三十稻場式期に位置付けられることから、沢の埋没と共に沢の内側へ開発が及んでいく過程を読み取る事が出来る。沢の左岸には、ピットや土坑が展開する。分布域は中期と重なり、遺構同士の切り合いが著しい。ピットには柱痕を有するものもあることから、沢の左岸にも未認定の建物が存在していた可能性も否定できない。

④その後 繩文時代後期中葉以降の遺物は、晩期中葉の土器が1点と近世末期の陶磁器が数点確認出来るのみである。このことから、縄文時代中期中葉から營まれた町上遺跡は後期前葉に終焉を迎え、その後、昭和40年代の国営圃場整備事業により大幅な土地改変が行われるまでの間は、積極的な土地利用がなされていないといえる。

## 2 繩文土器

主要な遺構毎に出土土器の系統別組み合わせを見ていく（第8表）。

①中期中葉 SI91・SK43・44 では大木 8b 式と柄倉式が共存している。地文に撫糸文を有する土器はすでに出現しているものの、条痕文を有する土器は出現していない。典型的な柄倉式は少なく、綾杉文系土器や大木式の系譜を引く 8b 式新阶段頃の土器が多い。

②中期後葉～後期初頭 SK45・78・94・219で見られるように、大本9式と加曾利EⅢ・Ⅳ式、沖

第8表 主要遺構出土土器の系統別一覧

ノ原式、加飾隆帯文土器が共伴し、該期の大まかな組み合わせが分かる。SI27に伴うと考えられるSK20では、蓋がやや時期が下る可能性を残すものの、大木10式と加曾利E IV式、沖ノ原式が共伴しており、該期後半の組み合わせが分かる。加曾利E IV式の出土傾向はSK106・139にみられるように後期の称名寺式や三十稻場式と伴う特徴があり、該期の後半以降に出現する。該期では魚沼地方を中心に分布する沖ノ原式や加飾隆帯文土器が多い。大木式系統は9a式が多く見られるものの、9b式~10式の出土は少ない。加曾利E式は定量出土している。

③後期前葉 SK139で見られるように、前半では称名寺式と三十稻場式が共伴している。これらは未だ中期末~後期初頭に中心を持つ土器型式の系譜を引く土器と共に伴する例が多い。該期の後半では沈線文系土器が卓越する。掘立柱建物(SB1-5)では別時期の遺物の混入は比較的少なく、該期の良好な資料といえる。該期では蓋付きの土器が急増する。前半では称名寺式が少なく、在地系の三十稻場式が圧倒的に多い。後半では必ずしも系統を明瞭に分別できない土器が多いが、在地系の南三十稻場式も定量見られることから、前半に引き続き在地系の影響は強いものと考えられる。

### 3 石 器

町上遺跡から総数1,751点の石器が出土した。その所属時期は、遺構出土が少なく明確ではないが、土器型式を当てはめる中期中葉の大木8a式から柄倉式の頃より、活動が活発になる。そして後期前葉の称名寺式、三十稻場式に統く在地系の南三十稻場式期に終焉を迎える。これらから、石器も縄文時代中期中葉から後期前葉に収まるものと考えられる。なかでも中期末葉から後期前葉が中心的な時期になるものと考えられる。

石器類のうち、礫類156点、礫剥片1,030点、剥片類187点の合計1,373点を除いた、石器378点の器種別の比較をしてみた。採取・加工具の打製石斧104点と板状石器26点の合計130点で石器の約34%、調理具と見られる磨石類51点と砥石・石皿65点の合計116点で石器の約31%を占め、狩猟・漁獵具は8%である。採取・加工具>調理具>狩猟・漁獵具の順になり、清水上遺跡II等をまとめた鈴木の分析〔鈴木1999〕に対比すると、採取・加工具が石器のなかで最多を占める、清水上遺跡・五丁歩遺跡の縄文時代中期前半期の類例に近い。ただ、調理具も採取・加工具に較べやや少ない程度であり、さらに石礫は後期の特徴を備えていることから、調理具が採取・加工具よりも多い城之腰遺跡（中期後半から後期前半）例に近い組成への変化を示しているとみられる。

### 4 総 括

発掘調査によって縄文時代中期中葉から後期前葉にまたがる集落遺跡であることが明らかになった。遺跡は水無川扇状地の北端に近い、扇端部に位置する。この扇状地は南北約5.6km、東西約3.5km、面積約14.6km<sup>2</sup>の規模である。付近には扇端部から湧く伏流水を利用した養魚場もあることから、現在では見えない水場を想定することも可能である。

今回の発掘調査では、調査区の中央を斜めに南東の高い方から、北西の低い方へ沢が流れおり、縄文時代中期には埋没過程の最終段階であったと見られ、沢内からは遺構は検出できなかった。この沢の両岸に遺構を検出した。左岸（西側）は縄文時代中期中葉から後期初頭の竪穴建物や土坑等を検出した。初期

の遺構は竪穴建物 SI91 である。ベッド状遺構を持つ遺構と見られるが、遺構の大半が北西側の調査区外へ延びる。出土土器は在地では棚倉式、東北南部の土器型式では大木 8 から 8b 式期のものである。

沢左岸の利用は後期初頭まで続き、根固石を持つ柱穴や竪穴建物も 3 基確認した。

後期は沢の東側、右岸の利用が始まる。掘立柱建物を 5 棟検出した。柱持柱を持つ建物が 3 棟、それを持たない、あるいは不明な建物が 2 棟ある。柱穴内の出土遺物から後期前葉に属すると考えられる。掘立柱建物は、桁行 1 間、梁間 2 間から 3 間、柱間面積 5.3nf から 14nf まである。

土坑覆土（埋土）中に含まれる白色で微細な骨片を現地調査中に確認した。注意深く観察すると、魚の歯のようなものが多く見えたため、3か所（SK97、SK20、P108）の遺構の土壤を水洗して、残滓を乾燥後に選別した。その資料を奈良文化財研究所の山崎健氏に分析を依頼した（第VI章 2 動物遺存体）。分析の結果、貝類、魚類、両生類、鳥類、哺乳類が含まれており、特に魚類が卓越していた。魚類でも、サケ科のみで占められ、魚野川を産卵のために遡るサケを集中的に捕獲していたことを裏付けるものと見られる。現在でも、魚野川でサケ漁が行われ魚沼市の魚野探捕場では、2011 年度に 4,382 匹を捕獲している（第 II 章 C 魚野川水系の水産資源）。縄文時代と直接結びつけることは難しいが、サケの捕獲は重要な食料獲得の手段であったと思われる。

遺跡の広がりは、中期を主体とする遺構群は西側の水田に延びるものと考えられる。沢を挟んで後期の掘立柱建物群は、北の市道八色原 5 号線下から北西へ広がる可能性がある。市道から北の浦佐バイパス法線内は県教委に確認調査によって、遺跡が延びない事が判明している。

## 要 約

- 1 町上遺跡は、新潟県魚沼市大字大浦字八色原に所在する。遺跡は、越後三山（駒ヶ岳・中ノ岳・八海山）から発する水無川下流域に形成された扇状地に立地し、標高は 115.4~117.2m である。
- 2 調査は一般国道 17 号浦佐バイパスの建設に伴い、2011（平成 23）年度に実施した。調査面積は 2,578 m<sup>2</sup> である。
- 3 遺跡は、大部分が昭和 40 年代に始まる圃場整備により破壊されている。その影響は、包含層のほとんどと遺構の一部に及ぶ。
- 4 調査の結果、縄文時代中期中葉 - 後期前葉の集落と遺物を検出した。そのほか、縄文時代晚期中葉の土器と近世後半 - 近代の陶磁器類がわずかに出土した。
- 5 検出した遺構は、竪穴建物 4 軒、掘立柱建物 5 棟、土坑 33 基、ピット 100 基以上である。
- 6 集落は、中期中葉から後葉では竪穴建物を主体とするが、後期前葉では掘立柱建物へと変化する。また、中期では集落範囲が沢（幅 15~20m、深さ約 1.5m）により限定されているが、後期に入り沢が埋没すると旧沢の両岸に土地開発範囲が拡大する。
- 7 3 基の土坑やピットの覆土土壤中から微細な焼骨片を確認した。同定の結果、貝類・魚類・両生類・鳥類・哺乳類が含まれていることが判明した。特に魚類が卓越し、サケ科の比率が極めて高い。
- 8 出土した遺物は、縄文土器が浅箱 280 箱（約 1.55t）、石器類が浅箱 59 箱出土した。縄文土器の約 1.45t が二次移動された土層（客土）からの出土である。
- 9 縄文土器は、中期中葉から後期前葉が主体である。土器の系統は A: 関東系、B: 東北系、C: 越後在地系がある。A は阿玉台式・加曾利 E 式・称名寺式、B は大木式（8a-10 式）・綱取式、C は火炎土器系・柄倉式・沖ノ原式・三十稻場式・南三十稻場式などが出土した。その他、粗製土器や信州及び北陸の影響を受けたと考えられる土器群が組み合う。
- 10 石器は、1,751 点出土した。礫類 156 点、礫剥片 1,030 点、剥片類 187 点を除いた 378 点の内訳は、採取・加工工具（打製石斧・板状石器）が最も多く 34% を占め、次いで調理具（磨石類・砥石・石皿）が 31% である。狩猟・漁獵具は 8% と低調である。

## 引用・参考文献

- 青木英治ほか 1971 「第八編 史跡」『南魚沼郡誌』下 南魚沼郡誌編集委員会編 新潟県南魚沼郡村会
- 穴沢吉太郎編 1977 「原始古代の郷土」『大和町史 本編上巻』新潟県魚沼郡大和町役場
- 阿部恭平ほか 1998 『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 笹山遺跡』十日町市教育委員会
- 網野善彦 1985 「古代・中世・近世初期の漁捞と海産物の流通」『漁業・日本技術の社会史2』日本評論社
- 池田 亨 1979 『堀之内町文化財調査報告書第1輯 上の原遺跡』堀之内町教育委員会
- 池田 亨 1992a 『大和町文化財調査報告第5号 郡御遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨 1992b 『大和町文化財調査報告第6号 堂島長者屋敷遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨 2002 『小出町埋蔵文化財調査報告書第2集 居平遺跡(一次調査)』新潟県北魚沼郡小出町教育委員会
- 池田 亨ほか 1981 『堀之内町文化財調査報告書第2輯 原・居平遺跡』堀之内町教育委員会
- 池田 亨ほか 2002 『小出町埋蔵文化財調査報告書第1集 居平遺跡』新潟県北魚沼郡小出町教育委員会
- 池田 亨・荒木勇次 1987 『大和町文化財調査報告書第2号 柳古新田下原A遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨・荒木勇次 1988 『大和町文化財調査報告第3号 水上遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨・細矢菊治 1990 『大和町文化財調査報告第4号 水上遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨・高木公輔 2001 『広神村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 覚屋遺跡』広神村教育委員会
- 石原正敏 1998 「第Ⅲ章 龍文時代の遺構と遺物 2. 遺物 A 土器」『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 笹山遺跡発掘調査報告書』新潟県十日町市教育委員会
- 植月 学 2006 「馬高式期におけるサケ・マス類の利用をめぐって」『津南学叢書第4輯 火爐土器の時代—その文化を探る』新潟県・津南町教育委員会・信濃川火爐街道連携協議会
- 植月 学 2009 「第5章付編第1節 黒姫洞窟遺跡第5-7次調査出土の動物遺体」『魚沼市埋蔵文化財調査報告第5集 黒姫洞窟遺跡・第2期発掘調査報告』新潟県魚沼市教育委員会・魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団
- 梅川勝史 1992 『堀之内町文化財調査報告書第5集 古林古墳群』新潟県北魚沼郡堀之内町教育委員会
- 梅川勝史 1996 『堀之内町文化財調査報告書第6集 正安寺遺跡 春日平遺跡』新潟県北魚沼郡堀之内町教育委員会
- 梅川勝史 1997 『堀之内町文化財調査報告書第8集 正安寺遺跡II』新潟県北魚沼郡堀之内町教育委員会
- 梅川勝史 1998 『堀之内町文化財調査報告書第9集 原・居平遺跡 倉下遺跡』新潟県北魚沼郡堀之内町教育委員会
- 梅川勝史・高木公輔 2006 『魚沼市埋蔵文化財調査報告書第1集 月岡遺跡』新潟県魚沼市教育委員会
- 岡田武松校訂 1978 『北越雪譜』改訂版〔鈴木牧之編撰〕岩波文庫(初版1936年)
- 尾崎高宏・坂上法子 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第101集 大久保遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮ほか 1990 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第56集 岩原I遺跡』新潟県教育委員会
- 國島 聰ほか 1991 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第29集 城之腰遺跡』新潟県教育委員会
- 小林達雄編 2008 『叢覧 織文土器』アムプロモーション
- 桜井準也 1996 「第1編原始・古代・中世 第1章原始時代」『小出町史』上巻 小出町教育委員会編
- 佐藤雅一 1985 「権現平遺跡発掘調査報告」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第24 下倉山城跡 権現平遺跡 両新田遺跡』新潟県教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1985a 『堀之内町文化財調査報告書第3輯 布場平D遺跡』堀之内町教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1985b 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第31 瓜ヶ沢遺跡 流沢の塚 七久保遺跡 苗塙山城跡』新潟県教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1995 「第1編先史・古代と中世の堀之内 第1章堀之内町の考古」『堀之内町史 資料編 上巻』堀之内町

- 品田高志 2001 「IV遺物 1 繩文土器」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第37集 十三本塚北』柏崎市教育委員会
- 菅沼 亘・宮内信雄 2007 「十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 幅上遺跡発掘調査報告書」十日町市教育委員会
- 鈴木俊成 1996 「第IV章縄文時代の遺構・遺物 2 分類・その他 C石器」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成 1999 「第2章縄文時代第5節 道具と技術 第2項 早期から晚期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 鈴木俊成<sup>ほか</sup> 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木道之助 1991 『図録石器入門事典』柏書房
- 関 雅之 1980 「第1編原始・古代の広神」『広神村史』上巻 広神村史編さん委員会編 新潟県北魚沼郡広神村
- 高木公輔 2002 「広神村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大清水遺跡」広神村教育委員会
- 高木公輔 2007 「魚沼市埋蔵文化財調査報告書第3集 平成18年度埋蔵文化財確認調査報告書」新潟県魚沼市教育委員会
- 高木公輔 2008 「魚沼市埋蔵文化財調査報告書第4集 平成19年度埋蔵文化財確認調査報告書」新潟県魚沼市教育委員会
- 高木公輔 2009 「魚沼市埋蔵文化財調査報告書第6集 一日市遺跡」新潟県魚沼市教育委員会
- 高木公輔 2010 「魚沼市埋蔵文化財調査報告書第7集 平成20・21年度埋蔵文化財確認調査報告書」新潟県魚沼市教育委員会
- 高木公輔<sup>ほか</sup> 2012 「魚沼市埋蔵文化財調査報告書第8集 馬作り遺跡」新潟県魚沼市教育委員会
- 高橋 保 2012 「第IV章遺跡3遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第233集 川久保遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 1992 「4B石器類・6B石器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 五丁歩遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄<sup>ほか</sup> 1990 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第55集 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 田中 靖 1991 「第IV章 遺物2C石器」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第29集 城之腰遺跡』新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1961 「第二章遺物 I 土器」『柄倉』柄尾市教育委員会編 吉川弘文館
- 田海義正<sup>ほか</sup> 1990a 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 清水上遺跡」新潟県教育委員会
- 1990b 「小出町埋蔵文化財調査報告書第4集 月岡遺跡・古長沢遺跡」新潟県北魚沼郡小出町教育委員会
- 戸田秀一<sup>ほか</sup> 1989 「南魚沼郡大和町」『角川日本地名辞典 15 新潟県』竹内理三編 角川書店
- 中村孝三郎 1968 「新潟県北魚沼郡嶺之内町月岡遺跡調査報告書」長岡科学博物館考古研究室
- 中村孝三郎 1978 「越後の石器」学生社
- 納屋内高史・松井 章 2009 「第IV章西郷遺跡の自然科学分析 5 西郷遺跡出土の動物遺存体」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第200集 西郷遺跡 大藏遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 藤巻正信<sup>ほか</sup> 1985 「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第24 下倉山城跡 権現平遺跡 両新田遺跡」新潟県教育委員会
- 細矢菊治 1994 「南魚沼郡水無川流域の歴史」大和町水無川流域の歴史を語る会
- 細矢菊治<sup>ほか</sup> 1985 「大和町埋蔵文化財調査報告第1号 京平塚遺跡発掘調査報告書」大和町教育委員会
- 松井 章<sup>ほか</sup> 2011 「遺構土壤の水洗選別法による屋代遺跡群の縄文中期集落における生業活動の再検討」『長野県立歴史館研究紀要』第17号 長野県立歴史館
- 八木次男・佐藤雅一 1988 「旧石器時代から縄文時代草創期の遺物・魚野川流域を中心として」『新潟考古学談話会会報第1号』新潟考古学談話会
- 山内清男 1964 「日本先史時代概説Ⅲ縄文式文化」『日本原始美術1 縄文式土器』講談社
- 山内清男 1969 「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』第1巻古代 学習研究社
- 吉川耕太郎 2012 「東北地方の縄文石器」『季刊考古学第119号 縄文時代の有肩打製石斧』雄山閣

渡辺三省 1986 「北魚沼郡」「南魚沼郡」『日本歴史地名大系第十五巻 新潟県の地名』平凡社

竪穴建物観察表

S 127

位置 番号	4R 4Q	回数	15-17 -18	時期	中期後半～ 後期初段	平面形	剖面 形状	縫隙(m) 直径×高さ		7.1×7.1 (縫隙)	縫 穴 (縫隙)	117.16 - 底面標高	未検出 検出標高 底面標高	
								床	未検出	付帯 施設	袋状土坑 (SK20)	切り合い關係	-	出土 遺物
P 48 円形	-	52	48	116.73	116.58	-	-	P 35	円筒	-	42	34	(116.65)	116.56 (0)
P 19 円形	-	66	69	116.99	116.65	54	[柱穴]	P 47	円筒	-	28	28	116.65	116.55 16
P 18 円形	半円状	58	58	117.05	116.74	51	P 24 (構造方形)	P 24	構造方形	半円	64	58	116.92	116.59 33
P 17 横円	横状	72	69	117.14	116.51	63	P 21 (長方形)	P 21	長方形	横状	54	36	117.05	116.56 49
P 16 横円	横状	52	48	117.16	116.84	32	P 23 (円筒)	P 23	円筒	U字状	30	26	117.11	116.74 37
P 15 縱横円	横状	74	36	117.16	116.75	41	P 22 (横円)	P 22	横円	横状	24	20	117.14	117.06 8
P 14 横円	半円状	46	47	117.12	116.91	21	P 9 (円筒)	P 9	円筒	半円状	56	46	117.02	116.66 26
P 13 横円	横状	68	52	117.14	116.89	25	[柱穴]	-	-	-	-	-	-	-
P 12 横円	半円状	54	54	117.11	116.81	34	P 8 (横円)	P 8	横円	横状	102	72	116.87	116.34 53
P 11 横円	横状	50	40	117.06	116.73	33	P 3 (横円)	P 3	横円	半円	116	68	116.88	116.25 58
P 6 円形	半円状	32	28	116.63	116.62	21	-	-	-	-	-	-	-	-

S 146

位置 番号	3 R - Q 4 R - Q	回数	15-19	時期	中期後半 (大約94cm)	平面形	剖面内	縫隙(m) 直径×高さ		9.0×8.5 縫隙×縫隙	縫 穴 (縫隙)	15cm	検出標高 底面標高		
								床	未 検出	付帯 施設	土器類遺物	縫隙(幅16cm)	切り合い關係	-	出土 遺物
炉	石籠炉 (SK67)	-	-	-	-	-	-	P 68 > SK67 (右端) P 68 < P 12 P 68 < P 14 P 68 > P 10 P 68 > P 13 P 68 > P 15	-	-	-	S 146 (2-17) : SK67 (19-32) P 10 (3-38), P 5 (39-44) P 7 (45-47), P 2 (48-49) P 64 (55-59), P 132 (51) P 12 (55-56), P 52 (55-58)	117.02 116.74		
遺構 番号	平面 形状	断面 形状	直径 (cm)	高さ (cm)	幅 (m)	縫隙高 (m)	底面高 (m)	底 深さ (cm)	遺構 番号	平面 形状	断面 形状	直径 (cm)	縫隙高 (m)	底面高 (m)	底 深さ (cm)
[柱穴]	-	-	-	-	-	-	-	P 124	横円	半円	84	68	116.74	116.40	34
P 5 横円	台形狀	104	73	116.69	116.36	53	P 69	横円	半円	46	30	116.76	116.60	16	
P 29 横円	横状	103	70	116.73	116.29	44	P 68	横円	半円	79	65	116.74	116.47	27	
P 30 扇形	台形狀	74	74	116.73	116.29	44	P 64	横円	台形狀	66	54	116.80	116.38	22	
P 31 円形	台形狀	84	76	116.70	116.42	24	P 65	横円	横状	50	(40)	116.79	116.63	16	
P 70 円形	横状	104	100	116.69	116.68	72	P 50	横円	-	74	68	116.56	116.28	28	
P 60 扇丸形	横状	104	70	116.86	116.66	76	P 63	横円	台形狀	(72)	70	116.86	116.63	(50)	
P 61 横円	横状	108	78	116.89	116.13	76	P 62	横円	台形狀	90	78	116.84	116.31	53	
P 7 横円	横状	96	72	116.80	116.29	51	P 66	横円	横状	46	34	116.86	116.53	27	
[柱穴]	-	-	-	-	-	-	P 110	内円	内円	50	(42)	116.84	116.68	16	
P 32 横円	台形狀	74	58	116.66	116.34	34	P 8	内円	台形狀	60	54	116.92	116.63	29	
P 125 (横円)	台形狀	(66)	(66)	116.71	116.29	42	P 112	横円	横状	100	88	117.02	116.43	59	
P 132 横円	台形狀	162	70	116.67	116.40	27	-	-	-	-	-	-	-	-	
P 111 横円	半円状	36	36	116.74	116.57	17	S 667	長棒円	圓形	188	(122)	(116.74)	116.37	37	
P 27 横円	台形狀	77	62	116.75	116.45	29	-	-	-	-	-	-	-	-	

S 191

位置 番号	3 O	回数	8-14	時期	中期中盤 (標準式)	平面形	半円	縫隙(m) 直径×高さ		5.6×1- (縫隙)	縫 穴 (縫隙)	25cm	検出標高 底面標高	
								床	未 検出	付帯 施設	ベット状遺 物(25cm)	切り合い關係	-	出土 遺物
炉	-	-	-	-	-	-	-	P 213 > SK106 > P 3 > S 192 S 191 > SK1 > 売土 S 191 > P 234 > P 235 SK216 > SK233 > P 256 P 256 > P 71	-	-	-	S 191 (57~59) P 1 (61~69) P 2 (70~71) P 3 (72~74)	116.48 116.24	
遺構 番号	平面 形状	断面 形状	直径 (cm)	高さ (cm)	縫隙高 (m)	底面高 (m)	底 深さ (cm)	遺構 番号	平面 形状	断面 形状	直径 (cm)	縫隙高 (m)	底面高 (m)	底 深さ (cm)
(柱穴)	-	-	-	-	-	-	P 7	内円	内円	24	24	116.46	116.35	(11)
P 1 横円	台形狀	(99)	(90)	116.50	115.69	91	P 3	横円	台形狀	50	47	116.50	116.21	(39)
P 5 横円	-	54	40	116.54	115.97	57	P 9 (円筒)	-	(60)	48	43	116.43	116.32	(11)
P 6 横円	-	52	38	116.58	116.13	31	P 10 (横円)	-	(32)	(64)	126.38	115.86	(46)	
P 5 (縫穴)	-	(45)	35	116.46	116.34	(12)	P 11 (縫穴)	縫状	-	78	66	116.35	115.68	(61)
P 4 円形	-	48	40	116.46	116.21	(25)	P 12 (縫穴)	縫状	-	56	(48)	-	115.61	-
P 14 円形	-	39	28	116.50	116.26	24	P 235 (縫穴)	-	(56)	50	-	-	115.63	-

S 192

位置 番号	3 P	回数	8-14	時期	中期後半	平面形	剖面 形状	縫隙(m) 直径×高さ		4.2×1- (縫隙)	縫 穴 (縫隙)	30cm	検出標高 底面標高	
								床	有	付帯 施設	-	出土 遺物		
炉	-	-	-	-	-	-	-	SK146 > SK149 SK149 > P 1 P 1 > P 2	-	SK146 (76) SK149 (77-77) P 1 > P 2 (78-81)	116.64 116.22			
遺構 番号	平面 形状	断面 形状	直径 (cm)	高さ (cm)	縫隙高 (m)	底面高 (m)	底 深さ (cm)	遺構 番号	平面 形状	断面 形状	直径 (cm)	縫隙高 (m)	底面高 (m)	底 深さ (cm)
(柱穴)	-	-	-	-	-	-	P 3	横円	-	34	28	116.43	116.21	22
P 1 (横円)	-	(86)	-	116.47	116.30	17	P 4	横円	-	58	42	116.56	116.22	36
P 2 (横円)	-	(84)	-	116.49	116.01	48	P 199 (縫穴)	-	(70)	(60)	116.56	116.22	34	
P 2 横円	-	36	32	116.49	116.29	20	P 215 (縫穴)	縫状	-	65	50	116.51	116.18	35

## 観察表

掘立柱建物観察表

S B 1

柱穴番号	3・4	位置	2L 3L	断行	2間 (2.5)	梁行	1間 (2.5)	床面積 13.9m <sup>2</sup>	時 瞬後期前歴		構 造	構件 2×1脚	種 方 向 N16° W
									柱穴 形状	断面 形状	長径 (cm)	短径 (cm)	壁記高 (cm)
187	横円	半円	—	94	66	115.90	115.25	0.65	187-196	2.50	—	—	187-197 4.85
196	円	—	78	74	115.30	115.33	0.60	196-197	2.50	—	—	211-198	4.74
197 (横円)	円形	72	(52)	115.70	115.41	0.29	197-198	2.58	—	—	—	—	—
198	横円	—	92	72	115.61	115.14	0.47	198-210	2.48	—	—	—	切り合い・腰保
210	円	—	88	86	115.44	115.12	0.52	210-211	2.30	—	—	—	P187>P188
211	円	—	112	106	115.66	115.23	0.23	211-187	2.58	—	—	—	出土遺物
232	横円	—	62	52	115.66	115.23	0.43	211-212	2.08	—	—	—	P182 (94~104) , P196 (105~106)
188 (円)	(半円)	70	(64)	115.90	115.35	0.55	212-187	1.99	—	—	—	—	P197 (107~110) , P216 (110)
209	横円	半円	94	72	115.37	115.25	0.29	196-210	2.65	—	—	—	P211 (112~115)

S B 2

柱穴番号	3・4	位 置	3M 4M	断行	1間 (2.5)	梁行	1間 (3.6)	床面積 10.44m <sup>2</sup>	時 瞬後期前歴		構 造	1×1脚	種 方 向 N 0° W
									柱穴 形状	断面 形状	長径 (cm)	短径 (cm)	壁記高 (cm)
149	円	—	78	74	116.15	115.91	0.34	231-154	0.95	—	—	—	154-151 3.52
150	横円	—	92	66	116.16	115.87	0.29	154-150	0.80	—	—	—	153-150 3.49
151	円	—	78	74	115.18	115.62	0.36	155-152	0.94	—	—	—	231-194 3.70
152	—	—	89	74	116.20	115.79	0.41	152-149	2.78	—	—	—	切り合い・腰保
153	円	半円	90	81	116.22	115.91	0.21	149-150	0.88	—	—	—	—
154	円	—	78	69	116.24	115.69	0.35	150-151	1.16	—	—	—	—
184	円	—	44	42	116.14	115.88	0.26	151-184	1.10	—	—	—	出土遺物
231	横円	—	64	58	116.24	115.95	0.29	184-183	1.58	—	—	—	P153 (85)
183	円	腰保	78	70	116.27	115.73	0.54	183-231	2.48	—	—	—	—

S B 3

柱穴番号	5・6	位 置	4M 4N	断行	2間 (2.5)	梁行	1間 (2.7)	床面積 17.5m <sup>2</sup>	時 瞬後期前歴		構 造	構件 2×1脚	種 方 向 N 28° W
									柱穴 形状	断面 形状	長径 (cm)	短径 (cm)	壁記高 (cm)
163	円	輪状	92	90	116.39	115.61	0.78	179-164	2.50	—	—	—	164-181 2.74
164	円	輪状	96	92	116.42	115.66	0.76	164-163	2.62	—	—	—	229-148 4.42
179	円	輪状	100	98	116.27	115.54	0.73	165-160	2.53	—	—	—	148-162 3.95
180	円	台形	122	114	116.19	115.32	0.87	180-181	2.60	—	—	—	229-162 8.37
181	円	輪状	100	84	116.21	115.63	0.68	181-182	2.58	—	—	—	切り合い・腰保
182	円	輪状	86	89	116.26	115.41	0.65	182-179	2.74	—	—	—	—
182	横円	輪状	80	76	116.29	115.81	0.48	182-239	2.00	—	—	—	出土遺物
236	横円	—	82	38	116.32	115.99	0.33	229-176	2.12	—	—	—	P163 (116~119) , P164 (120)
148	円	—	74	72	116.29	115.55	0.74	163-162	2.12	—	—	—	P179 (121~123) , P180 (124~126)
229	円	W字	68	56	116.25	115.53	0.72	199-162	2.19	—	—	—	P181 (127~133) , P229 (134~137)

S B 4

柱穴番号	5・7	位 置	5N 4N	断行	2間 (6.2)	梁行	1間 (2.4)	床面積 11.6m <sup>2</sup>	時 瞬後期前歴		構 造	構件 3×1脚	種 方 向 N52° W
									柱穴 形状	断面 形状	長径 (cm)	短径 (cm)	壁記高 (cm)
170	長棒円	W字	82	49	116.54	116.27	0.24	191-192	1.70	—	—	—	172-170 1.64
171	長棒円	W字	68	44	116.56	116.33	0.23	192-171	1.58	—	—	—	174-171 2.28
172	長棒円	輪状	60	44	116.58	116.20	0.38	171-170	1.72	—	—	—	175-192 2.08
174	長棒円	半円	64	48	116.58	116.39	0.19	170-173	2.38	—	—	—	173-172 1.15
175	長棒円	内形	56	38	116.64	116.34	0.36	173-174	1.50	—	—	—	切り合い・腰保
176	横円	U字状	48	44	116.68	116.31	0.37	174-175	1.66	—	—	—	—
191	横円	U字状	76	50	116.66	116.03	0.63	175-176	1.60	—	—	—	出土遺物
192	不整形	柱状	64	44	116.65	116.48	0.17	176-191	1.63	—	—	—	—
172	横円	輪状	42	34	116.55	116.21	0.34	176-190	1.28	—	—	—	P170 (86)
193	横円	—	62	46	116.65	116.53	0.12	190-191	1.02	—	—	—	P191 (67)

## SB5

四版番号	4-5	位置	N S E W	断面 形状	長径 (cm)	横径 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	壁厚 (mm)	床面積 5.29m <sup>2</sup>	時間 階級前歴	構造	1×1間	構造方向	NSW E
柱穴 番号												柱穴 開口			
194	長機内 横内	箱状	108	84	116.54	115.83	0.71	204-194	2.26			224-194		1.12	
204	円	箱状	64	60	116.51	115.84	0.67	194-237	2.27			237-238	切り合い構造	-	
237	(機内)	-	96	62	(116.49)	115.67	(0.82)	237-238	2.42			-		-	
238	機内	-	115	92	116.37	115.64	0.73	238-234	2.36			田土塗物		-	
224	旗九方	-	60	42	116.51	116.20	0.31	204-224	1.08			P204(92) P237(86-95)		-	

## 袋状土坑観察表

( )内の数値は推定値

遺構番号	時期	位置	図版	平面形	規 模 (cm、標高±m)				報告書番号	切り合い	備考	
					長径	横径	底面積	深さ				
SK30	中期文～後期前葉	4 Q	15-17 -18	円形	156	122	156	96	116.25	8-11	>P27	地骨43点出土
SK43	中期中葉	3 R	15-16	円形	189	(162)	177	63	116.44	146-149	<SK43	
SK44	中期中葉	4 R	15-16	円形	224	200	224	88	116.21	150-153	>SK43	
SK45	中期後葉	3 S	15-17	楕円形	145	126	172	67	116.29	154-164	-	
SK76	後期前葉	3 P	8-11	楕円形	172	146	160	99	115.75	166-192	>P54 <SK139	
SK97	中期中葉末～後期初頭	3 P	8-10 -12	楕円形	112	90	124	106	115.59	206-217	>P144-SK143 <P(後期前葉)	地骨11万点出土
SK106	中期末～後期初頭	3 O-N	8-9 -14	楕丸方形	162	140	166	81	115.62	228-240	>S191	

## ピット(柱痕あり)観察表

( )内の数値は推定値

遺構番号	時期	位置	図版	平面形	規 模 (cm、標高±m)				柱径 (cm)	柱固石 有無	切り合い	出土遺物 報告番号	備考
					長径	横径	底面積	深さ					
P33	後期前葉	3 Q	15-16	楕円形	(85)	108	(69)	115.81	32	有	>P29-SK34	282~289	
P38	中期中葉	3 S	15-17	円形	49	40	44	116.64	18	無	-	-	
P39	中期後葉	3 Q	15-16	円形	74	(72)	46	116.04	18	有	<SK53	290~293	
P54	中期末～後期初頭	4 P	8-13	円形	28	26	21	116.66	15	無	-	有	
P56	後期前葉	4 P	8-13	楕円形	49	34	25	116.60	14	無	-	有	
P57	中期中葉	3 P	8-13	円形	49	42	34	116.30	14	有	-	有	
P72	後期前葉	3 P	8-10	(楕円形)	(79)	(70)	(47)	116.37	20	無	>SK73	360~362	
P74	後期前葉	3 P	8-13	楕円形	49	40	24	116.60	14	有	-	無	
P75	後期前葉	3 P	8-13	円形	74	68	74	116.09	20	有	-	有	
P82	後期前葉	3 P	8-13	(楕丸方形)	(82)	(56)	(51)	116.29	22	有	-	203~306	
P89	後期前葉	3 P	9-12	円形	94	85	108	115.53	20	有	>P90	有	
P93	中期後葉	3 P	8-13	楕円形	58	48	44	116.42	14	有	-	有	
P109	中期	3 O	8-11	楕円形	68	55	36	116.20	18	無	-	-	
P114	後期前葉	3 P	8-10	楕円形	88	76	83	115.77	24	有	>P189-SK140	314~317	
P115	中期後葉～後期初頭	3 O	8-10	楕円形	127	118	57	116.03	24	有	>SR140	318~322	
P117	3 O	8-12	円形	42	40	84	115.76	18	有	-	-		
P122	3 O	8-11	円形	47	42	39	116.13	18	無	-	-		
P143	後期初頭	3 P	8-12	楕円形	(106)	96	91	115.78	50	有	<P144-SK97	324~328	
P213	3 O	8-9	楕円形	76	67	80	115.69	18	無	>S191	無		

## 土坑・ピット観察表

( )内の数値は推定値

遺構番号	時期	位置	図版	平面形	規 模 (cm、標高±m)				切り合い	出土遺物 報告番号	備考
					長径	対辺	深さ	底面標高			
SK01	後期前葉	4 P	8-11-14	(楕円形)	(92)	(80)	(29)	116.66	-	-	138-139
SK10	中期中葉	4 R	15-17	楕丸長方形	234	100	36	116.98	-	-	140 破か
SK34	中期後葉	3 Q	15-16	楕円形	(94)	89	(27)	116.30	<P33	141-145	
SK49	中期後葉	3 R	15-16	不規則	(114)	(36)	(-)	116.72	-	-	166
SK73	中期中葉	3 P	8-10	楕円形	172	134	46	116.38	<P72-P141	有	
SK79	4 P	8-11	円形	114	108	50	116.37	-	-	有	
SK80	後期前葉	4 P	8-11	円形	108	108	46	116.35	-	-	193-195
SK94	中期末～後期初頭	3 N	8-9	円形	172	160	52	115.87	<P147	196-199	
SK95	中期後葉～後期初頭	3 O	8-9	楕円形	122	85	30	116.09	-	218	埋設土器 遺構
SK98	後期前葉	3 P	8-10	楕円形	112	90	40	116.26	>SK190-P99	219-221	
SK104	後期前葉	3 O	8-9	楕円形	104	90	52	115.99	-	222-227	

## 観察表

遺構 番号	時 期	位 置	國 版	平面形	規 模 (cm. 檻高はm)				切り合 い	出土遺物 報告番号	備 考
					長 径	短 径	深 さ	底面傾 斜			
SK116	後期前葉	3 P	8-9-14	楕円形	(154)	(110)	(85)	115.65	>SK192-SK146-P215-P199	241-242	
SK139	後期前葉	3 P	8-11	(楕円形)	(98)	89	43	116.39	>SK78	243-247	
SK140	中期後葉 ～後期初頭	3 P	8-10	(楕円形)	(154)	(104)	(42)	116.22	<SK114-SK142 -P115	248-250	
SK142	後期前葉	3 P	8-10	長椭円形	136	80	63	115.98	>SK140 ≈P200	251-254	
SK145		3 P	8-14	楕円形	(104)	(84)	(58)	115.52	>S192	無	
SK146	中期後葉	3 O	8-9-14	(楕円形)	(126)	(92)	(34)	116.22	<SK116 >P199	有	
SK147		3 N	8-9	楕円形	92	90	48	115.86	>SK94	無	
SK190		3 P	8-10	(円形)	(70)	66	(29)	116.34	<P99-P189-SK98	無	
SK216	後期初期	3 O	8-9-14	(楕円形)	(144)	(106)	(32)	116.46	<SK233	255-269	焼上粒含む
SK217		3 Q	15-16	円形	138	128	67	115.87	>P71	無	
SK219	中期後葉 ～後期初頭	3 O	8-9	楕円形	136	114	75	115.49	-	270-280	
SK233		3 O	8-14	楕丸或方形	(186)	(140)	64	115.69	P236- <P228-SK216-SI91	無	
P25	4 Q	15		楕円形	58	38	27	116.79	-	有	
P26	後期前葉	5 Q	15-17	円形	60	46	26	116.80	-	281	
P36		5 S	15-17	円形	38	32	32	116.65	-	無	
P38		3 S	15-17	円形	48	45	44	116.64	-	無	
P40	中期中葉 ～後葉	3 R	15-16	円形	63	50	28	116.81	-	有	
P41	中期後葉	3 R	15-16	円形	68	60	42	116.62	-	有	
P42		3 R	15-16	円形	48	42	12	116.79	-	無	
P50		4 Q	15	円形	32	30	19	116.63	-	無	S146
P51		3 Q	16	円形	74	68	28	116.28	-	無	
P52	中期後葉 ～後期初頭	3 P	8-13	円形	48	44	21	116.68	-	有	
P53		4 P	8-13	円形	32	28	17	116.68	-	無	
P55		4 P	8-13	円形	42	34	16	116.72	-	無	
P58	中期葉～ 後期初頭	3 P	8-11	(円形)	(52)	42	24	116.48	>SK78	有	
P59	中期後葉	4 P	8-12	楕円形	42	35	40	116.19	-	有	
P71	中期後葉	3 Q	15	楕円形	48	38	45	116.06	>SK217	288-299	
P76	中期後葉 ～後期初期	3 P	8-13	円形	54	48	26	116.60	>P77	有	
P77		3 P	8-13	(楕円形)	(48)	37	35	116.54	<P76	無	
P81	後期前葉	3 P	8-13	長椭円形	86	54	38	116.28	-	294-295	
P82		3 P	8-13	円形	38	32	31	116.46	-	無	
P84	中期中葉か	3 P	8-12	円形	32	28	18	116.50	-	有	
P85	後期前葉	3 O	8-12	楕円形	44	32	23	116.37	-	307	
P88		3 O	8	楕円形	58	50	18	116.39	-	無	
P87	中期後葉か	3 O	8-12	楕円形	36	30	26	116.27	-	308	
P90	中期中葉 ～後葉	3 P	8-12	(楕円形)	(46)	36	10	116.51	<P89	有	
P99	中期中葉か	3 P	8-10	円形	30	24	18	116.47	<SK98 >SK190	有	
P100	後期前葉	3 O	8-12	楕円形	80	68	41	116.19	-	310-311	
P101	中期中葉 ～後葉	3 O	8-12	円形	50	48	39	116.21	-	有	
P102		3 O	8-11	円形	46	40	37	116.20	-	有	
P103	後期前葉か	3 O	8-12	楕円形	60	50	29	116.32	-	有	
P105	後期前葉	3 O	8-11	楕丸形	72	51	32	116.15	-	312-313	
P107		3 N	8-11	円形	64	50	39	115.93	-	有	
P108	中期中葉 ～後葉	3 P	8-12	楕円形	38	33	27	116.38	-	有	焼青出土
P109	中期中葉 ～後葉	3 O	8-11	楕円形	68	55	36	116.20	-	有	
P113	中期中葉	3 P	8-13	楕円形	34	26	26	116.54	-	有	
P117		3 O	8-12	円形	42	40	84	115.76	-	無	
P118		3 O	8	楕円形	45	40	30	116.26	-	有	
P119		3 O	8-11	円形	36	36	12	116.48	-	有	
P120		3 O	9-11	楕円形	32	24	29	116.23	-	無	
P121		3 O	8	楕円形	(72)	58	53	116.09	&P128	無	
P122		3 O	8-11	円形	47	42	39	116.13	-	無	
P127	中期中葉 ～後葉	3 O	8	円形	42	37	19	116.39	-	有	
P128	中期中葉	3 O	8-11	円形	40	38	25	116.27	&P121	有	
P129		3 O	8-11	円形	45	42	18	116.35	-	無	
P130		3 O	8-12	長椭円形	68	50	37	116.24	-	無	
P131	中期後葉	3 P	8-12	楕円形	68	64	31	116.29	-	323	
P133		3 P	8	楕円形	40	34	20	116.68	-	無	
P134		3 P	8-13	円形	32	28	20	116.63	-	無	
P135	後期前葉	3 P	8-12	円形	34	32	19	116.40	-	有	
P136		4 P	8	円形	54	48	23	116.28	-	無	
P138		2 N -3 N	8-11	円形	60	52	31	115.91	-	有	

遺構 番号	時 期	泣 窓	回 版	平面形	規 模 (cm. 體高(in))				切り合 い	出土遺物 番号	備 考
					長径	短径	深さ	底面標高			
P141	3 P	8		(楕円形)	(76)	68	(47)	116.40	>SK73	-	無
P144	3 P	8-12		(円形)	(56)	50	(28)	116.37	>P143 <SK97	-	無
P159	4 M	3-5		楕円形	54	36	11	116.06	-	-	S A 1
P160	4 M	3-5		円形	45	40	21	116.16	-	-	S A 1
P161	4 M	3-5		楕円形	52	52	32	116.09	-	-	無
P165	4 N	3-5-6		楕円形	96	74	39	115.96	-	-	無
P166	4 M	3-5		楕円形	48	42	21	116.26	-	-	無
P167	4 N	3-5		円形	34	30	23	116.22	-	-	S A 1
P168	4 N	3-5		円形	42	38	20	116.20	-	-	S A 1
P169	4 N	6		円形	36	34	24	116.30	-	-	無
P177	5 N	5		椭丸三角形	38	34	22	116.37	-	-	無
P178 後期前葉	4 N	5		楕円形	90	62	37	116.18	%P222	329-332	
P185	4 M	5		円形	32	30	27	115.77	-	-	無
P186	3 L	3		円形	86	74	41	115.51	-	-	無
P189 中期後葉	3 P	8-10		楕円形	68	(65)	(42)	116.21	-	333-335	
P195	5 N	4-5		楕円形	60	36	31	116.21	-	-	無
P203 後期初頭	4 N	5		円形	54	47	41	115.96	-	336	
P205 後期前葉か	5 N	5		円形	28	26	24	116.40	-	337	
P206 後期前葉か	5 O	5		楕円形	76	54	49	116.06	-	有	
P207	5 O	5		椭丸三角形	46	30	27	116.31	-	-	無
P208	4 N	5		楕円形	76	60	33	116.22	-	-	S A 1
SK209	2 L	3-4		楕円形	94	57	29	115.28	-	-	無
F220	5 N	5		楕円形	36	30	19	116.34	-	-	無
F221	4 N	3		円形	48	46	14	116.40	-	-	無
P223	3 M	3-4		円形	44	42	24	115.86	-	-	無
P225	5 N	5		椭丸三角形	58	42	25	116.41	-	-	無
P226	5 N	6-7		円形	26	22	14	116.53	-	-	無
P227	5 N	5		(円形)	46	42	35	116.20	-	-	無
P228 中期中葉か 中期後葉	3 O	8-14		楕円形	44	32	27	115.60	<SK216-SK233 S191との関係不明	338-339	
P236	3 P	9		(楕円形)	(40)	39	(60)	116.17	-	-	無

## 観察表

縦文・土製品観察表

報告番号	分類	位置	色調	色調	黏土矿物	文様	消費道路	備考	岩石・石基・角・角閃石	チャート・チャート・チャート	岩石・石基・角・角閃石	上・上部片
									外側	内側		
1	壁鉢	21群d	S127 P6	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/4 灰黄褐色	長、幅、縞	平行沈縞 LR	—	—	—	—	—
2	壁鉢	21群c	S127 P6	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	長、縞	高位沈縞 LR	—	—	—	—	—
3	瓦鉢	16群c	S127 P22	10YR7/4 灰・黄褐色	10YR7/3 灰・黄褐色	長、石、雲、縞	円孔 皮膚	内外スス	蓋状口縫	—	—	—
4	壁鉢	21群a	S127 P39	10YR6/4 灰・黄褐色	10YR6/4 灰・黄褐色	縞、土	LR	—	—	—	—	—
5	壁鉢	6群	S127 P35	10YR6/1 灰・黄褐色	10YR6/4 灰・黄褐色	縞、縞	瓦筋 網状縞	—	—	—	—	—
6	壁鉢	16群	S127 P24	10YR5/2 黑褐色	10YR5/2 黑褐色	石、雲	皮膚 LR	内外スス	—	—	—	—
7	底部	21群c	S127 P24	7.5YR6/6 褐	7.5YR6/6 褐	長、石、チャ、縞	高位沈縞 SL	—	—	—	—	—
8	壁鉢	11群	S137 SK20	10YR6/4 灰・黄褐色	10YR5/2 灰・黄褐色	長、石、縞	加輪捲縞(斜目) 空窓文、沈縞、LR	内外スス	—	—	—	—
9	蓋	23群a	S127 SK20	10YR6/4 灰・黄褐色	7.5YR5/1 黑	縞	ミガキ	—	—	—	—	—
10	壁鉢	8群	S127 SK20	7.5YR6/3 灰・黄褐色	7.5YR6/4 灰・黄褐色	長、石、角、雲、縞	7.5YR6/4 LR	内外スス	—	—	—	—
11	底部	21群a	S127 SK20	7.5YR6/4 灰・黄褐色	7.5YR6/4 灰・黄褐色	長、石、雲、縞	LR	内外スス	底面ミガキ	—	—	—
12	壁鉢	11群	S146	床下	10YR7/1 灰・黄褐色	10YR7/1 灰・黄褐色	長、石、縞	平行沈縞 空窓文	内外スス	JR客土と接合	—	—
13	壁鉢	16群b	S146	床下	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR5/1 灰・黄褐色	石、縞	沈縞	内外スス	蓋状口縫	—	—
14	壁鉢	21群c	S146	床下	10YR5/2 灰・黄褐色	10YR5/2 灰・黄褐色	長、石、雲、土	高位沈縞 LR	内外スス	—	—	—
15	壁鉢	21群c	S146	床下	7.5YR6/3 黑	7.5YR6/4 黑	長、石、縞	平行沈縞 網状縞(Lz)	—	—	—	—
16	壁鉢	8群	S146	周囲	7.5YR6/4 灰・黄褐色	7.5YR6/4 灰・黄褐色	長、石、雲、縞	縞帶	—	口縫部突起	—	—
17	壁鉢	10群a	S146	7.5YR5/1 黑	10YR6/3 灰・黄褐色	長、石、雲、縞	垂直文、蓋状北緯文 円孔、LR	内外スス	—	—	—	—
18	壁鉢	21群a	S146 土器埋葬2	10YR6/2 灰・黄褐色	2.5YR5/1 黑	長、石、雲、縞	SL	内外スス	JR客土と接合	—	—	—
19	壁鉢	22群a	S146 SK67	7.5YR6/6 褐	7.5YR6/4 灰・黄褐色	雲、縞	高位斜先馬首文 SL	—	—	—	—	—
20	壁鉢	7群	S146 SK67	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR5/2 灰・黄褐色	長、石、縞	斑状・飛逐縞帶	—	口縫部突起	—	—	—
21	壁鉢	19群b	S146 SK67	2.5YR5/1 黑	2.5YR5/1 黑	縞	条痕	内外スス	—	—	—	—
22	壁鉢	6群	S146 SK67	10YR6/4 灰・黄褐色	10YR5/3 灰・黄褐色	縞、縞	平行沈縞	—	蓋状口縫か	—	—	—
23	壁鉢	11群	S146 SK67	10YR7/3 灰・黄褐色	10YR7/4 灰・黄褐色	長、雲、縞	加輪捲縞(斜目) 網状縞、SL	—	—	—	—	—
24	—	11群	S146 SK67	10YR6/1 灰・黄褐色	10YR6/1 灰・黄褐色	縞	空窓文	—	—	—	—	—
25	壁鉢	18群c	S146 SK67	2.5YR5/1 黑	2.5YR5/1 黑	縞	SL	内外スス	平縫口縫	—	—	—
26	壁鉢	5群	S146 SK67	10YR4/1 灰褐色	2.5YR4/1 灰褐色	石、縞	多条沈縞	—	—	—	—	—
27	壁鉢	21群c	S146 SK67	10YR6/4 灰・黄褐色	10YR6/3 灰・黄褐色	雲、縞	高位沈縞 SL	内外スス	—	—	—	—
28	壁鉢	7群	S146 SK67	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR7/3 灰・黄褐色	長、石、雲、縞	縞帶・飛逐文 SL	内外スス	—	—	—	—
29	—	36群	S146 SK67	10YR3/1 黑	10YR2/1 黑	縞	斜状沈縞、円形斜突 網状縞(Lz)	—	—	—	—	—
30	壁鉢	11群	S146 SK67	7.5YR5/4 灰・黄褐色	10YR3/1 黑	長、雲、縞	偏角、沈縞 LR	内外スス	—	—	—	—
31	—	7群	S146 SK67	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR7/3 灰・黄褐色	長、縞	偏角・飛逐文 LR	—	—	—	—	—
32	壁鉢	21群c	S146 SK67	7.5YR6/4 灰・黄褐色	7.5YR6/2 灰・黄褐色	長、雲、縞	高位沈縞 LR	内外スス	—	—	—	—
33	壁鉢	11群	S146 P70	10YR6/1 灰・黄褐色	10YR6/1 灰・黄褐色	チャ、縞	平行沈縞	—	平縫口縫	—	—	—
34	壁鉢	2群	S146 P70	7.5YR5/2 灰褐色	7.5YR6/2 灰褐色	長、雲、縞	網状沈縞 網状沈縞	—	—	—	—	—
35	壁鉢	11群	S146 P70	10YR3/2 灰褐色	10YR5/2 灰褐色	縞	加輪捲縞(斜目)	内外スス	—	—	—	—
36	壁鉢	11群	S146 P70	10YR3/2 灰褐色	10YR3/2 灰褐色	長、縞	平行沈縞 SL	内外スス	—	—	—	—
37	壁鉢	21群c	S146 P70	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR6/4 灰・黄褐色	長、雲、縞	高位沈縞 LR	内外スス	—	—	—	—
38	壁鉢	4群	S146 P70	10YR6/3 灰・黄褐色	10YR6/4 灰・黄褐色	長、石、縞	高位沈縞、網状縞 LR	内外スス	—	—	—	—
39	壁鉢	18群c	S146 P5	10YR4/3 灰・黄褐色	10YR5/6 灰・黄褐色	長、雲、縞	SL	内外スス	蓋状口縫	—	—	—

長:長石 石:石英 黄:角閃石 チ:チャート 青:青田 緑:赤緑 士:土器片

報告番号	分類	出土位置	色調	色調	出土混入物	文様	用意施設	備考
40	標本	新・第7層 S146 P5	外灰 10YR6/2 に5Y4-黄褐色	内灰 7,5Y8/4 に5Y4-黄褐色	黒、縦	刷り消し RL	内スス	
41	標本	7層 S146 P5	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	石、青、縦	鏡面施設 無(?)	内スス	
42	標本	21層c P60	10YR5/3 に5Y4-黄褐色	10YR2/2 に5Y4-黄褐色	長、石、青、縦	鏡面施設 LR	内スス	
43	標本	11層 S146 P50	10YR2/1 に5Y4-黄褐色	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	長、青、縦	パブル状沈殿文 斜め走り、RL	内スス	
44	標本	4層 S146 P7	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	2,5Y6/1 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	珠形施設文 平行走り	—	
45	標本	10層b S146 P7	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	2,5Y4/1 に5Y4-黄褐色	石、青、縦	鏡面施設 RL	—	
46	標本	11層 S146 P7	10YR2/1 に5Y4-黄褐色	10YR5/3 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	平行走り	—	
47	標本	10層c S146 P52	10YR5/3 に5Y4-黄褐色	10YR2/1 に5Y4-黄褐色	長、石、青	内孔 光沢施設	—	口縁部把手
48	標本	6層 S146 P62	7,5Y6/1 に5Y4-黄褐色	10YR2/1 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	比較 LR	内スス	
49	標本	21層c P64+65	10YR2/2 に5Y4-黄褐色	1,5Y6/4 に5Y4-黄褐色	石、縦	刷り消し、鏡面施設 LR	内スス	
50	—	21層c S146 P132	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	SYR4/4 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	多条波線	—	
51	標本	10層a S146 P8	10YR5/3 に5Y4-黄褐色	10YR2/3 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	LR	内スス	
52	標本	10層a P110	2,5Y5/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	縦	鏡面施設(シガキ?) 無(?)	内スス	
53	標本	6層 S146 P110	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	光澤 RL	内スス	
54	標本	10層c P112	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	縦帶 LR	内スス	39:覆土土接合 近状口縁
55	標本	10層a P112	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	無(?)	内スス	
56	標本	10層c S191	2,5Y2/1 に5Y4-黄褐色	2,5Y2/1 に5Y4-黄褐色	長、縦	斜面切削輪、鏡面 光澤、内凹切妻文	内スス	
57	標本	4層 S191	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	石、縦	斜面切削輪、鏡面 光澤	内スス	
58	標本	4層 S191	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	石、縦	斜面切削輪、鏡面 光澤	内スス	
59	標本	4層 S191	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	石、縦	斜面切削輪、鏡面 光澤	内スス	
60	標本	1層 S191- P1	7,5Y9/6 に5Y4-黄褐色	7,5Y9/6 に5Y4-黄褐色	縦	押し引き文	—	
61	標本	6層 S191- P1	SYR6/6 に5Y4-黄褐色	10YR2/2 に5Y4-黄褐色	長、縦	斜面切削輪、鏡面 光澤	内スス	
62	標本	11層 P1	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	式、縦	多条波線	内スス	
63	標本	4層 S191- P1	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	縦	斜面切削輪、平行 斜行斜波線	内スス	
64	標本	22層c P1	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	10YR5/1 に5Y4-黄褐色	縦	鏡面	—	
65	標本	4層 S191- P1	7,5Y9/6/4 に5Y4-黄褐色	10YR5/3 に5Y4-黄褐色	長、石、青、縦	珠形施設文 鏡面	内スス	
66	標本	6層 S191- P1	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	角、青、縦	鏡面施設 RL	内スス	
67	—	28層 P1	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	石、角、縦	把手	内スス	
68	標本	6層 S191- P1	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	2,5Y6/2 に5Y4-黄褐色	長、石、青、縦	無(?)	内スス	
69	標本	6層 S191- P1	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	斜面切削輪、光澤	内スス	
70	標本	6層 S191- P2	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	10YR2/2 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	光沢施設文 似た	内スス	
71	標本	18層a P2	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	10YR5/2 に5Y4-黄褐色	長、石、青、縦	ミガキ	内スス	菱状口縁
72	—	16層a P3	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	長、石、青、縦	沈殿	内スス	
73	標本	16層b P3	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	7,5Y9/6/4 に5Y4-黄褐色	角、チャ、縦	沈殿、鏡面 斜め走り	内スス	
74	標本	16層 P3	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	10YR4/4 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	多条波線	内スス	
75	標本	21層a S192	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	長、石、青、縦	RL	内スス	
76	標本	2層 P146	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	10YR4/3 に5Y4-黄褐色	長、縦	斜面切削輪	内スス	
77	標本	21層c P146	7,5Y9/4/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/4 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	鏡面施設 RL	内スス	
78	標本	10層a P192	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	10YR4/2 に5Y4-黄褐色	長、石、縦	鏡面	内スス	
79	標本	21層a P192	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/2 に5Y4-黄褐色	長、縦	鏡面(?)	—	
80	標本	20層 P1	10YR7/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	石、縦	刷り糸(?)	内スス	
81	標本	20層 P1	10YR7/2 に5Y4-黄褐色	10YR6/3 に5Y4-黄褐色	石、縦	刷り糸(?)	内スス	

## 観察表

基長石(石)石英(角閃石)チャート(電)電石(砂)砂岩(土)上層片

番号	分類	出土地位置	色調	色調	地質・地物	地質・地物	文 種		参考
							内面	外面	
81	漂砾	10群 P1	S9S- P1	2.5Y3/1 黒褐色	DYR5/2 黒褐色	石、礫	圓形 L.R.	円柱	内外スズ
82	漂砾	20群 SK145	S9S/4 C.5A-黃褐色	10YR5/4 C.5A-黃褐色	DYR6/4 C.5A-黃褐色	石、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
83	漂砾	21群 c SK145	S9S/2 C.5A-黃褐色	2.5Y3/1 黒褐色	DYR3/1 黒褐色	石、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
84	漂砾	10群 c SK145	S9S/1 C.5A-黃褐色	2.5Y3/1 黒褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	石、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内外スズ
85	鉢	13群 a P153	S9S/2 C.5A-褐色	7.5YR5/4 C.5A-褐色	DYR6/6 C.5A-褐色	石、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
86	漂砾	15群 P170	S9S/4 C.5A-黃褐色	10YR5/4 C.5A-黃褐色	DYR6/4 C.5A-黃褐色	石、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
87	漂砾	16群 P291	S9S/4 C.5A-黃褐色	10YR5/4 C.5A-黃褐色	DYR5/4 C.5A-黃褐色	石、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
88	漂砾	16群 b P231	S9S/5 C.5A-黃褐色	7.5YR5/4 C.5A-黃褐色	2.5YR6/3 C.5A-黃褐色	石、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
89	漂砾	16群 P237	S9S/5 C.5A-黃褐色	10YR5/1 C.5A-黃褐色	DYR6/6 C.5A-黃褐色	石、苔、土	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
90	漂砾	16群 c P237	S9S/5 C.5A-黃褐色	5YR5/6 C.5A-黃褐色	DYR6/6 C.5A-黃褐色	石、苔、土	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
91	漂砾	13群 a P231	S9S/5 C.5A-黃褐色	10YR5/3 C.5A-黃褐色	2.5YR6/4 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
92	鉢	16群 c P234	S9S/5 C.5A-黃褐色	10YR5/3 C.5A-黃褐色	2.5YR6/3 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
93	底部	21群 P236	S9S/5 C.5A-褐色	7.5YR5/4 C.5A-褐色	2.5YR6/4 C.5A-褐色	石、苔、土	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
94	鉢	18群 c P237	S9S/5 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
95	漂砾	8群 P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/4 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
96	漂砾	13群 a P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	7.5YR5/3 C.5A-黃褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
97	漂砾	11群 P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	7.5YR5/4 C.5A-黃褐色	2.5YR6/4 C.5A-黃褐色	石、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
98	—	13群 P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	7.5YR5/4 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
99	漂砾	13群 a P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/3 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
100	鉢	13群 b P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
101	漂砾	11群 P187	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
102	漂砾	13群 a P188	S9S/1 C.5A-黃褐色	7.5YR6/2 C.5A-黃褐色	2.5YR6/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
103	鉢	16群 c P188	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
104	鉢	16群 c P188	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
105	鉢	16群 a P196	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
106	鉢	16群 c P196	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
107	漂砾	13群 a P197	S9S/1 C.5A-黃褐色	2.5YR5/3 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
108	漂砾	12群 P197	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
109	漂砾	18群 c P197	S9S/1 C.5A-黃褐色	7.5YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
110	鉢	23群 P197	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
111	漂砾	12群 P210	S9S/1 C.5A-黃褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、雲	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
112	鉢	16群 b P211	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
113	漂砾	11群 P211	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
114	鉢	13群 a P211	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
115	漂砾	13群 a P211	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
116	鉢	16群 c P213	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
117	漂砾	16群 b P213	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
118	漂砾	19群 P213	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/4 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	—
119	鉢	13群 a P213	S9S/1 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
120	—	9群 P214	S9S/1 C.5A-黃褐色	2.5YR5/1 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス
121	漂砾	16群 a P219	S9S/1 C.5A-黃褐色	10YR5/2 C.5A-黃褐色	2.5YR5/2 C.5A-黃褐色	石、苔、雲、礫	圓形 L.R.	圓形 L.R.	内スズス

報告番号	分類	出土位置		色調	色調	胎土混入物	文様	消費痕跡	備考
		層別	詳細・位置						
122	縄跡	12群	SB3 P179	2.5Y3/2 黒地	10YR6/2 灰黒地	瓦、繩	加輪輪窓(網突)	外スズ	
123	縄跡	16群5	SB3 P179	2.5Y3/2 黒地	10YR5/3 にぶく黄褐	瓦、石、繩	三角花窓	外スズ	
124	縄跡	12群	SB3 P180	10YR6/4 にぶく黄褐	10YR5/3 にぶく黄褐	瓦、繩	加輪輪窓(網突) 沈状口縁	外スズ	
125	縄跡	13群4	SB3 P180	7.5YR5/4 にぶく黄褐	10YR5/1 にぶく黄褐	石、繩	網突	内スズ	
126	縄跡	16群5	SB3 P180	10YR5/3 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	瓦、石、繩、土	平行沈跡文	外スズ	
127	縄跡	16群6	SB3 P181	10YR6/1 黒地	10YR5/1 黒地	瓦、石、繩	沈状口縁	内浮スズ	
128	縄跡	20群	SB3 P181	7.5YR5/4 にぶく黄褐	7.5YR5/4 にぶく黄褐	石、繩	織物系(?)	—	
129	縄跡	15群	SB3 P181	10YR6/3 にぶく黄褐	10YR5/4 にぶく黄褐	瓦、石、テキ、繩	弧状花窓	外スズ	
130	縄跡	18群4	SB3 P181	7.5YR5/4 にぶく黄褐	10YR5/1 黒地	瓦、繩、土	ミガキ	外スズ	
131	縄跡	25群	SB3 P181	10YR5/2 黒地	10YR5/3 にぶく黄褐	瓦、土	継位波状沈窓	内スズ	
132	縄跡	11群	SB3 P181	2.5Y3/3 にぶく黄褐	2.5Y3/3 にぶく黄褐	石、土	加輪輪窓(網突)	—	
133	縄跡	16群4	SB3 P181	10YR6/2 灰黒地	10YR5/4 にぶく黄褐	石、繩、土	平行沈跡文	外スズ	
134	縄跡	12群5	SB3 P229	10YR6/3 にぶく黄褐	10YR5/1 にぶく黄褐	石、繩	加輪輪窓(網突斜窓)	—	
135	縄跡	16群6	SB3 P229	10YR6/2 灰黒地	10YR6/4 にぶく黄褐	瓦、石、繩	三角波文	内浮スズ	
136	縄跡	16群5	SB3 P229	10YR6/2 灰黒地	10YR6/2 にぶく黄褐	瓦、石、繩	平行沈跡文	—	
137	縄跡	15群5	SB3 P148	10YR6/4 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	瓦、繩	刺突	—	
138	直	13群5-1	SK1	2.5Y7/4 青地	2.5Y6/3 にぶく黄褐	瓦、繩	刺突	内スズ	
139	縄跡	21群5	SK1	10YR5/2 灰黒地	10YR6/2 にぶく黄褐	瓦、石、繩	ナデ	外スズ	
140	縄跡	6群	SK10	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	繩	沈跡	—	
141	縄跡	21群5	SK34	10YR5/2 灰黒地	10YR5/3 にぶく黄褐	瓦、石、繩	継位波状	内スズ	
142	縄跡	26群	SK34	10YR6/4 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	石、繩	沈跡波文	—	口縁端部に沈跡
143	—	9群	SK34	7.5Y3/4 にぶく黄褐	10YR5/2 にぶく黄褐	繩	壁筋	ミガキ	—
144	縄跡	21群5	SK34	2.5Y3/1 黒地	2.5Y4/2 灰黒地	繩	無面(Lx)	外スズ	
145	縄跡	21群5	SK34	7.5Y3/4 尾	7.5YR3/4 尾	石、繩、繩	底面:ナデ		
146	縄跡	6群	SK43	7.5Y3/4 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	繩	継位波状	RL	—
147	縄跡	4群	SK43	10YR7/4 にぶく黄褐	10YR3/2 にぶく黄褐	瓦、繩	継位波状	内スズ	
148	縄跡	4群	SK43	2.5Y6/4 にぶく黄褐	10YR6/3 にぶく黄褐	繩	沈跡波文	—	
149	縄跡	6群	SK43	10YR5/3 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	瓦、繩、繩	平行・継位波状	外スズ	
150	縄跡	18群5	SK44	10YR6/4 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	瓦、石、繩、繩	RL	—	
151	縄跡	18群5	SK44	7.5YR6/6 尾	7.5YR6/3 尾	瓦、石、繩、繩	ミガキ	—	
152	縄跡	6群	SK44	2.5Y4/2 灰黒地	10YR6/4 にぶく黄褐	瓦、繩	継位波状	内スズ	
153	縄跡	4群	SK44	10YR5/3 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	繩	継位波状	—	
154	縄跡	11群	SK45	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	瓦、繩	平行沈窓	外スズ	
155	縄跡	11群	SK45	10YR5/2 にぶく黄褐	10YR5/4 にぶく黄褐	石、繩	平行沈窓	外スズ	
156	縄跡	26群	SK45	10YR5/2 にぶく黄褐	10YR6/1 にぶく黄褐	瓦、石、繩	継位波状	—	
157	縄跡	7群	SK45	10YR5/2 灰黒地	10YR6/3 にぶく黄褐	瓦、繩、繩	継位波状文	外スズ	
158	縄跡	6群	SK45	10YR5/2 灰黒地	2.5Y4/2 灰黒地	瓦、繩	継位波状文	内スズ	11群5-1 横状口縁
159	縄跡	7群	SK45	10YR4/3 にぶく黄褐	2.5Y5/2 灰黒地	瓦、石、繩	継位波状文	内スズ	
160	縄跡	7群	SK45	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	瓦、繩、繩	継位波状文	—	表状口縁
161	縄跡	7群	SK45	10YR5/3 尾	10YR6/3 にぶく黄褐	瓦、石、繩	継位波状文	外スズ	表状口縁
162	縄跡	7群	SK45	10YR6/3 にぶく黄褐	10YR6/4 にぶく黄褐	石、繩	継位波状文、把手 凹孔、RL	外スズ	表状口縁

## 観察表

報告番号	分類	出土位置	色調	色調	出土人物	文様		
						表面	裏面	表面
163	深鉢	6群	SK45	10YR6/4 にぶい・黄褐色	7.5YR6/4 にぶい・黄褐色	灰、緑	四孔、押し引き文 縦格	—
164	深鉢	12群	SK45	7.SYR6/4 にぶい・黄褐色	7.SYR6/4 にぶい・黄褐色	灰、石、チヤ、緑	加賀藤原(朝日) LR、網目(アラシ)	内舟スズ
165	深鉢	7群	SK49	10YR6/3 にぶい・黄褐色	2.5Y3/2 にぶい・黄褐色	灰、緑	三角状模文 網目	内舟スズ
166	—	16群b	SK80	10YR6/2 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰	網目消し RL	内舟スズ
167	深鉢	26群a	SK78	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR6/4 にぶい・黄褐色	灰、緑	武藏一条、網目(r) 内舟・網目正規	外スズ
168	深鉢	C群	SK78	10YR6/2 灰	2.5Y4/1 灰	灰、石、緑	斜行沈跡・条	外スズ
169	深鉢	26群a	SK78	2.5Y3/2 灰	2.5Y3/2 灰灰斑	灰、緑、土	武藏一条 網目(アラシ)	平錐口縁
170	深鉢	12群	SK78	10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR6/2 にぶい・黄褐色	灰、石、緑	武藏一条、女真面	内舟スズ
171	深鉢	12群	SK78	10YR6/3 にぶい・黄褐色	2.5Y3/2 にぶい・黄褐色	灰、石、緑	武藏一条、網目(アラシ) 網目消し	内舟スズ
172	深鉢	12群	SK78	10YR6/1 黒地	10YR6/2 白	灰、緑	加賀藤原(朝日) 内舟(アラシ)、網目(r)	新土種良
173	深鉢	18群b2	SK78	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR6/4 にぶい・黄褐色	灰	武藏一条 網目(アラシ)	—
174	深鉢	26群b	SK78	2.5Y3/2 灰灰斑	2.5Y3/2 灰灰斑	灰、緑	網目 網目(アラシ)	—
175	深鉢	12群	SK78	10YR6/1 にぶい・黄褐色	10YR6/2 にぶい・黄褐色	石、緑、土	加賀藤原(押尾) 赤絞	外スズ
176	深鉢	18群b3	SK78	10YR6/2 黒地	10YR6/2 白	石、緑	武藏(LE)	内舟スズ
177	底部	18群b3	SK78	2.5Y3/2 灰灰斑	2.5Y4/2 灰灰斑	石、緑	無筋(Lx)	内舟スズ
178	深鉢	21群a	SK78	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰、質、緑	無筋(Lx)	—
179	深鉢	7群	SK78	2.5Y3/2 灰灰斑	10YR6/4 にぶい・黄褐色	石、質、緑	平行沈跡	—
180	深鉢	11群	SK78	5YR5/4 にぶい・黄褐色	10YR6/2 にぶい・黄褐色	灰、石、質、緑	赤絞 空縫文	内舟スズ
181	深鉢	18群b	SK78	10YR6/1 黒地	10YR6/4 白	灰、土	底破 縦格	外スズ
182	底部	21群a	SK78	2.5Y3/4 にぶい・黄褐色	10YR6/2 にぶい・黄褐色	灰	LR	底部・足部 (平行沈跡)
183	深鉢	16群c	SK78	2.5Y3/4 にぶい・黄褐色	2.5Y2/2 にぶい・黄褐色	灰、石、緑	赤絞 無筋(アラシ)	内舟スズ
184	深鉢	7群	SK78	10YR6/1 にぶい・黄褐色	10YR6/2 にぶい・黄褐色	灰、石、質、緑	無筋(アラシ)	外スズ
185	浅鉢	22群a	SK79	2.5Y3/2 灰灰斑	10YR6/2 灰灰斑	灰、石、質、緑	武藏	外スズ
186	深鉢	11群	SK78	10YR6/1 黒地	10YR6/2 黒地	灰、石、質、緑	赤絞、空縫文 縦格	外スズ
187	深鉢	11群	SK78	10YR6/2 にぶい・黄褐色	2.5Y2/2 にぶい・黄褐色	灰、石、質、緑	赤絞 網目	内舟スズ
188	深鉢	19群	SK78	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR6/2 にぶい・黄褐色	灰	底位空縫文 赤絞	—
189	浅鉢	22群b	SK78	10YR6/2 黒地	10YR6/2 白	灰	毛ガキ	褐色・赤絞 軸上縫合
190	底部	21群a	SK78	2.5Y3/4 にぶい・黄褐色	2.5Y3/2 にぶい・黄褐色	石、緑	無筋(Lx)	内舟スズ
191	深鉢	26群	SK78	10YR6/2 黒地	10YR6/4 にぶい・黄褐色	灰、土、緑	網目系(RLR)	内舟スズ
192	底部	21群a	SK78	10YR6/2 灰灰斑	10YR6/1 黒地	緑	無筋(RL)	底部・ナゾ
193	深鉢	21群c	SK80	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰、緑	底位武藏 RL	—
194	深鉢	19群	SK80	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR6/4 にぶい・黄褐色	灰、石、緑	赤絞	—
195	深鉢	20群c	SK94	10YR6/2 黒地	10YR6/4 にぶい・黄褐色	灰、土、緑	網目系(r)	板状口縁
196	深鉢	21群a	SK78	10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰	加賀藤原(朝日底張) 網目(アラシ)	内舟スズ
197	深鉢	12群	SK94	10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰	加賀藤原(朝日底張) 網目(アラシ)	板状口縁
198	深鉢	11群	SK94	10YR6/2 灰灰斑	10YR6/2 灰灰斑	灰、緑	赤絞、空縫文 縦格	内舟スズ
199	深鉢	18群a	SK97	10YR5/3 にぶい・黄褐色	2.5Y5/2 にぶい・黄褐色	灰、石、緑	ナゾ・毛ガキ	内舟スズ
200	深鉢	18群a	SK97	2.5Y5/2 にぶい・黄褐色	10YR6/2 灰灰斑	石、緑	毛ガキ	外スズ
201	深鉢	18群a	SK97	10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰、緑	毛ガキ	外スズ
202	深鉢	18群a	SK97	2.5Y5/3 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	灰、緑	毛ガキ	外スズ
203	深鉢	18群a	SK97	2.5Y5/3 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	石、緑、緑	底L	内舟スズ

番号	分類	出土位置		色調	色調	出土品目	文様	消費統	備考
		器種	器-部						
204	深鉢	18群a	SK97	10YR5/1 馬頭	10YR6/2 灰黒地	繩	輪形(L.R)	内スヌ	
205	深鉢	11群	SK97	10YR6/4 に△-△-黄緑	10YR6/4 △-△-黄緑	長、縦	加須彌形(斜向) 空透文、無縫(L.R)	—	
206	深鉢	16群a	SK97	10YR6/1 馬頭	2.5Y5/2 灰黒地	石、雲、縦	毛ガサ	—	
207	深鉢	19群b	SK97	10YR6/3 △-△-黄緑	10YR6/3 △-△-黄緑	長、縦	山形	—	平継口縁
208	深鉢	18群b3	SK97	10YR6/3 △-△-黄緑	10YR6/4 △-△-黄緑	長、石、縦	波形-条 △-△-引出文	内スヌ	
209	深鉢	18群3	SK97	10YR6/3 △-△-黄緑	10YR6/3 △-△-黄緑	長、縦	波形-条 △-△-引出文	内スヌ	
210	深鉢	11群	SK97	10YR6/1 馬頭	10YR6/2 灰黒地	長、雲、縦	花透文 空透文	内内スヌ	
211	深鉢	7群	SK97	10YR6/6 馬頭	10YR6/4 △-△-黄緑	長、縦	波形、透け透し 足	内内スヌ	
212	把手	26群	SK97	10YR6/4 △-△-黄緑	10YR6/4 △-△-黄緑	長、石、雲、縦	波形、透け透し L.R	—	
213	—	16群a	SK97	10YR6/1 馬頭	10YR6/3 △-△-黄緑	長、石、チャ	多条沈澱	内スヌ	
214	深鉢	16群a	SK97	10YR6/2 灰黒地	10YR6/2 灰黒地	石、縦	多条沈澱	内スヌ	
215	深鉢	6群	SK97	7.5YR6/4 △-△-馬	7.5YR6/4 △-△-馬	長、縦	波形-条 △-△-波形	内内スヌ	
216	深鉢	4群	SK97	7.5YR6/4 △-△-馬	7.5YR6/3 △-△-馬	長、縦	透青透文 斜行短波	内スヌ	
217	—	6群	SK97	10YR6/3 △-△-黄緑	10YR6/3 △-△-黄緑	長、縦	花透文	内スヌ	
218	深鉢	8群	SK95	10YR6/4 馬頭	10YR6/4 △-△-黄緑	長、石、縦	花透文、透け透し L.R	内スヌ	SH-30包含層と接合
219	—	16群	SK98	10YR2/2 馬頭	10YR2/2 馬頭	長、石、雲、縦	斜行波	内スヌ	
220	深鉢	16群b	SK98	10YR6/1 馬頭	10YR6/1 △-△-黄緑	長、石、角、縦	斜行-条 △-△-波形	内スヌ	
221	深鉢	16群a	SK99	7.5YR6/4 △-△-馬	7.5YR6/4 △-△-馬	石、角、縦	弧状透文	内スヌ	
222	—	18群b3	SK104	10YR6/1 馬頭	10YR6/3 △-△-黄緑	長、石、雲、縦	波形-条	内スヌ	
223	深鉢	12群	SK104	10YR2/1 馬	10YR6/2 灰黒地	石、縦	加須彌形(斜向) △ガサ	—	
224	深鉢	12群	SK104	7.5YR6/4 △-△-馬	7.5YR6/4 △-△-馬	長、石、チャ、縦	加須彌形(斜向)	—	
225	深鉢	13群a	SK104	10YR6/2 灰黒地	10YR6/2 △-△-黄緑	長、石、雲、縦	透光斜彌形(斜向) 斜行	内スヌ	
226	畫	25群a	SK104	9YR6/6 馬	9YR6/6 馬	繩	内内△ガサ	—	
227	畫	25群b	SK104	2.5Y7/1 馬頭	2.5Y7/1 馬頭	長、石、土	朱透文	内内スヌ	
228	深鉢	6群	SK106	10YR6/4 灰黒地	10YR6/4 △-△-黄緑	長、縦	謹密透文	内スヌ	
229	深鉢	12群	SK106	10YR6/4 △-△-黄緑	10YR6/2 △-△-黄緑	長、雲、縦	加須彌形(斜向) 無縫(L.R)	—	
230	深鉢	12群	SK106	10YR6/6 馬頭	10YR6/6 △-△-黄緑	長、石、雲、縦	加須彌形(斜向) 無縫(L.R)	内スヌ	
231	深鉢	11群	SK106	10YR2/2 馬頭	10YR2/1 △-△-馬	長、雲、縦	斜行波、空透文 波形、L.R	内内スヌ	
232	深鉢	26群c	SK106	2.5Y4/2 馬頭	2.5Y4/2 △-△-馬	石、雲、縦	透け条(?)	内内スヌ	
233	深鉢	12群	SK106	2.5Y5/2 馬頭	2.5Y5/2 △-△-馬	石、石、雲、縦	疊市	—	
234	深鉢	12群	SK106	10YR6/2 灰黒地	10YR6/3 △-△-黄緑	長、石、雲、縦	加須彌形(斜向)	内スヌ	
235	深鉢	11群	SK106	10YR5/1 馬頭	10YR5/1 △-△-馬	繩	斜行半隱形 R1.	内スヌ	
236	—	15群	SK106	2.5Y5/3 △-△-馬	10YR6/4 △-△-黄緑	長、縦	加須彌形(斜向) 波形、無縫(L.R)	—	船土壁及
237	深鉢	12群	SK106	10YR5/3 △-△-馬	10YR6/2 △-△-黄緑	長、石、雲、縦	加須彌形(斜向) 無縫(L.R)	—	
238	深鉢	6群	SK106	10YR6/3 △-△-黄緑	10YR6/2 △-△-黄緑	繩	△カル竹枝透文 波形透文、波紋透	内スヌ	
239	深鉢	10群c	SK106	10YR3/1 馬頭	10YR3/1 △-△-馬	石、縦	波形透文 L.R.	内内スヌ	
240	深鉢	10群c	SK106	2.5Y5/2/1 △-△-馬	10YR3/2 △-△-馬	石、雲、縦	波形透文 L.R.	内内スヌ	
241	—	16群	SK116	2.5Y5/3/5 △-△-馬	10YR6/3 △-△-黄緑	長、石、縦	多条沈澱 L.R.	—	
242	—	26群	SK116	2.5Y5/6/5 △-△-馬	2.5Y6/1 △-△-黄灰	石、縦	△ガサ、透化加熱 透形(?)	内スヌ	
244	把手	10群c	SK139	10YR6/2 灰黒地	10YR6/3 △-△-黄緑	石、雲、縦	無縫(L.R)	内スヌ	口縁部把手

### 觀察表

番号	分類	出土位置	色調		形状	出土品物	文様	消費領域	備考
			外側	内面					
245	環狀	13層a	SK139	5.9YR3/3 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	刺繡	内スズ	
245	環狀	22層c	SK139	2.5YR3/1 黒褐色	2.5YR3/1 黒褐色	石、瓦、繩	几何、抽象文、沈没地文、L記	—	口縫部突起
246	環狀	22層c	SK139	7.5YR5/3 にぶく・黒褐色	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	石、繩	丸孔、吹継	—	口縫部突起
247	環狀	18層d	SK139	7.5YR8/4 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、繩	エガキ	—	種子
248	環狀	21層c	SK140	10YR3/3 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	腰帯消し、竪位文、輪形文	—	
249	環狀	21層a	SK140	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	吹継、一条、L記	—	平縫口跡
250	環狀	12層	SK148	10YR8/4 にぶく・黒褐色	10YR8/4 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	加納藤巻(刻目) RL	—	
251	環狀	11層	SK142	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	石、繩	平行沈綱、 加納藤巻(刻目)	—	
252	環狀	16層c	SK142	10YR6/3 にぶく・黒褐色	10YR2/2 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	柳枝紋、柳葉文、 吹継地文	内スズ	腰状口縫
253	環	13層b	SK142	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	石、繩	河原底文、 刺繡	—	
254	環	15層b	SK142	10YR3/4 にぶく・黒褐色	10YR2/2 にぶく・黒褐色	石、繩	刺繡	内スズ	
255	環狀	22層a	SK216	2.5YR4/4 にぶく・黒褐色	10YR2/2 にぶく・黒褐色	石、繩	腰帯消し、注口	内スズ	SI91と接合
256	環狀	22層a	SK216	10YR6/4 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	繩、土	吹継文	内スズ	指土隠丘
257	環狀	18層c	SK216	10YR3/1 黒褐色	10YR2/2 黒褐色	石、繩	平行	内スズ	平縫口跡
258	環狀	11層	SK216	10YR6/6 明黄色地	10YR4/4 にぶく・黒褐色	瓦、石、チャ、繩	平行沈綱、 吹継文	—	
259	環狀	12層	SK216	10YR6/4 にぶく・黒褐色	2.5YR2/2 吹継灰	繩	加納藤巻(押印) 輪形文	内スズ	
260	環狀	5層	SK216	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	10YR2/2 にぶく・黒褐色	石、繩	藤唐草	—	
261	環狀	6層	SK216	10YR3/3 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、繩	半降起吹継文	—	
262	環狀	13層	SK216	10YR3/3 にぶく・黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、繩	加納藤巻(刻印刺繡)	—	腰状口跡
263	環狀	12層	SK216	10YR3/2 黒褐色	2.5YR3/2 吹継灰	石、瓦、繩、土	加納藤巻(円形刺繡)	内スズ	
264	環狀	11層	SK216	10YR3/2 黒褐色	10YR4/4 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	式板 RL	内スズ	
265	環狀	12層	SK216	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	石、繩	加納藤巻(円形刺繡) 吹継文	内スズ	
266	環狀	6層	SK216	10YR6/4 にぶく・黒褐色	10YR2/2 にぶく・黒褐色	瓦、瓦、繩	吹継地文、小鳥巻文 火矢吹継文	—	IN-30客土+接合
267	環狀	5層	SK216	7.5YR4/4 にぶく・黒褐色	7.5YR6/4 にぶく・黒褐色	石、瓦、チャ、繩	中降起吹継文	—	
268	環狀	12層	SK216	10YR6/4 にぶく・黒褐色	10YR6/4 にぶく・黒褐色	繩	加納藤巻(円形刺繡) 中降起吹継文 L字手縫	内スズ	20・30客土・SI91 (1層)と接合、壁虎汀有
270	—	10層c	SK219	10YR6/2 吹継地	10YR5/2 吹継地	石、瓦、繩	吹継一条、吹継文	内スズ	腰状口縫
271	—	10層b2	SK219	10YR5/2 吹継地	10YR5/2 吹継地	石、瓦、繩	吹継一条 L字手縫	内スズ	玉縫口跡
272	環狀	12層	SK219	10YR3/1 黒褐色	10YR3/3 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	加納藤巻(押印) 輪形文	内スズ	
273	環狀	18層b3	SK219	10YR5/2 にぶく・黒褐色	10YR5/2 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	輪形文(R記)	内スズ	
274	環狀	18層a	SK219	10YR5/2 吹継地	10YR5/2 吹継地	石、繩	吹継一条、吹継文	内スズ	平縫口跡
275	環狀	20層a	SK219	10YR5/3 にぶく・黒褐色	10YR5/4 にぶく・黒褐色	石、繩	吹継一条 繩の名(?)	内スズ	
276	環狀	16層b	SK219	10YR4/2 火矢地	10YR2/1 火矢地	石、瓦、繩	腰状口縫	内スズ	
277	環狀	11層	SK219	10YR3/2 黒褐色	10YR2/3 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	吹継、吹継文	内スズ	
278	環狀	11層	SK219	10YR2/2 黒褐色	7.5YR5/3 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	吹継、吹継文	内スズ	
279	環狀	21層c	SK219	7.5YR5/4 にぶく・黒褐色	10YR5/4 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	腰状平行吹継	内スズ	底面:ナダ
280	环狀	21層a	SK219	7.5YR4/1 黒褐色	10YR2/3 にぶく・黒褐色	石、チャ、瓦、繩	ナダ	内コダ 底面:ナダ	
281	环	16層c	P26	10YR6/2 吹継地	10YR7/4 にぶく・黒褐色	石、繩	吹継二条	内スズ	
282	环狀	11層	P13	10YR5/2 吹継地	10YR6/4 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	河原底文、 吹継	内スズ	
283	环狀	4層	P13	7.5YR6/6 黒	10YR4/4 にぶく・黒褐色	石、繩	腰状吹継文 腰状吹継文	—	
284	环	13層a	P13	7.5YR5/3 にぶく・黒褐色	10YR2/2 にぶく・黒褐色	石、瓦、繩	内コダ 腰状吹継文 吹継	—	

標名	分類	出土位置		色調 外見	色調 内面	出土品目	文様	消費系群	備考
		層別	断続・位置						
285	鉢	4層	P33	7.5YR6/6 灰	10YR6/4 灰	石、縁	中薩摩(朝日) 焼成	—	
286	器物 貝冠	3層	P33	10YR6/3 にぶい 黄褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	貝、水、縁	船状押し引き文	—	口縁部装飾
287	器物 貝冠	3層	P33	2.5Y4/1 黄褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	貝、石、縁	舟形	—	口縁部装飾
288	深鉢	10層	P33	7.5YR6/4 にぶい 灰	10YR6/4 にぶい 黄褐色	長、石、角、チャ、縁	条痕	—	
289	深鉢	10層c	P33	10YR6/4 にぶい 黄褐色	10YR5/2 灰黃褐色	石、角、縁	乳状沈殿 斑駁(?)	—	
290	—	21層c	P39	7.5YR6/3 にぶい 灰	7.5YR6/4 にぶい 灰	貝、茎、縁	多条沈殿	内スス	
291	深鉢	5層	P39	10YR6/3 にぶい 灰	10YR5/2 灰黃褐色	長、石、縁	ゾーナ状浮文 RL	—	
292	深鉢	11層	P39	10YR6/2 灰黃褐色	10YR5/2 灰黃褐色	石、角、茎、縁	平行・継位沈殿 横筋(L)	内スス	
293	深鉢	11層	P51	10YR6/2 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	石、縁	加賀藤唐(鉢身) 光輪一束	内スス	
294	深鉢	10層c	P71	10YR5/2 灰褐色	7.5YR6/3 灰	縦筋(沈殿)、巻き折し 縁	縦代沈殿、巻き折し 縁	—	
295	深鉢	11層	P71	10YR6/3 にぶい 黄褐色	10YR5/3 にぶい 黄褐色	貝、石、縁	平行沈殿 渦文	内スス	
297	深鉢	1層	P71	10YR6/3 にぶい 黄褐色	10YR5/2 灰黃褐色	石、チャ、縁	雲状半隆起文 押し引き文	内スス	
298	深鉢	6層	P71	10YR5/2 にぶい 黄褐色	10YR6/4 にぶい 黄褐色	石、縲	縦代平行沈殿 縁	内スス	
299	深鉢	6層	P71	10YR5/2 灰褐色	2.5Y5/2 灰褐色	縲	光輪	内スス	
300	深鉢	12層a	P72	7.5YR6/3 にぶい 灰	10YR5/2 灰褐色	角、縲	吳家文	内内スス	波状口縁
301	深鉢	6層	P72	10YR5/2 灰褐色	10YR5/3 にぶい 黄褐色	石、縲	平行沈殿 渦文	内スス	
302	深鉢	11層	P72	10YR6/3 にぶい 黄褐色	10YR7/4 にぶい 黄褐色	長、石、茎、縲	雲状半隆起文 押し引き文 RL	—	
303	深鉢	10層c	P83	10YR5/2 灰褐色	7.5YR6/3 灰	長、茎、縲	縦筋(沈殿)、巻き折し 縲	内スス	
304	深鉢	10層	P83	10YR6/1 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	石、縲	平行沈殿 渦文	内スス	
305	深鉢	6層	P83	10YR5/2 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	石、角、縲	光輪	内スス	
306	深鉢	6層	P83	10YR5/4 にぶい 黄褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	足、縲	薩摩波多文	—	
307	—	26層	P85	2.5Y3/1 灰褐色	2.5Y7/3 灰褐色	長、茎、縲	加賀藤唐(鉢身) 船状押し	—	
308	深鉢	7層	P87	10YR6/2 灰褐色	10YR6/3 灰褐色	長、石、縲	薩摩	—	
309	深鉢	7層	P89	2.5Y3/3 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	石、角、縲	薩摩渦文	内スス	
310	深鉢	19層	P100	7.5YR6/2 灰褐色	10YR6/4 にぶい 灰	長、石、縲	光輪	内スス	
311	深鉢	16層a	P100	10YR6/1 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	足、石、縲	多条沈殿	内スス	
312	深鉢	16層b	P105	10YR6/1 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	長、茎、縲	三重花文 平行沈殿	内スス	
313	高鉢	9層	P105	10YR6/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	石、縲	袖円錐各 元年	—	赤彩、紺土残 波状(?)
314	深鉢	21層a	P114	2.5Y3/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	石、縲	輪筋(Lz)	内スス	
315	深鉢	11層	P114	10YR6/1 灰褐色	2.5Y3/2 灰褐色	縲	丸模 条 渦文	内スス	
316	—	26層	P114	10YR6/1 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	縲	沈殿	内スス	
317	深鉢	16層a	P114	2.5Y3/2 灰褐色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	石、縲	多条沈殿 LR	内スス	
318	深鉢	21層a	P115	2.5Y3/1 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	長、石、縲	LR	—	平縁口縁
319	深鉢	21層a	P115	10YR6/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	石、縲	輪筋(Lz)	—	平縁口縁
320	深鉢	7層	P115	10YR6/2 灰褐色	1.5Y4/1 灰褐色	長、茎、縲	薩摩、花綿 RL	内スス	
321	深鉢	15層a	P115	7.5YR6/6 灰	1.5Y7/2 灰褐色	長、茎、縲	斜筋	—	
322	深鉢	21層a	P115	7.5YR6/3 にぶい 灰	10YR6/4 にぶい 灰褐色	足、縲	薩摩(?)	内スス	
323	深鉢	7層	P131	10YR6/4 にぶい 黄褐色	10YR6/2 灰褐色	長、茎、縲	薩摩、光輪 RL	—	
324	深鉢	18層b2	P143	10YR6/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	足、縲	沈殿	内スス	
325	深鉢	11層	P143	10YR6/1 灰褐色	10YR6/3 灰	長、石、茎、縲	化粧渦文 沈殿	内スス	

## 観察表

表: 岩石(石英・角・角閃石 チャート) 対: 観察 標: 測定 士: 土器片

番号	分類	出土位置	色調	色調	結晶入物	文様	消費痕跡	備考
	鉱形	剖・面	遺跡・位置	層位	外側	内面		
320	透鉄	4群	P143	10YR6/2 にぶ・黄褐色	10YR5/2 灰褐色	灰、石、鐵	縞筋彌文 斜行彌文	—
321	透鉄	11群	P143	10YR6/2 灰褐色	2.5Y4/2 灰褐色	鐵	帶筋彌文(斜行)、沈模 彌文、無筋(LE)	内凹スス
322	透鉄	16群a	P143	10YR6/1 黄褐色	10YR5/3 にぶ・黄褐色	石、角、鐵	灰褐色	—
323	鉄	16群c	P178	10YR6/2 灰褐色	10YR2/3 にぶ・黄褐色	灰、鐵	加熱強青(斜日) 灰褐色	—
330	透鉄	21群d	P178	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR2/2 灰褐色	石、角、鐵	LR	内凹スス
331	鉄	16群c	P178	10YR6/2 灰褐色	10YR5/2 灰褐色	石、鐵	円形彌文 斜行彌文	—
332	鉄	16群c	P178	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR4/4 灰褐色	長、鐵	円形彌文、灰褐色 押し引き文	—
333	透鉄	21群a	P189	10YR6/2 灰褐色	10YR4/2 灰褐色	石、鐵	無筋(Lc)	内スス
334	透鉄	7群	P189	2.5Y9E/4 にぶ・黄褐色	10YR6/4 にぶ・黄褐色	石、鐵	丸形 無筋(Lc)	—
336	透鉄	12群	P203	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR6/4 にぶ・黄褐色	灰、石、鐵、鐵	加熱強青(斜日) 無筋(Lc)	内スス
337	透鉄	7群	P205	10YR6/2 灰褐色	2.5Y6/4 灰褐色	灰、鐵	加熱強青(斜日) 無筋(Lc)	—
338	透鉄	6群	P228	10YR5/4 にぶ・黄褐色	10YR2/2 灰褐色	鐵	無筋	—
339	透鉄	6群	P228	10YR6/2 灰褐色	10YR2/3 にぶ・黄褐色	長、鐵	圓形彌文 斜行彌文	—
340	透鉄	6群	4P	灰土層 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	石、鐵	斜行彌文 斜行彌文	内凹スス トンボ型斜状突起
341	透鉄	10群b	2M-2N 灰土層	10YR5/6 灰褐色	2.5Y5/4 灰褐色	長、鐵、鐵	斜行彌文、磨り削 LR	内スス
342	透鉄	22群b	2M 灰土層	10YR5/1 灰褐色	2.5Y3/2 灰褐色	鐵	毛ガサ	—
343	鉄	15群	2M 灰土層	10YR5/4 にぶ・黄褐色	2.5Y5/4 にぶ・黄褐色	灰、鐵	灰褐色	板状口縁
344	鉄	15群	2M-2N 灰土層	10YR5/2 灰褐色	2.5Y5/4 にぶ・黄褐色	長、鐵	無筋 LR	内凹スス 細土種直
345	鉄	16群c	4N 灰土層	10YR5/1 灰褐色	10YR5/1 灰褐色	石、鐵	三角彌文 斜行彌文、丸彌	—
346	鉄	16群a	4O 灰土層	10YR5/2 にぶ・黄褐色	10YR6/2 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	多条彌文	内スス
347	透鉄	21群a	4N 灰土層	10YR5/2 にぶ・黄褐色	10YR6/5 灰褐色	角、チャ、鐵	RL	内スス
348	鉄	16群c	4N 灰土層	10YR5/2 にぶ・黄褐色	10YR6/4 にぶ・黄褐色	石、鐵	円形彌文 円形・斜行彌文	—
349	鉄	26群	4O 灰土層	10YR5/4 にぶ・黄褐色	10YR6/3 にぶ・黄褐色	長、石、鐵	加熱強青(斜日) 円形彌文、斜行彌文	—
350	透鉄	11群	2M 灰土層	10YR5/4 にぶ・黄褐色	10YR5/4 にぶ・黄褐色	鐵	横八字彌文 強青(有) 強青(五)・ 強青(四)	内スス
351	透鉄 灰起	26群	3N 客土	10YR6/2 にぶ・黄褐色	10YR4/2 灰褐色	長、石、鐵、鐵	強青 丸孔	口縁部突起
352	透鉄	3群	3M 客土	10YR6/2 にぶ・黄褐色	10YR6/4 にぶ・黄褐色	鐵	強青冠、強青 丸孔	—
353	透鉄	3群	2M 客土	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR5/1 灰褐色	長、鐵、鐵	強青冠、圓形彌文 強青冠、斜行彌文	—
354	透鉄	3群	2M-3M 客土	10YR6/2 にぶ・黄褐色	10YR6/2 にぶ・黄褐色	長、石、鐵	強青冠、強青 丸孔	内スス 口縁部突起
355	透鉄	3群	3N 客土	10YR6/2 灰褐色	10YR6/3 にぶ・黄褐色	長、石、鐵	強青冠、強青 丸孔	内スス
356	透鉄 灰起	3群	3M 客土	10YR5/2 黄褐色	2.5Y3/2 黄褐色	長、石、鐵、鐵	強青冠 卷文	内スス
357	透鉄 灰起	3群	3M 客土	10YR6/4 にぶ・黄褐色	2.5Y5/4 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	強青彌文	圓状
358	透鉄	5群	2M 客土	10YR5/3 にぶ・黄褐色	10YR3/1 灰褐色	長、石、鐵	半隆起彌文	内スス
359	透鉄	5群	3M 客土	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR7/4 にぶ・黄褐色	石、鐵、鐵	円形彌文、斜行 多条彌文、H.L.	内スス
360	透鉄	5群	3M 客土	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR5/4 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	多条彌文	内凹スス
361	透鉄	5群	西側壁 客土	10YR6/2 灰褐色	10YR5/3 にぶ・黄褐色	石、鐵	強青	内スス
362	透鉄	6群	3N 客土	10YR6/3 にぶ・黄褐色	10YR7/3 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	半隆起彌文 RL	内スス
363	透鉄	6群	2N 客土	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR6/3 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	強青彌文	内スス
364	透鉄	6群	3N 客土	10YR6/3 にぶ・黄褐色	10YR6/4 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	強青冠半隆起彌文 RL	—
365	透鉄	6群	3N 客土	10YR6/4 にぶ・黄褐色	10YR7/4 にぶ・黄褐色	長、石、鐵、鐵	強青彌文	—
366	透鉄	6群	3N 客土	10YR6/3 にぶ・黄褐色	10YR4/2 灰褐色	長、石、鐵、鐵	口縁上部・強青冠半 彌文	内スス

報告番号	分類	出土位置		色調	色調	出土品種	文様	消費水跡	備考
		器形	西-東 遺構-位置						
261	深井	6群	3N	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	石、漆	薩	内スス
262	深井	6群	2M	客土	10YR5/2 灰黄褐色	10YR6/3 灰黄褐色	長、赤、黒、漆	薩新巻文、網目文、 波打	内スス
263	深井	6群	3M	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	7.5YR7/4 灰黄褐色	石、漆	薩帶卷文、網目文、 波打、平行波状文	内内スス
270	深井	6群	3N	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	10YR4/1 灰黄褐色	長、赤、黒	薩平行波状文、 大波折波状文	内内スス
271	深井	6群	3M	客土	10YR4/2 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	漆	薩新巻文、網目文、 波打、波状文	—
372	深井	6群	3M	客土	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	長、赤、漆	薩新巻文、網目文、 波打、平行波状文	内内スス
373	深井	6群	3M	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	7.5YR6/4 灰黄褐色	長、石、黑、漆	薩新巻文、 波打、平行波状文	内スス
374	深井	6群	2M-3M	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	10YR6/4 灰黄褐色	石、漆	薩新巻文、沈波 平行波状文	—
375	深井	6群	3N	客土	10YR6/3 灰黄褐色	10YR6/3 灰黄褐色	長、赤、漆	薩新巻文、北波 波状波状文	内内スス
376	深井	4群	2M-3M	客土	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	長、漆	薩新巻文、網目文、 波打、平行波状文	内内スス
377	深井	4群	3N	客土	7.5YR6/1 灰黄褐色	10YR2/2 石、黑、漆	石、黑、漆	薩新巻文(網目文)、薩 波打、網目文、波打	内スス
378	深井	7群	3M	客土	10YR6/4 灰黄褐色	10YR6/3 灰黄褐色	長、石、黑、漆	薩新巻文 (網目文)	内スス
379	深井	7群	3N	客土	5YR4/2 灰黄褐色	5YR4/3 灰黄褐色	長、石、漆	薩平行波状文、 波打、波状文	内スス
380	深井	7群	2M-3M 30-40	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	石、漆	薩平行波状文、網目文、 波打、波状文	—
381	深井	7群	3M	客土	10YR6/4 灰黄褐色	10YR6/4 灰黄褐色	長、石、漆	薩平行波状文、網目文、 波打、波状文	内スス
382	深井	9群	2M-3M 30-40	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/1 灰黄褐色	漆	薩平行波状文 (波打)	—
383	深井	9群	2M	客土	10YR5/2 灰黄褐色	10YR6/1 灰黄褐色	石、漆	薩新巻文、 北波、LR	内スス
384	有孔 鉢付	9群	40	客土	5YR6/1 灰黄褐色	10YR6/1 灰黄褐色	チヤ、漆、漆	薩手	—
385	—	9群	3M	客土	7.5YR5/3 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	石、角、漆	薩	—
386	有孔 鉢付	9群	3M	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	長、石、漆	沈波	—
387	有孔 鉢付	9群	3M	客土	7.5YR5/4 灰黄褐色	10YR6/3 灰黄褐色	長、石、漆	沈波	—
388	—	9群	4N	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR5/1 灰黄褐色	石、漆	薩	内内スス
389	—	9群	4O	客土	7.5YR5/3 灰黄褐色	10YR4/3 灰黄褐色	漆	薩	—
390	—	9群	5P	客土	10YR6/1 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	長、石、漆	薩	内内スス
391	蓄合か	9群	3M	客土	10YR6/3 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	長、角、漆、漆	1-4.4伏式網太 波打	—
392	蓄合か	9群	3M	客土	7.5YR5/4 灰黄褐色	10YR6/4 灰黄褐色	長、漆	1-4.4伏式網太 波打	—
393	深井	10群b	3M	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	10YR6/4 灰黄褐色	長、石、漆	薩新	内スス
394	深井	10群b	3M	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	10YR6/3 灰黄褐色	漆	薩新巻文 LR	波状口縁
395	深井	10群b	3L	客土	10YR6/4 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	漆	薩平行波状文 LR	内内スス
396	深井	10群b	2M-2N	客土	10YR5/1 灰黄褐色	10YR4/3 灰黄褐色	長、石、漆	薩新巻文 LR	内スス
397	深井	10群b	2M-2N	客土	10YR5/1 灰黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	長、石、漆	薩新巻文 LR	内スス
398	深井	10群b	3M	客土	10YR5/1 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	漆	薩	—
399	深井	10群b	3M	客土	10YR6/4 灰黄褐色	10YR6/3 灰黄褐色	長、漆	薩平行波状文 LR	—
400	鉢	10群b	2M-3M	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/4 灰黄褐色	長、チヤ、漆	薩新巻文 波打、LR	内内スス
401	鉢	10群b	3M	客土	10YR6/1 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	漆	薩	—
402	鉢	10群b	3M	客土	10YR6/4 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	長、漆	薩	—
403	深井	10群b	3N	客土	10YR5/3 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	長、石、漆	薩	内スス
404	深井	10群b	3M	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR2/1 灰黄褐色	長、赤、黑	薩新巻文 LR	内内スス
405	深井	10群b	2L	客土	7.5YR6/4 灰黄褐色	7.5YR6/4 灰黄褐色	長、漆	薩	内スス
406	鉢	10群b	3M	客土	10YR6/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	漆	薩	—

## 観察表

報告番号	分類	出土地点	色調	色調	粘土混入物	文様			測量情報	備考
			外面	内面		文様	文様	文様		
407	—	10群e	3M	客土	10YR5/2 黒褐色	2.5Y3/2 黒褐色	石、雲、繩	繩帶 雲	外スヌ	
408	漆器	10群e	3M	客土	10YR4/2 灰褐色	2.5Y3/2 灰褐色	石、雲、繩	蛇形、雲文 繩	外スヌ	
409	鉢	10群e	西隅裏	客土	7.5YR4/2 灰褐色	2.5Y4/2 灰褐色	石、雲	蛇形、雲文 L.R.	外スヌ	
410	漆器	10群e	40	客土	5.5Y5/2 暗灰色	5.5YR6/2 暗灰色	白、石、雲	網状紋(斜目) 雲	内スヌ	
411	漆器	10群e	2L	客土	10YR3/1 黒褐色	10YR2/1 黒褐色	長、石、雲、繩	加輪羅帶(斜目) 網狀紋(斜目)	内スヌ	
412	漆器	10群e	3M	客土	5.5YR5/4 灰褐色	10YR5/2 灰褐色	石、雲	加輪羅帶(斜目)、L.R. 円形雲文、網狀紋	外スヌ	
413	漆器	22群b	3M	客土	10YR3/1 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	繩	之字文	—	黑色、半空 粘土轉出
414	漆器	22群b	3M	客土	10YR3/2 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	石、角、繩	之字文	—	黑色、半空 粘土轉出
415	漆器	22群b	3M	客土	10YR5/3 灰褐色	10YR2/2 灰褐色	石、雲	之字文	—	黑色、半空 粘土轉出
416	漆器	22群b	20-30	客土	10YR4/4 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	石、繩	之字文	—	黑色、半空 粘土轉出
417	漆器	11群	3M	客土	10YR3/2 黒褐色	2.5YR3/3 灰褐色	石、雲、繩	加輪羅帶(斜目)、花綻 雲文、L.R.	外スヌ	
418	漆器	11群	3N	客土	10YR3/1 黒褐色	10YR4/2 灰褐色	石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
419	漆器	11群	3M-3N	客土	10YR3/2 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
420	漆器	11群	3N	客土	5.5Y3/1 黒褐色	2.5Y3/2 黒褐色	石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
421	漆器	11群	3N	客土	10YR3/1 黒褐色	10YR2/1 黒褐色	石、繩	加輪羅帶(斜目) 雲文、L.R.	内スヌ	
422	漆器	11群	3N	客土	5.5Y3/2 黒褐色	10YR6/2 灰褐色	石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
423	漆器	11群	3N	客土	10YR5/3 灰褐色	10YR6/4 灰褐色	角、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
424	漆器	11群	3M	客土	10YR4/2 灰褐色	10YR5/3 灰褐色	角、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	—	
425	漆器	11群	3M	客土	10YR3/3 灰褐色	10YR4/2 灰褐色	石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	—	
426	漆器	11群	3M	客土	10YR3/1 黒褐色	2.5YR3/2 黒褐色	石、雲	加輪羅帶(斜目) 雲文、L.R.	内スヌ	
427	漆器	11群	3N	客土	10YR6/6 繩	10YR6/4 灰褐色	長、石、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
428	漆器	11群	2M-3M	客土	5.5Y3/2 黒褐色	2.5YR3/3 灰褐色	角、繩	加輪羅帶(斜目) 雲文	外スヌ	
429	漆器	11群	3N	客土	10YR3/2 黒褐色	10YR4/3 灰褐色	長、石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
430	漆器	11群	3N	客土	10YR3/2 黒褐色	10YR4/2 灰褐色	長、石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
431	漆器	11群	3P	客土	10YR6/3 灰褐色	10YR5/2 灰褐色	石、繩	加輪羅帶 L.R.	—	
432	漆器	11群	2M-3M	客土	10YR4/2 灰褐色	10YR6/3 灰褐色	石、雲、繩	加輪羅帶(斜目) 雲文	内スヌ	
433	漆器	11群	3N	客土	10YR5/2 灰褐色	10YR3/2 黒褐色	石、雲、繩	加輪羅帶 L.R.	内スヌ	
434	漆器	11群	3M	客土	5.5YR6/4 灰褐色	10YR4/2 灰褐色	石、石、テヤ、雲、繩	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	
435	漆器	11群	3M	客土	7.5YR2/2 灰褐色	10YR4/2 灰褐色	長、石、繩	加輪羅帶(斜目) 雲文、L.R.	内スヌ	
436	漆器	11群	2M-3M	客土	10YR3/2 黒褐色	10YR3/3 黒褐色	石、雲	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	
437	—	11群	2L	客土	7.5YR5/4 灰褐色	10YR3/1 角	繩	八字形組合繩 L.R.	内スヌ	
438	漆器	12群	2N	客土	7.5YR4/4 灰褐色	2.5YR4/4 黒褐色	長、石、繩	加輪羅帶(斜目) L.R.	—	
439	漆器	12群	2N	客土	10YR6/4 灰褐色	10YR6/4 灰褐色	長、石、繩	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	
440	漆器	12群	4D	客土	10YR5/1 黒褐色	10YR6/2 灰褐色	長、石、繩	加輪羅帶(斜目)	内スヌ	
441	漆器	12群	2L	客土	10YR5/3 灰褐色	10YR5/2 灰褐色	石、雲、繩	加輪羅帶(斜目)	内スヌ	
442	漆器	12群	2M-3M	客土	10YR3/2 黒褐色	2.5YR3/3 黒褐色	長、石、繩	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	
443	漆器	12群	3M	客土	10YR6/3 灰褐色	10YR6/3 灰褐色	長、石、雲	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	菱状口縁
444	漆器	12群	2M-3M	客土	10YR6/4 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	長、石、雲、繩	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	口縁上縁面
445	漆器	12群	3M	客土	10YR6/4 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	長、石、雲	加輪羅帶(斜目) L.R.	内スヌ	
446	漆器	12群	2L	客土	10YR6/4 灰褐色	10YR6/3 灰褐色	繩	加輪羅帶(斜目) L.R.	—	菱状口縁

報告番号	分類	出土位置		色調	色調 内面	出土品目	文様	消費状態	備考	
		経緯	経緯・場所							
447	漆鉢	12鉢	2M・3M	赤土	10YR4/2 灰黒地	10YR5/4 石、縫	加熱陽燃(刺突) 刷毛、金箔	内外スス		
448	漆鉢	13鉢a	2M・3M	赤土	10YR5/3 にぶく黄地	10YR4/2 灰黒地	石、縫	花卉模様	内外スス	
449	漆鉢	13鉢a	3M	赤土	10YR3/2 黒地	10YR4/2 灰黒地	石、縫	花卉模様	内外スス	
450	漆鉢	13鉢a	3M	本土	7.5YR4/2 灰地	SYR4/4 にぶく赤地	石、縫	刺突 RL	内外スス	
451	漆鉢	13鉢a	3N	赤土	10YR5/2 灰黒地	7.5YR4/2 にぶく灰地	石、縫	加熱陽燃(刺突) 刺突	—	
452	漆鉢	13鉢a	4N	赤土	SYR5/4 にぶく赤地	SYR4/2 にぶく赤地	石、縫	刺突	内外スス	
453	漆鉢	13鉢a	3M	赤土	2.5Y3/2 黒地	10YR5/2 灰黒地	石、縫	刺突	内外スス	
454	漆鉢	13鉢a	3M	赤土	2.5Y3/2 黒地	2.5Y3/2 黒地	石、縫	刺突	内外スス	
455	漆鉢	13鉢a	4M	赤土	7.5YR5/4 にぶく黄地	10YR6/3 にぶく黄地	角、縫	刺突	内外スス	
456	漆鉢	13鉢a	4N	赤土	10YR5/2 灰黒地	2.5Y5/2 暗黒地	石、縫	押し引き波線文	内外スス	
457	鉢	13鉢a	4N	赤土	2.5Y3/1 黒地	10YR5/2 黒地	石、縫	円形浮文、刺突 丸鉄	内外スス	
458	壺	13鉢b	4O	赤土	7.5YR5/4 にぶく黄地	10YR5/3 にぶく黄地	石、縫	刺突 丸鉄	内外スス	
459	壺	13鉢b	5O	包含層	10YR4/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	石、縫	刺突	内外スス	
460	壺	13鉢b	3N	赤土	7.5YR5/4 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	角、縫	刺突、斜帶 丸鉄	—	
461	壺	13鉢b	4N	赤土	10YR5/2 にぶく黄地	10YR5/4 にぶく黄地	石、縫	刺突 丸鉄	—	
462	壺	13鉢b	3M	赤土	10YR5/4 にぶく黄地	10YR5/3 にぶく黄地	角、縫	加熱陽燃(刺突) 丸鉄	内外スス	
463	壺	13鉢b	4O	赤土	2.5Y3/2 黒地	10YR6/3 にぶく黄地	石、赤、縫	加熱陽燃(刺突) 丸鉄、斜帶	—	
464	壺	13鉢b	4O	赤土	10YR5/3 にぶく黄地	10YR5/3 にぶく黄地	角、縫	加熱陽燃(刺突) 丸鉄、斜帶(Lz)	—	
465	壺	13鉢b	2M・3M	赤土	2.5YR5/4 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	長、窄、縫	加熱陽燃(刺突) 丸鉄	内外スス	
466	壺	23鉢a	3M	赤土	7.5YR5/2 灰黒地	7.5YR5/4 にぶく黄地	長、窄、縫	加熱陽燃(刺突) 丸鉄	—	
467	壺	23鉢a	3M	赤土	7.5YR5/2 灰黒地	7.5YR5/4 にぶく黄地	長、窄	加熱陽燃(刺突) 丸鉄	—	
468	壺	23鉢a	2M・3M	赤土	7.5YR5/4 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	長、窄、縫	十グ	—	
469	漆鉢	13鉢	3M	赤土	10YR5/3 にぶく黄地	10YR5/4 にぶく黄地	石、縫	丸鉄、壓引消レ Lz	内外スス	
470	鉢	13鉢	2M・2N	赤土	2.5Y3/2 黒地	7.5YR5/4 にぶく黄地	石、縫	丸鉄、壓引消レ Lz	—	
471	鉢	13鉢	3O	2M・2N	赤土	7.5YR5/3 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	石、縫	丸鉄、壓引消レ 丸鉄、Lz	内外スス
472	鉢	13鉢	3O	2M・2N	赤土	10YR5/2 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	石、縫	丸鉄、壓引消レ 丸鉄、Lz	内外スス
473	漆鉢	14鉢	3M・3N	赤土	7.5YR5/2 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	長、窄、縫	丸鉄、壓引消レ Lz	丸鉄良	
474	漆鉢	26鉢	2M・3M	赤土	10YR5/2 にぶく黄地	10YR5/2 にぶく黄地	石、縫	丸鉄、压管青文 Lz	—	
475	壺	26鉢	2L	赤土	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 にぶく黄地	石、縫	丸鉄、压管青文 Lz	—	
476	漆鉢	26鉢	2M・3M	赤土	10YR5/1 灰黒地	10YR5/4 にぶく黄地	石、縫	压管文、压管一条 Lz	粘土種良	
477	漆鉢	16鉢a	5P	赤土	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	長、石、縫、縛	沈割透文	内外スス	
478	鉢	16鉢c	4P・5P	赤土	10YR5/1 灰黒地	10YR5/3 にぶく黄地	石、縫	多条底纹、円形透文 Lz	山鱗部突起	
479	漆鉢	16鉢c	5O	赤土	10YR5/2 灰黒地	10YR5/3 にぶく黄地	石、赤、縫	丸鉄	山鱗部突起	
480	鉢	16鉢c	4N	赤土	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	長、石、縫、縛	円形透文 丸鉄吹抜、乳状透文	内外スス	
481	鉢	16鉢c	4O	赤土	7.5YR5/3 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	長、石、縫	円形透文 半円鉄吹抜	直状口縁	
482	鉢	16鉢c	4M	赤土	7.5YR5/2 灰黒地	7.5YR5/4 にぶく黄地	石、縫	円形透文、底文	直状口縁	
483	漆鉢	20鉢	3O・4O	赤土	10YR5/2 にぶく黄地	7.5YR5/4 にぶく黄地	白、赤、縫	丸鉄、压管文 Lz	—	
484	鉢	16鉢b	5O	赤土	10YR5/2 灰黒地	10YR5/2 灰黒地	白、石	压管文、Lz	内外スス	
485	—	8鉢	4N	赤土	7.5YR5/4 にぶく黄地	7.5YR4/2 灰地	白、石、縫	丸鉄、压管文	—	
486	洗鉢	22鉢a	4N	赤土	10YR5/2 灰黒地	7.5YR4/4 地	白、石、縫	丸鉄、压管文	内外スス	

## 観察表

報告番号	分類	出土位置	色調		加土人物	文様	消費指標	備考	
			外側	内側					
486	浅鉢	22群d	3M	客土	10YR5/2 灰黒	10YR6/2 灰黒	黄、緑	藤原条纹文 新文	外スス 表状口縁
487	浅鉢	22群e	2L	客土	10YR5/4 に5YR5/2 灰黒	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	黄、角、緑	虎彌 新文	— 肥手、表状口縁
488	浅鉢	22群e	2L	客土	10YR5/3 に5YR5/2 灰黒	10YR5/3 に5YR5/2 灰黒	黄、石、緑	虎彌二条、朝英 円形浮文	外スス
489	壺か	A群	2M・3M	客土	2.5Y3/1 灰黒	2.5Y3/1 灰黒	黄、緑	虎彌条纹文 新文、丹波窯文	外スス 肥手
490	注口	24群	2M・3M	客土	10YR5/2 灰黒	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	黄、石、雲、緑	虎彌 LR	外スス
491	注口	24群	3N	客土	10YR7/4 に5YR7/2 黄褐	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	角、チャ、緑	ヒガリ	外スス
492	—	26群	3M	客土	2.5Y2/1 灰	2.5Y2/1 灰	—	北手	内西スス 肥手
493	深鉢	20群	3N	客土	10YR5/4 に5YR5/2 灰黒	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	黄、石、緑	朝英 腰の糸(1)	—
495	深鉢	20群	3M	客土	10YR4/2 灰黒	10YR5/3 に5YR5/2 黄褐	石、角、雲、緑、上	虎彌一条 腰の糸(x)	内西スス 口縁部突起
496	深鉢	19群a	2M	客土	10YR4/2 灰黒	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	黄、石、緑	虎彌一条 腰の糸	外スス
497	深鉢	19群a	3N	客土	2.5Y5/2 灰黒	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	黄、石、雲、緑	虎彌一条 腰の糸	—
498	深鉢	19群a	3M	客土	10YR3/2 灰黒	10YR4/2 に5YR4/2 黄褐	黄、石、雲、緑	虎彌一条 腰の糸	外スス
499	壺か	19群a	3M	客土	2.5Y4/1 灰黒	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	—	虎彌一条 腰の糸	外スス
500	深鉢	19群b	2N	客土	10YR4/3 に5YR4/2 黄褐	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	石、雲	柔軟	外スス
501	深鉢	19群b	3M・3N	客土	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	2.5Y5/2 灰	柔軟	—	外スス
502	深鉢	19群b	4N	客土	10YK2/1 黑	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	黄、緑	柔軟	内西スス
503	深鉢	19群b	3N	客土	10YR4/2 灰黒	10YR5/2 灰黒	石、緑	柔軟	外スス
504	深鉢	19群b	2M・3M	客土	2.5YRS/4 に5YR5/2 黄褐	2.5Y5/2 灰	黄、石、緑	柔軟	—
505	深鉢	18群c	2M	客土	10YR4/2 灰黒	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	石、緑	内孔 無筋(HI)	外スス 表状口縁
506	深鉢	18群b1	3M	客土	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	2.5Y5/3 灰	黄、石、雲、緑	側面压痕(LRL) RL	— 表状口縁
507	深鉢	18群b1	4N	客土	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	10YR5/2 灰黒	黄、石、雲、緑	側面压痕(LRL) RL	— 表状口縁
508	深鉢	18群c	3N	客土	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	石、角、緑	円形底文、丸蓋 RL	— 表状口縁
509	深鉢	18群c	3M	客土	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	2.5Y5/2 灰	黄、石、雲	無筋(Lz)	— 表状口縁
510	深鉢	21群b	3N	客土	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	2.5Y5/2 灰	黄、石、チャ、緑	無筋(Lz)	外スス
511	深鉢	18群a	2M・3M	客土	10YR5/2 灰黒	2.5YRS/2 灰	黄、チャ、緑	RL	外スス
512	深鉢	18群a	4N	客土	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	2.5YRS/4 に5YR5/2 黄褐	黄、角、緑	RL	内西スス
513	深鉢	21群a	2M・2N	客土	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	2.5YRS/3 に5YR5/2 黄褐	石、雲、緑	RL	外スス
514	深鉢	26群	3M	客土	10YR5/4 に5YR5/2 黄褐	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	—	加藤鉢帯(円形刺突) 円形刺突、丸蓋	内スス
515	深鉢	26群	3M	客土	10YR5/1 灰黒	10YR2/2 灰	—	加藤鉢帯(円形刺突) 円形刺突、無筋(Lz)	内西スス 肥手
516	深鉢	21群a	3N	客土	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	黄、角、緑	RL	内西スス
517	—	26群	2M・3M	客土	10YR6/3 に5YR6/2 黄褐	10YR6/4 に5YR6/2 黄褐	—	ナゲ	外スス 肥手か
518	鉢	17群	3M	客土	2.5Y4/2 灰黒	2.5Y2/1 灰	—	雲影花文 腰の糸L、LR	— 赤彩
519	上皿	25群a	3L	客土	7.5YRS/4 に5YR5/2 黄褐	2.5Y5/3 黄	黄、緑	ナゲ	—
520	上皿	25群c	4N	客土	10YR7/3 に5YR7/2 黄褐	2.5Y4/1 に5YR4/2 黄褐	チャ、緑	—	—
521	耳鉢9	25群b	3O	客土	10YR7/4 に5YR7/2 黄褐	10R6/6 に5YR6/2 黄褐	—	—	博翠型
522	格土塊	25群e	3M	客土	10YR7/4 に5YR7/2 黄褐	10YR7/4 に5YR7/2 黄褐	ナシ	複雑文	—

## 土製円盤(25群a)観察表

番号	出土位置	直径mm	色・調		出土層位	文様	使用痕	備考
			外周	内面				
44	S146 P5	50	14 にぶ・黄褐色	2.575/3 にぶ・黄褐色	縦	縫合沈縫 LR		素材: 大木Bb ~伴ノ式
67	S191- P1	33	12 にぶ・黄褐色	1.575/4 にぶ・黄褐色	縦	無縫 (Lx)		
102	S191 P187	36	7.575/4 にぶ・黄褐色	7.575/3 にぶ・黄褐色	縦	LR		
192	S194	41	10 にぶ・黄褐色	2.575/1 にぶ・黄褐色	石、縦	ナフ		素材: 木部
268	S1216	52	10 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	横、縦	沈縫、擦り削し LR	◎ ◎	素材: 称名式 高木式
293	P81	31	12 灰褐色	10 灰褐色	石、縦	沈縫 RL	○	
333	P189	28	10 灰褐色	10 灰褐色	石、角、縦	沈縫 RL	△	素材: 大木D式
322	不明	28	10 灰褐色	10 灰褐色	石、縦	RL	△	
524	3N	36	10 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	角、ナフ、縦	LR		
533	2L	27	10 灰褐色	10 灰褐色	枝、石、縦	LR		
536	3N	37	12 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	枝、角、縦	RL		
527	4Q-5Q	44	12 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	縦	-	○ ?	
528	2M-3M	41	12 にぶ・黄褐色	7.575/4 にぶ・黄褐色	枝、縦	ナフ		素材: 木部片
859	2L	30	12 にぶ・黄褐色	7.575/5 にぶ・黄褐色	枝、角、縦	RL		
530	3M	46	12 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	枝、縦	RL		
531	4N	36	12 灰褐色	10 灰褐色	角、縦	沈縫 LR	?	素材: 大木Bb式
532	不明	40	12 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	枝、縦	縫合沈縫 RL		素材: 大木Bb式
533	3N	50	12 にぶ・黄褐色	7.575/3 にぶ・黄褐色	枝、縦	RL		
534	不明	43	10 にぶ・黄褐色	10 にぶ・黄褐色	枝、縦	LR		
535	4P-5P	46	12 灰褐色	10 灰褐色	縦	RL		
536	2M-3M	46	12 にぶ・黄褐色	2.575/2 にぶ・黄褐色	枝、縦	ナフ		素材: 木部片

使用痕: ◎有り □有り △僅か ×不明瞭

## 石器観察表

番号	種別	遺存状況	石材	出土状況・標識名		寸法 (mm)	重さ (g)	備考
				グリッド	遺跡番号	層位		
538	石鏃	完	麻理石	2P	SK97	長方	17.4	12.6
539	石鏃	完	典義石		SK123	壁土下辺	22.9	13.8
540	石鏃	完	頁岩		SK4	搬出断面	38.4	13.2
541	石鏃	完	麻理石	50	凹合縫	21.9	11.2	2.7
542	石鏃	完	麻理石	41-48	客土	39.4	10.2	2.3
543	石鏃	完	麻理石	4-58	客土	39.4	13.7	3.4
544	石鏃	欠	麻理石	26	瓦上層	24.6	15.6	3.9
545	石鏃	完	麻理石	28	客土	31.6	15.3	4.2
546	石鏃	完	頁岩	4-26	客土	23.3	13.0	3.7
547	石鏃	完	麻理石	20	客土	36.8	12.4	2.5
548	石鏃	完	麻理石	20	客土	38.6	13.7	4.0
549	石鏃	完	頁岩	48	客土	26.7	14.0	5.6
550	石鏃	欠	典義石	38	客土	27.5	17.2	2.9
551	石鏃	完	頁岩	38	搬出断面	29.3	12.7	5.3
552	石鏃	完	麻理石	P110	搬出	51.8	17.9	10.1
553	石鏃	完	頁岩	SK97	搬出	53.9	17.9	5.3
564	石鏃	完	頁岩	68	客土	26.4	32.7	13.4
555	石鏃-竹刀型	完	頁岩	28	客土	77.8	24.0	8.5
556	不定型	△	メノク	20	客土	97.3	23.8	16.2
557	不定型	-	搬出断面	SK164	搬出	63.9	30.2	14.7
558	不定形刃器	搬出	頁岩			42.0	39.2	5.3
559	不定形刃器	搬出	頁岩			30.7	21.8	7.3
560	不定型	-	搬出断面	搬土		40.7	23.6	16.4
561	不定形刃器	搬出	頁岩			43.3	24.2	12.9
562	不定形刃器	半欠	典義石			79.3	22.6	6.0
563	不定形刃器	半欠	麻理石			24.5	24.2	6.2
564	不定型	-	搬出断面			89.5	44.9	11.4
565	不定形刃器	半欠	麻理石			26.4	44.8	11.4
566	不定形刃器	搬出	典義石			30.6	15.3	10.9
567	不定形刃器	搬出	搬出			55.3	47.0	9.7
568	不定形刃器	完	頁岩			43.4	37.7	10.7

## 観察表

番号	種別	土壌状況	石材	出土地点・遺物名			重量(g)	量さ	備考
				グリッド	遺構番号	位置			
569	不定形石器	底質	板状岩	3M		土上	58.3	44.6	13.7
570	不定形石器	底質	板状岩	3M		土上	77.9	32.6	19.0
571	不定形石器	底質	板状岩	2M・3M		土上	64.3	37.9	9.9
572	不定形石器	半灰	板状岩	2M		土上	49.2	40.1	8.0
573	不定形石器	底質	板状岩	10・20P		土上	105.8	109.4	39.0
574	不定形石器	底質	板状岩	4M		土上	105.8	93.4	20.0
575	板状石器	灰	板状岩	3M		土上	42.2	53.7	10.7
576	板状石器	灰	板状岩	4M		土上	43.8	52.9	15.1
577	板状石器	灰	板状岩片	SI91-P1		土上	49.2	73.4	11.2
578	板状石器	灰	板状岩	3M		土上	58.8	43.5	11.7
579	板状石器	灰	板状岩	2M		土上	31.6	41.3	6.5
580	板状石器	灰	板状岩	SI98		土上	35.6	42.0	8.1
581	板状石器	灰	砂岩	3M		土上	39.4	51.5	12.0
582	板状石器	灰	砂岩	2M・3M		土上	45.3	58.1	12.7
583	板状石器	灰	板状岩	3M		土上	47.4	65.2	11.2
584	板状石器	灰	火山岩	3M		土上	53.2	64.9	19.4
585	板状石器	灰	板状岩片	4M		土上	51.2	57.3	15.7
586	板状石器	半灰	板状岩	2M		土上	46.8	57.4	16.4
587	打制石器	半灰	板状岩	P113		土上	101.6	83.8	13.4
588	打制石器	半灰	板状岩	-		土上	95.7	79.8	14.9
589	打制石器	半灰	板状岩	安岳山		土上	99.9	52.1	22.7
590	打制石器	半灰	板状岩片	3M		土上	112.7	55.5	29.1
591	打制石器	半灰	板状岩片	3M		土上	127.0	69.4	24.1
592	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	105.7	42.0	11.6
593	打制石器	半灰	板状岩片	2M		土上	143.5	49.1	26.0
594	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	125.9	45.6	15.8
595	打制石器	半灰	板状岩片	3M		土上	111.8	55.7	26.4
596	打制石器	半灰	板状岩	2M・3M		土上	142.7	47.8	27.3
597	打制石器	半灰	板状岩片	2M・3M		土上	131.1	79.4	33.2
598	打制石器	半灰	板状岩	2M・3M		土上	85.3	42.8	12.3
599	打制石器	半灰	板状岩片	2M		土上	82.6	70.2	11.1
600	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	89.5	45.9	17.6
601	打制石器	半灰	板状岩片	3M		土上	96.8	56.5	12.6
602	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	89.6	70.9	24.0
603	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	109.1	42.8	14.7
604	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	132.2	83.6	16.7
605	打制石器	半灰	板状岩	3M		土上	134.4	66.1	18.8
606	磨製石器	半灰	板状岩	3M		土上	34.7	20.0	5.2
607	磨製石器	半灰	板状岩	3M		土上	55.0	18.2	6.5
608	磨製石器	半灰	板状岩	4M・5M		土上	76.8	45.4	21.8
609	磨製石器	半灰	板状岩	3M		土上	67.3	34.7	12.9
610	磨製石器	半灰	板状岩	3M		土上	78.7	43.0	9.5
611	磨製石器	半灰	板状岩片	3M		土上	112.7	48.0	23.2
612	磨製石器	半灰	板状岩片	3M		土上	146.5	66.7	34.5
613	石錐	灰	板状岩	3M・2M		土上	48.7	42.5	13.5
614	石錐	灰	板状岩	3M		土上	45.0	40.5	13.0
615	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	82.8	45.5	13.0
616	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	50.7	51.1	15.2
617	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	48.5	24.7	11.2
618	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	21.0	47.7	16.5
619	石錐	灰	板状岩片	3M・2M		土上	40.0	41.0	14.0
620	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	58.0	43.0	11.0
621	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	57.0	35.0	11.0
622	石錐	灰	板状岩片	3M		土上	81.7	84.7	21.0
623	磨石	灰	板状岩	安岳山	P164	土上	169.0	72.3	49.0
624	磨石	灰	板状岩	4M		土上	116.4	96.6	37.1
625	磨石	灰	板状岩	安岳山		土上	139.9	69.4	66.0
626	磨石	灰	砾狀石	3M		土上	90.4	81.8	36.1
627	磨石	灰	砾狀石	3M		土上	137.0	55.2	1,062.0
628	磨石	灰	砾狀石	2M		土上	272.0	86.0	65.5
629	磨石	灰	砾狀石	2M		土上	141.8	62.7	31.0
630	磨石	灰	砾狀石	3M		土上	175.6	60.1	58.4
631	磨石	灰	砾狀石	3M		土上	15.7	67.5	50.8
632	磨石	半灰	砾狀石	SI98		土上	97.8	97.6	31.5
633	磨石	半灰	砾狀石	3M・3M		土上	128.0	124.0	38.0
634	磨石	半灰	砾狀石	SI97		土上	167.5	100.0	51.0
635	磨石	半灰	砾狀石	2M		土上	141.0	101.0	66.0
636	石臼	半灰	砾狀石	4M・3M		土上	106.0	107.0	65.0
637	石臼	半灰	砾狀石	4M		土上	226.0	223.0	99.0
638	石臼	半灰	砾狀石	-		土上	178.0	128.0	55.0
639	陶輪石器	灰	砾狀石	-		土上	20.8	21.4	4.8
640	陶輪石器	灰	砾狀石	-		土上	26.7	18.6	11.7
641	陶輪石器	半灰	砾狀石	-		土上	36.2	28.4	14.4
642	陶輪石器	半灰	砾狀石	2M		土上	72.2	70.5	22.5
643	陶輪石器	半灰	砾狀石	4M		土上	63.4	58.3	15.4
644	陶輪石器	半灰	砾狀石	2M・3M		土上	75.1	60.4	18.7
645	小錐	灰	砾狀石	2M		土上	244.5	69.7	55.0

報告 番号	種別	保存 状況	石材	内地点・産地名			高さ (m)	重さ (t)	備考
				グリッド	産地番号	層位			
646	石壁	灰	麻粒石	40		土	187.0	65.5	58.0
647	石壁	灰	麻粒石	3P		土	243.0	120.0	90.0
648	石壁	灰	麻粒片岩	3L		土	180.0	48.0	46.9
649	石壁	灰	麻粒片岩	3P		土	90.7	18.4	18.6
650	石板	-	真透	P111		土	82.3	64.0	38.7
651	石板	-	真透真透	50		土	39.2	57.3	33.1
652	石板	-	真透	S191-P8		土	71.3	82.6	30.6
653	石板	-	灰石英	2M+3N		土	59.0	65.8	51.8
654	石板	-	真透	2M+3N		土	41.2	39.5	26.1
655	石板	-	真透	SK67		土	71.5	59.2	27.8
656	石壁	-	真透	40		土	137.4	132.4	48.0
657	石板	-	真透	3R		土	193.0	127.9	77.0
658	石壁	-	真透	4T		土	164.0	216.0	112.0
								4,456.0	

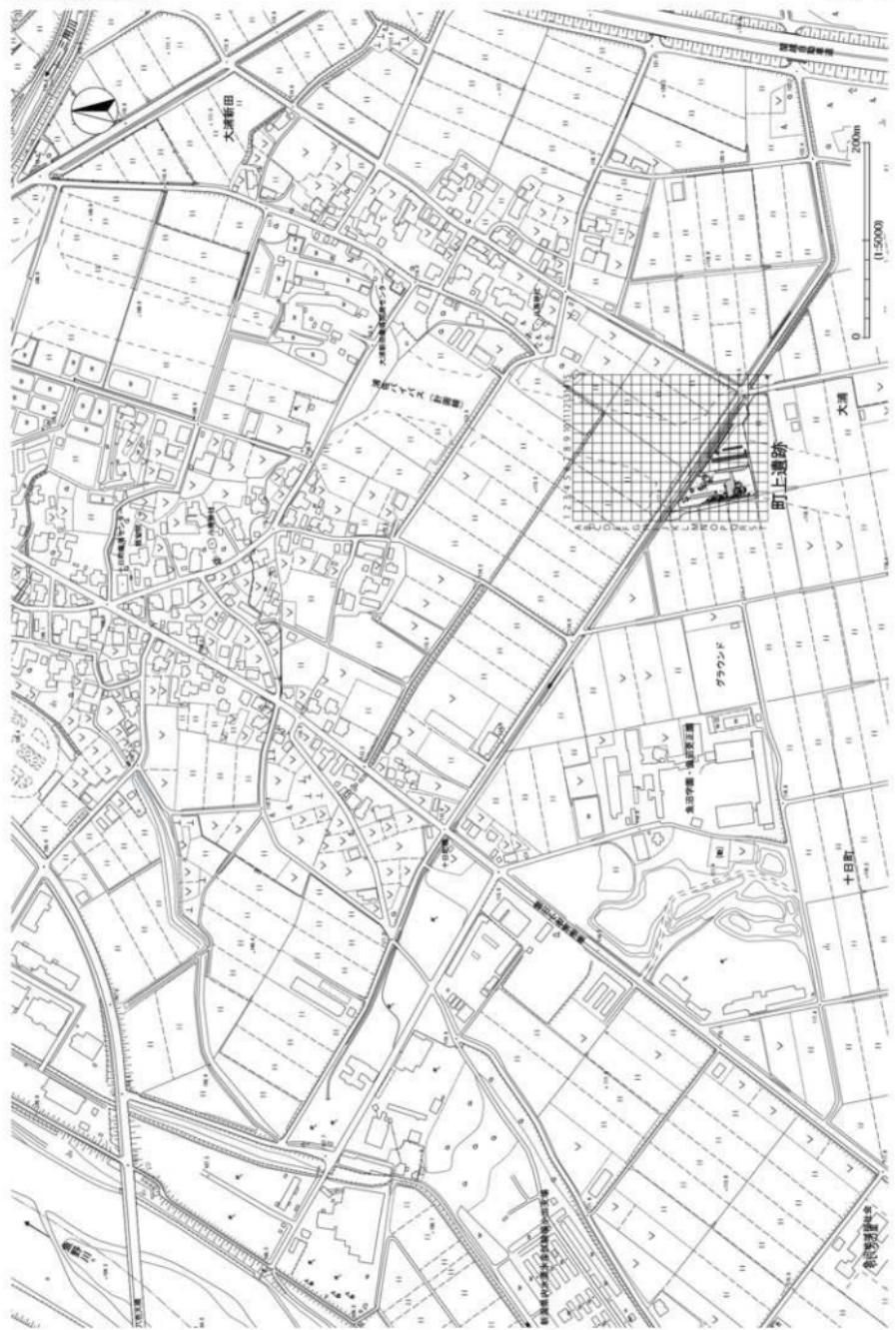
# 図 版

## 凡 例

- 1 遺構断面図の地山以下は斜線のスクリーントーンで示した。
- 2 セクション中の礫は■、柱痕は■で示した。
- 3 土層説明の土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』（2007年版）に準拠する。
- 4 土層説明の粘性及びしまりは、強・やや強・中・やや弱・弱の5段階で示した。
- 5 土層説明の混入物の密度は、極めて多量・多量・少量・僅かの4段階で示した。
- 6 セクション中の「RB」はロームブロックの略号である。

調査区と周辺の地形

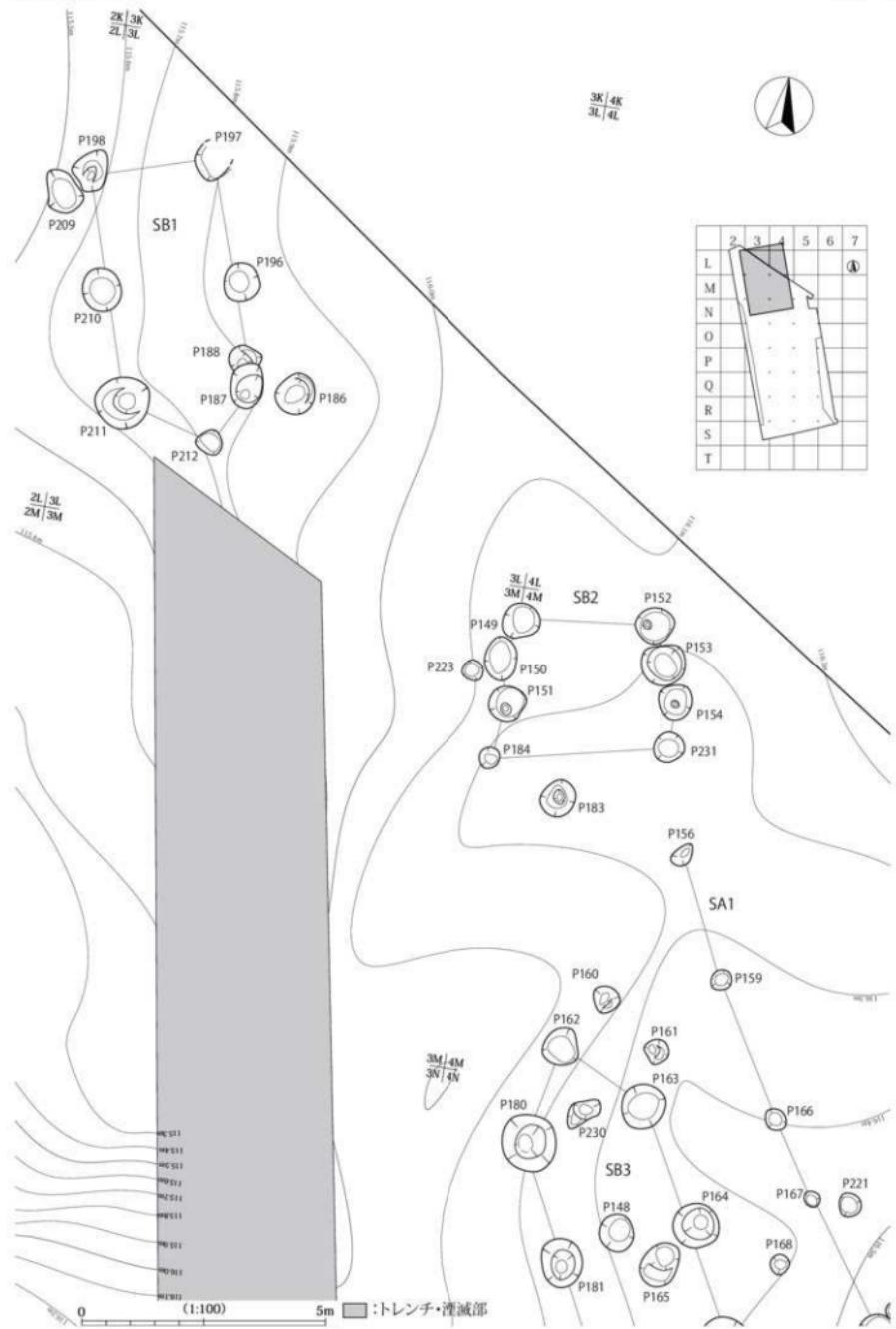
図版 1





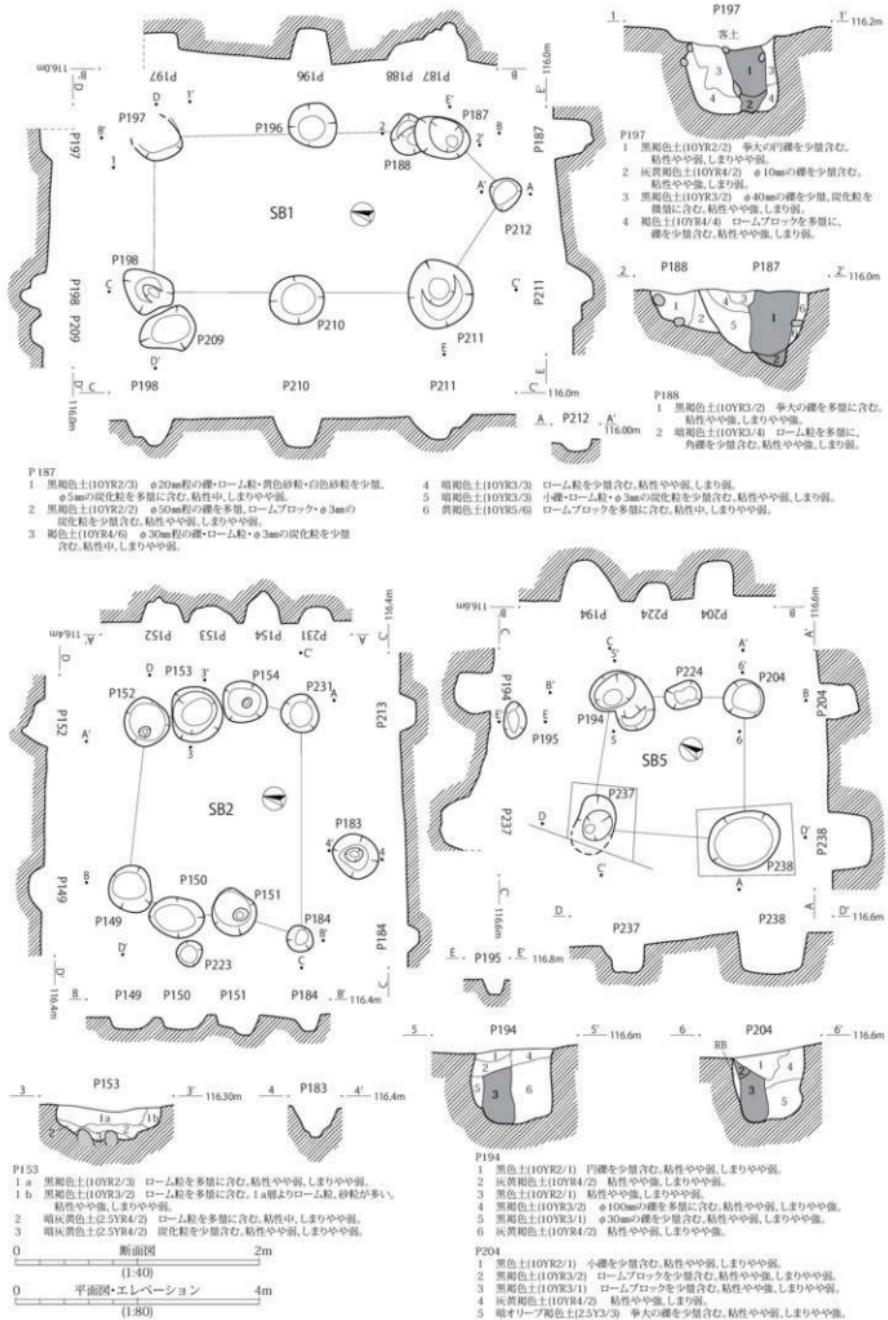
遺構分割図(1)

図版 3

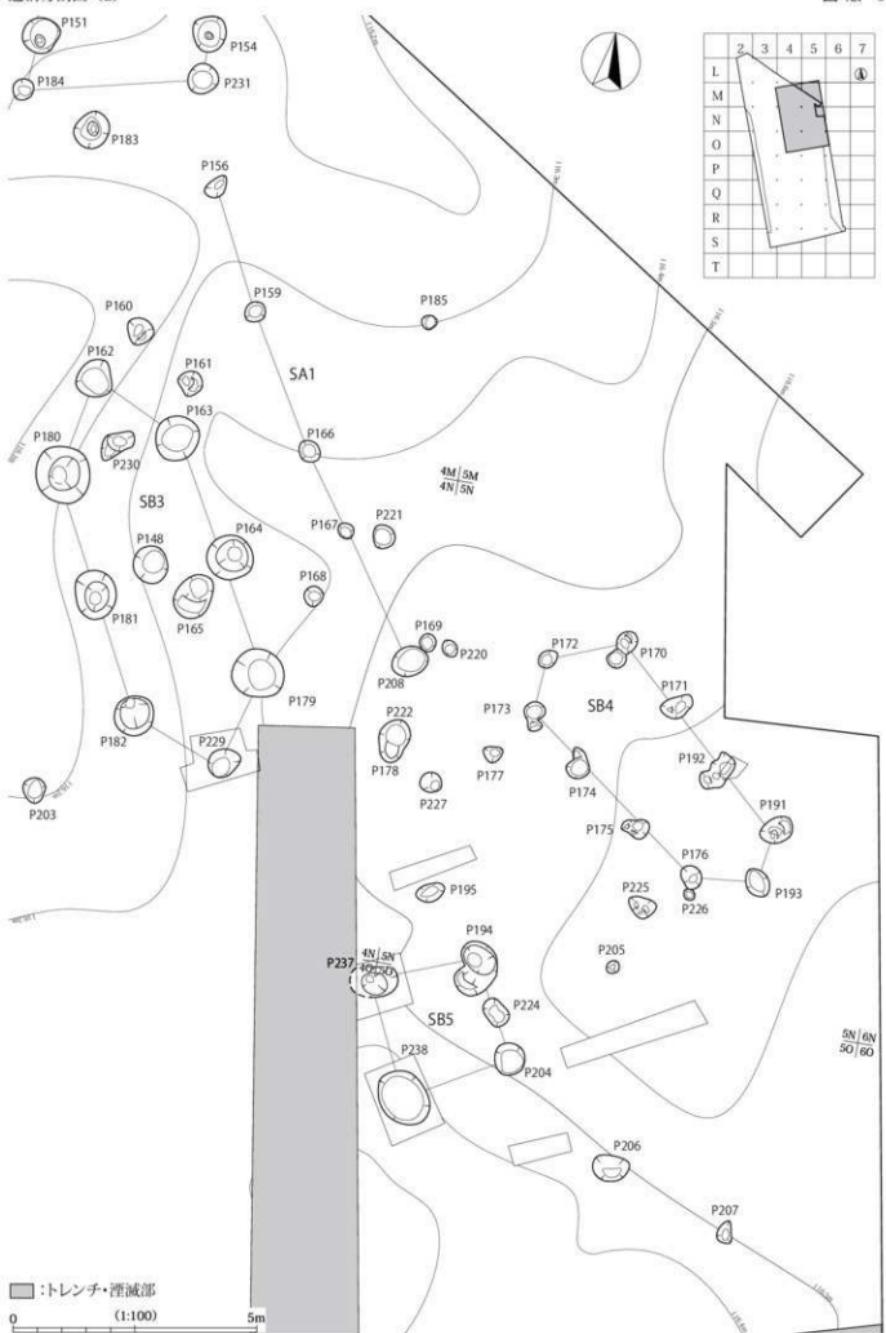


図版 4

遺構個別図 (1)

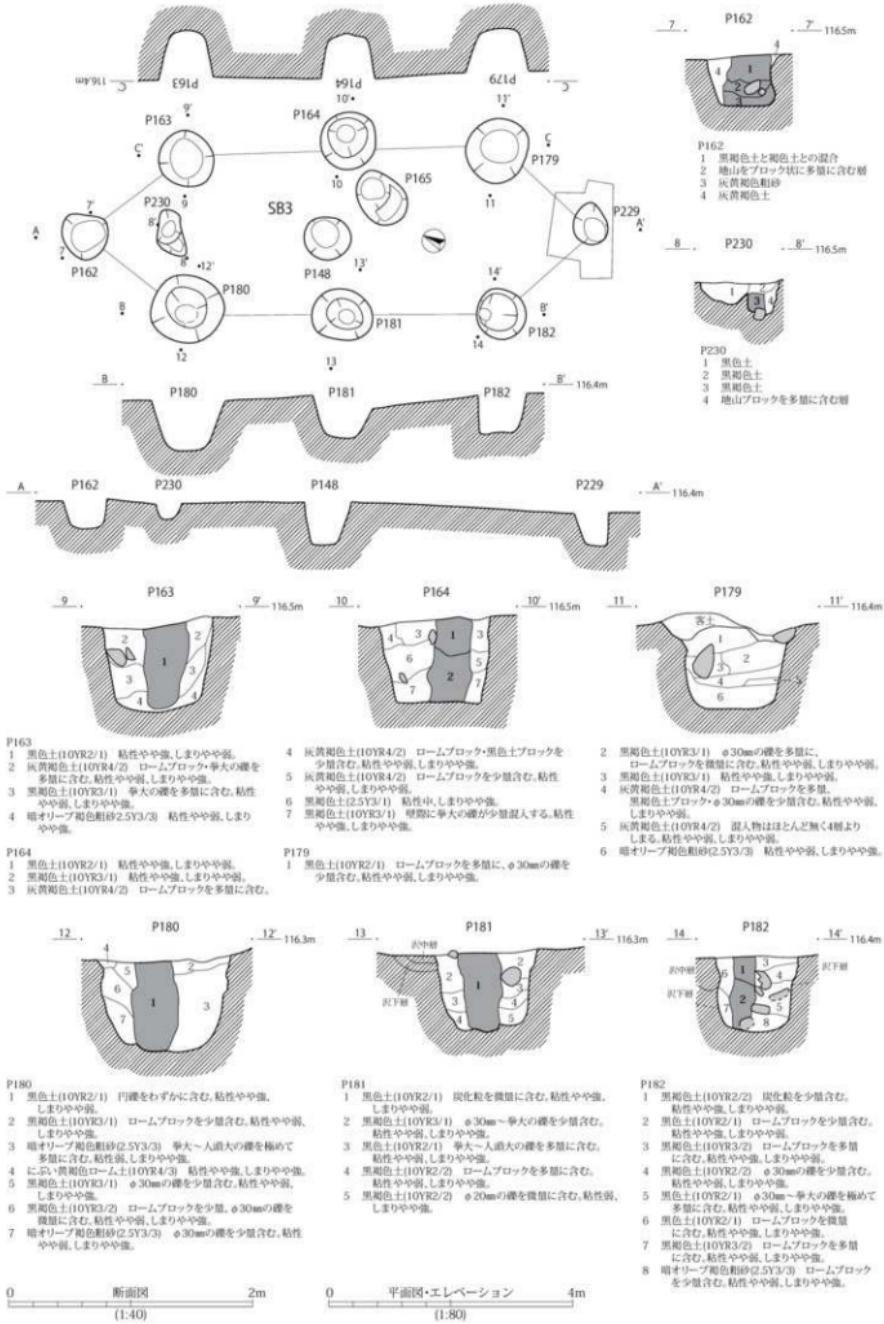


遺構分割図 (2)

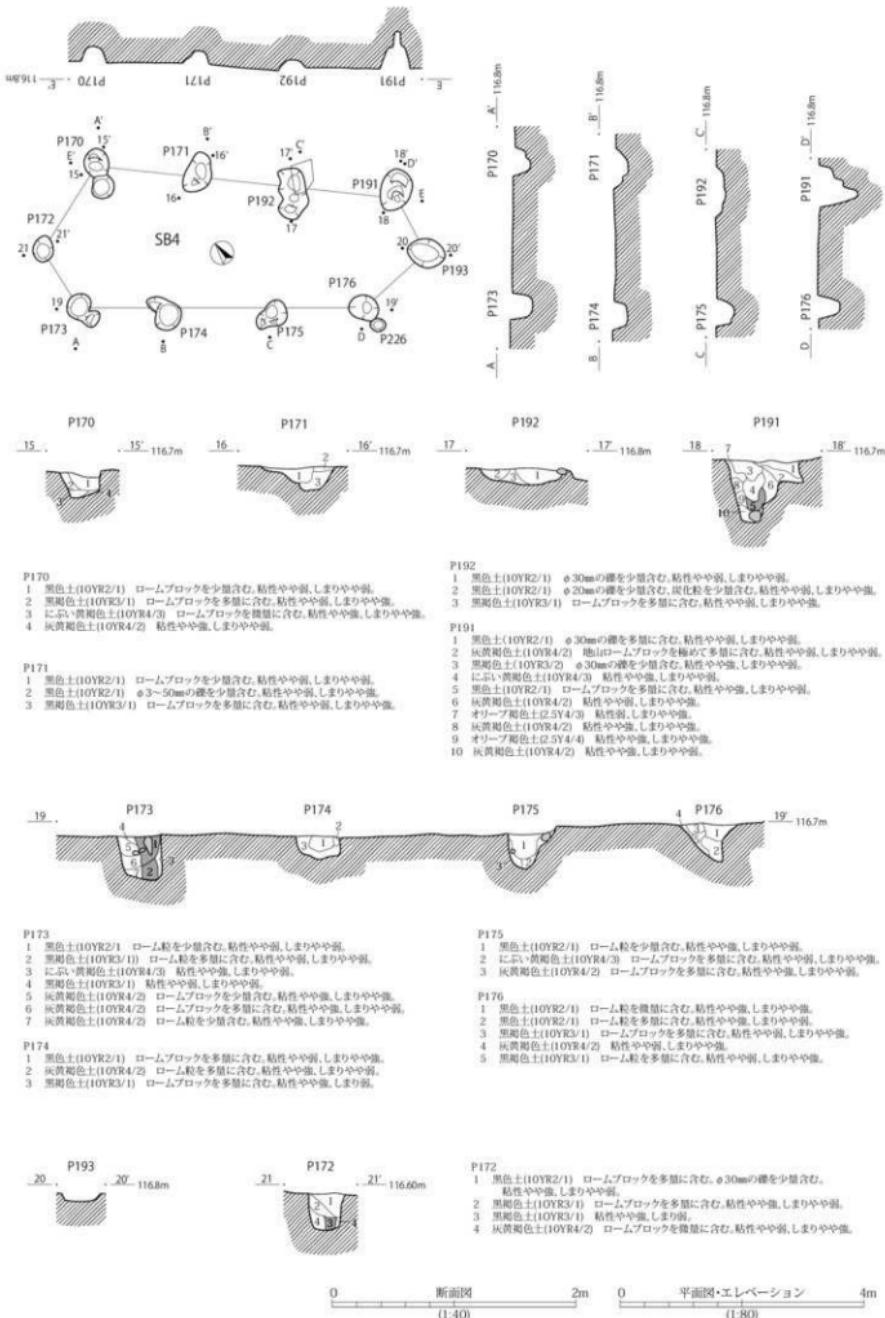


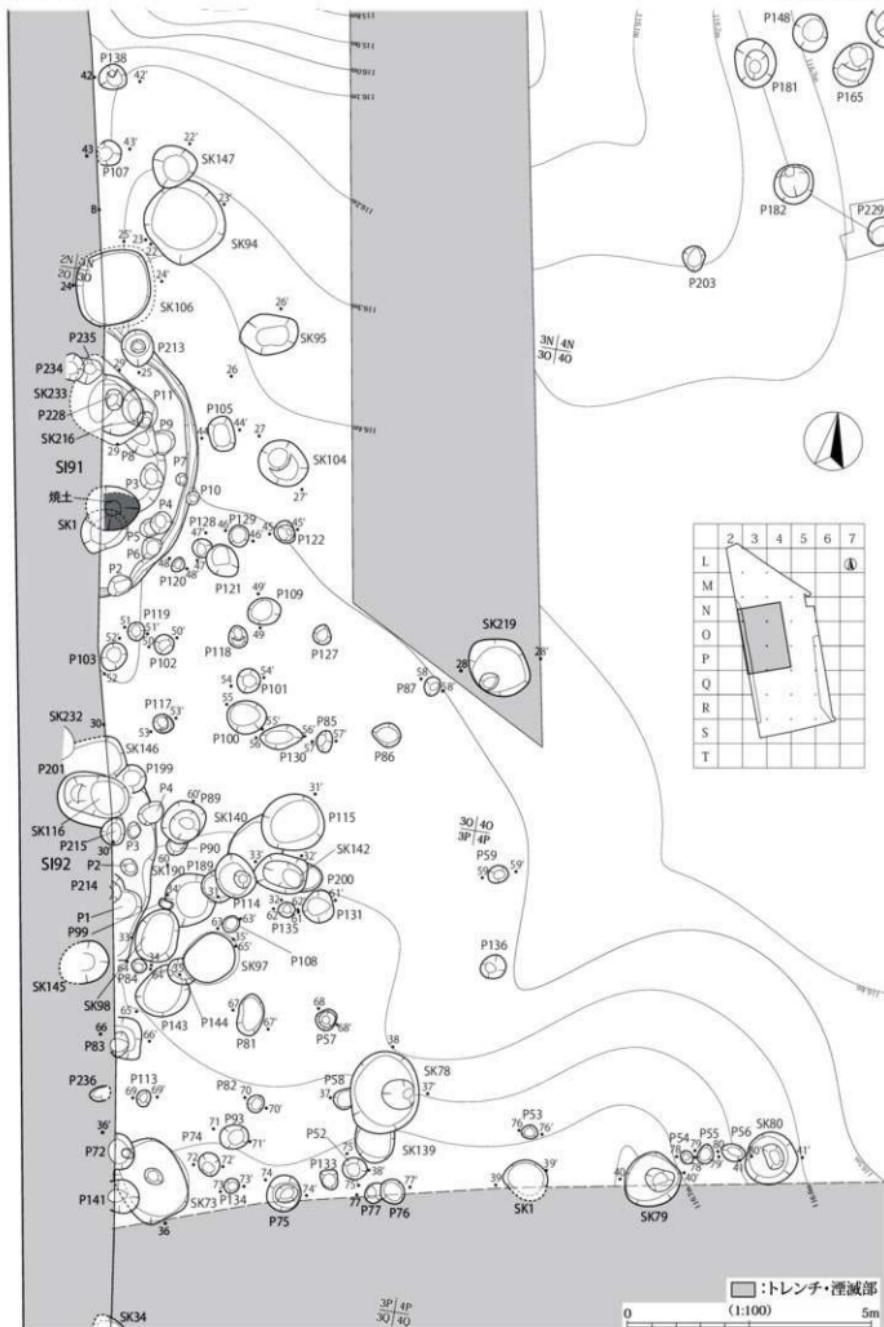
圖版 6

遺構個別図(2)

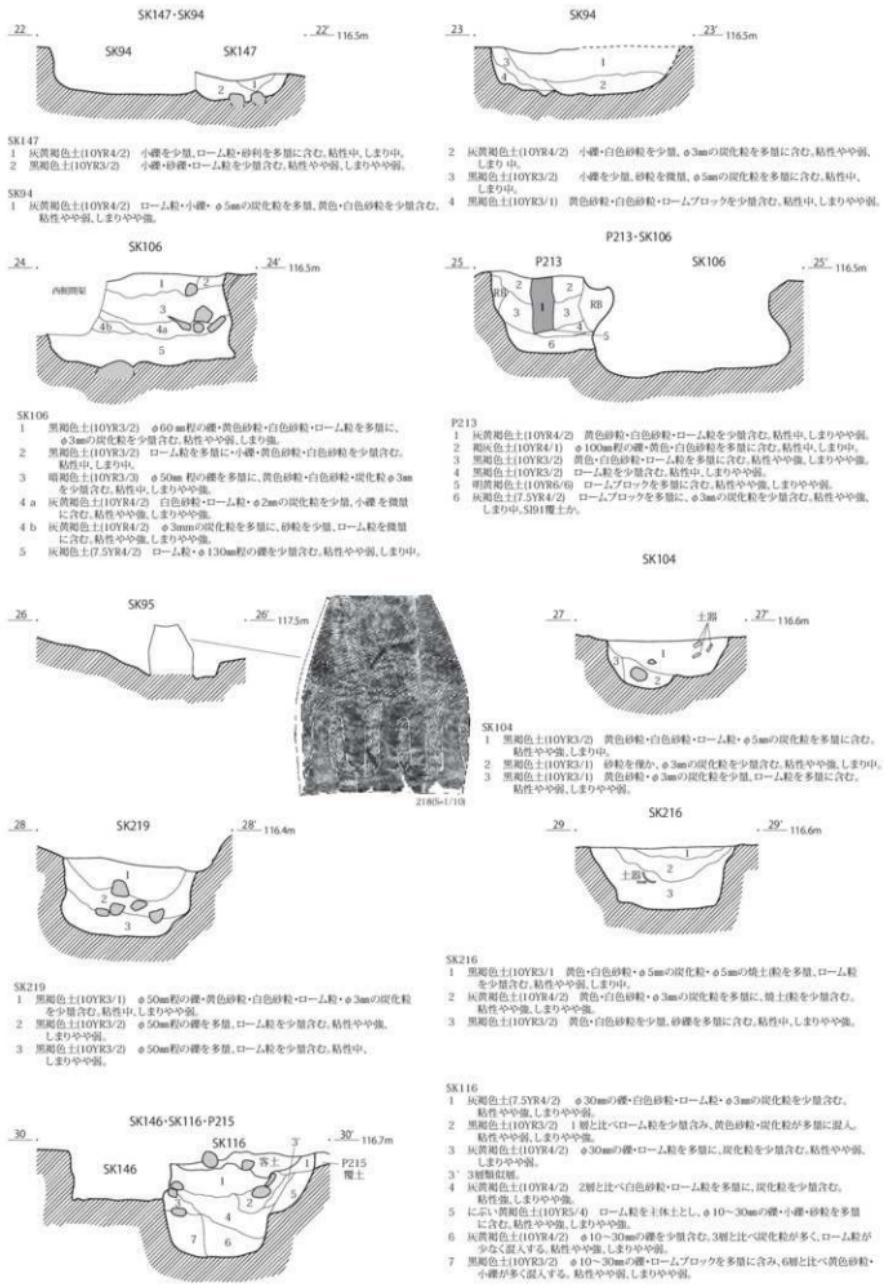


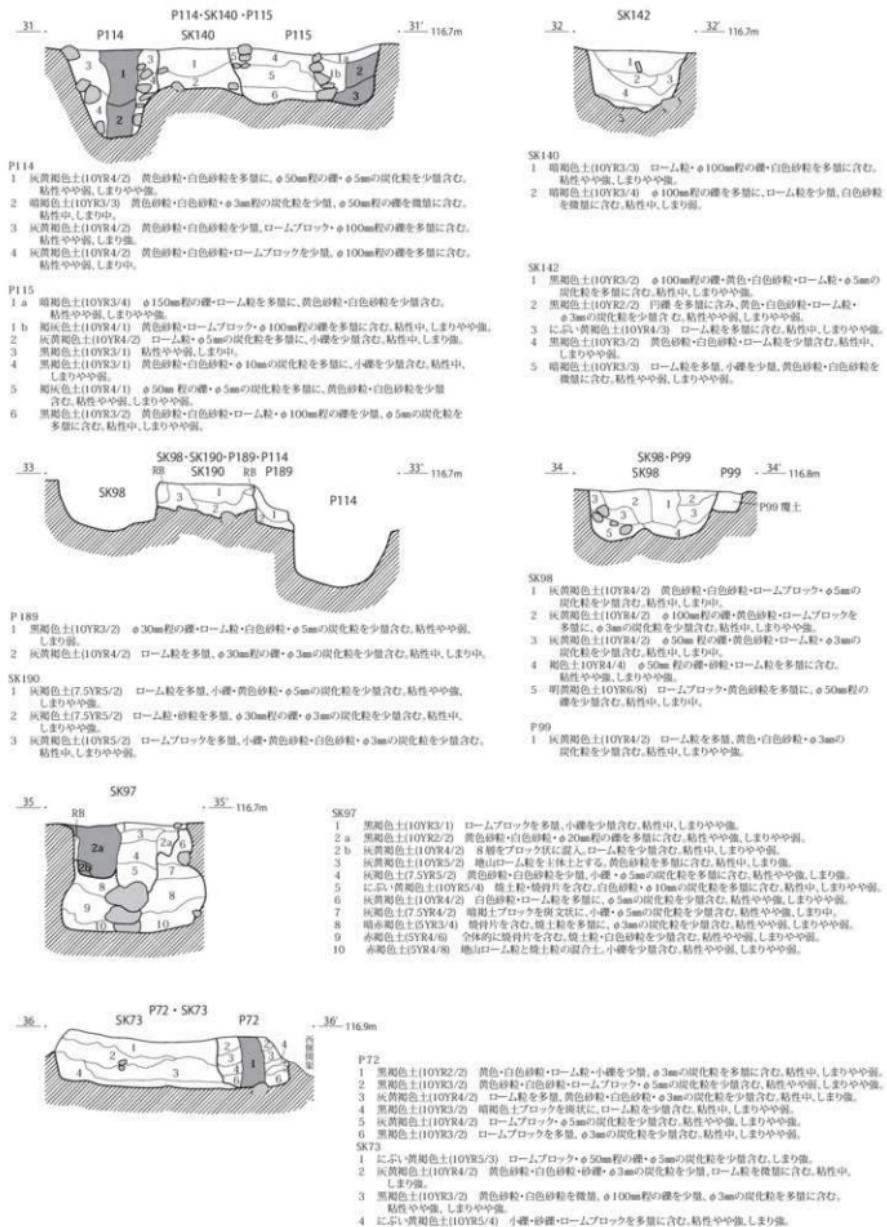
遺構個別図 (3)





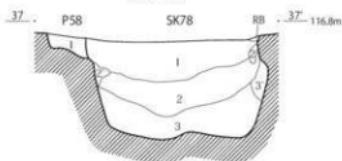
## 遺構個別図 (4)





## 遺構個別図 (6)

SK78-P58



P58

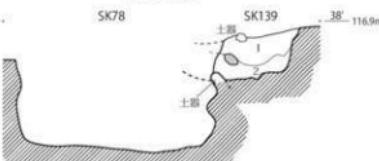
- 1 明褐色土(I0YR3/3) 小礫・ローム・ブロックを多量に含む。粘性中。しまりやや強。

SK78

- 1 黒褐色土(I0YR3/2) 小礫を多量に、黄色砂粒・白色砂粒・φ5mmの炭化粒を少量含む。粘性やや強。しまりやや強。  
2 岩頭面付近で、100mm程の繩を多量に、ローム粒を少量、白色砂粒を微量に含む。粘性やや強。しまりはローム・ブロックを多量に含む。

- 3 黒褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒を多量に、φ3mmの炭化粒を少量含む。粘性中。しまり中。ローム・ブロックを多量に含む。

SK139-SK78

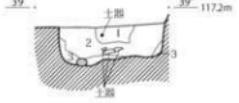


SK139

- 1 明褐色土(I0YR3/3) φ100mm程の繩・黄色・白色砂粒・φ5mmの炭化粒を多量に、ローム粒を微量に含む。粘性中。しまりやや強。

- 2 灰黄褐色土(I0YR4/2) φ50mm程の繩・ローム・ブロックを多量に、黄色・白色砂粒を少量。φ3mmの炭化粒を微量に含む。粘性中。しまりやや強。

SK1



SK1

- 1 黒褐色土(I0YR2/3) ローム粒とφ3mmの炭化粒を少量含む。粘性あり。しまり強。  
2 黒褐色土(I0YR2/2) ローム・ブロックとφ5mmの炭化粒を少量含む。粘性やや弱。しまりやや強。

- 3 明褐色土(I0YR3/3) ローム・ブロックを多量に含む。粘性中。しまりやや強。

SK80

- 1 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒を少量含む。しまりやや弱。

- 2 灰褐色土(I0YR4/1) 刻れ・ローム粒を多量に含む。粘性やや弱。

- 3 灰黄褐色土(I0YR4/2) ローム粒・φ50mm程の繩を多量に含む。粘性やや強。

SK79



SK79

- 1 灰黄褐色土(I0YR4/2) ローム・ブロックを多量に、砂粒を少量含む。粘性中。しまりやや弱。

- 2 黑褐色土(I0YR3/2) ローム・ブロックを少量、φ50mm程の繩を多量に含む。粘性やや弱。しまりやや強。

- 3 明褐色土(I0YR3/3) ローム・ブロック・φ50mm程の繩を多量に含む。粘性やや弱。しまりやや強。

- 4 黑褐色土(I0YR3/2) 2層付近で、φ50mm程の繩を少量含む。粘性やや強。しまりやや弱。

- 5 黑褐色土(I0YR4/2) 砂粒を含む。粘性やや弱。しまりやや弱。

- 6 明褐色土(I0YR3/3) ローム粒・φ60mm程の繩を多量に含む。粘性やや弱。しまりやや強。

SK80



P138



P138

- 1 黒褐色土(I0YR3/2) φ30mm程の繩・黄色・白色砂粒・白色砂粒・φ5mmの炭化粒を少量含む。粘性中。しまりやや弱。

- 2 灰褐色土(I0YR4/2) 小礫を多量、ローム粒・φ3mmの炭化粒を少量含む。粘性やや弱。しまりやや強。

P107

P107



P105

- 1 黒褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・小礫を少量含む。

- 2 灰褐色土(I0YR4/2) 黄色砂粒・白色砂粒を多量、ローム粒を少量含む。

- 3 明褐色土(I0YR3/4) 白色砂粒・白色砂粒を少量、ローム粒を多量に含む。

- 4 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒・φ5mmの炭化粒を多量に含む。粘性中。しまりやや強。

- 5 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒を多量に含む。粘性中。しまりやや強。

- 6 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒を少量含む。粘性中。しまりやや強。

P122



P122

- 1 黒褐色土(I0YR3/2) 黄色・白色砂粒・ローム粒・φ5mmの炭化粒を多量に含む。

- 2 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色・白色砂粒・ローム粒を多量、φ3mmの炭化粒を少量含む。

- 3 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒を微量、ローム粒を多量に含む。粘性中。しまりやや強。

- 4 ぶい 黄褐色土(I0YR6/4) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒を少量含む。粘性中。しまり中。

P129



P129

- 1 にぶい 黄褐色土(I0YR5/4) 黒色ブロックを斑状に、φ30mm程の繩・ローム粒・φ5mmの炭化粒を少量含む。粘性中。しまりやや強。

- 2 にぶい 黄褐色土(I0YR5/4) 砂粒・ローム・ブロック・φ3mmの炭化粒を多量、φ50mm程の繩を少量含む。粘性中。しまりやや強。

- 3 明褐色土(I0YR7/6) ローム粒を多量に含む。粘性中。しまりやや強。

P128

- 1 黑褐色土(I0YR3/2) 砂粒・ローム・ブロック・φ3mmの炭化粒を多量、φ50mm程の繩を少量含む。粘性中。しまりやや強。

- 2 黑褐色土(I0YR3/2) ローム・ブロックを極めて多量に含む。

P128

P128



P120

- 1 黒褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・拳大の繩を多量。φ5mmの炭化粒を少量含む。

- 2 黑褐色土(I0YR4/2) ローム粒を多量に含む。φ50mm程の繩・φ3mmの炭化粒を少量含む。

- 3 黑褐色土(I0YR4/2) 黄色砂粒・白色砂粒を微量、ローム粒を多量に含む。粘性中。しまりやや強。

- 4 黑褐色土(I0YR4/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒を少量含む。粘性中。しまりやや強。

P102



P102

- 1 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・拳大の繩を多量。φ5mmの炭化粒を少量含む。

- 2 黑褐色土(I0YR4/2) ローム粒を多量に含む。φ50mm程の繩・白色砂粒・ローム・ブロックを多量。

- 3 黑褐色土(I0YR4/2) φ3mmの炭化粒を少量含む。明顯に小礫が多く含まれる。粘性やや強。しまりやや強。

P119

- 1 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒・小礫を多量。φ3mmの炭化粒を少量含む。

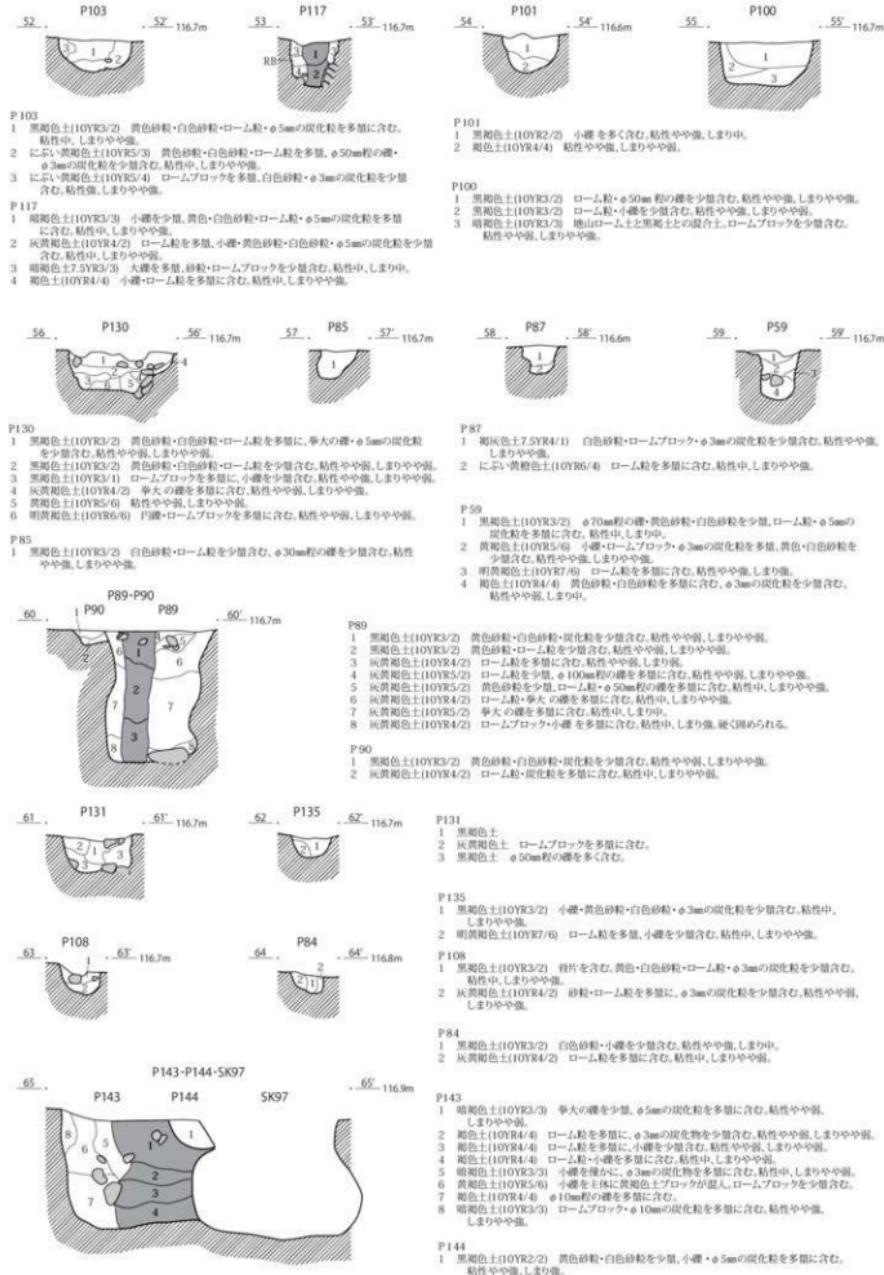
- 2 黑褐色土(I0YR4/2) ローム粒を多量。白色砂粒・φ3mmの炭化粒を少量含む。粘性やや強。しまりやや強。

- 3 黑褐色土(I0YR4/2) ローム・ブロック・小礫を多量に含む。粘性やや強。しまりやや強。

P119

- 1 黑褐色土(I0YR3/2) 黄色砂粒・白色砂粒・ローム粒・小礫を多量。φ3mmの炭化粒を少量含む。

- 2 黑褐色土(I0YR4/2) ローム粒を多量。白色砂粒・φ3mmの炭化粒を少量含む。粘性やや強。しまりやや強。

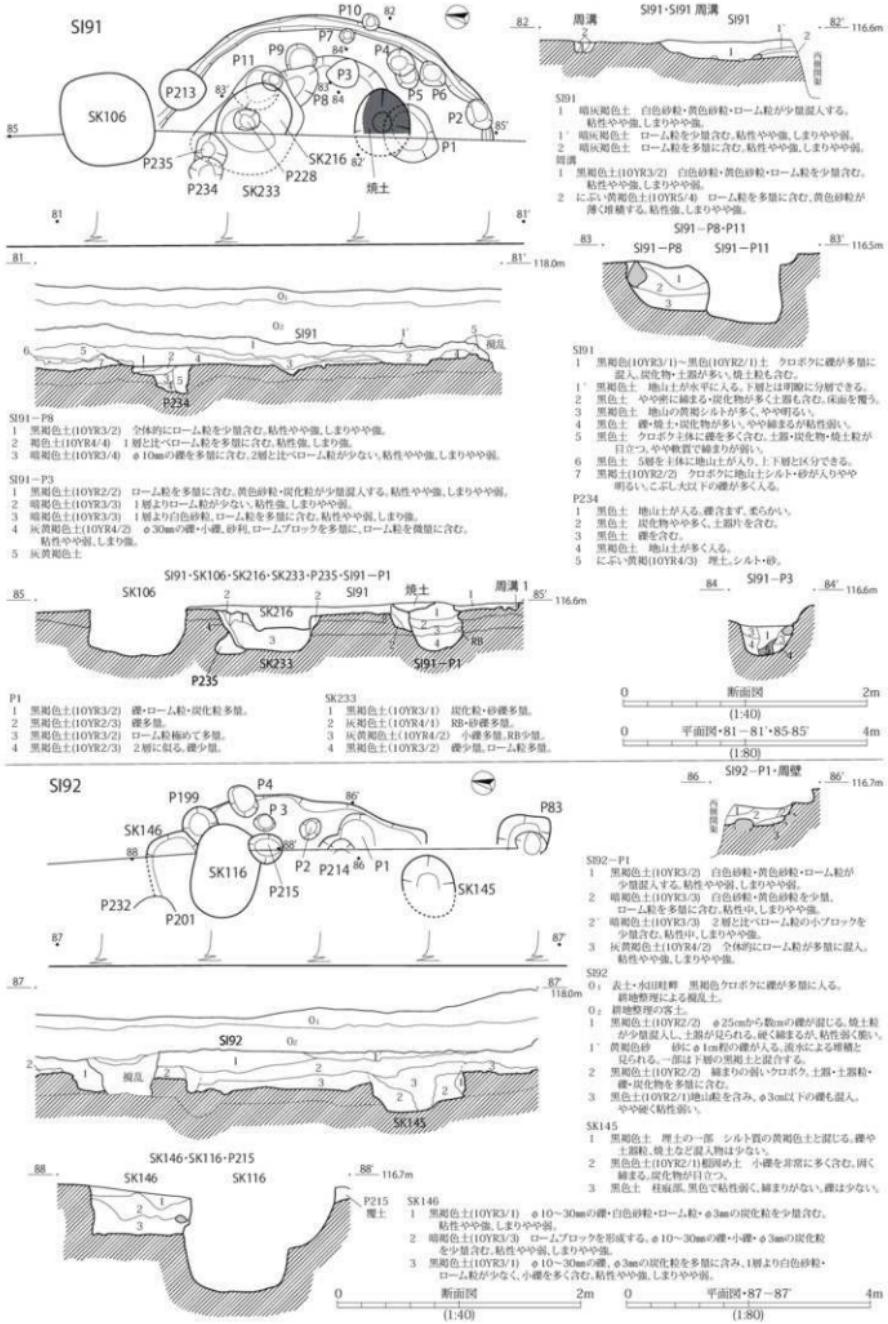


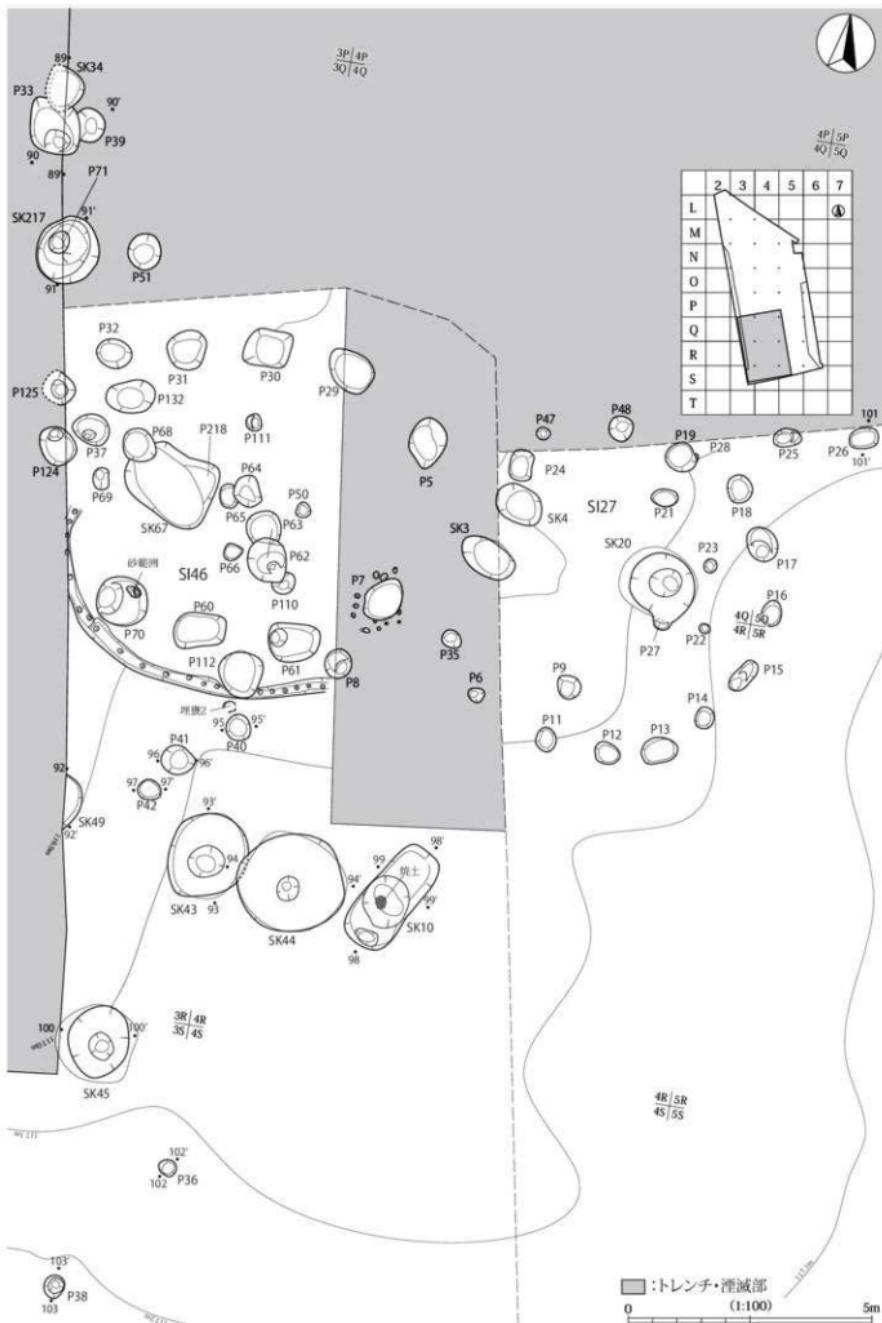
遺構個別図 (8)



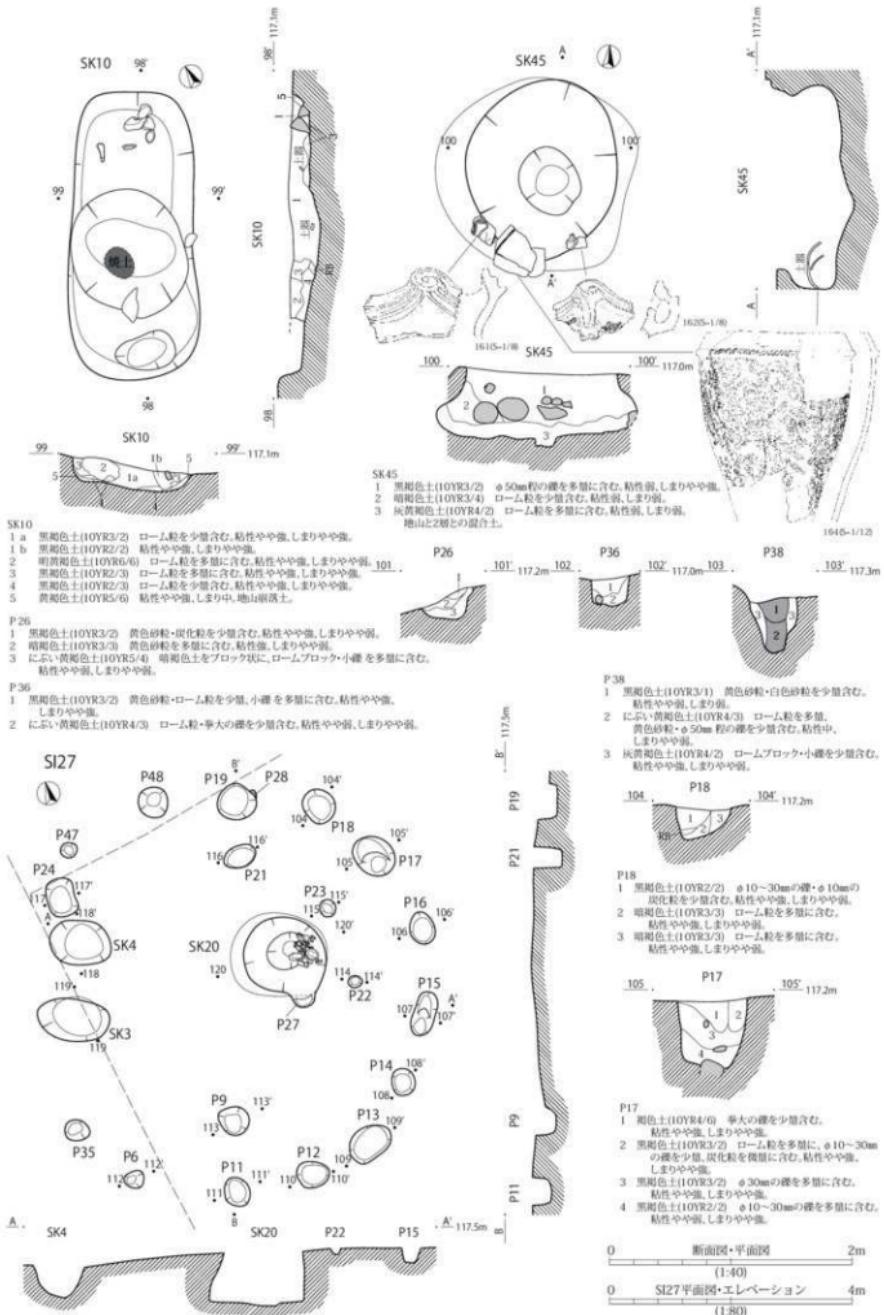
圖版 14

### 遺構個別図 (9)



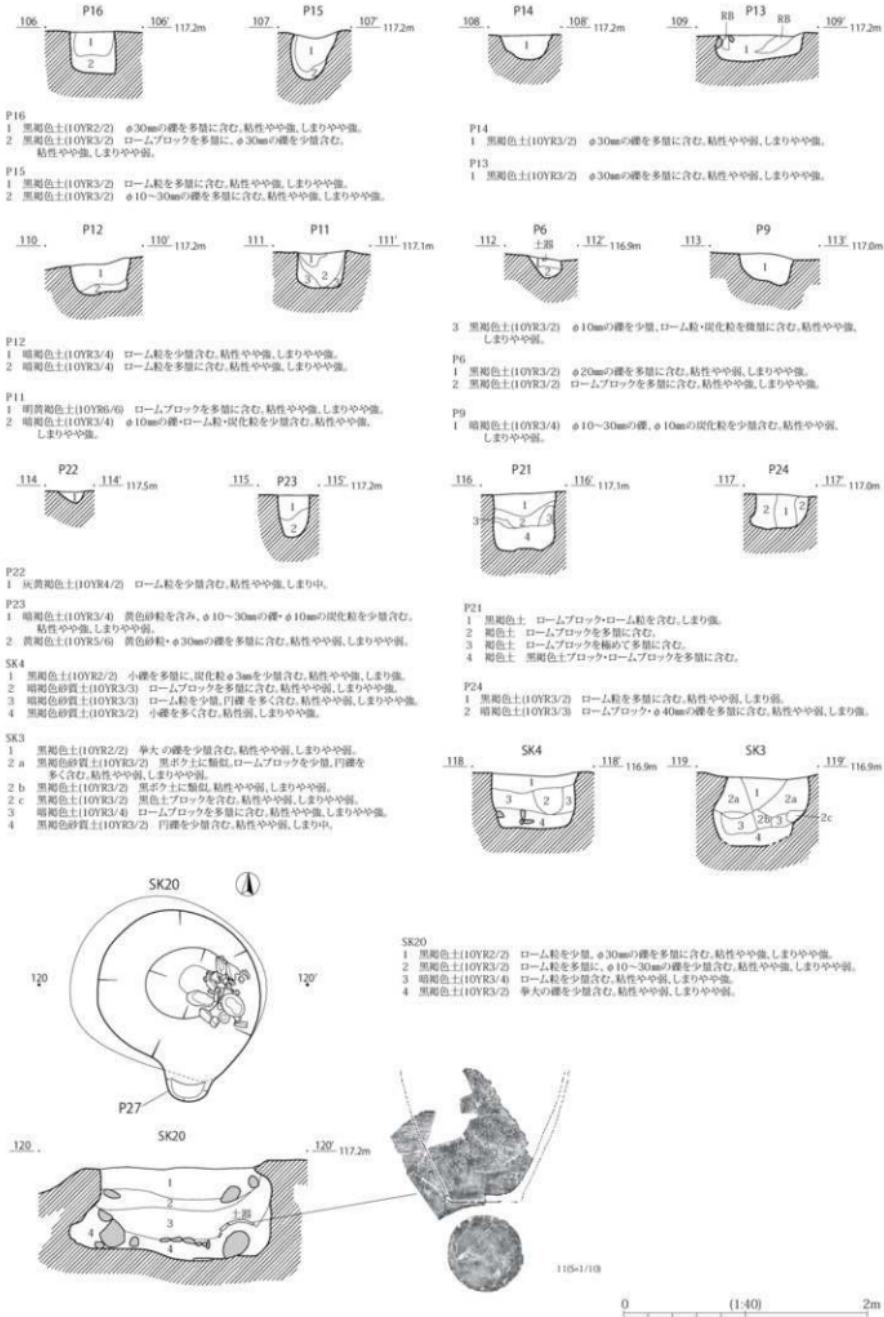




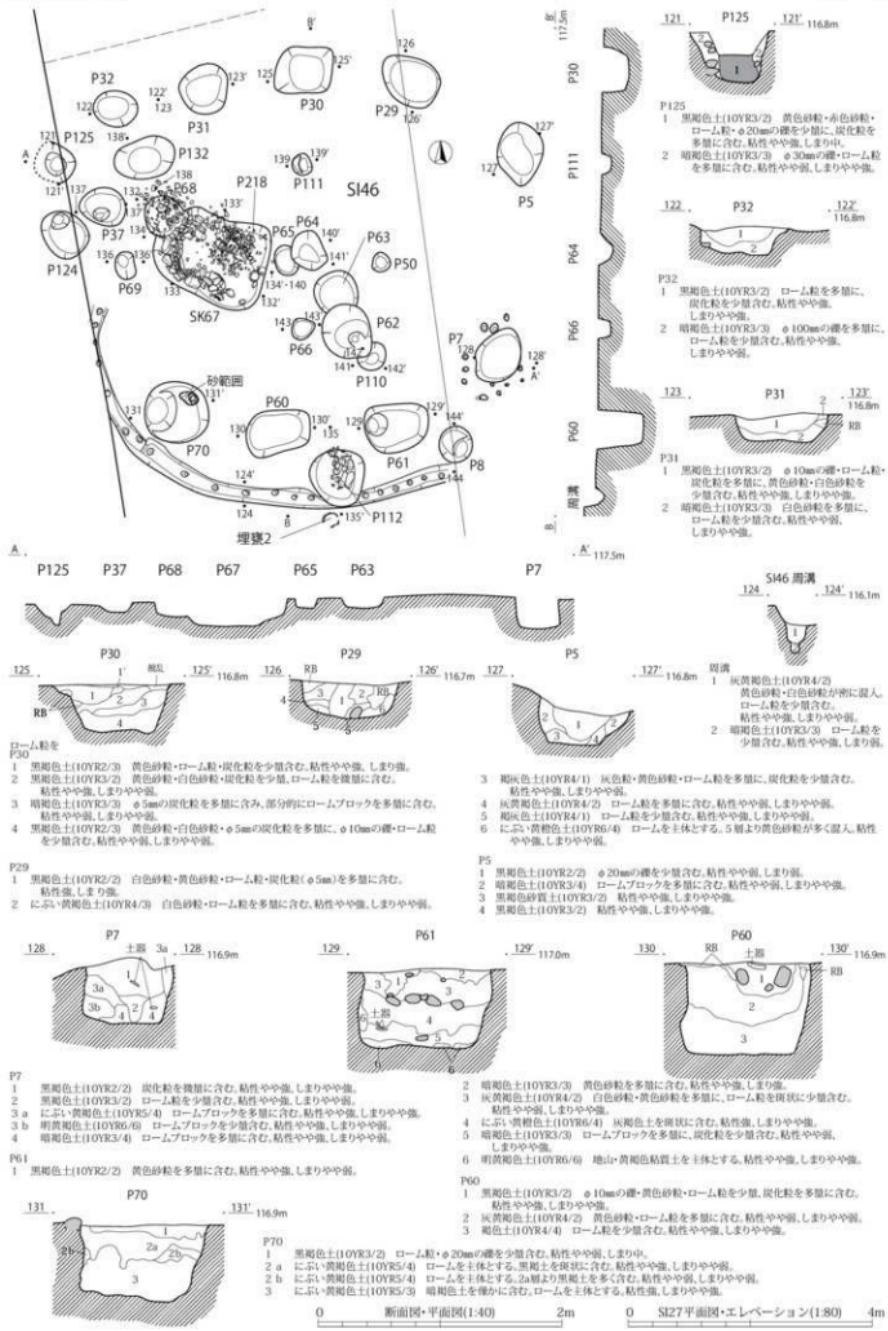


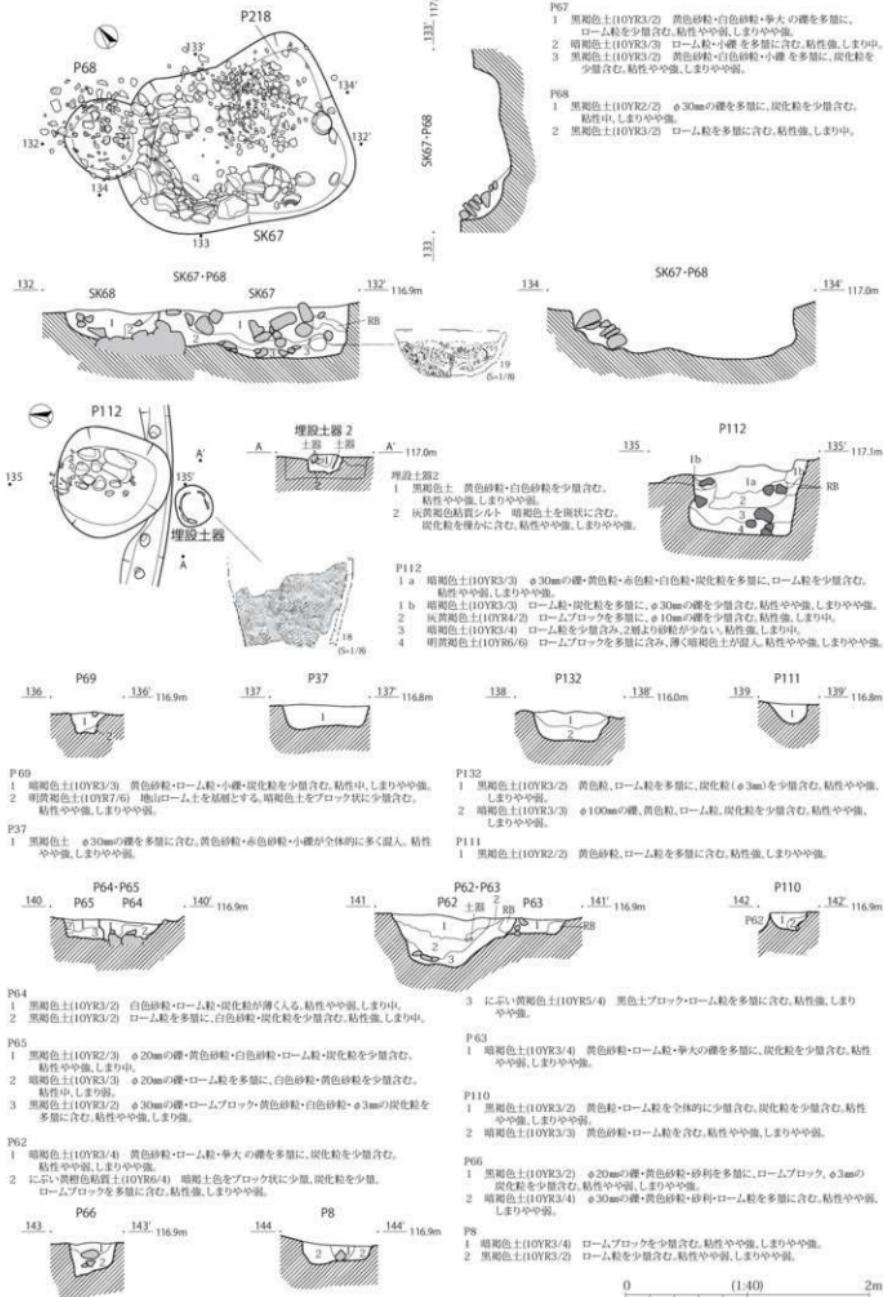
圖版 18

### 遺構個別図（12）



遺構個別図 (13)





0 (1:40) 2m

S127

P6

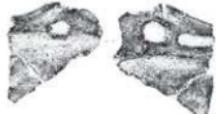


1



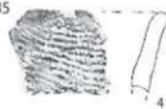
2

P22

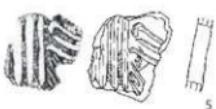


3

P24

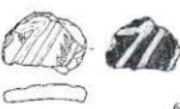


4



5

P24

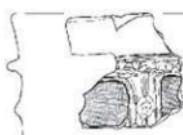


6



7

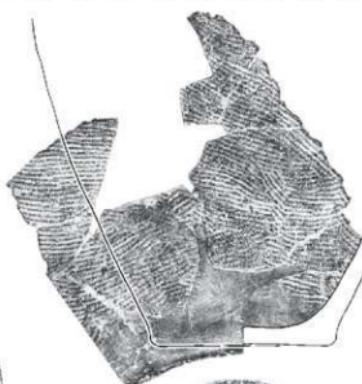
SK20



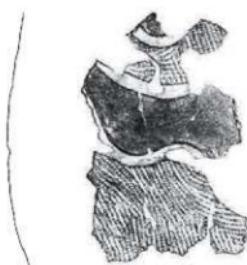
8



9



11



10

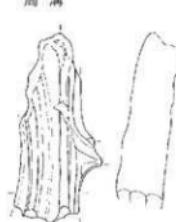
S146  
床面上

12

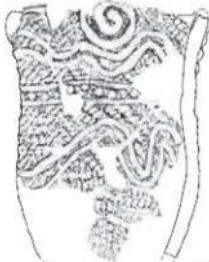


13

周溝

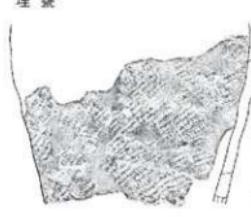


16



17

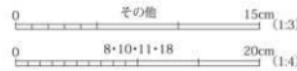
埋 突



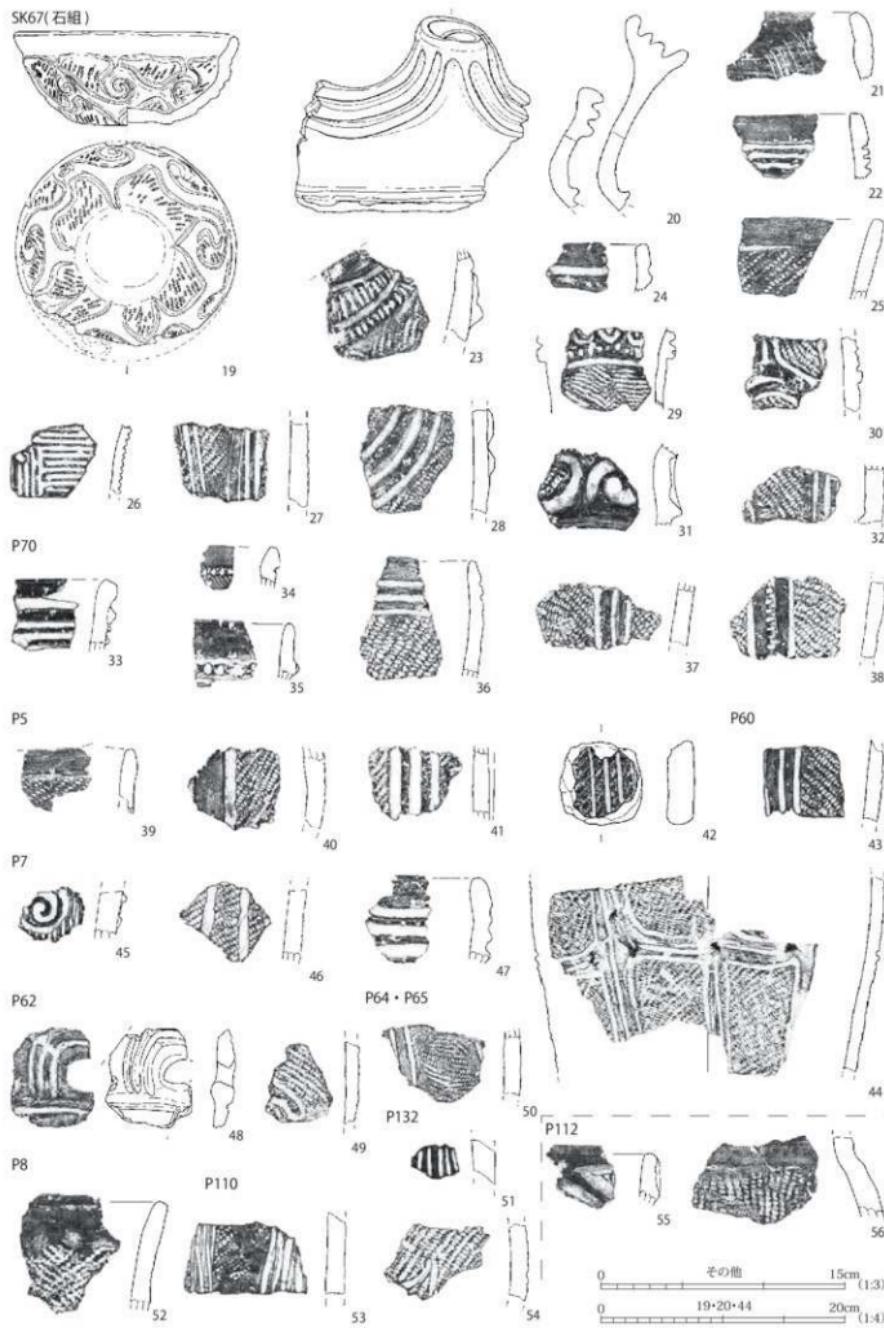
1

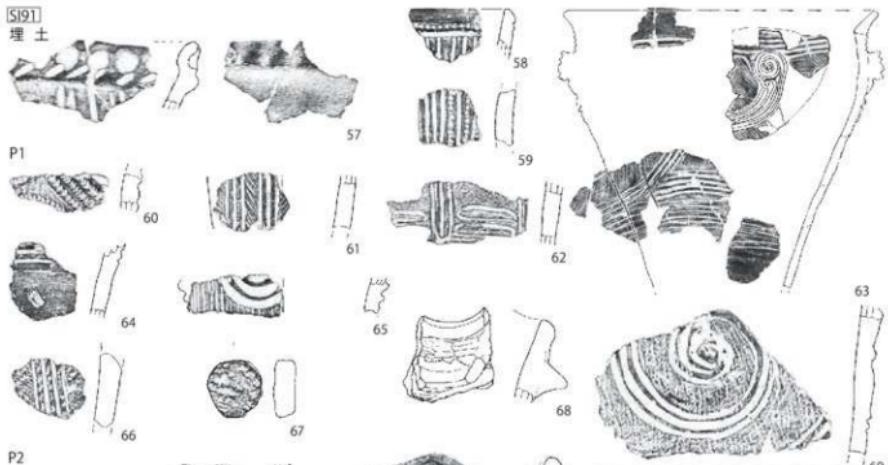


15



SK67(石組)



[S91]  
埋 土

P2

[S92]  
埋 土

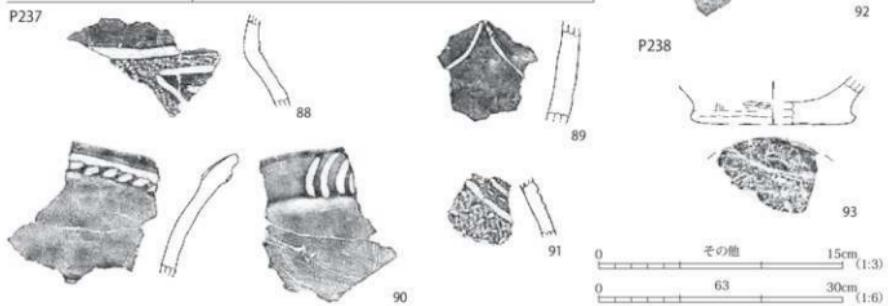
P146



SK145



P237



90

91

92

93

その他

その他

15cm  
(1:3)

63

30cm  
(1:6)

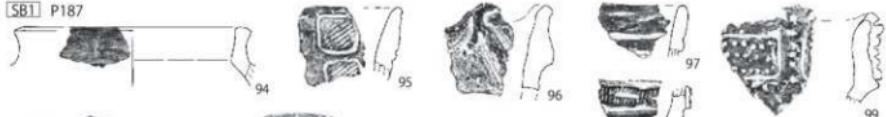
その他

その他

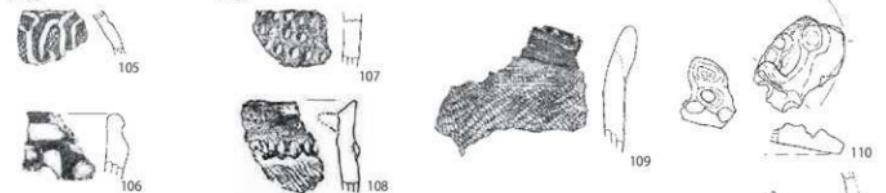
その他

その他

SB1 P187



P196



P210



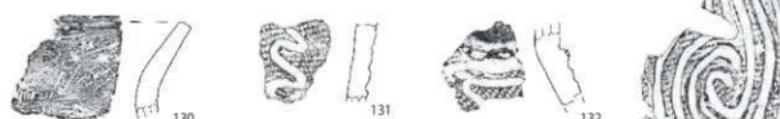
SB3



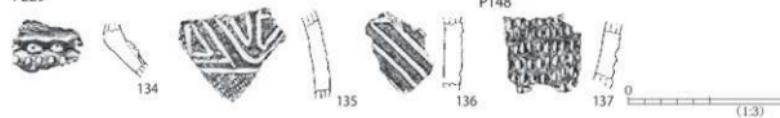
P164



P181



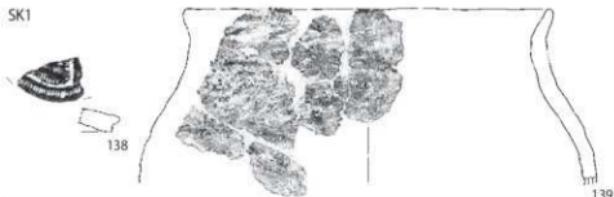
P229



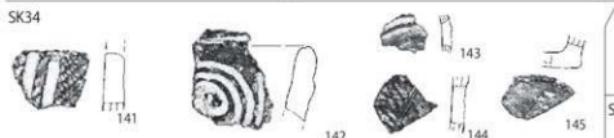
P148

0 15cm  
(1.3)

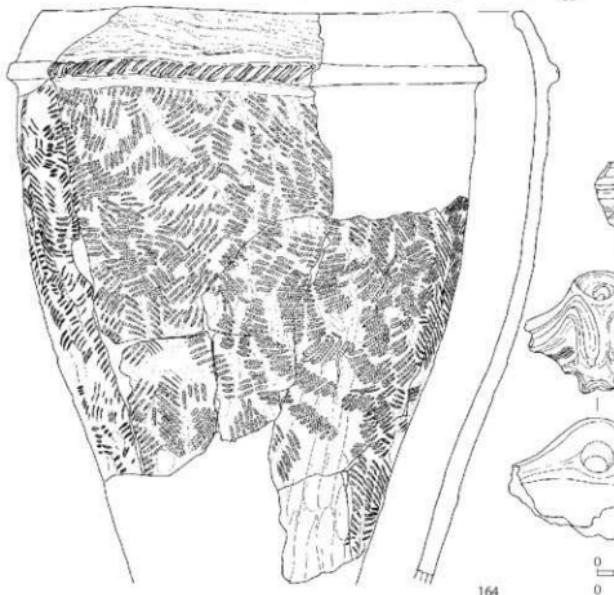
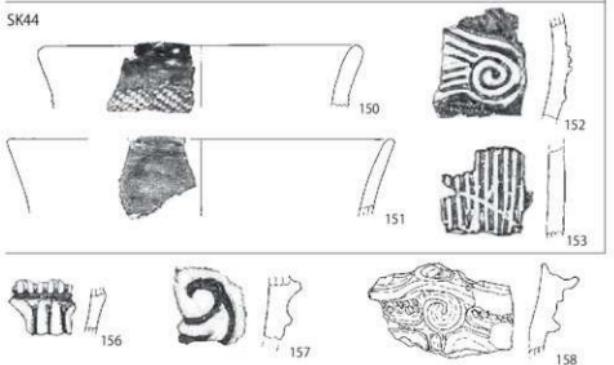
SK1



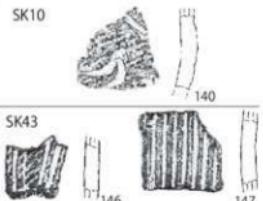
SK34



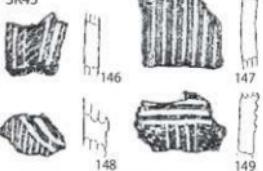
SK44



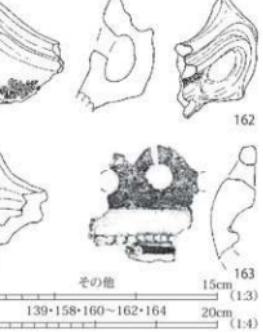
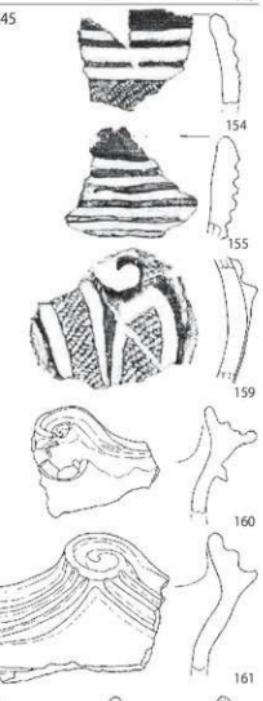
SK10



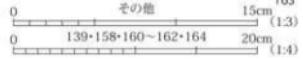
SK43



SK45



164



SK49

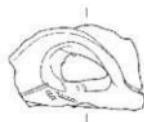


SK78

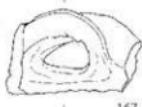


165

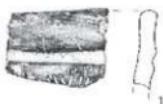
166



165



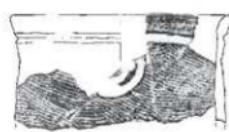
167



168



169



170



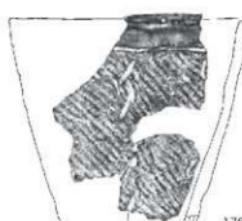
171



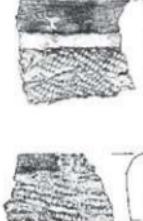
172



173



174



175



176



177



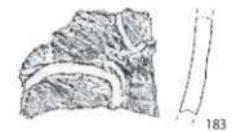
178



179



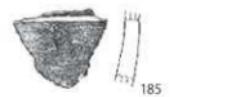
180



181



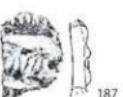
182



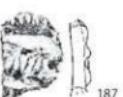
183



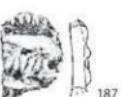
184



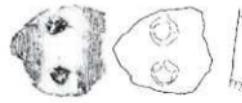
185



186



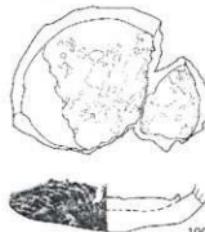
187



188



189



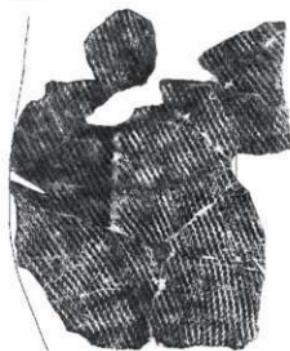
190

0 その他 15cm (1:3)

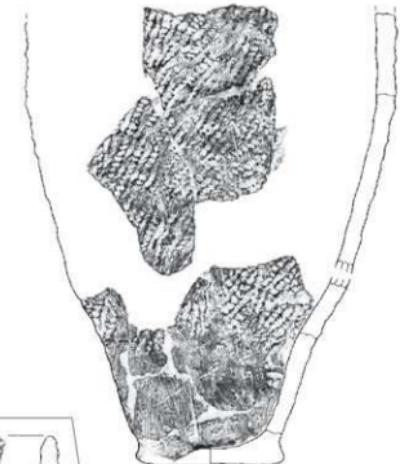
0 166+176+177+182 20cm (1:4)

## 遺構出土の縄文土器 (7)

SK78

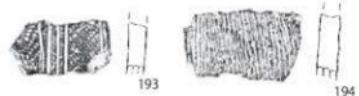


191



192

SK80

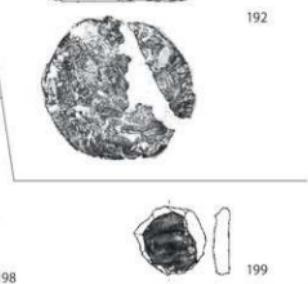


193

194

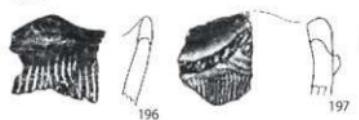
195

192



199

SK94

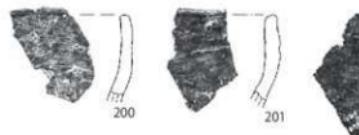


196

197

198

SK97



200

201

203

204

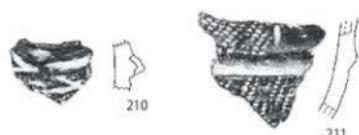


205

206

207

209



210

211

212

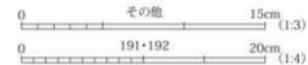
214



215

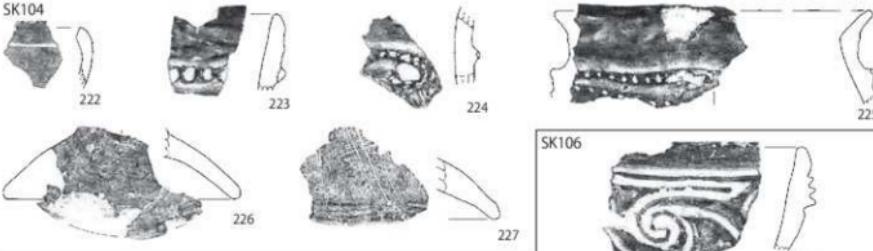
216

217

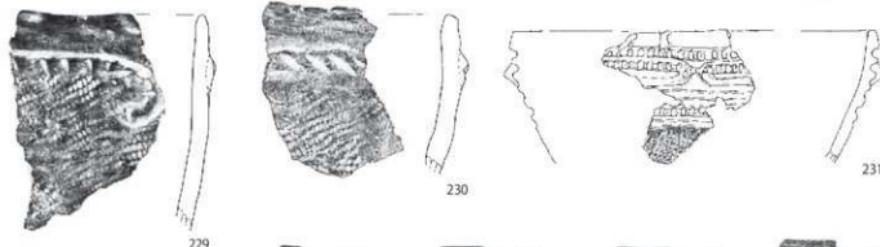




218



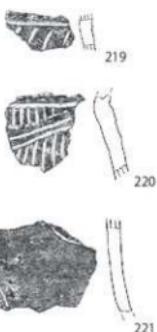
228



235



240

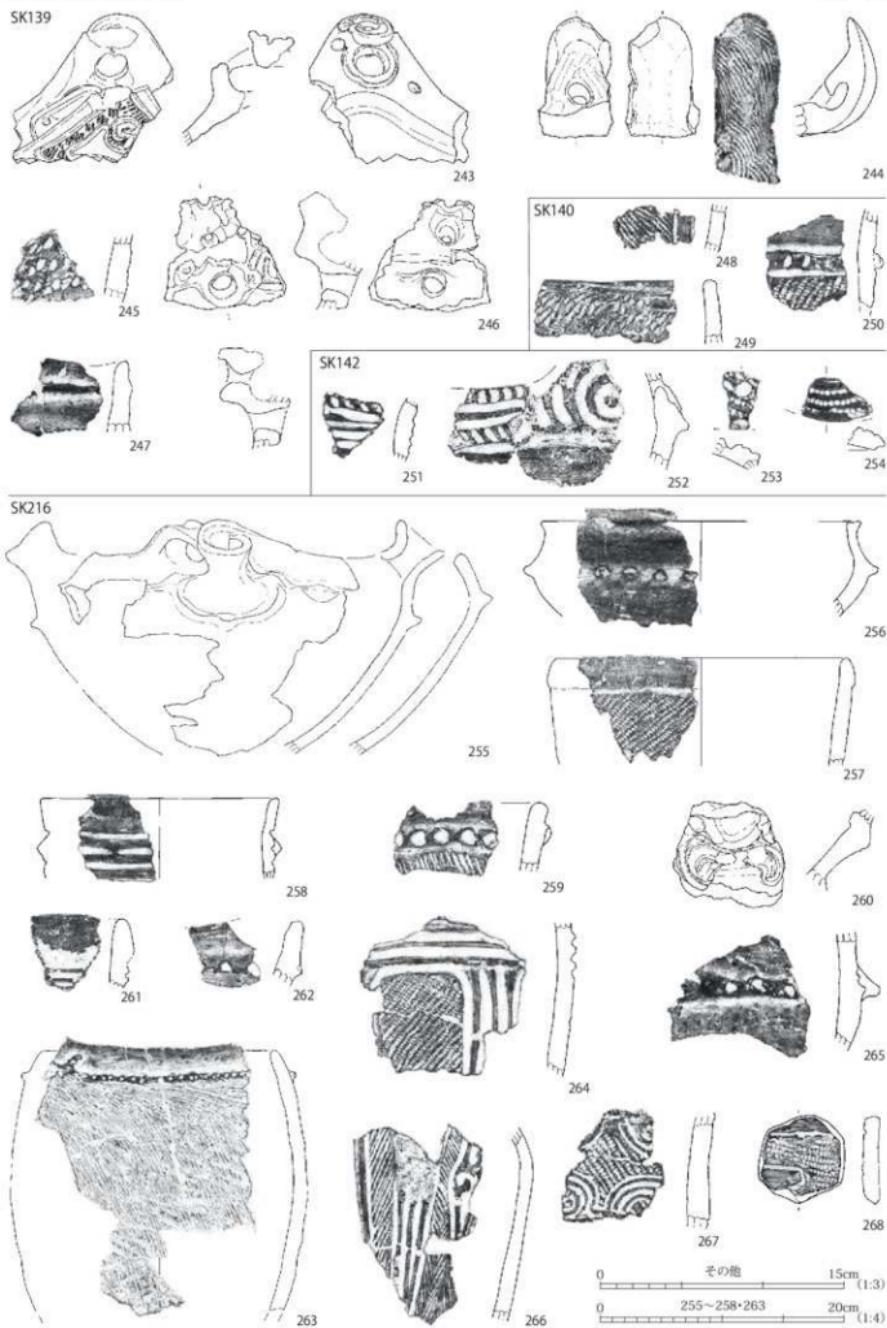


219

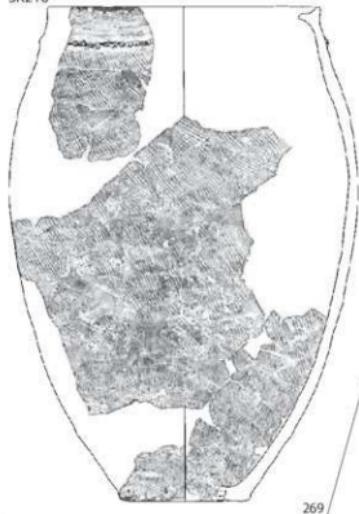
220

221





SK216



269

SK219



270



271



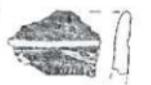
272



273



274



275



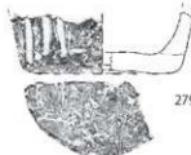
276



277



278



279



280

P26



281

P33



282



283



284



285



286



287



288



289

P39



290



291



292



293



294

P71



296



297

P72



300



301



295



302



298



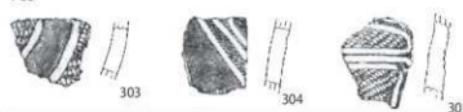
299



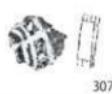
遺構出土の縄文土器 (11)

図版 31

P83



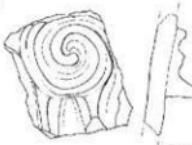
P85



P87



P89



P100



P105



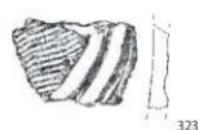
P114



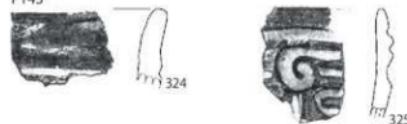
P115



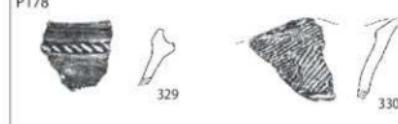
P131



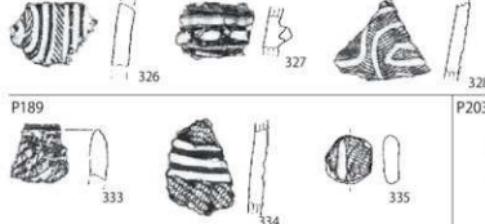
P143



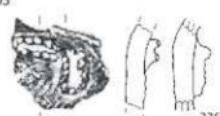
P178



P189



P203



P205



P228

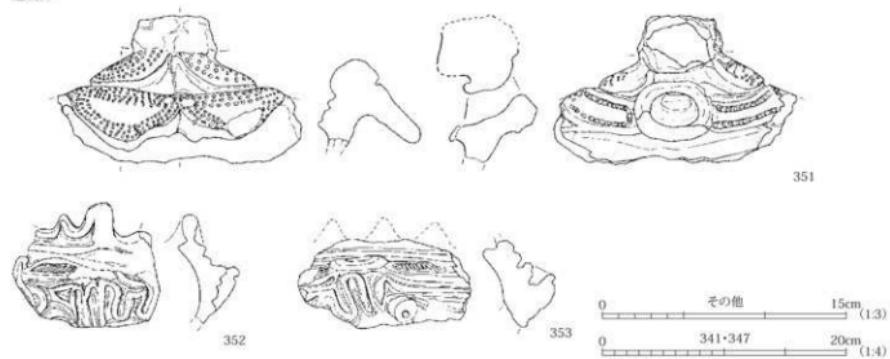


0 15cm (1:3)

沢上層



遺構外





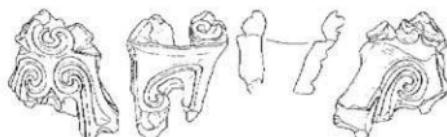
354



355



356



357



358



359



360



361



362



363



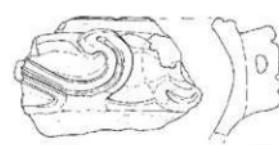
364



365



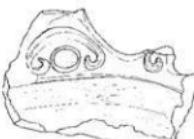
366



367

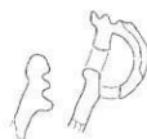


368



その他

15cm (1:3)

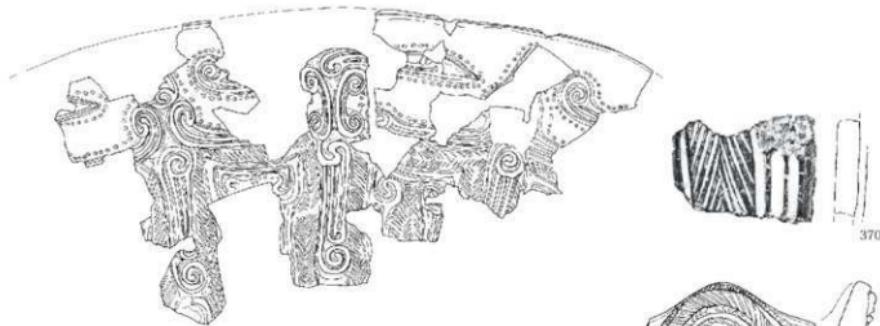


0

0

357・359・368

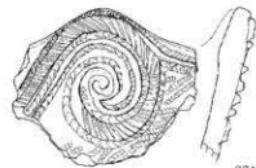
20cm (1:4)



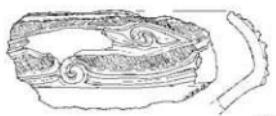
370



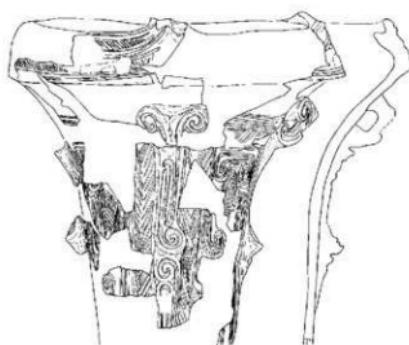
369



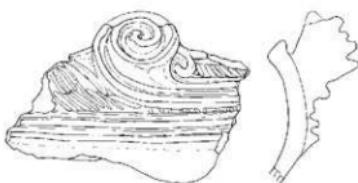
371



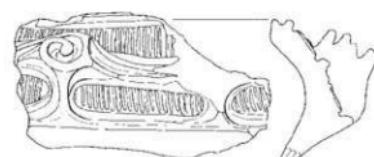
372



373

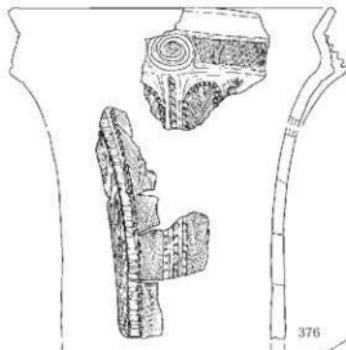


374

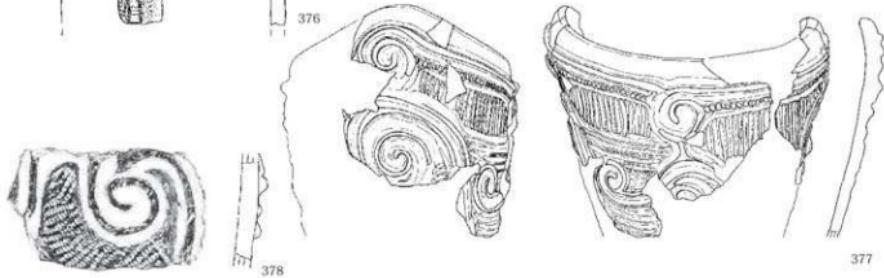


375

0	その他	15cm
0	369	20cm (1:4)
0	373	30cm (1:6)

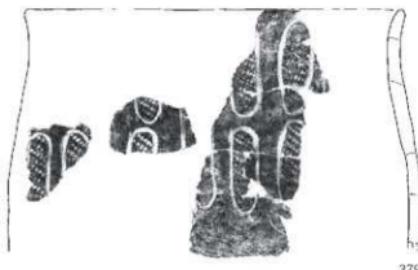


376

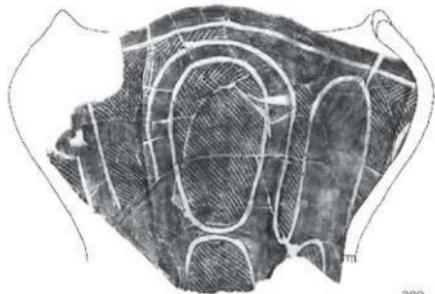


378

377



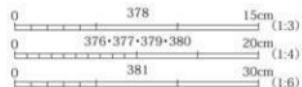
379

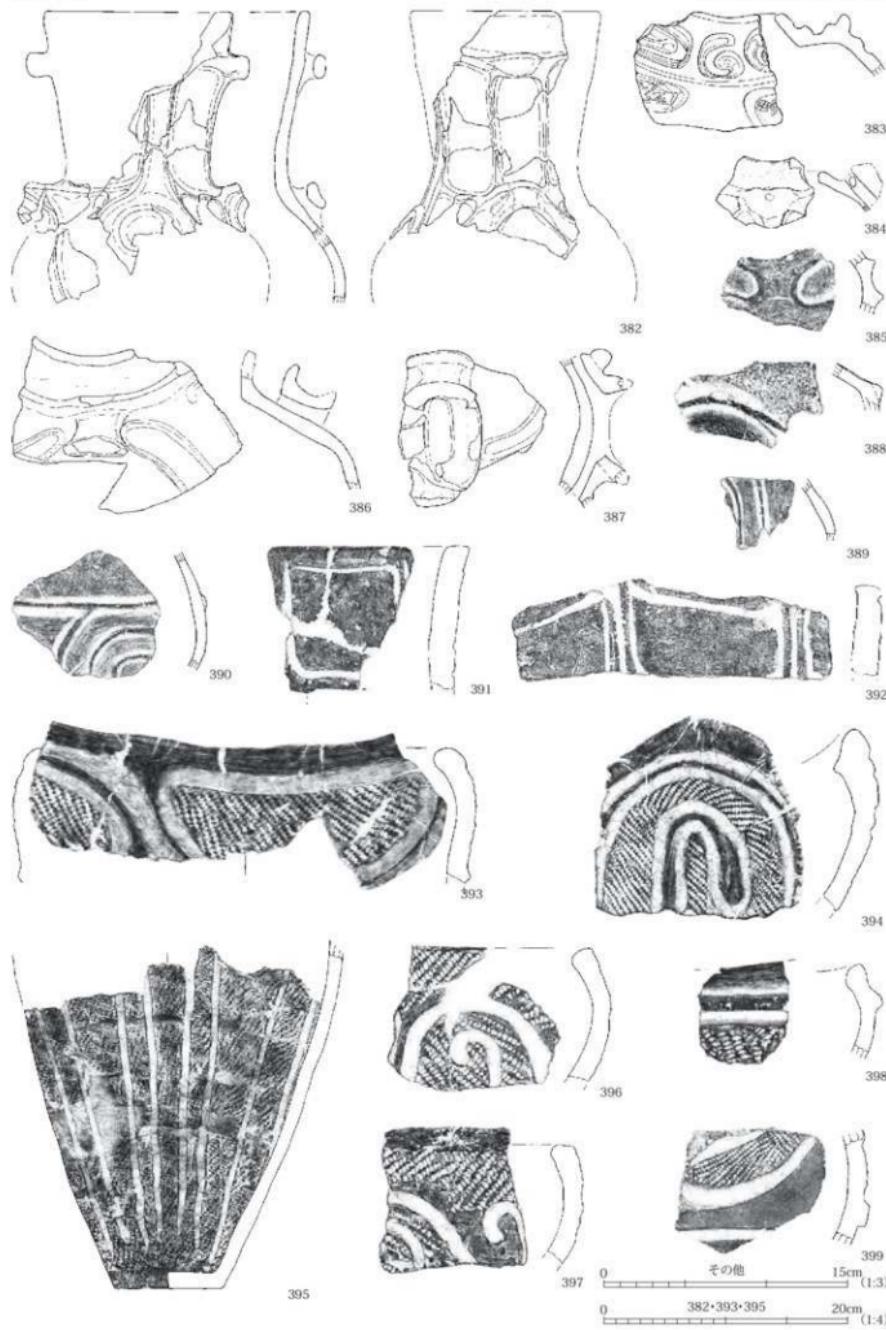


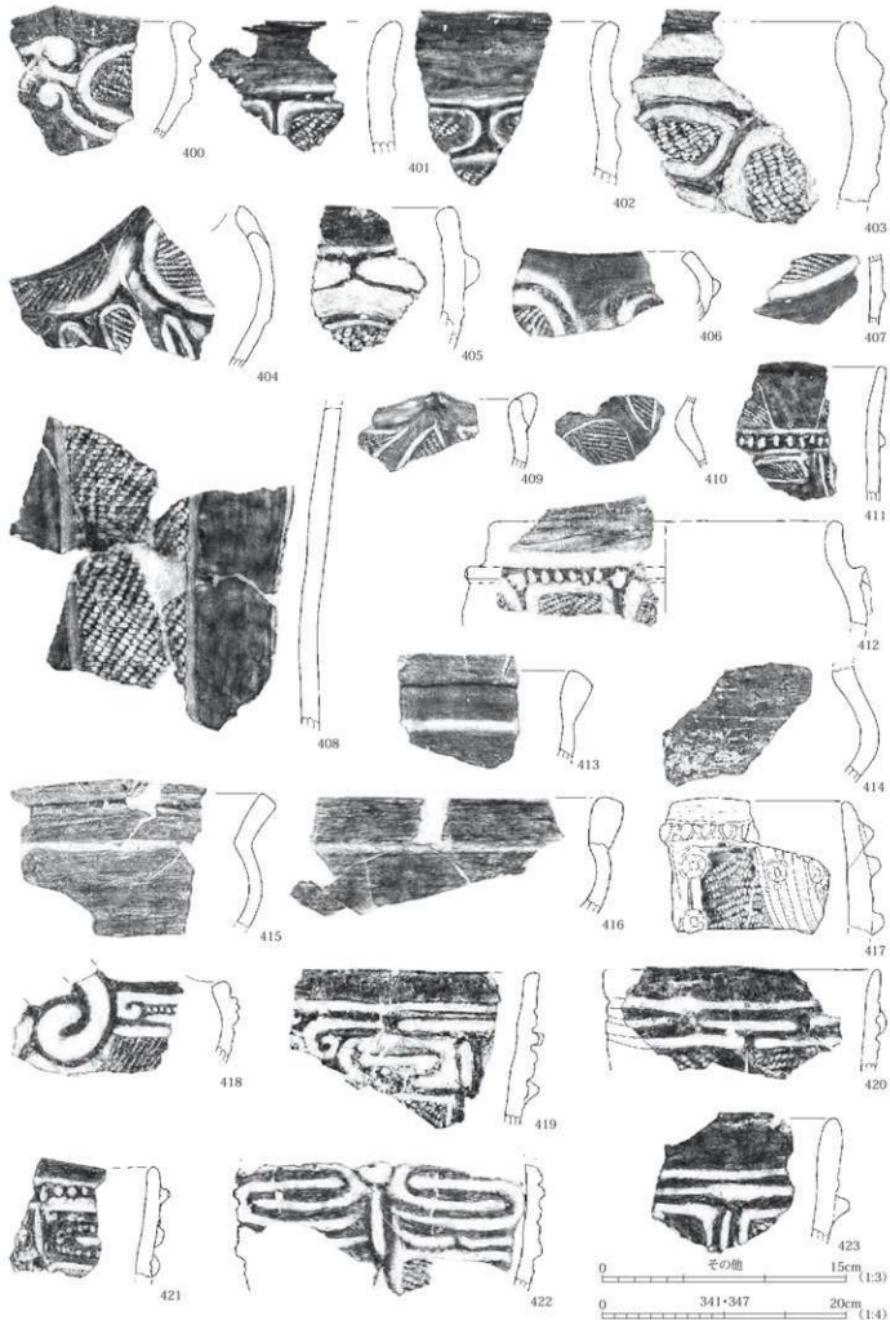
380



381





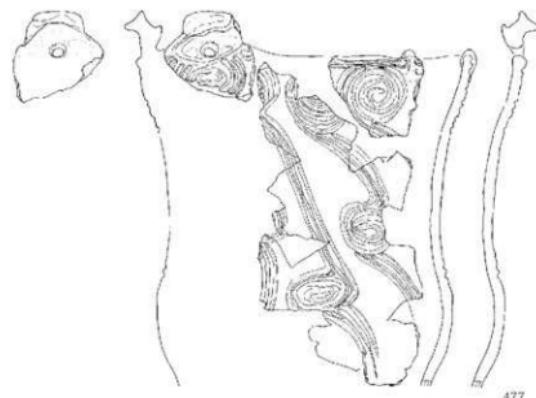




0 その他 15cm (1.3)  
0 435 20cm (1.4)



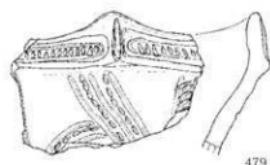
0 15cm (1:3)



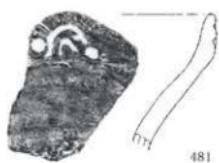
477



478



479



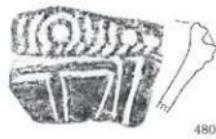
481



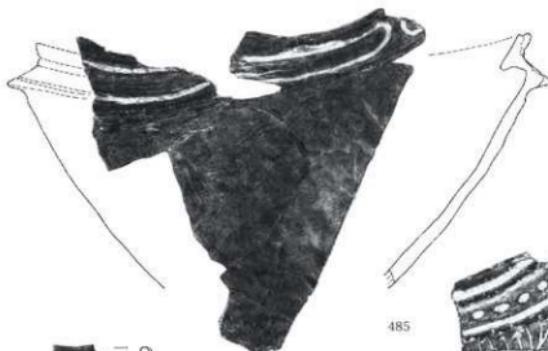
482



483



480



485



486



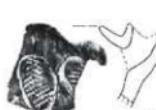
487



488



489



490



491



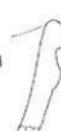
492



493

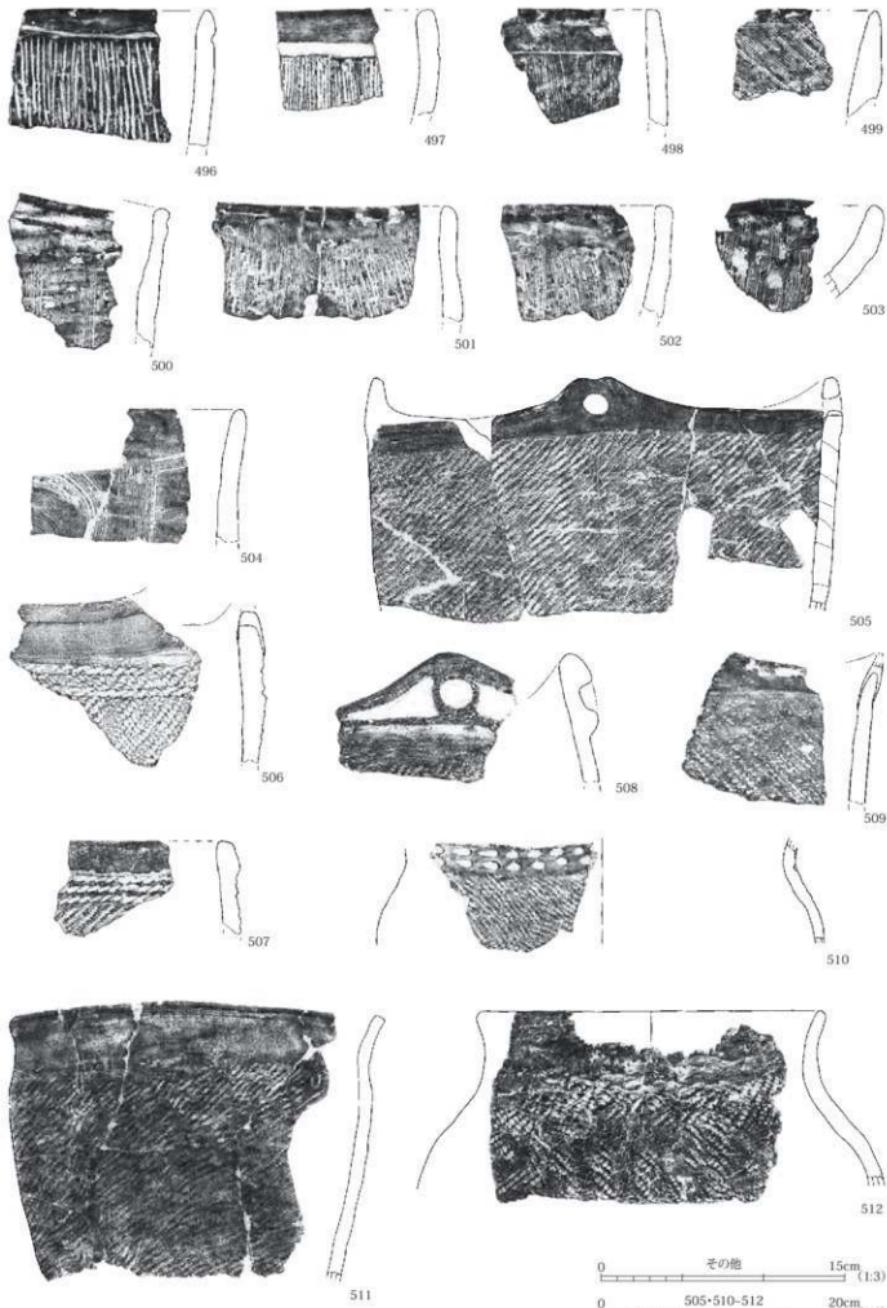


494

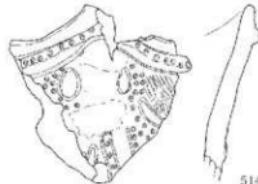


495

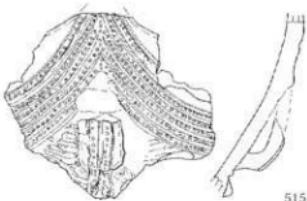
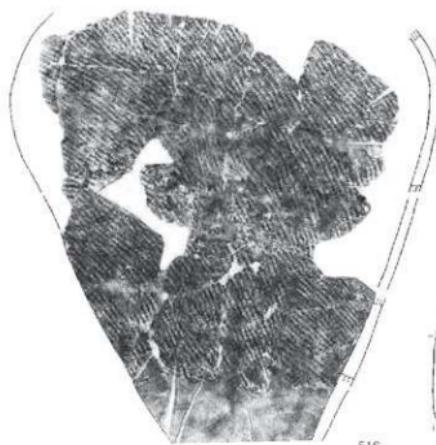
0 その他 15cm (1.3)  
0 477・485 20cm (1.4)



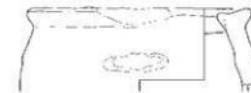
0 その他 15cm (1:3)  
0 505-510-512 20cm (1:4)



513



515



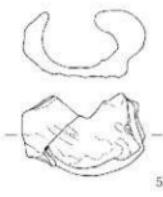
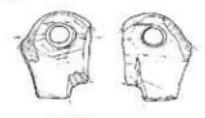
517



518



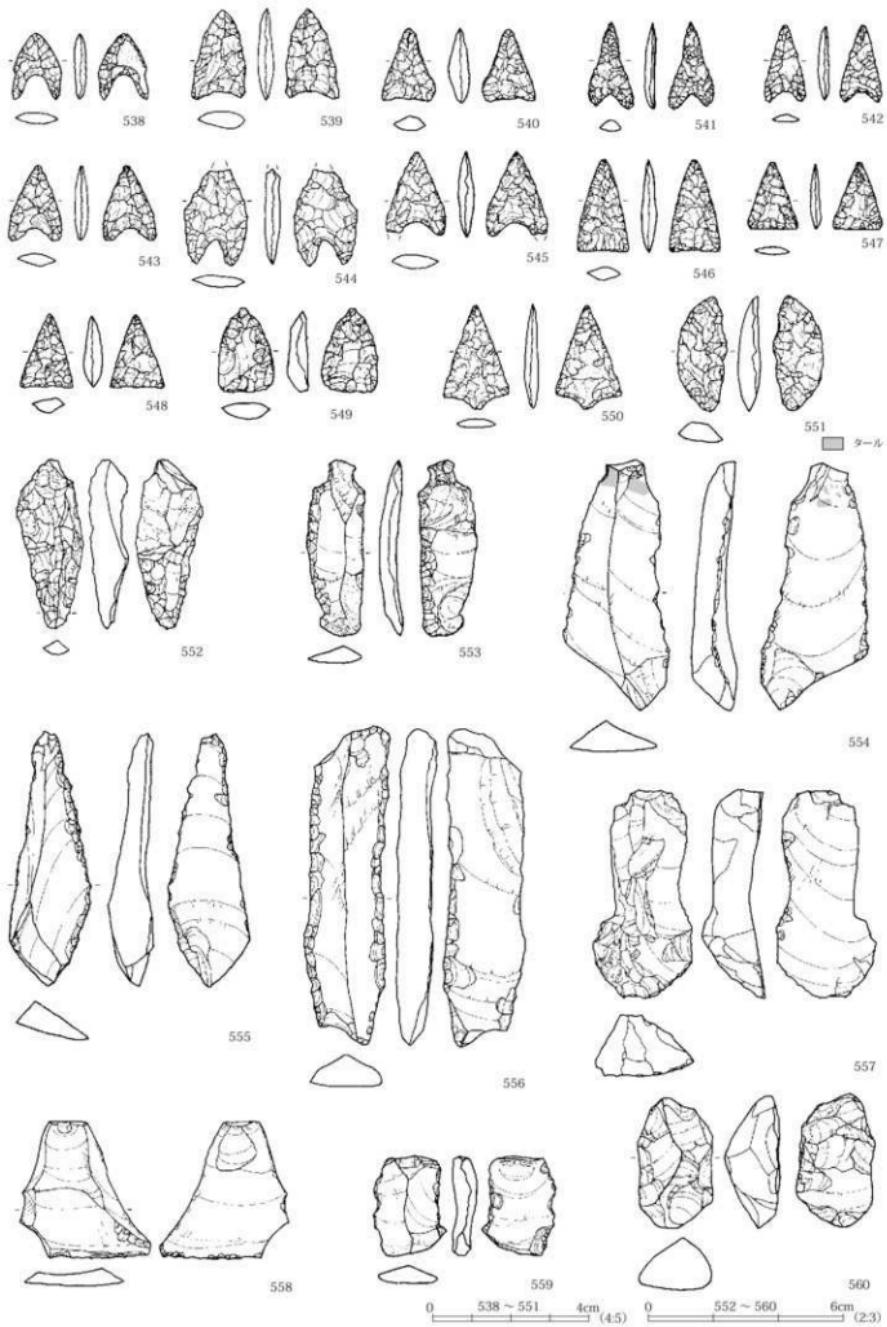
骨角器

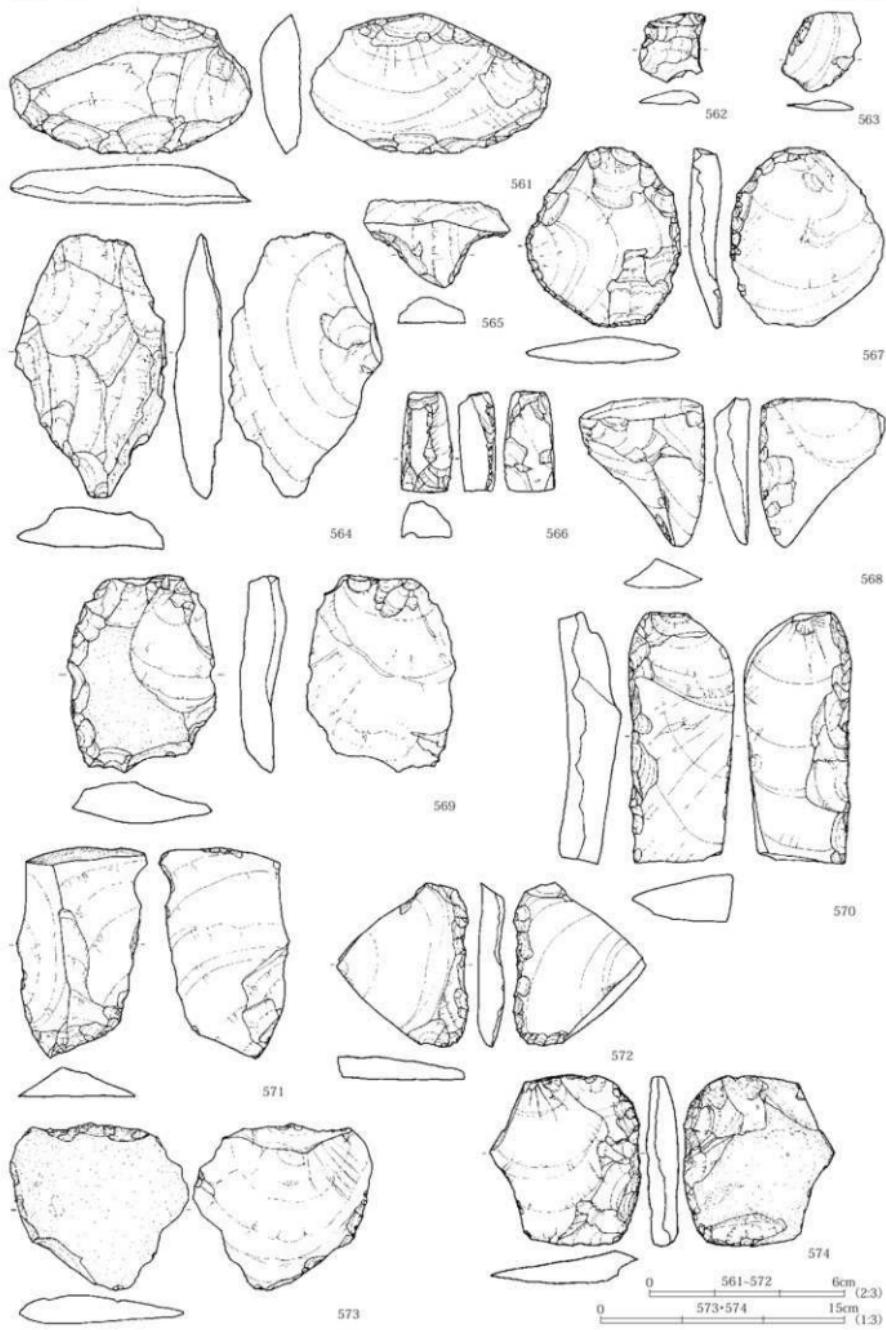


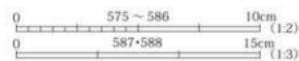
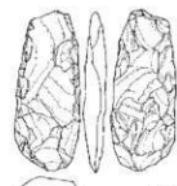
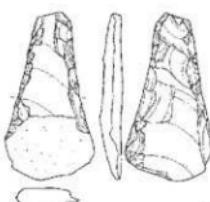
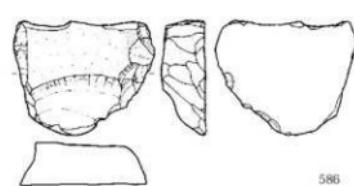
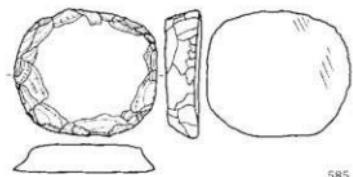
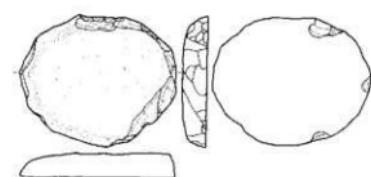
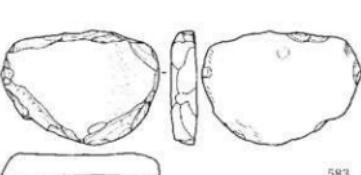
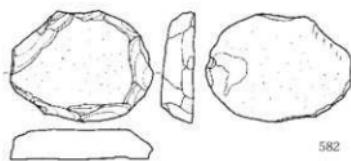
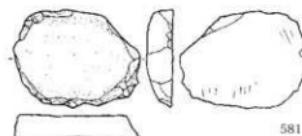
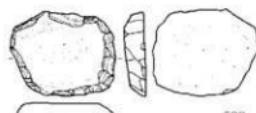
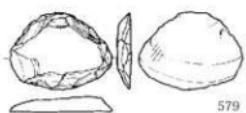
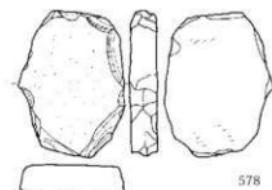
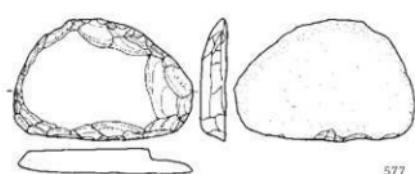
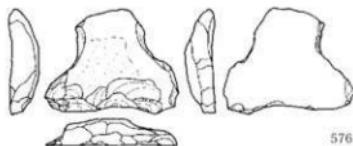
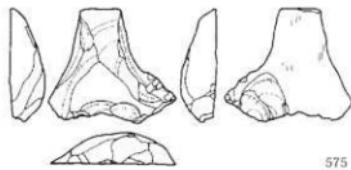
0 521-522 10cm (1.2)

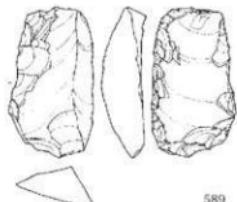
0 その他 15cm (1.3)

0 513-516 20cm (1.4)

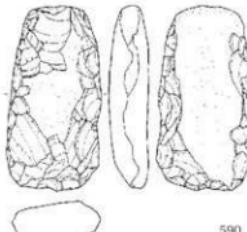




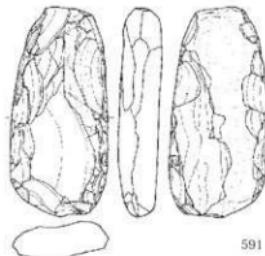




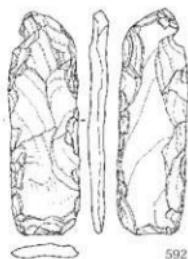
589



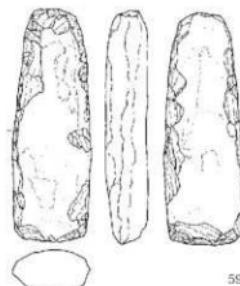
590



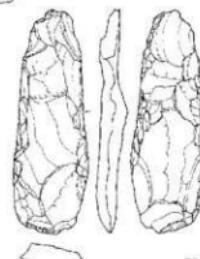
591



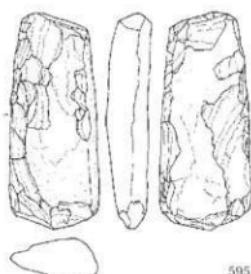
592



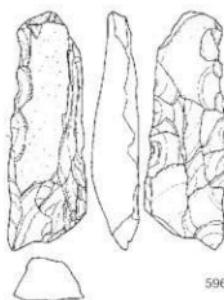
593



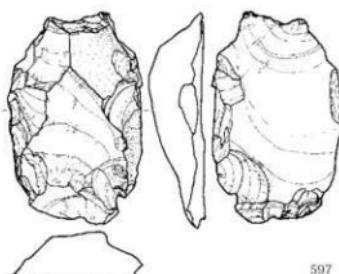
594



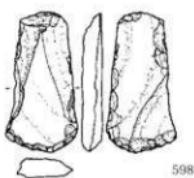
595



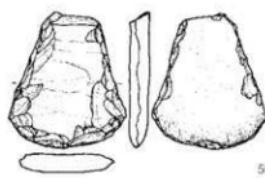
596



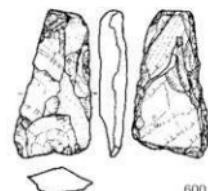
597



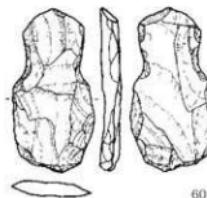
598



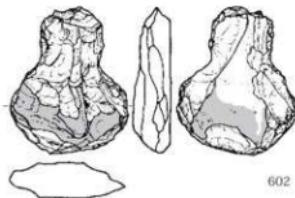
599



600



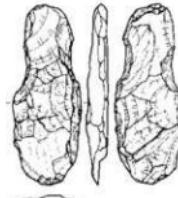
601



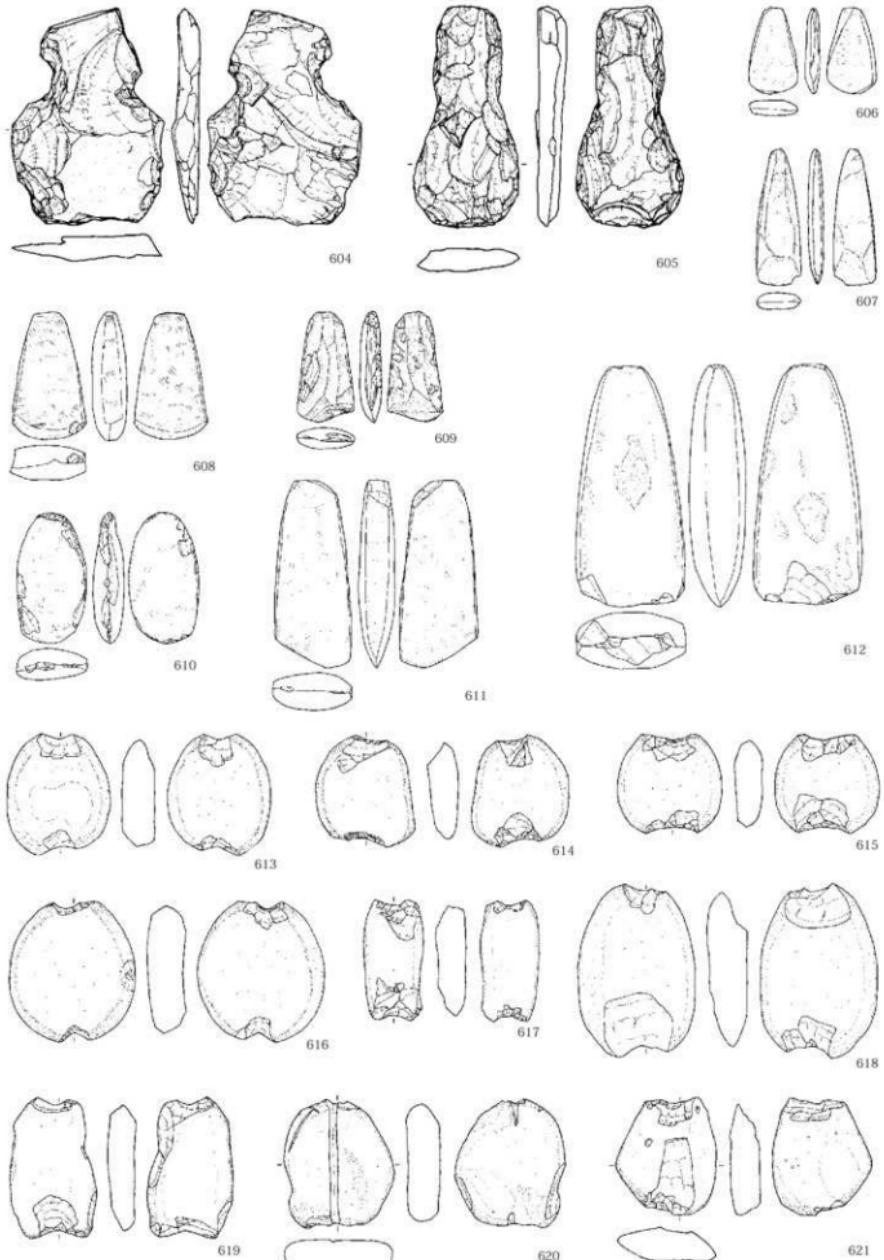
602 ■ 使用面

0

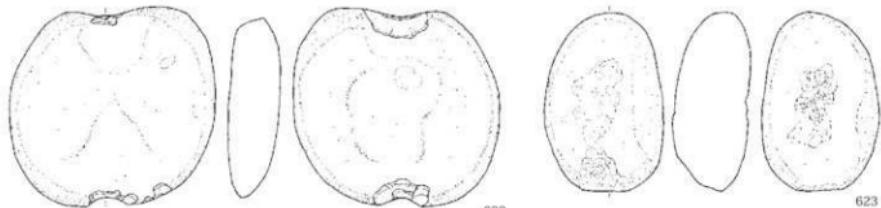
589 ~ 603

15cm  
(1:3)

603



0 606・607・613～621 10cm (1:2)  
 0 604・605・608～612 15cm (1:3)



622

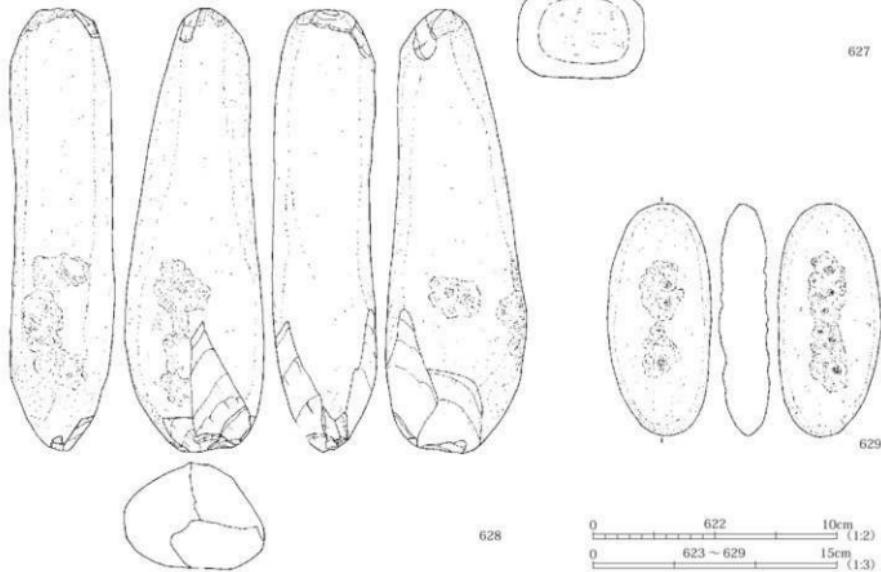
623

624

625

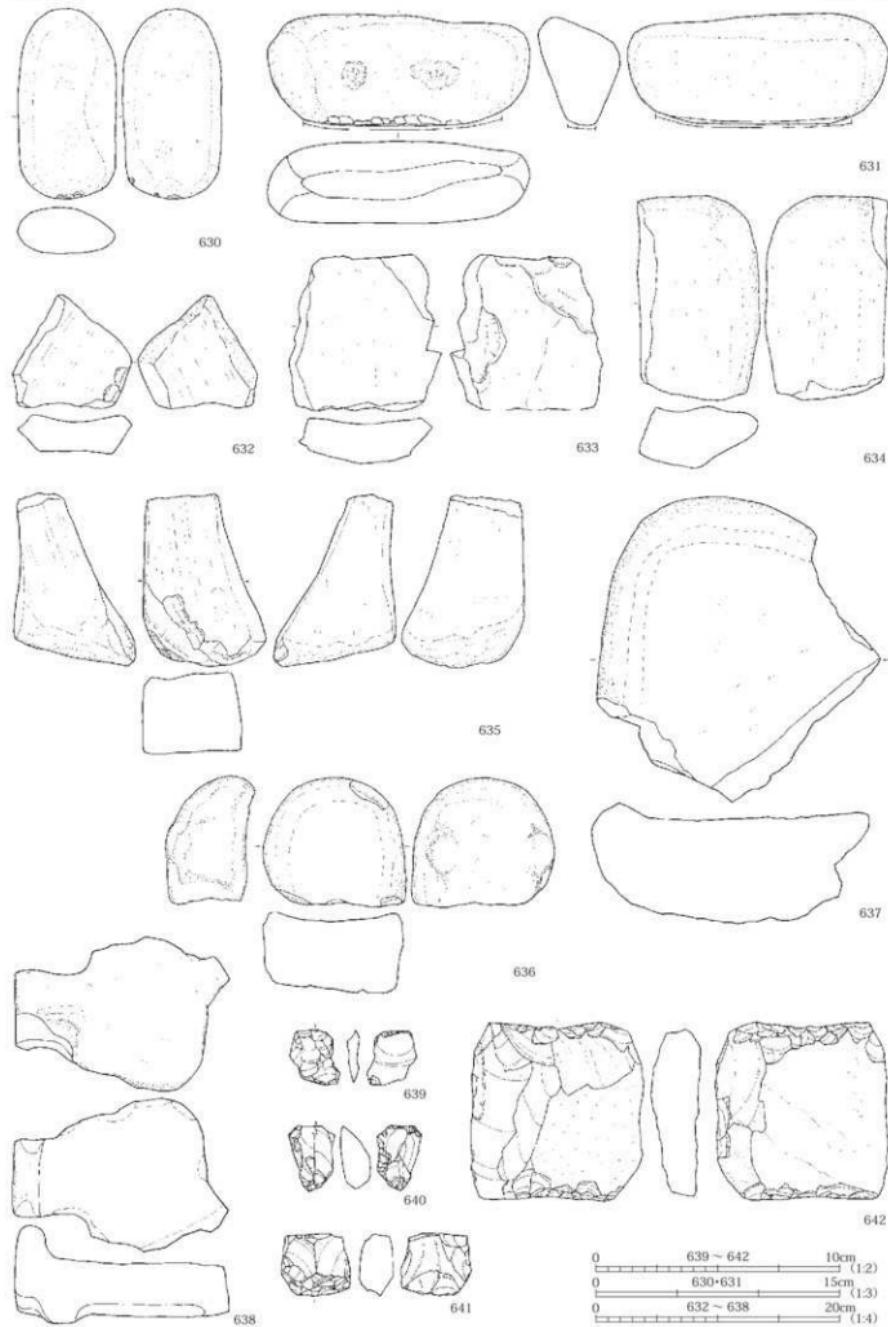
626

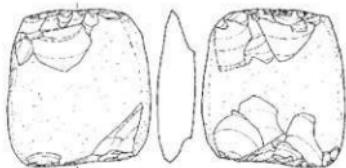
627



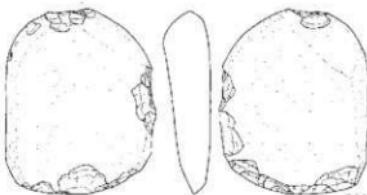
628

0 622 10cm (1:2)  
0 623 ~ 629 15cm (1:3)

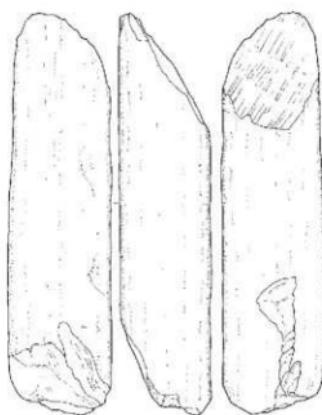




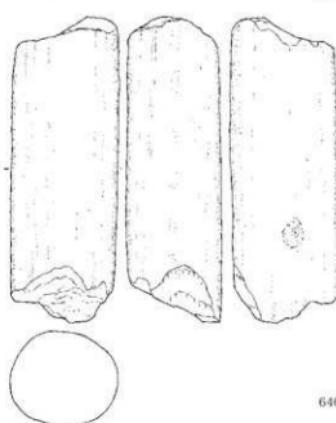
643



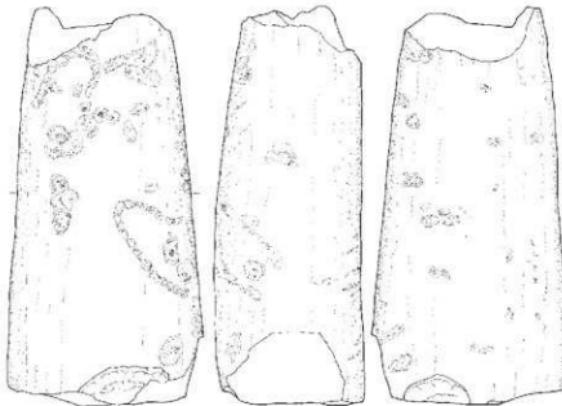
644



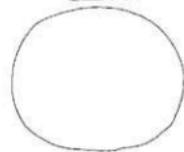
645



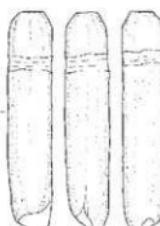
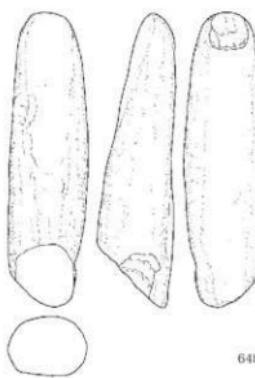
646



647

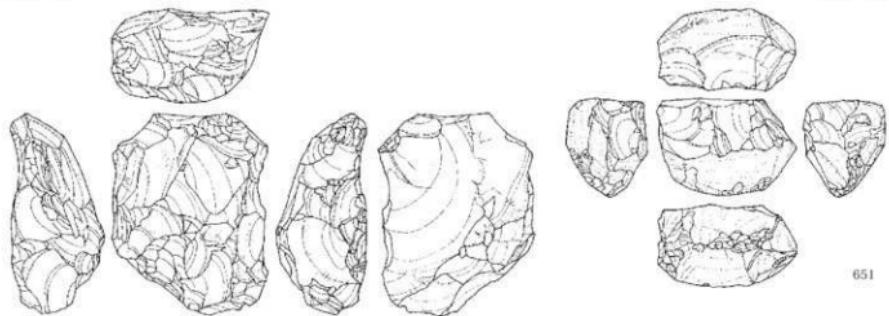


648

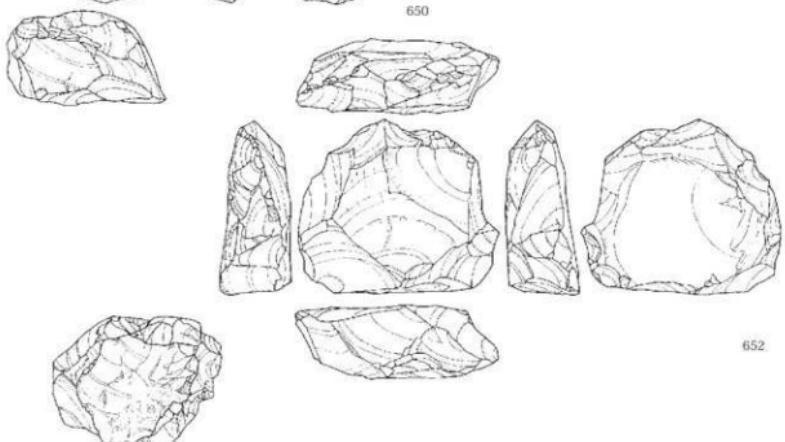


649

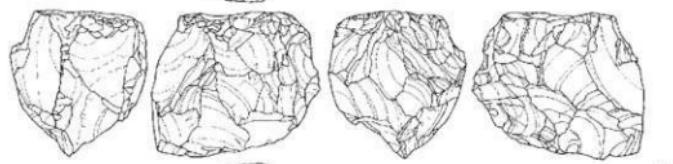
0 643・644・649 10cm (1.2)  
0 645～648 15cm (1.3)



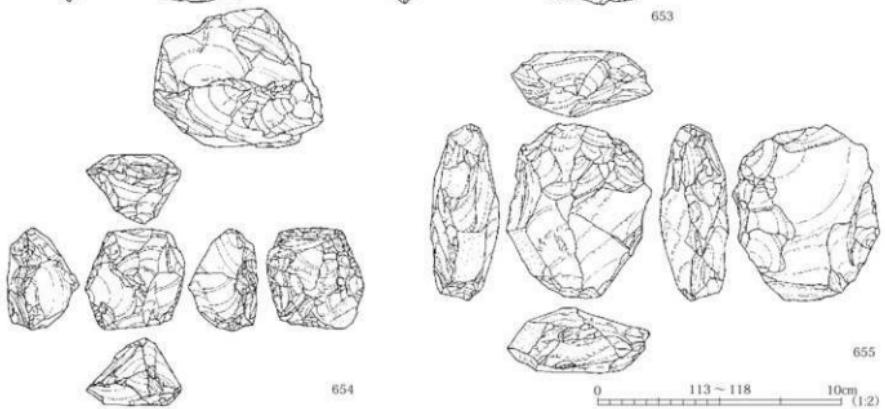
651



652

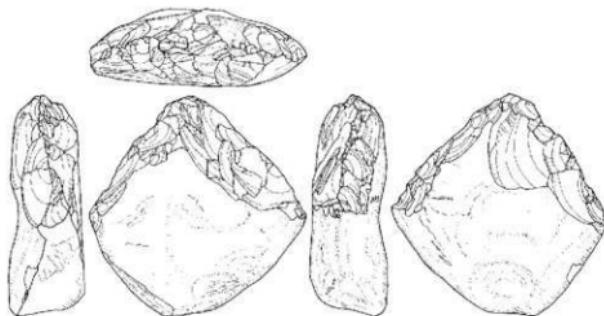


653

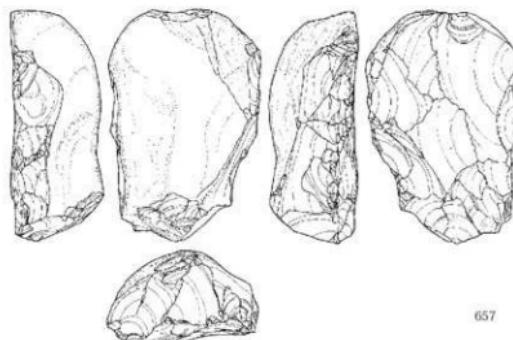


654

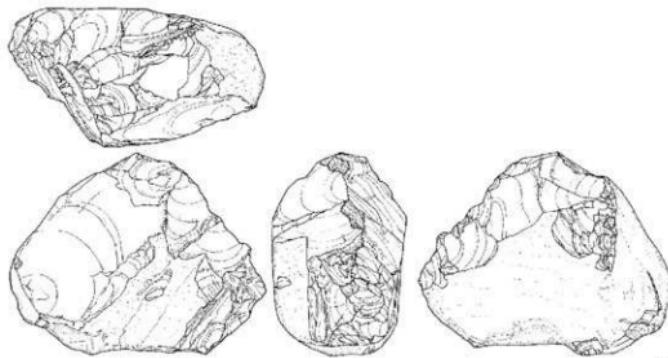
0 113 ~ 118 10cm  
(1:2)



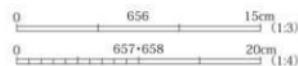
656



657



658





遺跡周辺の開拓前の状況

「国営魚野川東部開拓建設事業工事前全図（大和工区）」  
八色原土地改良区発行  
(1 : 20,000)



遺跡遠景（八色原扇状地と遺跡の位置）

矢印の交点が遺跡の位置



遺跡遠景（北から）



調査区全景（東・船直から）



遺跡遠景（北西から）



遺跡遠景（北東から）



調査着手（北西から）



調査着手（南東から）



客土堆積状況（SK3 検出）



遺構検出状況



豎穴建物（SI46 + SI27）完掘（西から）



掘立柱建物（SB2）完掘（北から）



埋甕出土状況 (SK95) (西から)



SK45 縄文土器出土状況 (北から)



SI46 内 石組炉 (SK67・P68) (北から)



SK97 燃土層検出 (南東から)



出土遺物



SI27・SI46 等完掘（東・鉛直から）



竪穴建物 SI27 完掘（西から）



柱穴 P16 セクション（南から）



柱穴 P17 セクション（南から）



建物内土坑 SK3 セクション（西から）



建物内土坑 SK3 完掘（西から）



袋状土坑 SK20 セクション（南から）



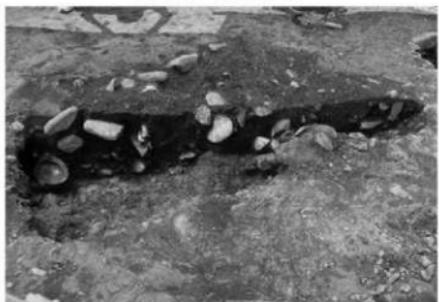
袋状土坑 SK20 完掘（南から）



竪穴建物 SI46 完掘 (東から)



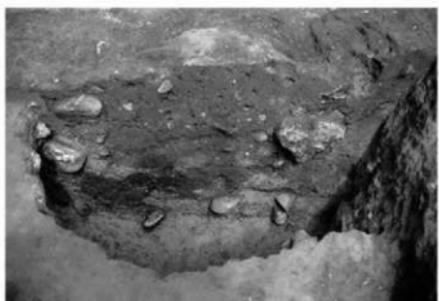
石組炉 SK67・P68 (東から)



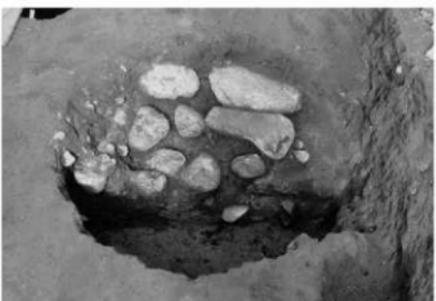
石組炉 SK67・P68 セクション (北東から)



石組炉 SK67・P68 完掘 (北東から)



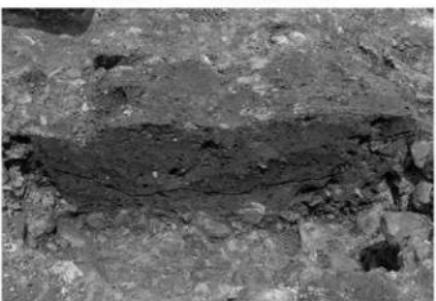
建物内ピット P112 セクション (西から)



建物内ピット P112 碓杵状況 (西から)



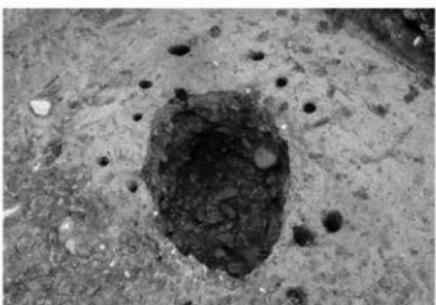
周溝セクション (東から)



柱穴 P31 セクション (南から)



柱穴 P7 セクション（北から）



柱穴 P7 完掘（北東から）



柱穴 P61 セクション上半（南から）



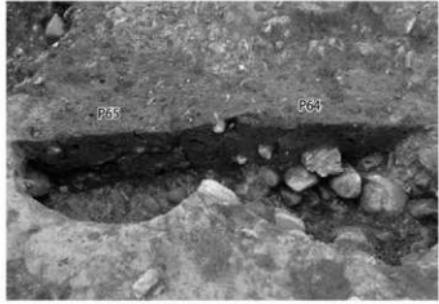
柱穴 P61 根固め石棟出状況（南から）



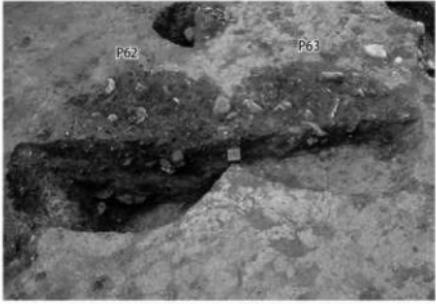
柱穴 P61 セクション下半（南から）



柱穴 P70 セクション（南から）



建物内ピット P64・65 セクション（南から）



建物内ピット P62・63 セクション（東から）



埋設土器出土状況（南から）



埋設土器セクション（南から）



SI91・92 等完掘（東・鉛直から）



竪穴建物 SI91 セクション（西から）



竪穴建物 SI91 完掘（西から）



竪穴建物 SI91 調査区西壁セクション（東から）



建物内ピット P1 セクション（西から）



建物内ピット P8 セクション（東から）



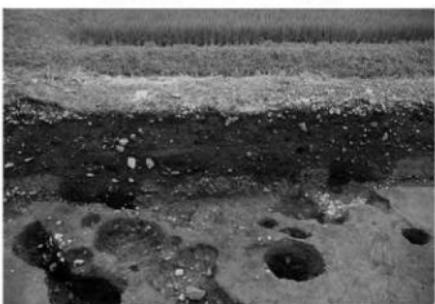
建物内ピット P3 セクション（南から）



建物床下土坑 SK233 セクション（西から）



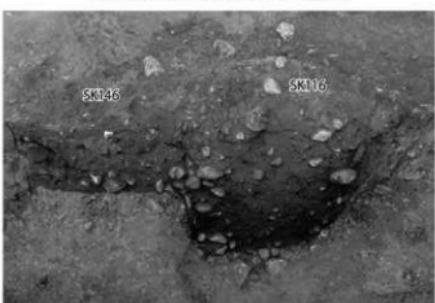
竪穴建物 SI92 完掘（東から）



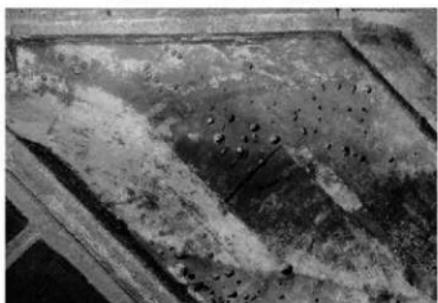
竪穴建物 SI92 調査区西壁セクション（東から）



建物内ピット P1 セクション（南から）



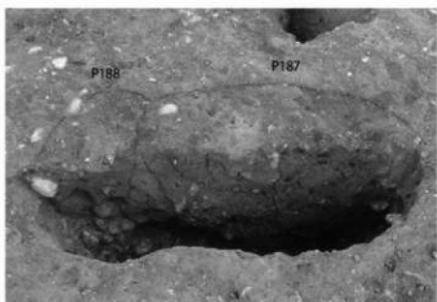
建物内土坑 SK146 セクション（西から）



掘立柱建物群完掘（南・船直から）



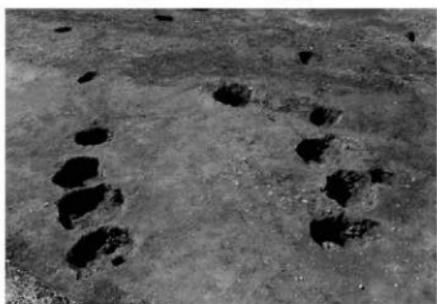
掘立柱建物 SB1 完掘（北から）



柱穴 P187 セクション (西から)



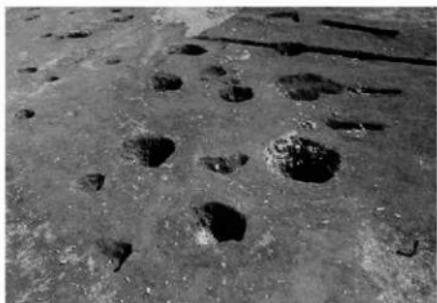
柱穴 P197 セクション (南から)



掘立柱建物 SB2 完掘 (北から)



柱穴 P153 セクション (南から)



掘立柱建物 SB3 完掘 (北から)



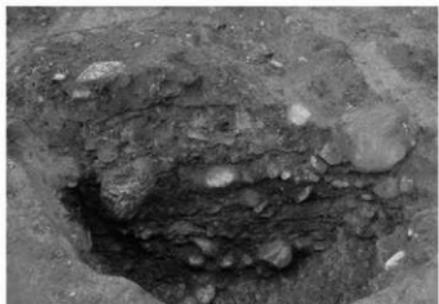
掘立柱建物 SB3 完掘 (東から)



柱穴 P163 セクション (南から)



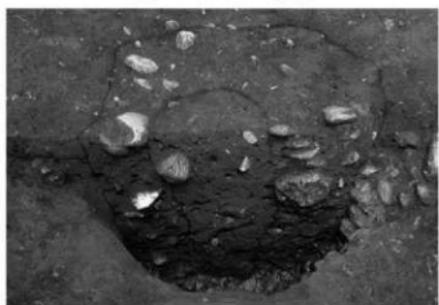
柱穴 P164 セクション (南から)



柱穴 P179 セクション (南から)



柱穴 P180 セクション (南から)



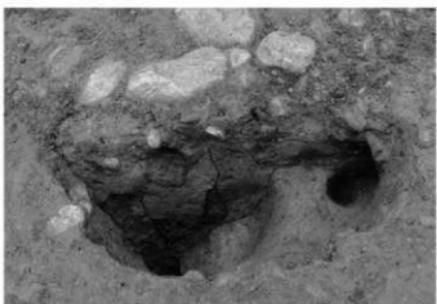
柱穴 P181 セクション (南から)



柱穴 P182 セクション (南から)



掘立柱建物 SB4 完掘 (北東から)



柱穴 P191 セクション (東から)



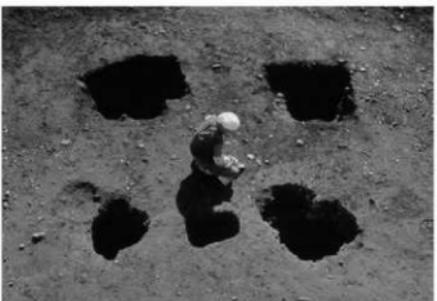
柱穴 P175 セクション (南から)



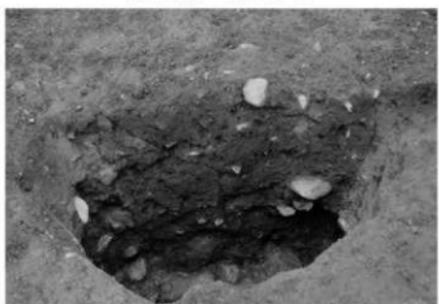
柱穴 P176 セクション (南から)



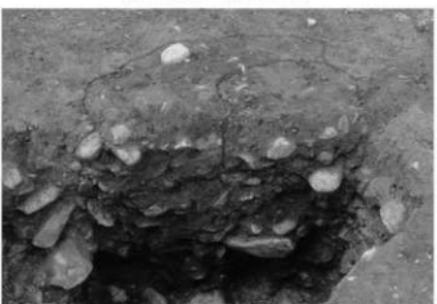
掘立柱建物 SBS 完掘 (南から)



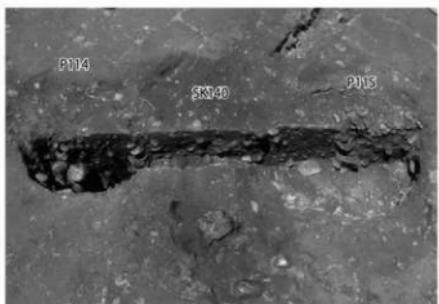
掘立柱建物 SBS 完掘 (東から)



柱穴 P204 セクション (南から)



柱穴 P194 セクション (南から)



土坑 SK140・ピット P114・115 セクション (南東から)



土坑 SK140 完掘 (西から)



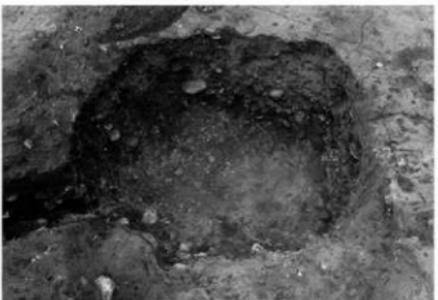
ピット P114 セクション (南東から)



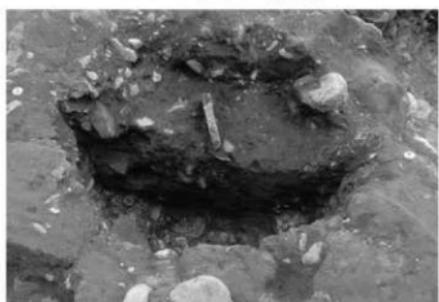
ピット P114 完掘 (東から)



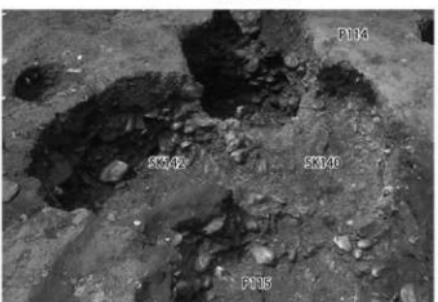
ピットP115セクション（南東から）



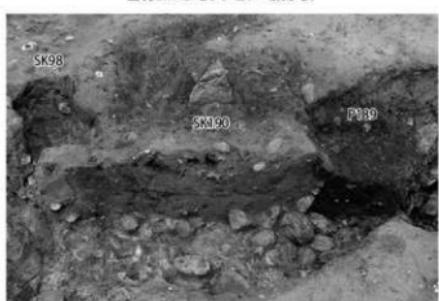
ピットP115完掘（東から）



土坑SK142セクション（東から）



土坑SK142完掘（東から）



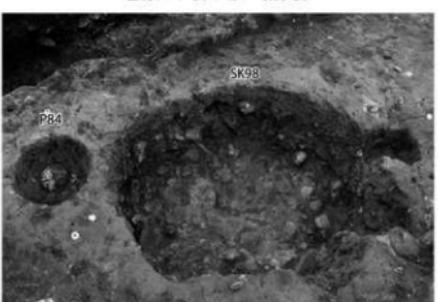
土坑SK190・ピットP189セクション（南東から）



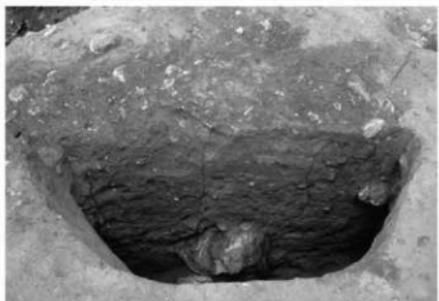
土坑SK73セクション（東から）



土坑SK98セクション（東から）



土坑SK98完掘（東から）



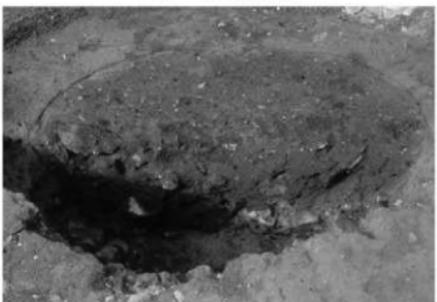
土坑 SK97 セクション (南から)



土坑 SK97 完掘 (北東から)



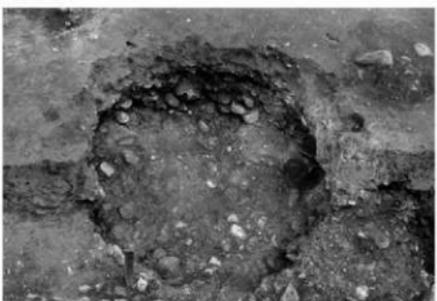
土坑 SK94 セクション (南から)



土坑 SK104 セクション (南西から)



土坑 SK106 セクション (南から)



土坑 SK106 完掘 (東から)



土坑 SK219 セクション (南から)



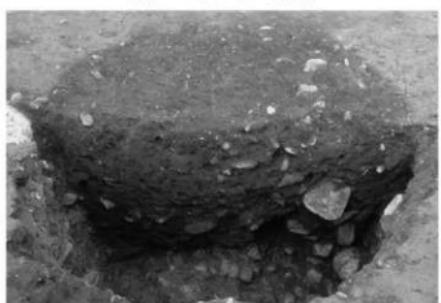
土坑 SK219 完掘 (北から)



土坑 SK216 セクション (東から)



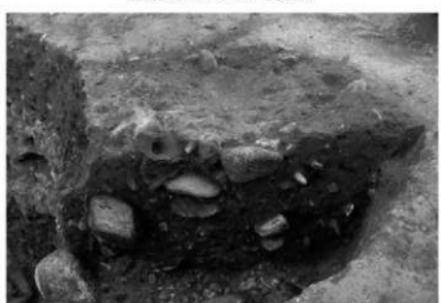
土坑 SK216 完掘 (西から)



土坑 SK78 セクション (南から)



土坑 SK78 完掘 (北から)



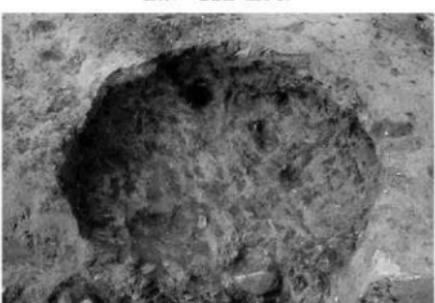
土坑 SK139 セクション (西から)



土坑 SK1 と客土 (西から)



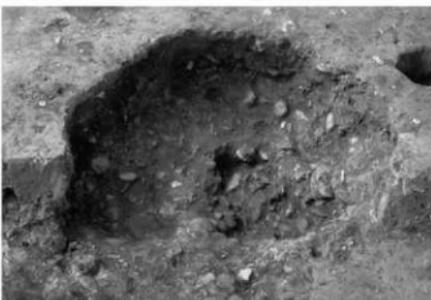
土坑 SK1 セクション (南から)



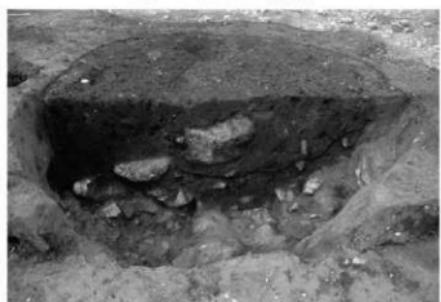
土坑 SK1 完掘 (南から)



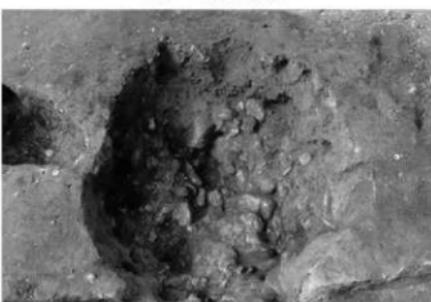
土坑SK79 セクション（南から）



土坑SK79 完掘（南から）



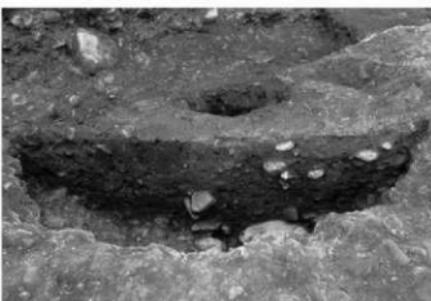
土坑SK80 セクション（南から）



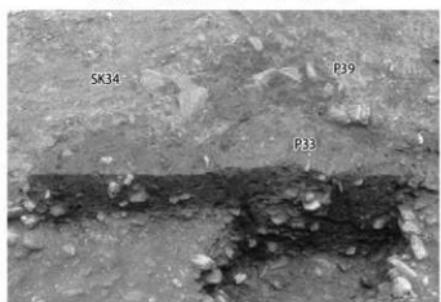
土坑SK80 完掘（南から）



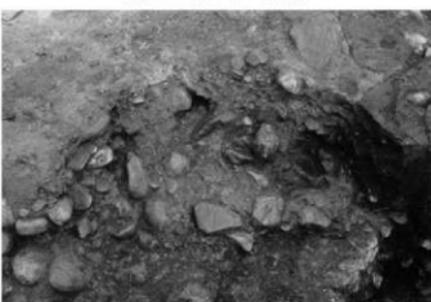
土坑SK145 調査区西壁セクション（東から）



土坑SK217 セクション（東から）



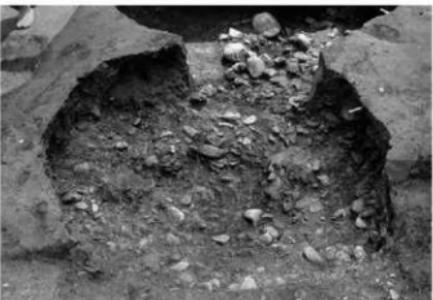
土坑SK34・ピットP33 セクション（西から）



土坑SK34 完掘（西から）



土坑 SK43 セクション (北から)



土坑 SK43 完掘 (西から)



土坑 SK44 セクション (南から)



土坑 SK44 完掘 (南から)



土坑 SK10 98-98' セクション (南西から)



土坑 SK10 99-99' セクション (北東から)



土坑 SK10 床赤化部断面 (南東から)



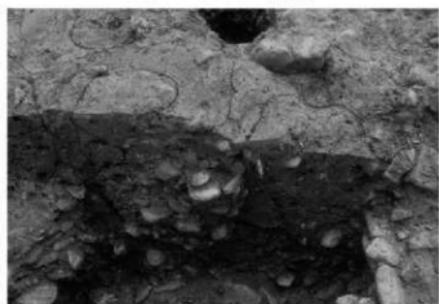
土坑 SK10 完掘 (東から)



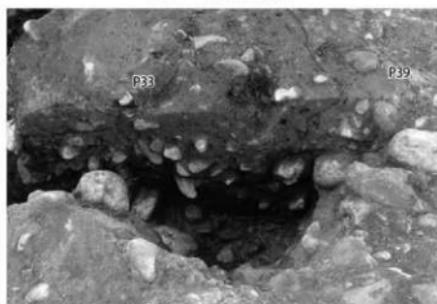
土坑SK45セクション（南から）



土坑SK45完掘（東から）



ピットP33セクション（東から）



ピットP33・39セクション（南東から）



ピットP81セクション（南西から）



ピットP83セクション（南から）



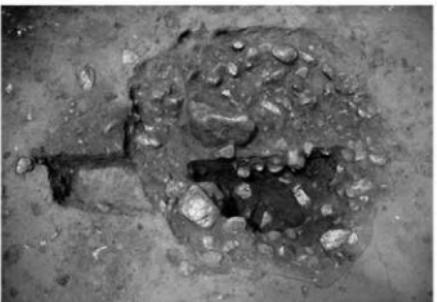
ピットP85セクション（南から）



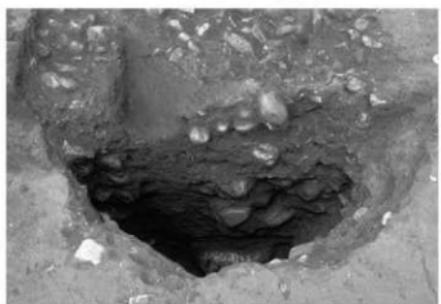
ピットP87セクション（南から）



ピット P89・90 セクション (東から)



ピット P89 根固め石検出 (東から)



ピット P89 セクション (東から)



ピット P89 完掘 (西から)



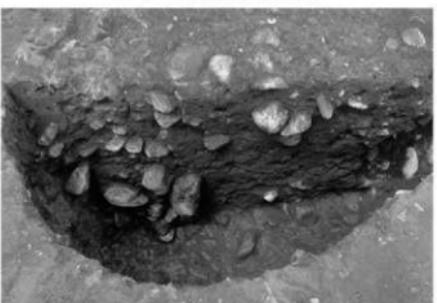
ピット P100 セクション (南西から)



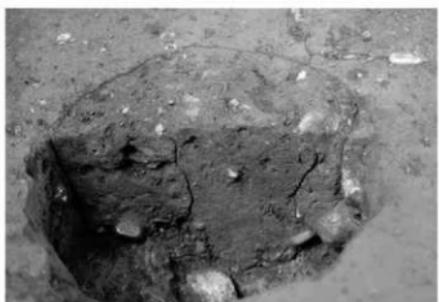
ピット P108 焼骨出土状況 (東から)



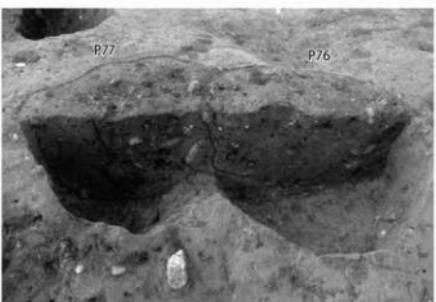
ピット P131 セクション (南から)



ピット P143 セクション (南から)



ピット P54 セクション (南から)



ピット P76・77 セクション (南から)



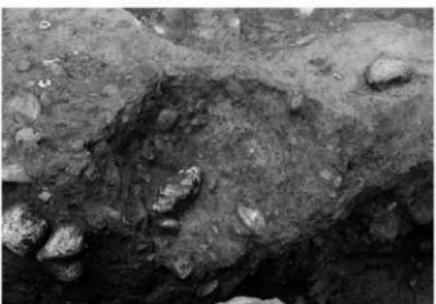
ピット P75 セクション (南から)



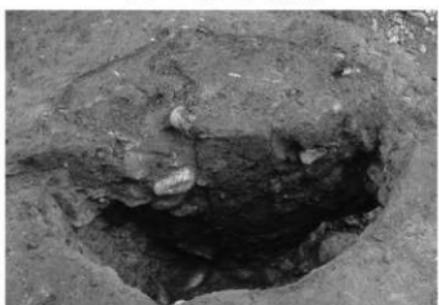
ピット P75 完掘 (南から)



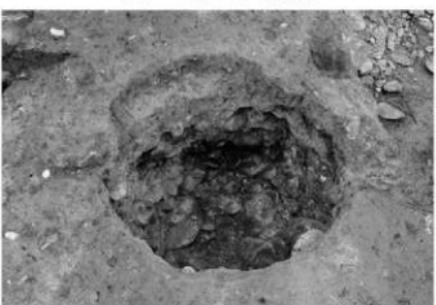
ピット P117 セクション (南から)



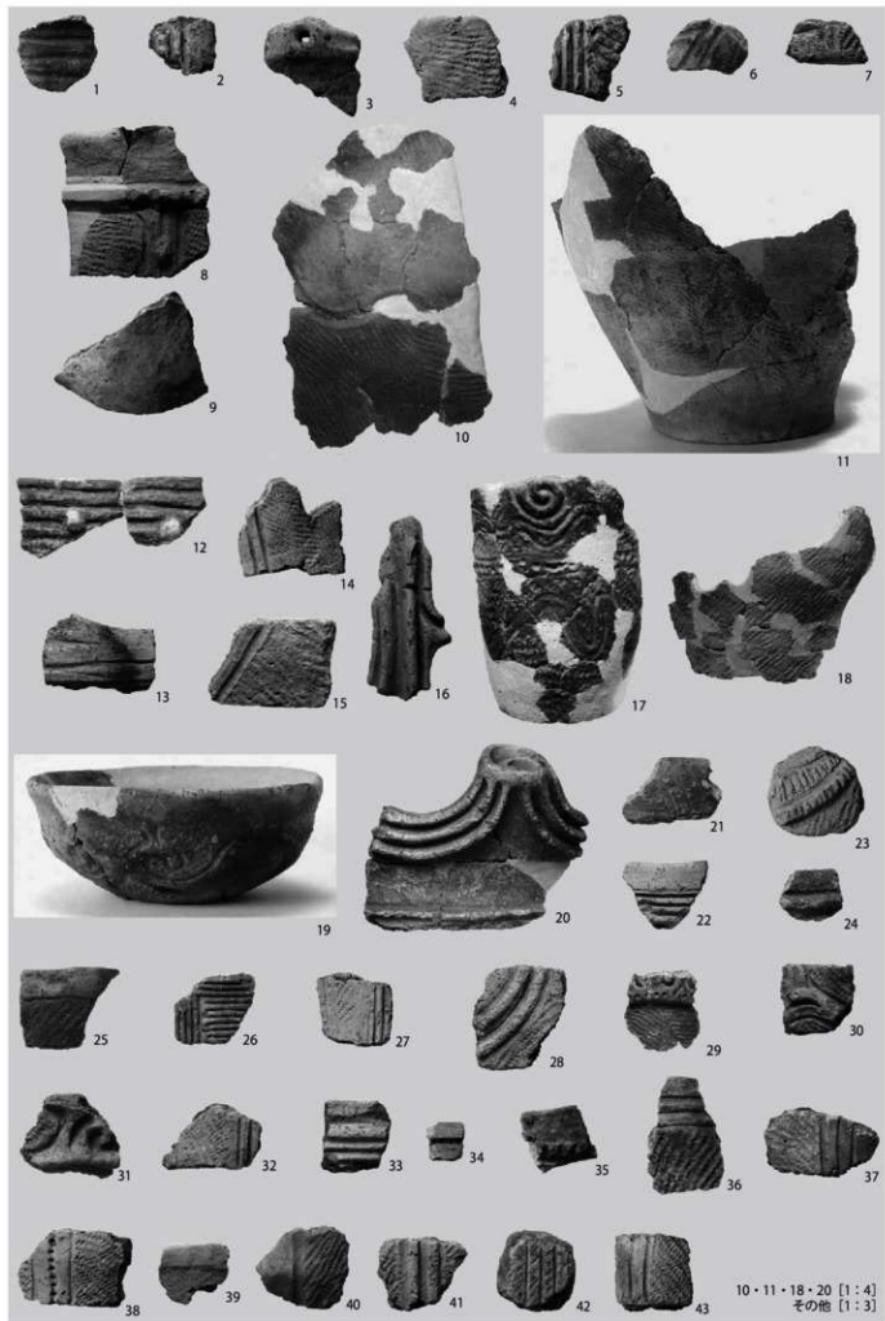
ピット P144 セクション (東から)

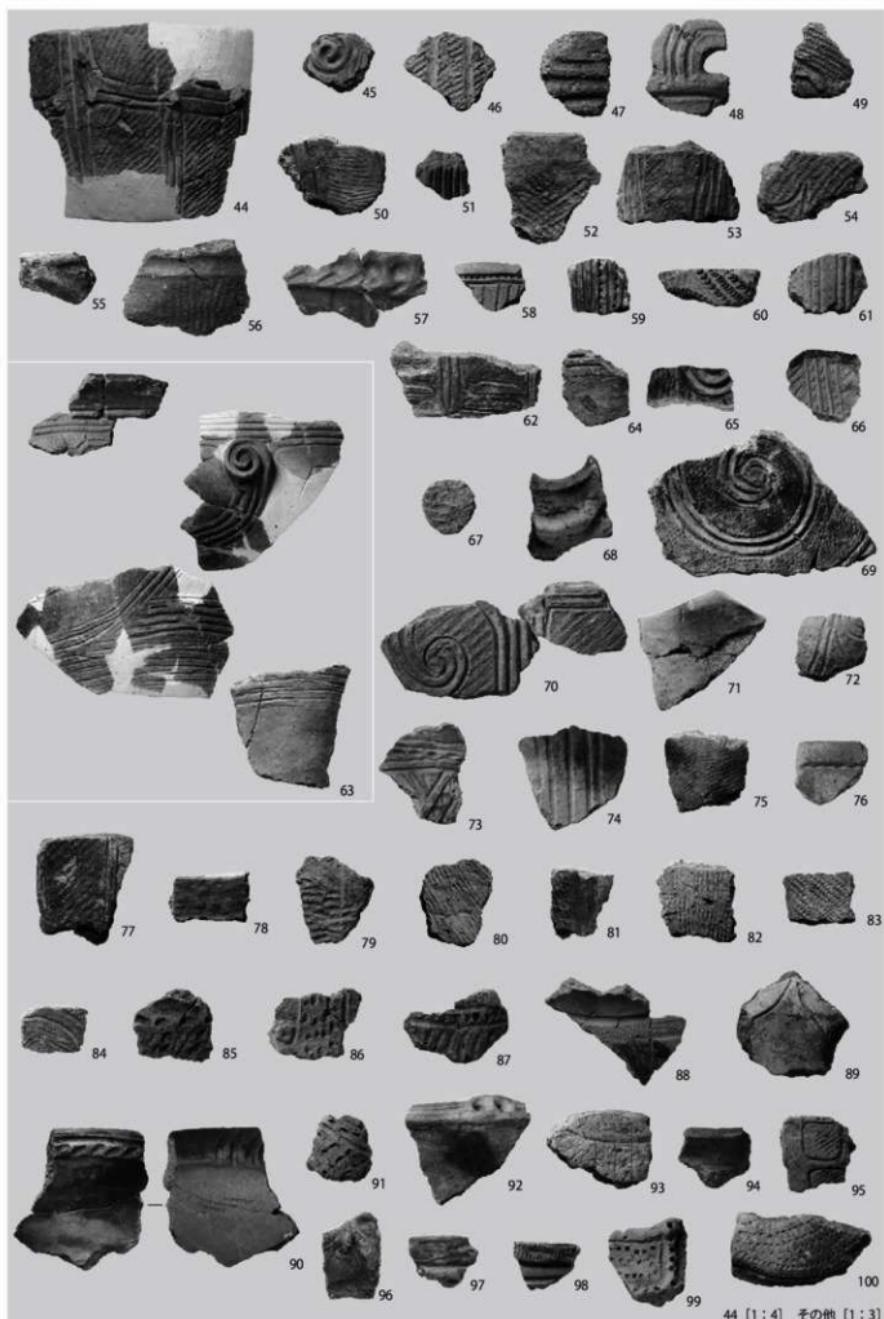


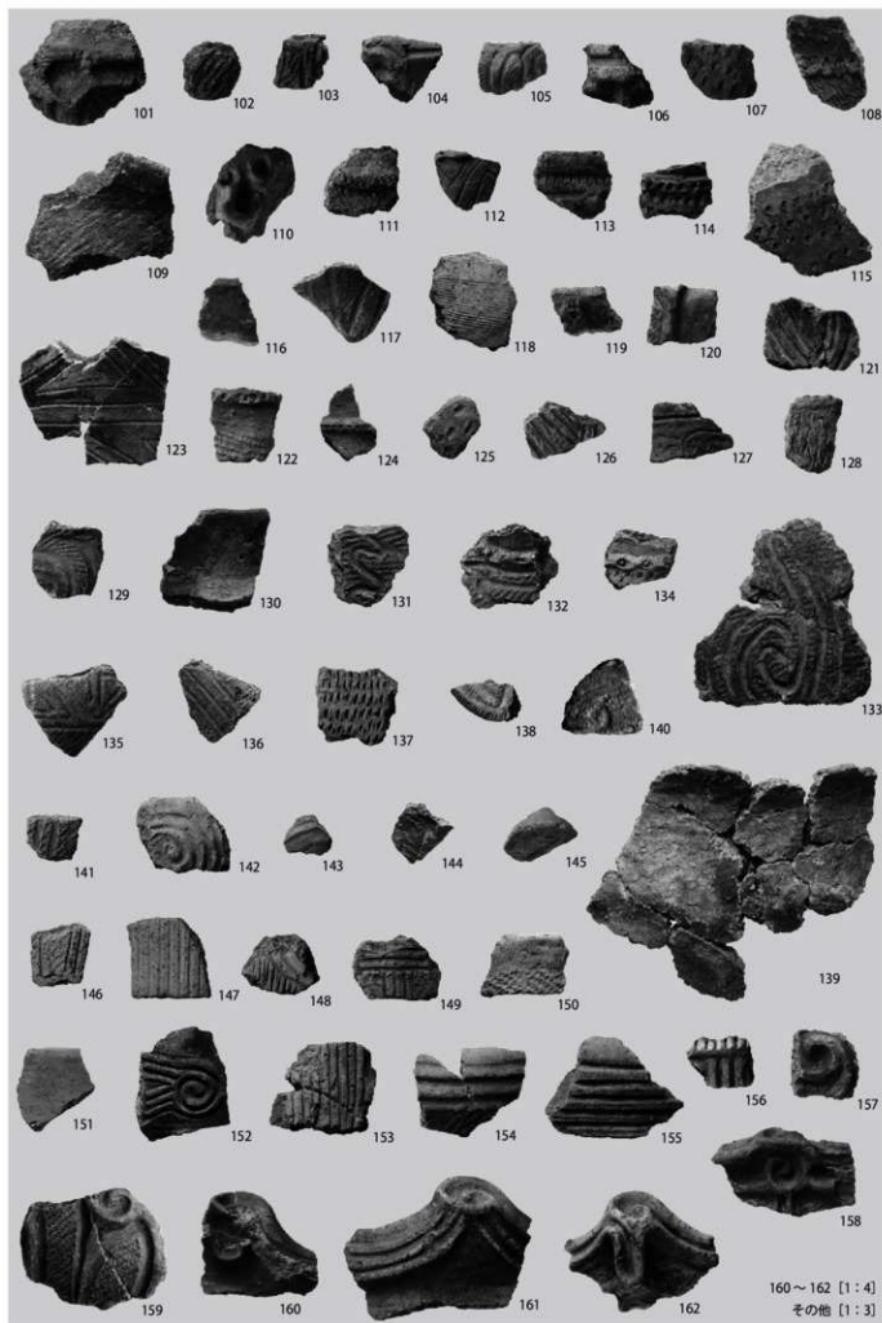
ピット P213 セクション (東から)



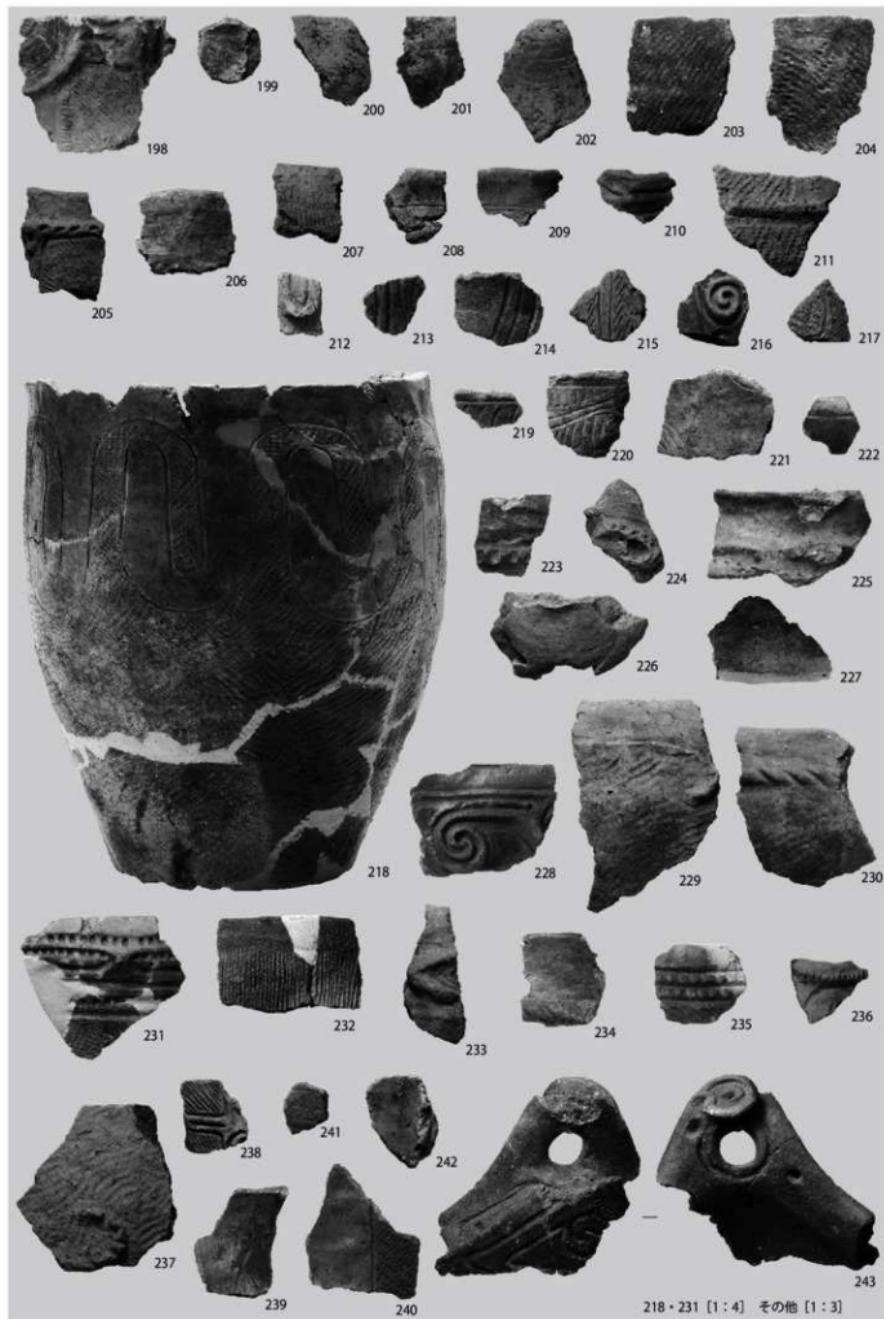
ピット P213 完掘 (東から)

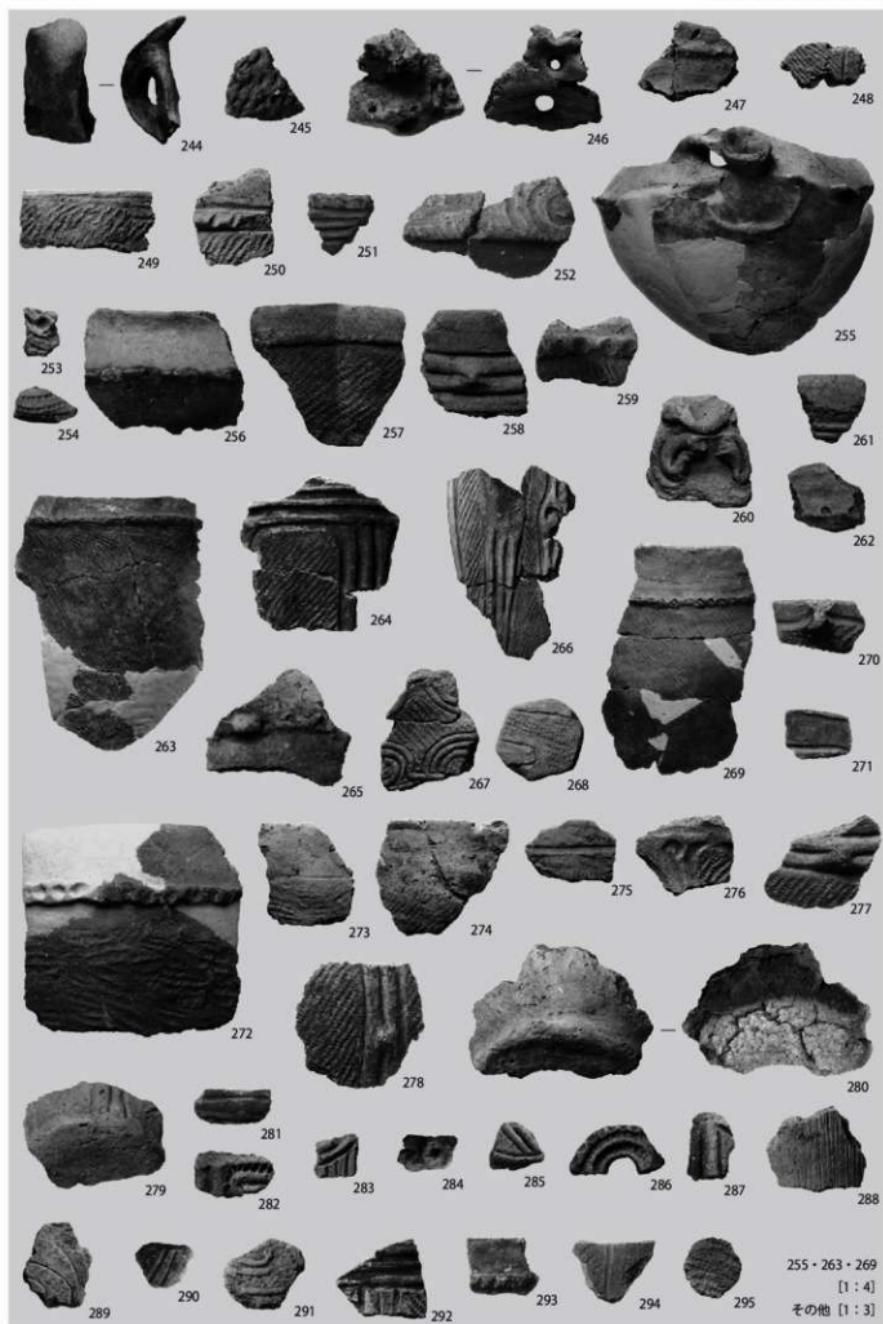


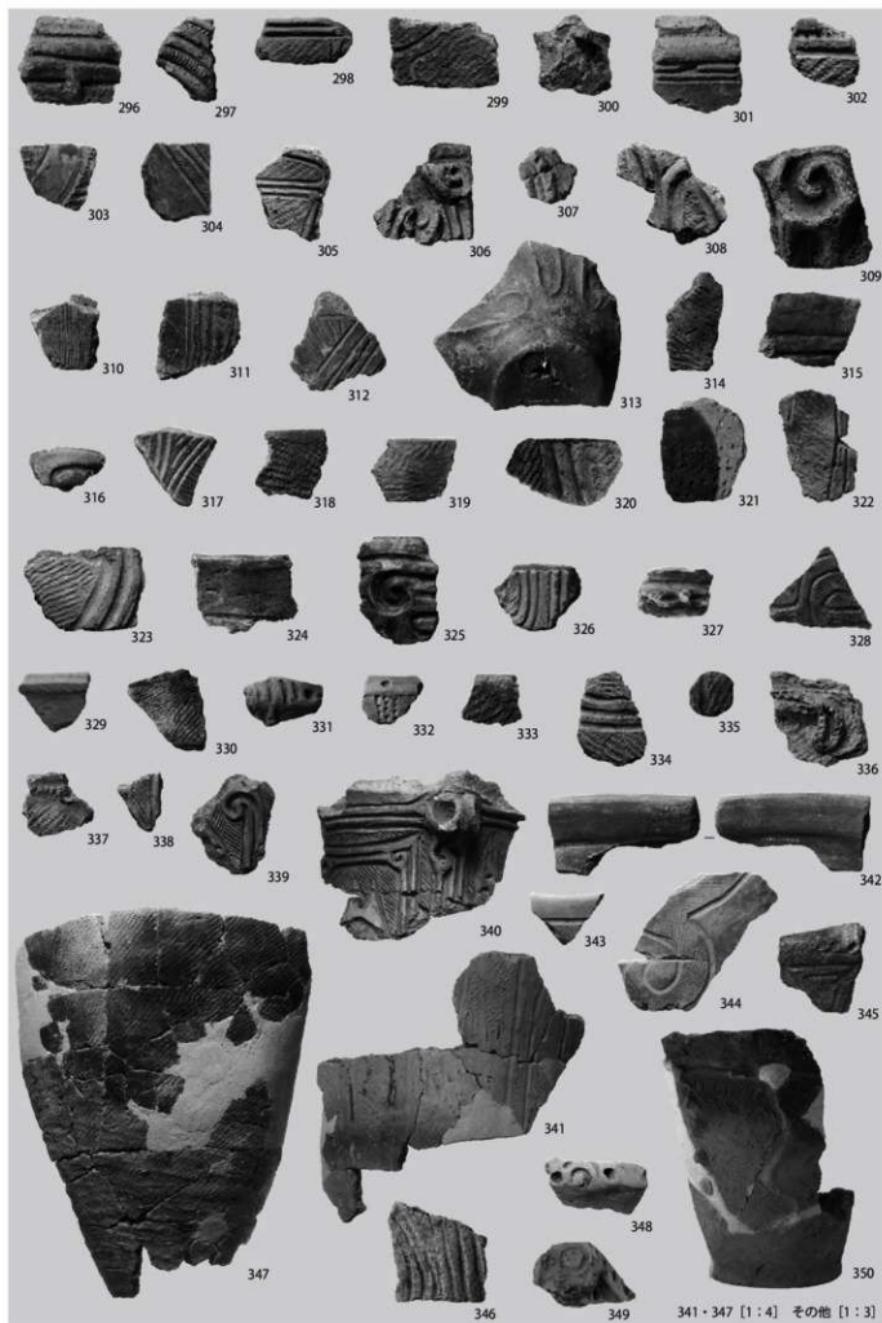














369 [1 : 4]  
その他 [1 : 3]



373・376・380・381

[1 : 4]

その他 [1 : 3]





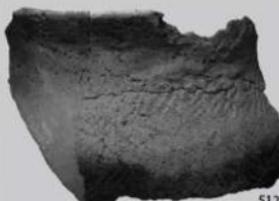








511



512



514



513



515



517



519



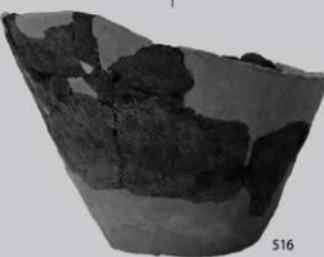
520



521



518



516



522



523



524



525



526



527



528



529



530



531



532



533



534



535



536

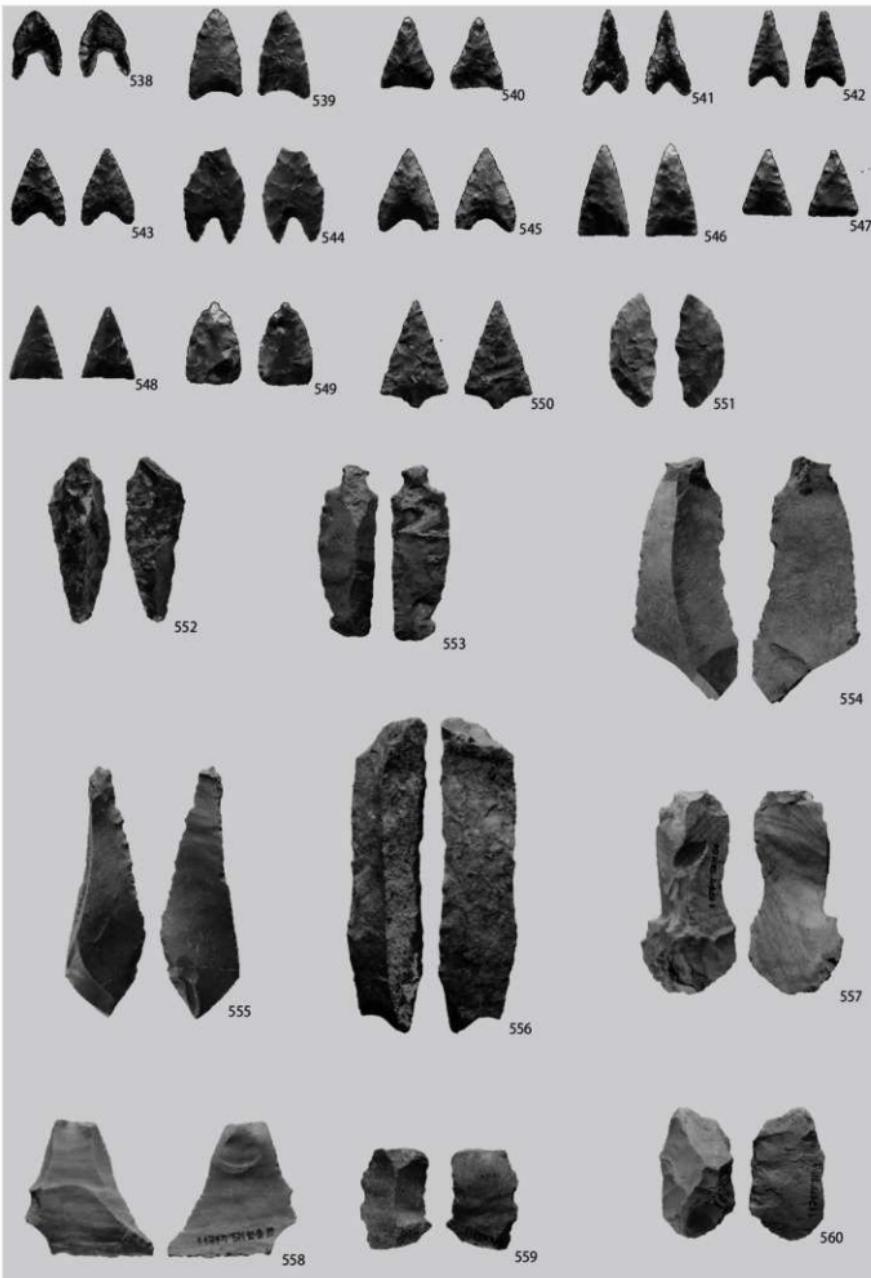


537

511・512・513・516 [1 : 4]

521・522 [1 : 2]

537 [3 : 2] その他 [1 : 3]



538～551 [4:5] その他 [2:3]



561



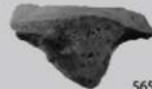
562



563



564



565



566



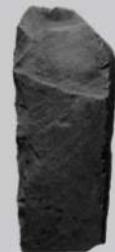
567



568



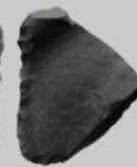
569



570



571



572

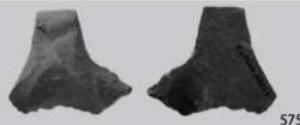


573

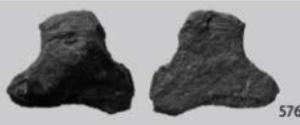


574

561 ~ 572 [2 : 3] 573 • 574 [1 : 3]



575



576



577



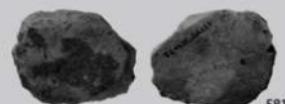
578



579



580



581



582



583



584



585



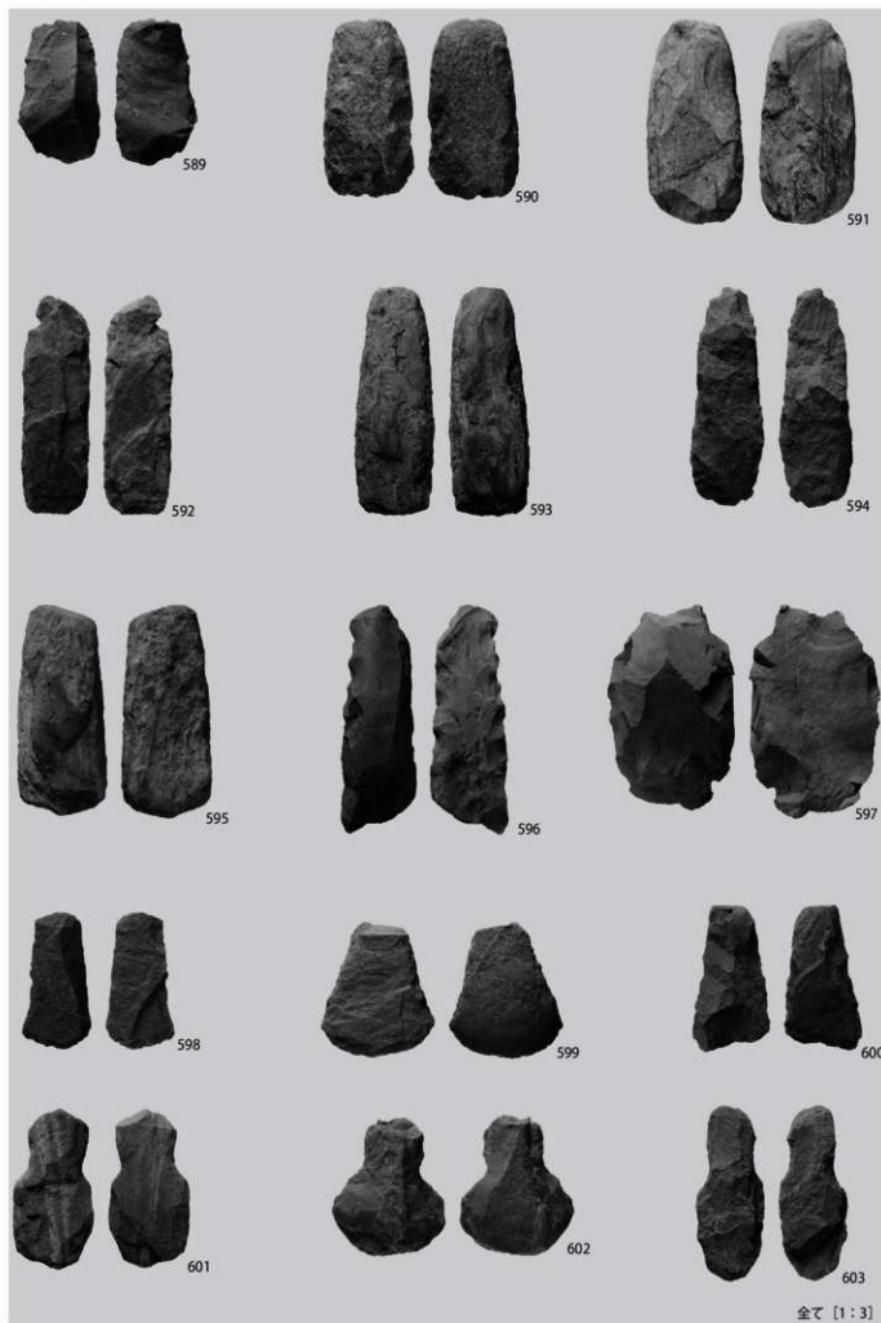
586

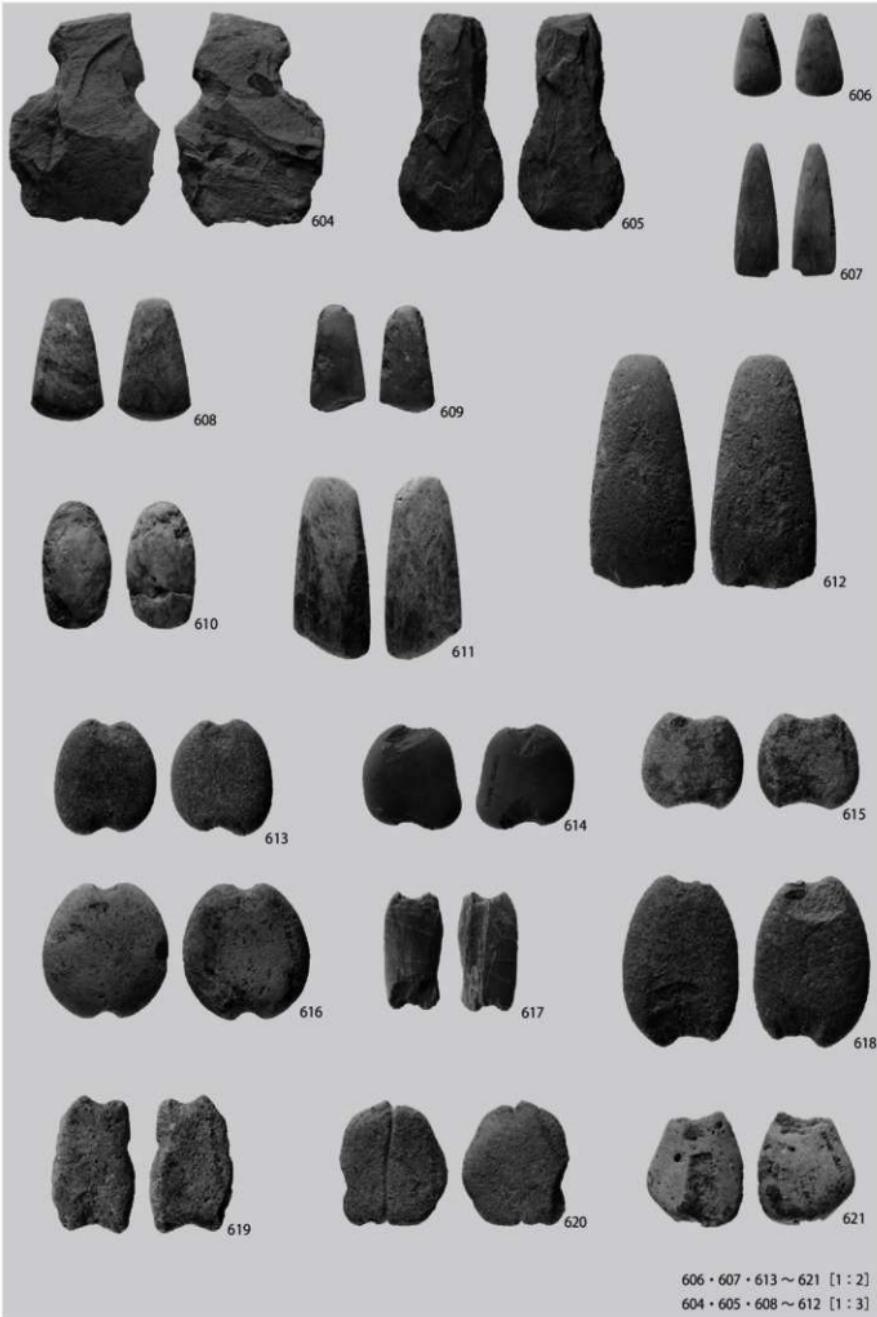


587



588





606・607・613～621 [1 : 2]  
604・605・608～612 [1 : 3]



622



623



624



625



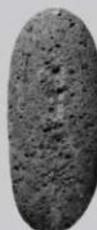
626



627



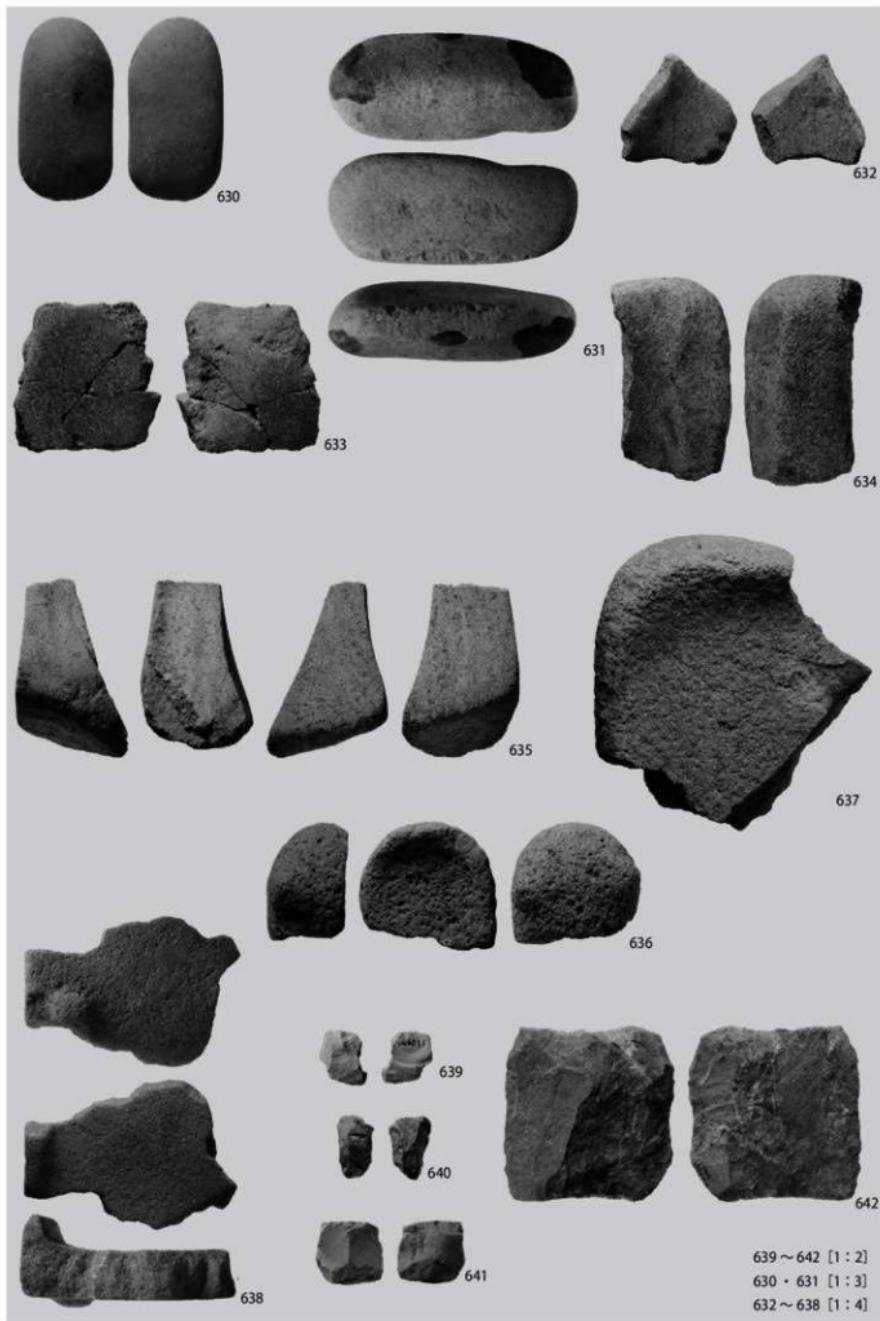
628



629

622 [1 : 2]

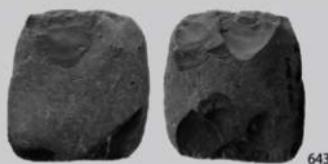
623 ~ 629 [1 : 3]



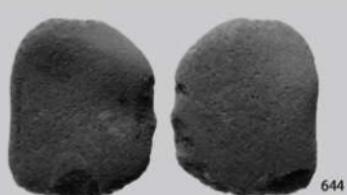
639 ~ 642 [1 : 2]

630 ~ 631 [1 : 3]

632 ~ 638 [1 : 4]



643



644



645



646



647



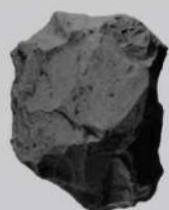
648



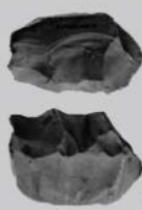
649

643・644・649 [1:2]

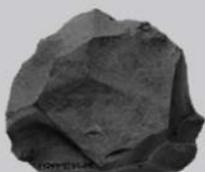
645～648 [1:3]



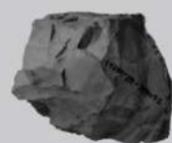
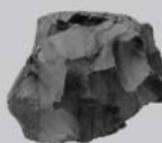
650



651



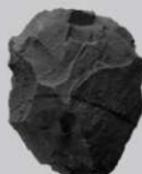
652



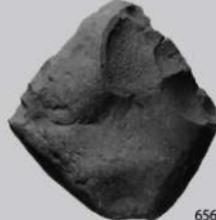
653



654



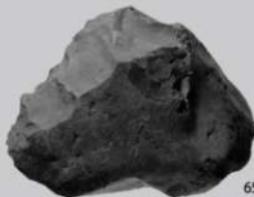
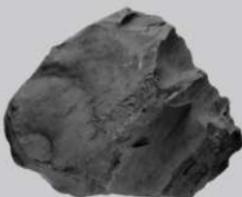
655



656



657



658

## 報告書抄録

ふりがな	まちがみいせき					
書名	町上遺跡					
副書名	一般国道17号浦佐バイパス関係発掘調査報告書					
巻次	II					
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第240集					
編著者名	相羽重徳・藤田 登・田海義正・延部真也・山崎 健・三ツ井朋子					
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社古田組					
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒949-3241 新潟市上越市柿崎区百木750番地 TEL 025 (536) 2721 株式会社古田組					
発行年月日	2013(平成25)年3月25日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 経度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
まちがみいせき 町上遺跡	新潟県魚沼市大字 大浦字八色原	15225	37度 11分 6秒	138度 56分 52秒	2011.05.11 ~ 2011.08.05	一般国道17号 浦佐バイパス 建設
所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項	
町上遺跡	集落	縄文時代(中期 中葉～後期前期)	竪穴建物4軒 掘立柱建物5棟 土坑33基 ピット多数	縄文土器(大木8～10式、加曾利III・IV式、連弧文系、火炎系、柄倉式、沖ノ原式、加賀隈帶文系、称名寺式、三十幅場式、網取式、沈縫文系) 土製品(土皿、土棒、円盤) 石器(石蹴、石堆、石臼、不定形石器、三脚石器、板状石器、打製石器、磨製石器、石鎚、磨石類、砥石、石皿、石棒、石核)	扇状地に立地する縄文時代中期中葉～後期前期の集落を検出した。ただし、昭和40年代以降のは場整備により多くが破壊されている。	

<b>新潟県埋蔵文化財調査報告書 第240集</b> <b>一般国道17号浦佐バイパス関係発掘調査報告書II</b> <b>町上遺跡</b>	
2013年3月22日印刷	編集・発行 新潟県教育委員会
2013年3月25日発行	〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025(285)5511
	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 025(25)3981 FAX 025(25)3986
	印刷・製本 株式会社第一印刷所 上越支店 〒943-0802 上越市大豆1丁目12番7号 電話 025(524)8650

頁	位置	誤	正
図版53	キャブション	八色原土地改良区	大和郷土地改良区
図版53	キャブション	－（追加）	写真を一部使用、加筆
例言・抄録		山崎 健	山崎 健